
零崎冬識の人間模様

四季織@ついったーはじめた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎冬識の人間模様

【Nコード】

N6259M

【作者名】

四季織@ついったーはじめた

【あらすじ】

自称最弱の殺人鬼・零崎冬識は、池袋の街で歪んだ人間たちと出会う。

嘲笑う情報屋、裏社会に精通する闇医者、流行する妖刀、池袋最強の喧嘩人形、無色透明なカラーギャング、ダラーズ　そして、
“都市伝説”首なしライダー。

嘘を振り撒きながら、誰よりも弱い殺人鬼はこの街の人々と係わり合い、そして

愛器・依存症状を片手に、どうしようもなく壊れきった街を迷走する。

これは、歪んだ物語。

歪んだ1人の殺人鬼の物語

。

〈電車内 独り言〉（前書き）

初めまして、四季織です。

初投稿ですが、何卒お付き合いです！

直しました。

読みやすくなっていれば幸いです。

〈電車内 独り言〉

もしも時間が戻せたら。

もしも時間を操作し、過去へと戻すことができるなら。

僕は戻さない。

戻ればいいとは思っけれど、わざわざ時間を戻したいとも思わない。無理にそんなことしたってどうせまた繰り返すだけだし、その苦痛を二回も味わう羽目になるなんて馬鹿げてる。

僕はそういう冷めた奴なのだ。

確かに僕の人生というものは失敗ばかりだけれども。

間違いだらけで、最早間違いしかなかったけれども。

その中にだって、極僅かだが、大切にできるような事だって少なからずあるわけだし。失いたくないものが、あるはずだ。

無い、というのは即ち死んでいるのと同じような事なんじゃないかと、僕は思う。

生きているけれど、死んでないだけ。

歪曲していて屈折していて逸脱していて超越している卑屈な人間だ、
そんなの。

こちらら人間である以上、そう小さい頃から卑屈な奴なんて、僕ぐ
らいになれば早々に世界から排除されてるんだろっし、そんな奴そ
もそもいないだろ。

いや、まあ1人心当たりはあるけれど。

けれどその人の周りには、やはり死んでいるような人が多かった。

その人は、政治力でもなく財政力でもなく暴力でもない、ただの普
通の世界　つまりは一般人だった。

だけど、明らかに何か足りない　色んな何か欠落しているよ
うに、僕は感じた。

ある意味、どの世界の誰よりも、わけわかない存在だった。

色んな人の欠点の寄せ集め。

初対面で。

第一印象は。

死んでいるような人。

それが、僕から見た戯言遣いの見解である。

さながら欠陥製品のような。

つまりは人間失格のように。

改めて思い返してみても、僕にはあの戯言遣いが生きているようには見えない。

気配を感じとる能力には極めて長けている僕だからこそ、戯言遣いからは【生氣】みたいな、雰囲気というものが、一切感じられなかったことには、かなり衝撃を受けた。

こいつ、本当に生きてんの？

みたいな。

生きている方が、不思議な感じ。

それは玖渚友を相手取った時にも同様に、感じれたことだったけれど。

生氣が無い。

ということは、過去に“大切”と呼べる【思い出】が、無いということ。

まあ、あの戯言遣いに【思い出】を強要しようとすること自体、無駄なことだろうとは思っただけさ

ということ、散々語った某戯言遣いであるいー兄的思考終了。

僕には御世辞にも好きになれそうもない類の、卑屈なエンドレス思考、終了。

「 戯言だよなあ」

傑作じゃあ、ない。

呟く電車内に僕以外の人影は無く、僕の呟きは虚しく宙へと消えた。
真昼の電車内なんてこんなものだ。

些かなすぎる気もしなくもないが。

だってこれ、東京行きだぜ？

あーでも、こんな真っ昼間に東京行きの電車に乗る人も、いないか。
今から行ってどーすんだよ。

みたいな。

つまり。

今現在貸し切り状態、なわけである。

ちよつと感動。

その辺、田舎人だ。

「これは 傑作かな」

戯言じゃあ、ない。

.....。

ダメだ。調子でない。

僕は誰かが居ないと調子がでないタチなのだ。
そうなのだ。

誰かが居ないと、ダメなんだよなあ。

「家族、とか？」

いつも誰かが居てくれる。
いつも何かで繋がっている。
だから、家族。
だからこそその、家族。」

僕の家族は　まあ、とことん特殊だけど。特殊過ぎるくらいに。
常識はずれな存在だから。

でも、それだからこそ。
僕にとっては。

「あー。僕、やってけんのかなー？」

離れるのは、辛すぎる。
誰かが居ないのは、辛すぎる。

「やっぱり帰ろうかなー……」

京都の、骨董アパートとか。
帰れる場所はあるけれど。

「今帰ったら、みい姉に殴られるよなー……」

それは痛いだろう。
何で戻ってきたバカヤロー。
とか言いながら。

もしくは、抱き締めてくれたりして？
お帰り！

とか言っちゃって。
きゃー。

「いや、それは無いよな」

まさに戯言だ。

いや、妄想か？

年甲斐もなく（あり？）にやけてしまった。

不覚。

「うにゃ。それはダメだ。あとは……」

家族は普段、散々になっているし。一定の場所に留まっている奴なんて、いるのかな？

ひー兄とかまさしく風来坊、世の中をふらふらすることに関しては既に一流だ。

「すげーよなあ……ひー兄は」

すごいと思う。

独りで生きられるひー兄は。

独りでも生きられる、ひい兄は。

僕には一生無理だ。

「まあ、僕の一生も限りなく少ないものだとは思っけど」

《殺し名》の平均寿命は 一般人と比べれば、かなり短い。

僕も、かろうじて《殺し名》の1人なわけだから。きつと一生というのは短いものなのだろう。

その短い一生の中で。

僕はどれくらいの時間、家族と共に過ごせるのだろうか。

「こんなん、戯言だし、傑作だ」

とかなんとか呟きつつ物思いに耽っていたら、電車内にアナウンスが流れた。

『まもなく、終点です お忘れ物のないようお願い致します』

あー首痛い。長旅だったなー。

遥々京都から東京まで。
骨董アパートから、池袋まで。

頭上に置いておいた荷物を下ろす。大抵の荷物は別で送ってあるの
で、必要最低限の所有物だ。携帯とか、財布とか。マジで荷物少ない。

良いことだ。

悪くない。

とまあ、曲兄の口癖を呟いたところで、扉がプシューと変な音を出しながら開いた。

広がる景色はいつもと違う。

だけど僕にとっての“いつも”は、この街で始まる。

臆病者のこの僕を。

家族に執着するこの僕を。

この街は、受け入れてくれるのだろうか。

「さあて。零崎は幕を開けるのか否か

」

開かない方が、いいんだろうけど。

こうして僕

ゼロサキトウシキ

零崎冬識は、池袋という街に侵入した。

扱いは、異物としてだろうけど。

世界にとって、《殺し名》は招かねざる客なのだから。
まして《零崎》なんて。

《殺人鬼》なんて。

「それこそ、戯言だし傑作だ

」

欠陥製品に魅せられ、
人間失格に憧れる僕は。

今日から《池袋》という街に、呑み込まれることになる。

〈都市伝説 首無首吊〉（前書き）

プロローグに引き続き直しました。
間あけてみました。

〈都市伝説 首無首吊〉

「帰りてえ……………」

僕は呟いた。

まっさらだった電車内から出たとたん、コレだ。

僕の目の前に広がるのは人。人、人、人。そして人。つまりは人。どうしようもない程に、人だけが僕の視界に溢れかえっている。

今日は平日なのに。

思っていたよりも更に多い、人。気味が悪いくらいの、人。

「うう……………」

さつき諦めた京都に帰るという思いが、沸き上がる。

弱い僕だからこそ。

軟弱すぎな僕だからこそ。

……………。

今頃、いー兄は何をしているんだろうか。

もう向こうから、帰って来てるかな。

僕の慕う戯言遣いは、宿探しに勤しんでいるだろう。

そして、僕の一つの故郷の人達。

みい姉は……バイトかな？まだアパートにいるかも。

崩子ちゃんはお散歩か。

萌太くんはバイトだろう。

あの爺さんは公園かな？

……ザ・現実逃避終了。

家族みたいな人たち。

僕にとっては、もう1つの家族。

骨董アパートの住人たちは、今何を思っているのか。

「戯言だ……」

そういえば、ひー兄どこにいるんだろう。

ていうか、アパート出るときちらっと気配感じたけど。どこかにいるんだろう。

ちなみに僕は、ある程度近づけば、ほんの僅かな気配も逃さず感じられる。よく知る気配なら尚更。家族なんてすぐわかる。皆が皆殺気振り回して生きてるようなもんだしな。
唯一の特技だ。

「特技、ねえ……」

普通に生きていけば身に付かないスキルだ。
あってもそんなに意味はないだろう。

「ていうか、本当に人だらけだな……池袋って」

正直言つて、自分が今どこにいるんだかさっぱりわからない。
人に流されて来てみたけれど、どこだろうか。

要するに、迷子。

16にもなつて迷子とは。

「そう兄に知れたらある意味最悪だよな……これ」

零崎双識。

《殺し名》 序列3位、零崎一賊の長男にして切り込み隊長。自身の
得物 大鉄の名が元となった“自殺志願”マインドレンデルとか“二十人目の地獄”
”とかなんか凄い通り名を持つ僕の兄である。

そして何より変態だ。

どうしようもないほどに、変態。

「そう兄はまだひー兄を探してんのかな？」

零崎人識。

同じく《殺し名》 序列3位、零崎一賊の鬼子。殺人鬼と殺人鬼
家族同士の近親相姦によつて生まれた、零崎の中の零崎。

僕はひー兄のことを“人間失格”と呼んだり呼ばなかったり。

極度の放浪癖があり、ふらふらといつもどこかを一人旅している。

その為に滅多に会わないが、心なしかいつも面倒事に巻き込まれて

いる気がする。

案外お人好しなのだ。

……… 僕が本気になって捜せば、すぐ見つかると思うけど。

まあやってみたことはない。

僕は本気を出すキャラじゃない。

それに僕にはひー兄を捜す理由はないし。

ひー兄は、独りでも生きていけるのだから。

それに、ひー兄の放浪癖は今に始まったもんじゃない。

始まりは中学を卒業してすぐ　つまり僕が中学の頃のことだ。実際、卒業とかはきちんとしたわけじゃあないみたいだけど。それに詳しく知らないし。

頑張れ、そう兄。

僕も、ひー兄には随分と会っていない。

最後に話したの、いつだったけ？

というレベルで、だ。

「会いたいなあ」

会いたいなあ。

素直に、またひー兄と会いたい。

ひー兄は僕の憧れだから。
憧れであり、一つの目標。

とか考えていると、目の前になんかビルが見えてきた。(いや、ビルばっかなんだけど)
他のより、大きい(ようにみえる)。

「……………あれ？」

サンシャイン(らしき物体)だった。
どうやら、どこかを回って戻ってきたらしい。

凄いな僕。
ていうか周りの人。

とりあえず、サンシャイン周辺をぶらぶらとする。

アニメイトの前に、怪しい二人組(一人がなんかのキャラの等身大パネルを持っていたので異様に目立った)がいたのは無視。

「ん?……………もう7時だし」

結構な時間をぶらぶらとしていたらしい。

それに、駅に着いたのも結構ない時間だったし。そこからぶらぶらしていれば、こんな時間にもなるか。

よく考えればずっと歩きっぱなしだったわけだ。

「さてと。僕の新居までは、どうやっていくのかな？」

とりあえず携帯で現在地確認。

僕の新居は、骨董アパートに負けず劣らず分かりづらい場所にあるはずだ。

地図上の確認はOK。

そう遠くないし、迷わなければすぐ着くかな。

「よし。れっつー」

迷った。

やっちまった、と思った。

.....。

けれども後悔先にたたず。

よく地図を見なかった僕が悪いのは明白だった。
ていうか他にいねえよ。

いたとしたら誰だよ。出てこいこの野郎。

「つにゃ.....どくだ」

残念ながら僕は機械に弱い。故に、新居の住所周辺ぐらいしかわか

らない。さつきは駅に居たからわかったけれども、今度は場所がわからない。

路地裏。みたいな場所に、僕はある。
ビルの裏っかわ。

「だから都会とか嫌なんだよ……」

京都もそれなりに都会だと思っけど、あれは慣れればなんとかなるし。

初日から迷子じゃあ、先が思いやられるな……。

と独り言を連発しつつ、またぶらぶらと歩く。

どうにかなるんじゃないかな？の意を込めて。

と、再び歩き始めて数分後。

「オイオイ、何夜中に独り歩きしてんの？」

「ハハ、マジつける」

からまれた。

……あれ？おかしいな。

なんか、明らかに僕より年上で、明らかにチンピラっていうかヤンキーっていうか。服装を頑張っている人たちに。
そんな三人組にからまれた。

チャラチャラとチエーンが音を鳴らす。全員が同じようなアクセサリーを身に付けていて、仲間意識強そうだった。黄色い布とかなんだそれ。

……あー、ついてない。

「兄ちゃん何か言ってよー？俺らさ、丁度暇だったんさー」

暇ならナンパとかしにいけばいいのに。

こんなあからさまなカツアゲするくらいならナンパの方がいいんじゃない？

「ハハ！俺らしかも金ねえんだよ。ちょっとわけてくれたりしない？なんてよお！」

うわぁ。

今時こんな分かりやすいカツアゲする奴らなんかいたんだ。堂々とやるなあ堂々と。

ちなみに僕は涼しげな顔をして、逃げ道を探している。

僕ははやく家に帰らなくてはいけないのに。高校生の夜の一人歩きなんて危険だし。今危険の真っ最中だけど。

非常についてないな。

なんか悪いことしたかな？つい最近した気がする。

「なあに無視してんのー？はやく金寄せさせていってんだよ！」

開き直った。

うわ……。

「聞いてんのか手前!？」

キレた。

鬱陶しいなあ。

「出さねーんならよー兄ちゃん。貰ってくぜえ?」

また別の一人が、そう言う。

「ほらはやくしろよー!」

急かしてきた。

無視無視。

「チツ、何だよこいつ?」

「マジ意味わかんねえー」

「殴ってみりゃあいーんじゃねえ?」

「おーそれいーじゃん!」

あれ?

なんかこれ、僕が殴られる雰囲気になってないか?

どこがどうなれば僕が殴られなくちゃならないんだよ!理不尽すぎる!

「じゃあ殴ってみんべえーよ！」

「ほらいくぜえー？」

一人が拳を握り、振りかぶる。

殴られる？

それは 困る。

痛いのは嫌いだし、何よりもこんな奴らに殴られるのは、屈辱だ。

「あーあ。 “抑えてたのになあ”」

と、呟く。

勿論、三人組には聞こえないぐらいの小さな声で。

僕は。

この人の多すぎるこの街で。

“必死に自分を抑えて縛って拘束していたというのに”。

いや、でもこれは正当防衛か。
ならいいや。

どうせ死んでも、関係ないし。

「さて、零崎の」

僕が、“愛器”を取り出そうとした瞬間。
“殺人鬼”が表舞台に立とうとした瞬間。

ブルルウウウウウウウウンンンン！！！

“馬の鳴き声”のようなエンジン音が、僕の耳を貫いた。

嘶きが聞こえる。

いや、実際には聞こえてはいなかった。

“聞こえたのだと錯覚するほどの、酷く重く黒い気配が、僕を貫いたのだ”。

“気配を感じとる”スキルを持つ僕だからこそ、この奇妙な気配を感じとったのだ。

当然、若者たちには聞こえるはずもない。未だに拳を握っている。
いや、今、僅かに地面が擦れる音がした。

驚くほどに無音。

タイヤとアスファルトが擦れる音が、酷く大きく響いているように思える。

さすがに若者たちにも聞こえたようで、あたふたと慌てはじめた。

「おい、今の……………」

「ああ。もしかして……………」

「“黒バイ”!?”

“黒バイ”?

なんだ、それは。

僕はニュースを見ない。そもそもテレビを見ない。しかも池袋には今日訪れたばかりだ。

当然、この街の“都市伝説”など、知るよしもなかった。

池袋の都市伝説 “首無しライダー”、通称“黒バイク”など。

僕が知るはずもなかった。

馬の嘶きが近づく。

“そして僕は、よりはっきりと、より明確に、その気配を感じとった”。

なんだ コレは。

“黒バイ”。

明らかにこの異質な存在を指した言葉だろう。

「嘘だろ！？なんでんなとこに黒バイが……………」

「に、逃げようぜ！」

と、若者三人組は一目散に逃げていった。

逃げるの速いな。

そういうわけで。

この場には、僕とその“黒バイ”とやらの、二人（人だよな…………？）だけになってしまった。相手が何も喋らないので、どうしたらいいかわからない。

僕は優柔不断な奴なのだ。

いや、助けてもらったのはありがたいけど。

あ、そうだ。お礼を言ったほうがいいだろう。

「あの…………どうも、ありがとうございました」

僕が言うと、“黒バイ”はその奇妙なヘルメットを考えるように上へ傾け、「閃いた！」みたいな動きをすると、どこからか（わからなかった）PDAを取り出して、カタカタと文字を打ち込む。そして打ち込んだ文字を僕の方に向けて提示した。

『大丈夫だった？』

おお。良い人だ（多分）。

やはり僕のことを助けてくれたらしい。

「はい。……ありがとうございます」

するとまた“黒バイ”は文字を打ち込む。

『そう。なら良かった。それじゃあ、私はこれで』

そう言うと（見せると）“黒バイ”は走り出そうとした。それを僕は慌てて止める。

ていうか、私？

もしかして、女？

「あ、ちょっと待ってください！」

“黒バイ”はまた僕に文字を見せる。

『……………？』

僕は慌てながら言った。

「あの……あなたは？」

あんな気配を醸し出している人物だ。

出来れば名前くらいは聞いておきたい。

『……………もしかして、私のこと、知らない？』

は？

いや、知らないでしょ普通。

「……………？」

すると今度は“黒バイ”まで悩み始めてしまい、少し考えた（らしい）あと、また文字を打ち込んだ。

『えーと……………多分、池袋にいれば私の噂ぐらいいは聞いたことあるんじゃないかな？』

噂？

池袋にいれば？

有名人？

「……………いや、僕今日から池袋に来たんで」

『ああ、通りで！』

“黒バイ”は納得したような仕草を見せると、素早く文字を打ち込み、見せる。

『ようこそ、池袋へ。私はセルティ・ストウルルソン。たまに見掛けるかもしれないから、その時は声掛けてくれると嬉しいかな』

……………。

僕なんかには、すごく好意的にしてくれたと思う。

正直、あんな気配を纏っているのだからヤバい感じだと思ったけれど、池袋に知り合いもない僕にはありがたいことだった。

ただ、僕が驚愕するのはもう少し先の話になるが。

「僕は ミカギリトウゴ 深限冬護です。よろしく願いします、セルティさん」

そうして“黒バイ” もといセルティ・ストウールソンは、漆黒のバイクに跨がり、走り去っていった。

それが僕、深限冬護 ではなく零崎冬識と、池袋に住む“妖精”デュラハンであるセルティ・ストウールソンとの、出会いだった。

《殺し名》 序列3位、零崎一賊の殺人鬼“ディベンダンスシンプトン 依存症状”と、現実に存在する所謂“ファーストコンタクト 化け物”の、第一接点。

池袋という街は。

やはり僕を異物扱いしているらしい。

(出会い セルティ・ストウールソン
都市伝説)

(被害者 三人
加害者 セルティ・ストウールソン)

〈都市伝説 首無首吊〉（後書き）

感想お待ちしております。

〈通話 責任（赤人）〉（前書き）

引き続き修正。

今回は特にキャラ崩れが起きている可能性が高いです……。あつたらごめんなさい。

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。

〈通話 責任（赤人）〉

翌日。

「く……………あああ」

と、伸びる。

ベッドは持っていないし、布団を出すのも面倒だったので、畳の上で寝てしまった。まあ僕はどこでも寝れるからいいんだけど、さすがに直に畳の上だと体が痛いような気も。まあいつか。

携帯で時間を確認。

現在時刻、8時10分。

昨日から一夜開け、今日は土曜日。なんの変哲もない、ただの休日だ。

特に予定もない。

勿論僕に友人がそういるわけもなく（言うならば悪友が多い）、今日は新居で1人寂しく休日を過ごすのかなーという感じ。

我ながら寂しい休日を過ごす高校生だ。

「さてと……………とりあえず朝飯……………」

何か食べたい。

よく考えれば、昨日何も食べずに寝た気がする。どつりで今現在の空腹感が半端ないわけだ。

設置したばかりの冷蔵庫の扉を開く。

何も入っていないかった。

そりゃあそうだ。昨日越してきたばかりだし、買い出しにも行っていないのだから、食材が入っているわけがないのだ。

お腹がすいた。

「……………」

寝起きの悪い（低血圧）僕にとって、こんな起きて直後の外出は結構キツかったりするのだが　仕方ない。眠気に卒倒されそうになる体を無理矢理行使し、僕は唸る。

今の時間だと　まあ、コンビニで何か買ってくればいいのか。

あれ？コンビニどこにあったっけ。

記憶力には自信が無い。

なんとかかなるか。

残念ながら学習能力にも自信が無かった。

というか最早無かった。

昨晚の教訓、全く活かされていなかった。

何はともあれ。

「れっつじー」

気だるい声色で、やる気無さそうに言ってみた。

こうして僕は財布を持って家を出た。

意地でも家を出ていなければ、いつものように後悔するのは、すぐ後のことだったけれど。

怪しく軋む扉を開ける。

この物件、相当年季入ってるな……。だから家賃安いのか。

外はすでに明るく（当たり前前だ）、今日はどうやら天気が良いようだった。

まだ、慣れない景色。

慣れない街。

正直、自分が今向いている方向が何だかわからない。

重症だ。

「つと……」

携帯がバイブする。そういえば、マナーモードに設定していたままだったな。電話かメール、どちらだろう。

電話だった。

画面に表示された名前は

………えーと。

ノーコメントで。

ていうかでないと殺される。

やむなく通話開始。

『ちいーす、冬ー識くーん。哀川潤お姉さんだよー。元気してたー？』

相手はご存知、人類最強の請負人こと哀川潤だった。

やべえ。

あちゃあ。

勝手に引っ越したのバレたか？

玄関先で足止め食らうとは。さすがに予想外。

「……………どうもです、哀川さん」

『だあーからあたしのことを名字で呼ぶなんての。全く、十全ではありませんわね』

嫌な感じに笑い、完璧すぎる声帯模写で赤色は言う。

……………くそつ、僕のこと、心得てやがる。

『それにしても冬識くん。何かお姉さんに謝らなきゃならないことがあるんじゃないかな？うん？』

「……………何でしょうね」

『惚けんなよー冬ちゃん。あたしは何でも知ってるんだぜ？』

全知全能だった。
神レベルらしい。

『どうしてあたしになーんも伝えずに、東京にいるのかな？』

おっと……………。

完全にバレていた。

マジ？

まだ、昨日の話なのにな。

だがそこは流石人類最強。情報収集については、抜かり無かった。

「……………にしても早すぎだろ」

大泥棒じゃああるまいし。

『なんか言つたか?』

本音が溢れた。

『冬ちゃん、あたしとの約束覚えてんのか? 第一、冬ちゃんに何かあつたら小唄のヤローがうるせーんだよ。一応あたしはお前の保護者(仮)なんだから』

(仮) って詞で言つたよ。この人。

まあ確かにそうなんだけど。

稀代の大泥棒、石丸小唄。

僕の 保護者。で、師匠。それで、哀川さんの悪友。

何だかんだ言つて仲の良い二人組だ。

『しいーかも池袋、だあ? そんな危ない危ない所に勝手に行つちゃうなんてお姉さん悲しい。涙が零れ落ちそうだ』

「かなり見え透いた嘘をつくんですね」

『斬り裂き魔にでも遭遇したらどうすんだよ』

「え？なんですか、それ」

『ふーん。まじで！。冬ちゃんでもそれくらいは知ってると思ってたのに！。意外意外、意外も意外だ』

「……………」

絶対狙ってる。

狙って言うてる！

笑いを堪えてやがる！

『にしたって池袋はねえだろ、池袋は。そんな色々ヤベーところ選ばなくたってよかっただろーが。何でよりにもよって池袋なんだ？

”『

……………。

哀川さん、心配してくれてるんだ。

この、僕を。

軟弱すぎる僕を。

池袋。

哀川潤が危険視するほどの 壊れてる街。言うならば、ERR3の
ような、普通の世界のぎりぎりのところ。

少なくとも、“僕みたいな立場”から見れば、その言葉は十分に的
を射ている。

場所自体がどうかじゃなくて、存在そのものが。

池袋という存在そのものが、怪異とかそういうのを、呼び寄せる。

「……特に意味はありませんよ。新居の家賃が、激安だっただけです」

そう言っただけは、無理に笑った。苦笑した。

まあ、半分嘘だけど。

嘘をつくのは得意分野ではない。

そもそも、あの戯言遣いが嘘を好みすぎている。そして誰よりも遣い慣れている。それだけだ。

『ふうん。へえ。成る程ねー。またいつもの放浪癖が発揮したって感じ？ま、いーんじゃねえの。冬ちゃんは心配しなくても何とかなるんだろーし。それにあたしも自由は大好きだ』

失敬な。僕に放浪癖なんて無いぞ。ひー兄じゃあるまいし。

しかも最後、軽いな。相変わらず。

とはいえ。

「ありがとうございます」

多数様々な意味合いを込め、礼を言う。

とりあえず、哀川さんには世話になりすぎてるくらい、お世話にな
っているしな。

赤色は、

『どういたしまして、ご主人様』

僕が敬愛するメイドさん、千賀ひかりさんの声で言った。

ちなみにあとでいー兄と趣味が合っているのが発覚し、軽くシヨッ
クを受けたのは、また別の話。

……くそつ、なんか悔しいぞ。

『なーんてな。んじゃ、小唄のヤローにはあたしから言っといてや
るよ。くくく、それ相応の覚悟はしといた方がいいかもなー。ほん
じゃまあ、ばいびー』

通話終了。

待受画面が表示される。

赤色 人類最強の請負人。

最悪な助言を残していきやがった。

しかも完全に楽しんでいやがった。

“こんなこと” 師匠に知れたら………

「殴られる……」

それだけでは、済まないかも。

うぁー……。

朝から何だよ……もう……。

本当に、嫌な感じだ。

「……………あれ？あ、と、お、おはよう………ございます？」

お先真つ暗暗中模索でネガティブモードへと陥ろうとしていた僕に、声が掛けられた。

少し驚いて振り向く。

そこには、僕の隣の部屋の扉の前に立つ、ごくごく普通の少年がいた。

いや、少年って言っても多分僕と同じ年ぐらい　つまりは16ぐらいだと思う。

扉を開けて、出てきた少年。
隣人さん、かな。

「あつ……………えつと……………あの……………もしかして、昨日引越してきた……………」

……なんか、もじもじしたしゃべり方だ。

うじうじしてるって言った方がいいか。

僕も似たようなもんだけど。

いやいや、挨拶されたんだから返さなくては。

「ああ、うん。えーと……僕は、深限冬護。高一。よろしく」

なるだけ気さくな感じ、気軽な感じで、僕は言う。

すると向こうも、

「あつと……僕、竜ヶ峰帝人っていいです。同い年です。よろしく
お願いします」

「……面白い名前だね」

「へ！？ああ、よく言われるよ……」

照れたように頭を掻き、少年　竜ヶ峰帝人くんは、言った。

竜ヶ峰、なんてすごい名前だなあ。

いや、僕の本名もすごい珍しいんだけどね？珍しいどころか、多分
僕の家族以外いないだろう。
零って。

しかも帝人くん、か。

帝人くんね…………。

主人公じみた名前だな…………。

良かった、隣人が同い年で。

「えと………… 竜ヶ峰くん？突然で悪いんだけど、今時間あるかな？コンビニ行きたいんだけど、道がいまいち分かんなくてさ」

コンビニに行けないのも本当だけど、できれば隣人、竜ヶ峰くんと親しくなっておきたい だからこそ、僕はわざわざ誘ってみたのだけれど。

竜ヶ峰くんからすれば、ついさつき知り合った隣人といきなりコンビニに行くなんてのも、どうかと思うんじゃないだろうか。
今更ながら不安になってきた。

ただ竜ヶ峰くんは、そんな僕の心配など無用だとも言うような屈託のない笑顔で、こう言った。

「うん、大丈夫だよ。僕も丁度暇だったし………… あ、あと僕の話は帝人でいいよ。えと………… コンビニでいいんだよね、深隈くん」

僕は、

「冬護でいいよ、帝人くん」

久しぶりの笑顔で、そう返すのだった。

「え、じゃあ冬護くん、来良に転校してくるの？」

帝人くんは、普通に驚いたようで、若干声が裏返った。

それが面白くて、若干笑いながら僕は言う。

「うん。ちよつと家庭の事情でね……明後日から行く予定」

「えっ……でも、大丈夫だったの？両親とか……それに今、斬り裂き魔とかで騒がれてるし」

「まあ、両親は ね」

そもそも、いない。
家族なら、いるけど。

……。

いや、ん？

それより、だ。

「……………斬り裂き魔？」

何だろう、その一昔前に流行ったような単語は。
初耳だ。

……あれ、なんだろう。

よく考えるとさっき聞いた気がしなくもない。

まあ多分、初耳だ。

「え、知らないの？今池袋で、出てるんだよ？一人で歩いているところを切りつけられるって事件」

「……………ふうん」

通り魔ならぬ斬り裂き魔、か。

殺してないだけマシだろ。

殺人鬼の僕が言うのもなんだけど。

反応が薄かったのが逆に意外だったらしく、また帝人くんは驚いた顔をしている。

素直だし、表情豊かな子だよなあ。

「そりゃまた、怖い話だね」

「う、うん……………。一人で出歩くときは、気を付けた方がいいよ」

「ありがとう」

こういう、友達みたいな会話が出るってのは、素直に嬉しかった。

零崎以前の僕にも。

青色に魅せられていた僕にも。

橙色と出会った僕にも。

狐に憑いていた僕にも。

こんなにゆったりと、普通の会話をする機会なんて、無かったから。

「一人暮らし……だよね」

「うん。帝人くんも？」

「もう10ヶ月くらい経つけど、あんまり慣れないな……」

「結構長いんだね。知り合いとか多いの？」

「うん……まあ、それなりに」

濁すような、曖昧な感じで帝人くんが言う。

ぼちぼち、って感じなのかな……。

「ああ、そうだ。冬護くんにも紹介しておきたい人がいるんだけど……。ていうか、僕の友達っていうか、親友っていうか」

友達、親友。

なんて微笑ましい言葉だろう。

この感情。

僕は、羨ましい、のかな。

「僕を来良に誘ってくれたのも、その人なんだけどね」

照れたような、そんな感じで帝人くん。

親友ね……。

僕からはかけ離れた言語だと言えよう。

「そっか。知り合いいないから、助かるよ」

「今度、紹介するね。あ、着いたよ、コンビニ」

帝人くんが指を差す方向には、コンビニ。

おお。着いた。

僕一人だったら多分辿り着けなかったんだろうな……。
感動。

「あー、悪いね帝人くん。適当に立ち読みでもして待ってて」

「うん、そうさせてもらおうよ」

そして、手元の週刊誌を手にとり、パラパラとめくり始める。

よし、朝飯朝飯。

おにぎり二個と、ペットボトルのお茶を一本。レジに差し出して購入する。

レジ袋を受け取り、帝人くんの方へ。

そこに、他の客が。

少年 僕と同年くらいなの。ということは、帝人くんの知り合い……とかじゃないかな。

すると案の定帝人くんが、

「ま、正臣!」

「おーう帝人おー!偶然じゃねえか。朝から一人でコンビニか?彼女もいないなんて、寂しい奴だなあこの!」

うん、知り合いだったらしい。

むしろ仲の良い印象だ。

「違うよ……一人じゃないって。それを言うなら正臣だって一人

あ、冬護くん!」

こちらに気付く帝人くん。

おたおたしながら、少しほっとしたような、そんな表情。

「えっと……」

「あ、この人がさっき言ってた」

「なるほど、さては帝人、ようやく自身の世界を広げたな?女の子

関連か！」

「全然違うよ！えっと……僕の隣に引越してきた、冬護くん。来良に転校するんだって」

かなりハイテンションな彼をうまく受け流す帝人くん。
慣れてるな？

「ほー。こんな時期に転校なんて珍しいな。あー俺、紀田正臣。女子の為に生き女子の為に死ぬであろう男だ！まあ正臣とでも読んでくれ」

僕に向かって、茶髪の彼はそう言った。

……すごいなそれ。

素直に感心してしまった。

だって女子の為に死ぬって。
面白い人だ。

そして僕は、名乗る。

勿論、仮の名前を。

「深限冬護。よろしく、正臣くん」

レジ袋を揺らしながら、笑う正臣くんを、もう一度見た。

綺麗な笑顔だった。

(出会い
竜ヶ峰 帝人

紀田正臣

高校生)

(被害者
なし

加害者
なし)

〈通話 責任（赤人）〉（後書き）

このあとも更新が遅くなると思いますが、よろしく願います。
誤字脱字指摘等も、あればよろしくです。

〈街中 不定少女と大人買い〉（前書き）

デュラララキャラばかりです。

戯言ファンの皆さんごめんなさい。

〈街中 不定少女と大人買い〉

何事でも、関わらないというのは最良の選択だ。

狡い？卑怯？

考えてみる。

無関係は強い。

無関心は強い。

だけど、無意識は弱い。

流石に無罪って訳じゃないだろう。

無実って訳でもない。

ただ単に、無関係ってのは、無関心ってのは。

殊更“一般人”に近いというだけの話だ

「園原杏里です。よろしくお願ひします」

いかにも真面目な優等生、というような風貌。

似合ひすぎてゐる眼鏡や、一切着崩れされてゐない制服、どれもこれもがそう、失礼だけと言ふならば地味な印象を受ける少女だった。

「深限冬護　　つてさっき言つたけど。よろしく、園原さん」

軽く会釈して、少女、園原杏里は僕に言つ。

やはり、うん、可愛いな。

一目惚れとかそういうんじゃないけど、普通に可愛いとは思つ。

結構タイプかもしれないな。

「えーと、つまりさっきの嫌ーな感じの先生は園原さんに嫌ーな感じにちよっかいを出してゐて、園原さんは嫌ーな感じの先生のこと、嫌がつていたと、そういうわけ？」

こくん、と頷く園原さん。

状況確認。

僕は今日から来良学園へと編入することになっていたので、新しいクラスで挨拶を終えた。幸運にも、帝人くんと同じクラスだった。

(あと園原さんもか)

一通り授業やら何やらを終え、放課後。

今日は帝人くんと正臣くんに街を案内してもらった約束をしていたので、二人を待つ間廊下をぶらぶらと歩いていた。

そこに、園原さんが嫌いな感じの男教師にからまれているのを見て、柄にもなくいつもの“戯言擬き”で教師に精神的ダメージを与えたあと、こうして園原さんと話をしている。

“戯言擬き”。

僕の戯言にはいー兄ほどの力はない　だから、“戯言擬き”。

敢えての、偽物。ただの、紛い物。

「にしても嫌な感じだね、あの教師。園原さん、大丈夫だった？」

「はい……………私は、大丈夫です」

小さな、本当に微かな声量。

哀川さんには是非とも見習って戴きたい謙虚さだ。

あの自己アピール常に全開みたいな自己中間とは、むしろ対極。

「ならいいや。それじゃ、僕はこれで」

軽く手をあげて、園原さんと別れる。

園原さんはお辞儀をして、また

「ありがとうございます」

そう言った。

直後。

「あつれー杏里、それに冬護。なにに、仲良くなっちゃってる感じ？ブラボー、素晴らしい！男女間の友情が、時を経て愛情に、つてパターンか？にしても冬護……お前がそんなに手が早い奴だとは思わなかったぜ」

「一体何をどのように誤解したらそうなるんだよ、正臣くん」

「紀田くん」

検討外れなことを抜かしながら僕の肩に腕をまわしてくる茶髪の少年、紀田正臣くん。

僕の数少ない友人の一人だ。

まだ知り合ってから日は浅いのだけれど。

それにしてもさっきは正臣くん、園原さんのこと“杏里”って呼ん

でたな。園原さんも、“紀田くん”と呼んでいたし。

友達だったのか。
少し意外。

「悪いなー遅くなつて。いや、杏里との楽しい会話を邪魔しちゃつてこの野郎むしろ遅く来てくれてありがとっだったって？ふふふ、そういう場面で気を使えるところが俺の良いところだ！」

「……………」

「……………えっと……………」

僕は呆れ顔で。

園原さんは素直に困惑したようで。

「二人して黙秘権行使すんのかよ」

かなり冷たい視線を正臣くんに送り続けながら、僕は無理矢理園原さんに話を振った。

「ところで園原さん、今日は予定とかあるの？」

突然話を振られて驚いたのか、少し遅れて園原さん。

「いえ……………特にはないですけど」

「それじゃあ、僕、今日これから街案内してもらつことになつてるんだけど……………一緒にどうかな？ねえ、正臣くん」

「ん？ああ、そうだな。杏里も暇なら行くぞー。帝人もいるからよ」

「竜ヶ峰くんもですか……。私でよければ是非……。あ、そうだ、すみません。今日はちょっと……」

と、少し言葉を濁らせる。

……用事、あるのか。

ちよつと残念。

「そつか。それじゃあ悪いね。また今度か」

「すみません、折角誘ってもらったのに」

「なんだよー、杏里という花がないのは寂しいことだけどよ……また明日な」

「すみません、じゃあ、また明日。ありがとうございました、深隈くん」

一瞬。

その一瞬の彼女が。

誰かに似ている気がしたんだけど

気のせいか。

気のせいだよな。

というわけで。

「どっか行きたいとことかあるか？」

「うーん……特には」

「そっか。じゃ帝人を案内したときと同じルートでいいよな」

そういうと正臣くんはゲームセンターのある十字路まで歩くと、そこを右折したところにある道へ入っていった。うわ。わけわかんねえ。

一人で来たら確実に迷う。

そう考えると京都は碁盤目状になっているから、迷子にならなくてとてもいい。

僕みたいな極度の方向音痴（物覚えが悪い、というのもあるが）には大変住みやすかった場所だといえる。

場所は60階通りの近く。

さつき正臣くんから説明を受けた。

大半はよくわからなかったけど。

数十分前。

来良学園で園原さんと別れ、帝人くんと合流。

そのあとは三人で適当に歩いてきたのだけれど、そこで正臣くんに行きたい場所はあるか、と尋ねられたところだ。

僕は結構重度の世間知らずなので（切り裂き魔についても全く知らなかったし）池袋に何があるのか、たいしてわからないし知らない。適当に案内してもらおうと思っていたので、軽く相槌を打っただけで、二人に任せた。

どこだろうって。

早速来た道を忘れている。

どうやら、本屋みただけだ。

「なんか、懐かしい感じだよな。帝人を連れてきたのが、4月だったもんな」

「あの時は確か、遊馬崎さんと狩沢さんが……」

二人が、僕の知らない名前を挙げたところで

「はいはい、呼んだ？」

「偶然つすねえ、紀田くんも帝人くんも。お久しぶりっす！」

突然背後から声を掛けられた。（僕が直接声掛けられた訳じゃないけど）驚いて振り向くと、そこには男女の二人組が。

男の方は重そうなりユックを背負っている。

普通に驚いた。

……僕だつて一般人に警戒心を抱くほど、ではない。

そんなの軽く病気だ。

人間不信。

「遊馬崎さんに狩沢さん！？……お久しぶりつす」

「お、お久しぶりです」

どうやらこの二人が、例の遊馬崎さんと狩沢さんらしい。

またすごい偶然だな。

「あれ？また知らない子がいるんすね……」

「ああ、こいつ、こないだ池袋に来た奴で」

紀田くんはそう言うと、僕に向かって、

「女の方が狩沢さん。男の方が遊馬崎さんだ」

そう説明してくれた。

初対面。

挨拶挨拶。

「どうも……。深限冬護です」

「へえー、深限くんっすか。なんか帝人くん負けず劣らず漫画のキャラみたいっすね」

「ほんとほんと。深夜アニメにでも出てきそうな名前よね」

なんかよくわからないことを話しながら、遊馬崎さんと狩沢さんは手に持った大きな袋を揺らす。

かなり大きいけれど、一体何が入ってるんだろうか。

「もう買い物、終わっただんですか？」

帝人くんの問いに、二人は。

「今回はそんなに買ってないのよ？電撃文庫を少しと、コミックスを少し」

当然だが、少しの限度を優に越えている。

これこそ真の大人買いというやつだろう。

これで少しなんだ……。

恐ろしいな……。

「じゃ、俺たちはこれからなんで。また今度」

そう言って軽く手を挙げる正臣くん。帝人くんも続けて頭を下げた。便乗して僕も軽く会釈する。

路地を進んでいく二人を遠巻きに見つめ、僕は二人に言った。

「……………何者？」

「何者って……………」

「知り合い。いい人たちだよ。仲良くしていればな」

軽く流す正臣くんだが、何だろう、意味深。

「知り合い、多いんだね」

「まあな。この俺の池袋での人脈をもってすれば知らない人間などいない！」

「そんなわかりやす過ぎる嘘を堂々と言わなくてもいいのに……………」

極めて冷静に帝人くんがたしなめる。

なんか、面白いなあ。

こういう、普通の友達って感じの会話。

無論、僕には同い年の友人が全くと言っていいほどに、冗談じゃなく本気で壊滅的にいない。全然、皆無だ。ほんとにいない。

僅か数人、くらい。

友人といえは

.....。

奇人変人悪人の寄せ集めだった。
オンパレードだった。

しかも年代差ありのパターン多し。
大丈夫なのか、僕の人間関係。

そして店内。

「じゃ、折角だし何か買っていくよ」

そう言い残し、僕は漫画コーナーへ。

うつすらわかっていると思うけれど、僕は無類の漫画好きなわけで、
にしても、すごい数だな、ここ。
疲れるほどに、大量の本。

早速何冊か手元に取り ジョジョでも買っていか 一応レジ
へ。
会計を済ませる。

思ったよりも冊数が増えてしまったな。
ジョジョ買いすぎだ、これ。

いくらいつ哀川さんにジョジョネタを出されたときの対応策と言っ
ても。

限りなく痛い出費。

生活費に響かなきゃいいけど。

まあ、どちらにしろ自業自得。

「うおっ、ずいぶん買ったな。結構高くついたんじゃないか？」

「まあね。暇潰しにもなるし。丁度お金もあつたから」

帝人くんは買い物中。

二人で待機中ということだ。

「そういえば正臣くんには、他に知り合いとかいるの？」

「まあ、それなりにな。大して多い訳じゃないよ。それに
まあ、色々あつたしな」

「ふうん」

「ふうんってお前……。俺、結構真面目だぜ？」

真面目な正臣くん。

違和感あり。

「良ければ、紹介して欲しいんだけど。ほら、僕知り合いいないから。なるべく増やしたいな……って思ってる」

池袋。

僕にとっては、まだ未知の世界、だし。
なるだけ知り合いは増やしておきたいもんだ。

「おーい、二人とも。お待たせ」

帝人くんが戻ってきた。

財布を持ったままだった。

何か買ってきたらしい。

「何話してたの？」

「ああ、僕が正臣くんに、誰か知り合いとかいないかって聞いてたところ」

「そうなんだ」

「要するによ、帝人に伝えた時みたいな感じで紹介すりゃあいいんだろ？なら、そうだな……」

三人で歩き始め、店の外へ。
街中を歩きながら、話を続ける。

「とりあえず、さっきの遊馬崎さんと狩沢さんだろ。その人たちといつも一緒にいるのに、門田さんって人がいるんだよ。この人はいい人だから、今度紹介するな」

ふむふむ。

適当に相槌をうつ。

「あとは　そうそう。この街にはな、　手え出しちゃいけない人

間”が何人かいるから、気を付けろよ」

「……………え、ええ？何それ？」

「僕も最初聞いたとき、何のことかと思ったよ……………」

帝人くんが言ってくれろ。

「……………どんな人なの？それ」

「帝人とおんなじこと言うんだな」

正臣くんは笑う。

“手え出しちゃいけない人間”

勿論、一般人だろう。

だけど、“だからこそ”だ。

一応、警戒しておかなきゃならないだろ？

経験上、“一般人の強さ”はよく知ってる。

「……………危険つつうか、化け物じみてるけどよ。サイモンは温厚だからいいとして 問題はあれだよ、“池袋の喧嘩人形”」

うわ……………。

なんか、すごい通り名。

だって喧嘩人形だよ？

「そいつ、平和島静雄っていうんだけどよ……こいつはマジでヤバいから。間違っても喧嘩なんかしちゃいけねえよ。なんてったって、自動販売機やら道路の標識やらをぶん投げてくるんだぜ？」

うお……。

なんだその不思議びつくり人間。

そんな人間が人類最強以外に存在していたとは……。

世界は意外と狭かった。

いや、多分その人たちだけだろ。そんなことするの。

器物破損。

器物損害。

「池袋最強って呼び声も高いよ、平和島静雄は。そう、そいつあと最後にもう一人、とんでもなくヤバイ奴がいる……ああ、ヤーさんやギャングみたいなのは、言うまでもねえとして……もう一人。こいつは一番ヤバイ。絶対に関わるなよ」

そう呟いた正臣くんは、そう。

酷く気分の悪そうな顔をした。

嫌なことでも思いたすかのように
嫌な思い出でもあったかのように
吐き気がするような

それは、随分と寂しい表情だった。

どこかで見たことのあるような表情だった。

「…………誰なの？その人って」

「ん、ああ、そいつな。折原臨也つつつんだ」

折原 臨也。

折原臨也？

オリハライヤヤ？

オリハライヤヤって あなの？

“情報屋”の？

「新宿主体の人だから、まず会わないとは思っけどな」

ふうん…………なるほど。

あの人、さながら赤色みたいに色んなところに顔出してるみたいだったしな。

新宿 ね。

そんなところにいたのか。

“あの悪名高い情報屋は”。

「あとは、そうだな。カラーギャングってのでいつなら…………ダラーズだよな」

「…………ダラーズ？」

ワンダラーズ、ツォダラーズの、かな。

ていうか、なんだか暴力じみた話になってきた。

たしか、この辺は粟楠会　とかいうヤクザの組があるんだっけ？

よく知らないけど。

師匠に聞けば一発なんだろうけどな。

情報収集は苦手なんだ。

そっちはからつきし、だめだ。

どちらかといえば実戦担当。でもないけど。

火憐ちゃんじゃないんだから。

「確か、カラーギャングなのにチームカラーがないっていう、あれだよな」

帝人くんが、説明してくれる。

カラーギャングね。

あー、常識なんだ。

「そうそう。少し前から目立ってきたチーム。っていつても、去年一回集会を開いただけで、大したことはしてないんだけどな」

危険な人物の次は　カラーギャングか。

本当に壊れてるな、この街。

選択ミスの予感。

「まあ、そんな感じが　後半は、関わるなって奴らだけだ」

紀田くんはそう、軽く流したつもりみたいだけど。

その表情が僅かに曇っていたのは、明らかだった。

平和島静雄

折原臨也

そして、ダラース

とりあえず、この二人（と一つ）には注意するのでしょうか。

僕は臆病者だから。

どうあつたとしても、怖いものは怖いから。

「ありがとう、紀田くん」

「いやいや、礼には及ばねーよ。そんな大したこと教えた訳じゃねえしな。んでどうする？これから」

「冬護くんは、他に行きたい場所はある？」

「いんや……特には。おまかせで」

「よし。じゃあナンパに行こう」

「行かないよ」

「……………じゃあどこ行くんだよ」

拗ねちゃった。

そんなにナンパに行きたいのか。

と、その時。

僕らの前を、黒い影が通り過ぎた。

それこそ、目にも止まらぬ速さで、だ。

黒い影。

そう、“馬の嘶き”だ。

「うおー……………黒バイクか。相変わらずすげえ速さだな」

「黒バイク？」

「ああ、そうだったな。言い忘れてた。今のが 池袋の都市伝説、
通称“黒バイク”略して“黒バイ”だ！」

ん？黒バイ？

どこかで聞いた気が。

……………。

あ。
セルティさんだ。

「……………何二人してにやってんだよ」

「へ！？いや、にやってなんかないよ」

「ん？いや、これが噂に聞く黒バイクかーって思って」

ほぼ同時に喋ってしまった。

しかも僕は嘘をついた。

噂なんて全然聞いてません。

ごめんなさい。

ちよつと見栄張ってみただけ。

「にしても、未だによく分かんないよなー、黒バイクの正体」

「そつだね……………でも、あの映像とかだと本当なのかな？あの噂」

「？」

疑問符付属。

正体？

噂？

都市、伝説。

うーん。

もしかして、みんなセルティさんの名前とか、知らないのか？

いや、考えてみればそうだ。

都市伝説とまで言われる存在なんだから、普通に接触できる筈がない。

だとしたら、何で僕はあの人と知り合いに。

それで、だ。

正体って、噂って、何？

「黒バイクには」

一問空けて、二人は息を合わせて言った。

僕が 想像もしなかった“噂話”というものを。

「首が無いって話」

それはヤバいだろ。

あの後。

結局あのまま街中をぶらぶらして、適当に店に立ち寄った後、僕らは別れた。

いや、別れたって言っても、帝人くんとは隣人同士なので、当然帰り道は一緒なのだけれど。

「それで、僕的にはあの“噂話”ってのが、どうにも気になるんだけど」

“首なしライダー”

そう、呼ばれているらしい。

首なし、ね。

首にいい思い出なんてないんだけれど……。

澄百合学園とか？

「まあ普通信じられないよね、首が無いなんて。本当かどうかは……わかんないし」

首なし。

まあ、噂だろ？

そんな風には 見えなかったし。

セルティさん。

確かに、ヘルメットは被ってはいたけど。

「ふうん。なんか面白い噂だね。初めて聞いたよ」

「いや……そっちの方が珍しいって」

まあ、そうだよな。

普通知ってる話題だよな。

……いや、だってニュースとか見ないし？

情報収集能力皆無。

「でも、確かに面白そうな噂だよな　非日常っていうか、非現実的っていうか、そんな感じで」

帝人くんは、笑顔だった。

照れ笑い　　ってわけじゃなく。

むしろ、小さな子供のような、雑じり気のない、綺麗な笑顔。

悪くない。

「非日常、ね……」

一体何が日常だというのだろうか。

……………。

これが日常なのかな。

「あ、ごめん。変なこと言ったよね」

「いやいや、全然」

むしろ、正論だ。

面白いかは別として、非現実的というのは。

世間的には、正論。

普通の世界的には、正論。

「それに、正臣はダラーズは危ないみたいなこと言ってたけど、
んだから軽いサイトみたいな感じになってるらしいしね」

ふうん。

機械、詳しくそつだ。

「よくチャットでも話すんだけど……」

チャット!?

僕には関わりもなさそうな単語がでてきた。
むしろ業界用語。

「いや、でもやっぱり楽しいよ、池袋って。冬護くんも気に入れば
いいけど」

「うん、その通りだ」

これから住むことになるわけだし。
気に入らなきゃつまらないし。

快樂主義ではないけれど、完璧主義なわけじゃない。

「あ、じゃあこれで。また明日　今度また遊びに行こう、園原さんも誘って」

いつの間にか僕の新居、帝人くんの住居に到着していたらしい。いや、僕は帝人くんについてきただけだから。

「うん　またね」

そう言って、玄関前で帝人くんに別れを告げ、扉を閉めた。

……………ふう。

畳の上に、倒れ込む。

時間が流れるのは早いものだ。

つまり、楽しかったんだな。あの時間が。
普通の友達同士みたいな、あの時間が。

そっか。

僕がね

楽しかったただなんて。

ただの、依存症状のくせに。

「 戯言だ」

正真正銘、本物の戯言だ。

僕は本来、こんな風に生きていられるわけじゃなかったのに。
どうしてこうなったんだろうか。

兄のお陰だろうか。

青色のお陰だろうか。

橙色のお陰だろうか。

大泥棒のお陰だろうか。

赤色のお陰だろうか。

それとも

「わからねえよ、そんなこと」

あの戯言遣いのせいだろうか。

例えこの日常が続いたとしても。

この楽しい日々が続いたとしても。

多分、僕はハッピーエンドでは終われないだろう。

恐ろしいくらい周囲の人間を巻き込み。

卑しいくらい周辺の物体を傷つけ。

きっと悲しいほどに誰も幸せにならないバッドエンドだ。

そうなるだけの理由が、僕にはあるのだから。

卑劣で卑怯で最悪な終わり。

大抵、終わりなんてそんなものだ。

終わり。

物語の終わりではなく。

ただの一人の殺人鬼の終わり。

だから、きっと僕も

「んなこといっても、何になるっていうんだか」

どうにもならないと思う。

さして意味のあることじゃあないし、大した意味も持たない眩き。

だけど この戯言は、僕の終わりを実に忠実に表していることを、僕はどこかで分かっていたのかもしれない。

だからこそその、戯言だ。

「……………お腹がすいた」

戯言ばっか言ってるもお腹はすくんだ。

だって人間だもの。いや、殺人鬼だっけ？

とにかく、お腹がすいたことには変わらない。

倒れ込んだ体を持ち上げ（軽く床が軋んだ。大丈夫かここ）、かうじて購入してある冷蔵庫へ向かう。扉を開ける。

冷たい冷気が僕の頬を撫でる。

ん？

あれ？

何もねえ。

食材どころか飲み物さえない。

こんなに寂しい冷蔵庫を見たのは久しぶり……………でもないな。

いや、一昨日言ったってどうか見たばっかじゃん。

引越したばっかで何も買いためしてなかったみたいなのを言
ってたじゃん、僕。

でた。僕の二大欠点の一つ（……………）。

学習能力、皆無。

……あーあ。
やっちまったよ。

朝から何も食べていない。

なんか最近ぐだぐだだな。

「傑作だよ」

ついてない。

本当に、ついてない。

(出会い 園原杏里

高校生

狩沢絵理華

遊馬崎ウォーカー

一般人)

(被害者 なし

加害者 なし)

〈街中 不定少女と大人買い〉（後書き）

修正完了です。

〈自宅 再会（災害）〉（前書き）

主人公の回想シーンには例のあの人が出てきますが、本編にはまだ
出ません。

ていうか出せません。

好きな方、ご了承下さい。

あと、行を開けてみました。

読みやすくなっていれば幸いです。

つめた方と開けた方、どっちの方がいいか、希望があったら是非教
えてください。

〈自宅 再会（災害）〉

「うーん、なるほどね。解析できた。君には明らかに足りないものがあるんだよ」

いつだったっけ。誰かに言われた。

「そう、あからさまに足りていない、決定的に不足している箇所が君にはある」

どこだったっけ。誰かに言われた。

「足りない、不足している。だけど君にとっては、むしろ好都合だとでもいうように、そのまま欠点や欠陥に繋がっているわけではないけれど」

なぜこんなことを言われたんだっけ。でも確かに言われた。

「正直僕には、なぜ君がそうして何気なく生きていけるのかが不思議でならないんだ。僕が“育てて”レベル99までいかなかったのは君くらいだからね」

誰だったっけ。誰かに言われた。

「そうだな 君は欠陥製品ではないけれど、何かが欠落している。そんな、苛つくくらい、理不尽で不完全な奴なんだよ」

だけど、一つだけわかっていることがある。

「言うならば、不完全理論ってところか」

この人は僕の友人だということだ。

でも多分、これは夢。

夢、だから。

朝だ。

うん、朝。

今日も楽しい楽しい高校生活が始まる。

「おはようございますご主人様。お目覚めの調子は如何でしょうか」

.....。

思考停止。

まあ、とりあえず。

おやすみなさい！

なんかメイドさんの声が聞こえた気がするけど。

赤いひらひらのメイド服が見えた気がするけど！

気のせいだ気のせい。

ああそつだ。

夢だよ。夢だ夢。

夢だよな。

夢じゃなきゃ困る！

う、うん。

落ち着け、僕。

もう一回、今のもう一回やるつ。

そうすれば何かが変わるはずだ。

朝だ。

うん、朝だよ。

今日も楽しい楽しい高校生活が始まるはずだ。

「二度寝はいけませんよ、ご主人様。昨夜はよく眠れなかったのですか？」

.....。

いやいやいやいや。

いや、いやいやいやいや。

あれえ？

いや、ええ？

まじ？

嘘だろ

「あ、あい」

瞬間、一瞬で何かを口に突っ込まれた。

“対応できない”速さだった。

「ぐ、苦し」

「おーっと、お忘れですかご主人様。“あたしのごとは名字で呼ぶな”って 何回言えば気が済むのですか？」

あ、あぐ。

これ、結構息ができない。

苦しい。

パン、突っ込まれてる！

苦しい苦しい窒息する！

「あいか……潤さん！」

パンが口から引き抜かれた。

いや、これはさすがに顎が痛い。

相変わらずキツイ挨拶だよな。

“人類最強の請負人” ！

「ちいーす冬ちゃん。久しぶり。元気してた？」

メイド姿の赤色が、そこにいた。

「お久しぶりです……潤さん」

「そんな露骨に嫌そうな顔されるとお姉さん傷ついちゃうなー、どうしてくれんだよ。冬ちゃん随分生意気になっちゃって」

「いえいえいえ、滅相もございません」

見苦しいほどの必死の弁解。

超必死。

ほんと、この人には頭が上がらないよ。

だって眩しすぎるから。

「で、どう？憧れの完璧メイドさん（声）に朝優しく起こしてもらってという最高のシチュエーション」

「いや……どうって言われても。ていうか、来るなら一回連絡入れて下さいよ」

あれが優しいのか……。

基準がずれまくってる。差違が激しすぎるだろ。

それにいきなり来られても。

対応に困る。いや本当に。

確かにそのメイド姿はかなり似合っているし、声はもう最高以外の

何物でもなかったけど。

完璧な声帯模写。

ぐっじょぶひかりさん。

いえーい。

「だって連絡入れたらドツキリの意味ねーじゃん」

ドツキリなのかよ。

ご丁寧に『ドツキリ大成功!』と書かれた看板まであった。

もういやだ。こんな自由人の相手はもういやだ。

何でこの人はこんなにも自由なんだ。

「……………で、一体何をしに来たんですか潤さん」

そう、これだ。

本筋も本命、本題。

人類最強、哀川潤がここにいる理由。

この人だって、暇人な訳ではないのだろうし。色々小道具用意してあるけども、それは無視して。

本当に暇なだけなのだったら逆に困るから。

「んー？ああな。まあ、とりあえず飯食おうぜ。腹減った」

完全にメイドキャラは崩したらしく、どっかりと畳の上に座る哀川さん。（やっぱり軋んだ）

ちなみに、胡座で。

僕の中で理想的な何かがすごい勢いで崩壊している気がする。

……だからといって僕にどうしろと？

この人に対抗できる訳がない。

「ていうか、何も無いんです……けど。買い置きしてないんで」

「はあああああああああ？」

すごい顔で睨まれた。

怖い、すげえ怖い。

トラウマになりそうなくらい怖い。

「……………すみません」

残念ながら謝るほかに選択の余地はなかった。

情けねえなあ今の僕。

カッコ悪。

「まだその悪い癖、直してなかったのかよ。流石のあたしも吃驚だぜ。しょーがねーなー、特別大サービス。ほらよ」

そう言つて、レジ袋を投げられた。中には、大量の飲料食料。プラスお菓子。

「え……いいんですか？これ」

「いーつてことよ。引つ越し祝い」

付けた。

ていうか、これさつき買ってきたのかな、この格好で。

具体的に言えば、赤色基調のメイド服で。

その様子ちよつと見たい。

よく考えれば軽く不審者だよな。

警察機構お構い無しだな。

京都じゃないから沙咲さんいないのに。

「いや、ありがとうございます」

素直にお礼。

これで飢え死には免れた。

いや、死ぬわけないけど。

この先進国で飢え死には嫌だなあ……。

でも帝人くんか誰かに連れていってもらわなきゃ、未だにコンビニには辿り着けない。

本当に学習能力がないんだよ僕は。

いやだって、池袋（主に東京全般も）ってなんかごちゃごちゃしてるし。

言い訳。

このままじゃあ、その内マジで死ぬんじゃないか？

学習能力が無さすぎて。

「てなわけだよ、ホレ飯」

「ああ、はい」

かろうじてあるコップ（1個のみ）を出してきて、その中にペットボトルのお茶を注ぐ。

水道水はさすがに出さない。

いや、普段なら出してるかもしれないけれど。

相手が悪すぎる。

僕はそんなチャレンジャーじゃないからな。

後でぶっ飛ばされるのやだし。

「さんきゅ」

短く哀川さんはそう言って、袋の中からサンドイッチを取り出して食べる。

僕はおにぎり（梅）を食べる。

うん、なんだか昔を思い出す。昔ってほどでもないけれど。

大泥棒ともこんな感じだったから。

哀川さんは言ってみれば、大泥棒から僕の保護者役を請け負っているようなものだ。

だからこそ、今僕たちの関係は友好だけど。

僕は昔（これは結構前だ）、何を血迷ったのか、この人類最強に勝負　　というか殺し合いを挑んでいる。

僕の零崎が暴走していた時代。

僕そのものが壊れていた時代。

今も壊れたままだけど。

いや、思い返してみれば随分と馬鹿なことをやってしまったものだ。

無謀にも程がある。

本当、何やってんだか。

昔からろくなことをしていない。

実際、その分の仕打ちは、事の直後に受けているし。

たっぷりと、これでもかとも言うつよつに。

赤色には、殺されたし生かされた。

だから恩人だ。

故に僕は逆らえない。

逆らう気さえ起きるはずもない。

だって怖いから。

だって、哀川潤が好きなんだから。

恋愛感情ではなく、友人、いや、家族みたいな感情。

「で、だ　冬ちゃん。実はあかし、冬ちゃんに用があつて来たんだよ」

良かった。

ドッキリの為だけじゃなかったんだ。

安堵。安心。安泰ではない。

「その用ってのがな、2つあるんだ」

哀川さんは、指を二本立ててこちらに向ける。要するにピー入型。

2つ、か。

一体何だろう。

「何ですか？」

「1つ目の用件。とりあえず謝りに来た。ごめん、冬ちゃん」

え、え？

急に謝られてしまった。

どうしよう。

どうすればいいんだ僕。

「何でそんな、急に」

「実はだな。小唄のヤローに言つとか言つときながら、まだ伝えら

れてないんだな。だからごめん」

……なんだ。

良かった。

ほんと、むしろ良かった！

ということは、師匠にはまだ僕の居場所は割れてないってことだな。

よし、まだ大丈夫。

“まだ”、大丈夫。

「それにもう1つ。冬ちゃんには別の用件があるんだが、それ伝えるのに時間がかっちまった。だからごめん」

うわ……。

相変わらず律儀な人だ。

いつも思うけれど、この人変なところで律儀だ。

「いや、そんなの謝る必要もないですよ？」

「嫌だね。借り作んの嫌いだし」

「ああ、そうですか」

まあ、そういうことなんだよな結局。

「おう。冬ちゃんには特に、借りは作つときたくないしな」
むう。

そんな風に思われてたんだ。

そうでもないと思うけど。

ていうか、哀川さんに借りを作る方が恐ろしいと思うけどな。

「まあ、大嫌いな池袋コウに来たのは冬ちゃんの様子見って意味もあるし　一石二鳥、いや一石三鳥だ」

様子見ね。

様子見。

保護者としての、様子見。

「それで、零崎くんはうまくやっていけるのかな？」

にやにやとした表情で言われた。

……………答えづらっ。

微妙、だよな…………。

「連絡入れてから2週間は経ったよな。ってことはよ、“友達”の一人くらいは作れたんじゃないかねえの？」

友達。

トモダチ。

きつと、意地悪く言ってるんだろう。

性悪だ。

僕にトモダチが圧倒的に少ないことを知ってのことだもんな。

よほどタチが悪い。

でもやっぱりそれも、保護者としての、“心配”。

なんだろう。

多分。

「別に……大丈夫ですよ。“トモダチ”できましたから」

嘘つきにもトモダチはできる。

それこそ、嘘だらけのトモダチだけど。

「ふーん。ならいいんじゃないかねえの？あたしも冬ちゃんに友達ができるのは嬉しいからな」

そう言っつて、哀川さんははにかんだ。

楽しそうな笑顔だった。

「そっか　なら、平気だな」

「え？何がですか？」

哀川さんは、一瞬悩むような仕草をして、僕に改めて向かう。

なんだろう。

「池袋コトに置いていても平気だよ　　つつことだよ。友達がいる
んなら、お前は大丈夫」

友達がいるなら

僕は大丈夫。

僕はきつと大丈夫。

誰かがいれば、大丈夫。

「大丈夫だけだよ　　問題はこの街自体なんだよな。びっくり人間
大集合だぜ、マジで」

「あなたがそれを言いますか」

「どつという意味だよこの野郎」

「何でもないです独り言です」

誤魔化した。

いや、できてねえよ。

「まあいいや。あたしは心が広いからな。激広だ」

「……ええ。知ってますよ」

これは本当に。

身内に甘いこの人のことだ。

分かりきってるよ。

解りきってる。

長い付き合いだし、ね。

「それで、だな。この街が“変”なのは 妙に異質なのは、ちいとばかりし“暴力”が絡んでるからなんだよ。もちろん真の意味で厄介なのは、やっぱし“普通の世界”何だろうがな」

“暴力”

つまり、暴力の世界。

この世には、4つの安定した世界がある。そしてそれぞれの世界が少しずつ重なりあっている状態だ。

まず一番大きな、《普通の世界》。

まあ、この世界のこと。ER3システムがぎりぎりのところだ。残りの3つ。

日常生活を表の世界とすれば、裏の世界。

最初に、玖渚機関を核とする《政治力の世界》。

玖渚ちゃんや直さんは、この玖渚機関を束ねる一族。

ああ、玖渚ちゃんは絶縁されているんだっけ。

要するに権力の世界だ。

次に、四神一鏡を核とする、《財政力の世界》。

神理^{ルール}楽やらんやら、そういう財閥が支配する世界。

そして、最後の世界。

言いて妙だけど 最後の世界。

殺し名7名、呪い名6名を核とする、《戦闘能力の世界》。

はっきり言って化け物だ。

いや、何だかんだ言っても、僕も殺し名にカウントされちゃうんだけどね。

零崎一賊。殺し名、序列3位。殺人鬼集団。

それよりヤバいのも、勿論あるんだけど。

圧倒的な暴力。

暴力の世界。

その 暴力が絡んでいる、のか。

正直、怖いとかじゃなくて面倒だ。面倒臭い。

いちいち、“隠蔽”とかそういうのがすごく、面倒。

「ええ、それはよくわかってますよ。普通の世界の、怖さってやつは」

それで僕は

こうなってしまったんだから。

だけど、暴力なら

“暴力”なら。

「大丈夫ですよ。“トモダチ”は、守ります」

約束したから。

守るって。

護るんだって。

「バーカ。それじゃダメなんだよ。お前自信を守らなきゃ、あたしとの約束を破ることになるんだからな」

拳骨が来た。“哀川潤の拳骨が”。

脳天に直撃した。

普通に痛かった。

「まあでも、友達を守るつつう心掛けは良いことだ。褒めてやる。よしよし」

そのまま、哀川さんは拳をほどいて、僕の頭をぐしぐしと撫でた。

髪がぐしやぐしやになった。

でも、哀川さんの掌は、温かった。

人肌の温もりってやつを直に感じた。

まるで、本当の親子みたいに。

僕は

「だから、頑張れ。お前は大丈夫だから。だから頑張れよ、あたしの息子」

.....。

.....ふう。

心拍数上がってる。

母親、か。

「はい、頑張ります」

「おう、頑張れ」

また、哀川さんははにかむ。

赤色は笑顔が似合う。

惚れちゃうぜ。

「んじゃ、もう行くわ。これから仕事入ってるからな。多忙多忙超多忙」

「そうですか　　やっぱり忙しいんですね。わざわざ、すみません
すると不思議そうに惚けた表情で、僕を見る。

「ああん？何言ってるんだよ。当たり前だろうが　　身内だし、息子
なんだから」

う。

息子って、連発されるとかなり照れる。

すげえ恥ずかしい。

色んなところがむずむずする……

「ん。じゃあな冬ちゃん。また時間あったら来るわ。小唄のヤローにも、ちゃんと言っといてやるから」

再び人を小馬鹿にしたような顔でにやにやしながら、哀川さんは窓を開けた。

……………まさか。

まさかそこから行く気なのか。

だって二階だぞ？

本当にやる気だ。

びっくりだよ！

両手は壁に捕まり、片足を窓枠に立て、仁王立ちのような格好になったところで。

赤色は素敵な素敵な笑顔で言い残していった。

「そついえば言い忘れてたけどよ、『《殺し名》のどっか おそらく匂宮雑技団の分家だろうな。が、お前を狙ってるらしいから、気を付けるよ。』」

そして窓から飛び下りていった。

あっという間に見えなくなった。

今、最後あの人が何て言った？

“今、最後、あの人が何て言った？”

《殺し名》のどっか

匂宮雑技団の分家

お前を狙ってるらしいから

.....。

.....。

思考停止再び。

思考回路がショートした。

えーと。

「.....マジか」

師匠が来るよりかはマジだけど。

だけど、でも。

「駄目だろ」

うん、駄目だと思う。

ていうか、何で？

何もしていないのに何故こんなことに。

おかしいぞ。変だ。

何でだよ

あー。わけわかんねえ。

「……寝よ」

零崎は。

僕の、零崎は。

僕と、零崎は。

開幕せざるを得ないのだろうか？

（再会 哀川潤

保護者・請負人）

（被害者 零崎冬識

加害者 哀川潤）

〈自宅 再会（災害）〉（後書き）

主人公のキャラが大変なことになってます。

ごめんなさい！

そして潤さん、口調が変かも知れないです。

すいません！

次の更新もいつになることやら……

頑張ります。

よろしく願います。

〈校内 交渉と後悔〉（前書き）

今回は殺し名が出てくる予定です。が。
出せるかな……

〈校内 交渉と後悔〉

早く行かなきゃ。

早く行かなきゃ。

逃げ逃げ。

逃げ逃げ。

え？

何故そんなにも急いでいるかだって？

そんなの簡単だよ。

早くしないと、僕の元から“非日常”が逃げていってしまっから。

早くしないと、僕の掌を“非日常”がすり抜けて行ってしまっから。

早くしないと、僕はまたつまらない“日常”に捕まってしまうっから。

早く行かなきゃ。

早く行かなきゃ。

懐中時計を落とさないで。

行く道を見失わないで。

真っ直ぐ進めばその先に、真っ赤なお城が見えてくる。

棘の森の向こう側。

扉を開けたその先の、夢の世界へ。

そうすれば、きっと

何かが僕を変えてくれるはずだから。

昔から夕焼けが嫌いだった。

なぜって、ただ単純に青色が好きだったから。

青空が橙色に変わる様子を見たときは、大好きな青色が、見事に台無しにされていく気分だった。

青色に塗り終わった絵の具の上から、橙色のペンキをぶちまけられたような、そんな気分。

裏切られたようなその気分。

だけど、夕焼けの後に訪れる闇の方が、もっと嫌いだった。

暗いところは大嫌いだ。

独りで立ち竦んでいるような錯覚に陥るから。

独りで泣いているような幻覚に襲われるから。

子供は暗いところが嫌いだと言っけれど

だとしたら僕はずっと子供のままなんじゃないかな、と思った。

同時に、別にそれでもいいや、と考えた。

「
」

夢うつつな気分で、窓の外を眺めていた。

空は既に青空が役割を終えて、橙色に塗り替えられようとしていた。

瞼が重い。

目が開かない。

夢うつつどころか意識が八割方無い状態だ。

つまり眠い。

ていつか寝ている。

「
」

最近寝不足なんだよな。哀川さんが妙な事を言い残していくから。

匂宮の分家かどこかが、お前を狙っているらしいから

それにしても分家、ねえ。

まあまさか本家が出てくるわけがないし。

そもそも“零崎である僕を殺すなんてどうかしてる”。

普通に、考えれば。

常識的に、考えれば。

けど残念ながら僕は“特例”だ。

いや、“異端”かな。

殺したとしても さして問題はない。

まあそれでも、殺人鬼を殺そうとすること自体、どうかしてる。

怖い怖い。

もう怖くて怖くて夜も眠れない。嘘だ。

単純に睡眠時間が足りていない、だけ。

だから今（夜以外に）寝ているというわけなのだ。

「
」

ああもう、この間哀川さんが訪れてからというものの昼と夜とが逆転している。夜

中のバイトでも初めたような生活リズムだ。

いや、哀川さんのせいじゃ無いんだけど。

悪いのは僕の兄貴だ。

あながち、バイトというのも間違いでもない。

タダ働きなだけで。

それはバイトとは言わない。

こんなにも労力をかけている自分に、凄く損をしている気がする。
多分している
んだろうな。

最近僕は忙しい。

“そういうこと”からは足を洗った筈だけど、ある人に無理矢理仕事の手伝いを
させられているからだ。

ある人っていつても、まあ普通に考えれば軋兄なんだけど。

何だよ仕事って。しかも真っ先に僕を手伝わせるか？

殺人鬼のくせに。

最悪なことに僕に対しては人使いが結構荒いし。

正直面倒臭い。

正直者にならなくとも面倒臭い。

だけど毎日頑張ってるよ。

頑張ってるよ？

タダ働きだけ。

軋兄のためだ、軋兄のため。

文面だけ見ると凄く良くできた弟じゃん、僕。

実際は全然違うけど。

180度回転させれば、僕に該当するまでになる。

残念ながら僕はちっとも誠実な人間でもなければそこまで兄思いな人間でも無かった。

人間ですら無いんだから。

仕方ない。

しかし、無茶苦茶言うよな、軋兄も軋兄で。

突然仕事手伝え、なんて。

もっと弟のことを考慮するべきだ。絶対にそうだ。

そんな兄は家族から嫌われてしまえ。

もしくは玖渚ちゃんから嫌われてしまえ。(禁句)

「冬護！」

「ん？」

目を開けて、机から顔を上げる。

眩しい。

さっきから誰かに呼ばれているような気はしていたけど、今やっと意識が復活したところだから。無視してたわけじゃない。

「え、何？誰？」

「誰？じゃねーよ！さっきからずっと呼び掛けてんのに見事に無視してくれやがって……ていうか俺は朝から放課後までぶっ通しで寝続けてるやつ初めて見たっつーの」

凄い勢いで突っ込まれた。

ナイス突っ込み(?)。

ていつかチヨップされた。

痛い。

この間から脳天ばかり狙われている気がする……。

ふむ。

どうやら朝から放課後までぶっ通しで寝続けている奴がいたらしい。

全く、学校を何だと思ってるんだ。学校は健全なる学習の場だぞ。

そんな不届き者の正体は、なんとびっくり僕だった。

改めて見上げたら、僕に突っ込みと脳天チヨップを食らわせたのは正臣くんだったらしい。

「……………?」

「素で疑問そうな顔で見つめるなよ。何だ、もしかしてキミってソツチノ趣味……」

「!?!?そうでなくてもやっぱり俺の美顔が輝かしすぎて直視できない直視なんかできっこないとも言いたいのか!……………照れちゃうぜ」

いや、だって。

なんでいきなり此処にいるのかなーって思っ

……ん？

「いや、何でいるんだよ」

正臣くんはごく自然に誰かの机に足を乗っけて座っている（誰の物が覚えてない）
さつき座ってた）。

正臣くんは隣のクラス。

そしてここは僕のクラスだ。

……これって不法侵入なんじゃないか？

「うわ。すげえ嫌そうな顔されたぞ俺。どうすればいい、どうすればいいんだよ

？何だ、何か面白いことを言えばいいのか？フリなのか？よし、じやあこの街で

一番女の子にフレンドリーかつセクシャルティに接することのできる奴を次の三

つから選べ！1紀田正臣、2紀田正臣、3紀田正臣」

「3点」

「どこかで聞いたことのある突っ込みが　でも今のはマジで悪かったよ……」

パクリ。

疑惑以前に諸パクリ。

でも正臣くんも滑ったんだからおあいこだ、うん。

セクシャルティってなんだ。

「で、僕のクラスで何やってんの？」

「今日一緒にナンパに行こうと誘いに」

「行かないよ」

その間、僅か0・6秒。

新記録更新。

いえーい。

「この間杏里がいけなかったから今日は一緒にナンパに」

「行かないよ」

「またそんなこと言ってよ……本当は行きたいんじゃない」

「行かないよ」

「三回言われた！？」

謎のリアクションをとられた。

謎すぎるポーズだった。

正臣くん、そのポーズ最高だよ。完敗だ。

今更ながら、さすがにもう分かっていると思うけど、僕の笑いのツボはかなり浅い。

「まあ、一緒にどっか回るのならいいけどね」

「それはナンパのついでだろ！」

あくまでナンパ優先か……。どんな固い決意だ。

園原さんがいるんだから、別にわざわざナンパに行かなくても、いいじゃん。

僕はそれで十分満足だし。

十全だ。

「そういえば、帝人くんは？」

そうだ。

いつもならここらで帝人くんが代わりに受け答えてくれるはずだけど。

周りを見ても、見当たらないな。

ていうか何で帝人くんがいないのに正臣くんがこの教室にいるんだ。

正臣くんはいつもそんな調子だけど。

「帝人なら委員会。だから杏里も一緒にいつてんだよ。あの二人クラス委員だからな」

「ふうん」

「つてえ、知らなかったのかよ！」

聞いていたような気もするけど。

どちらにしる忘れていては意味がない。

「じゃあ行くにしても待つていなきゃなんだね」

「ああ。でももうすぐ終わるんじゃない」

そう言いかけた正臣くんが、急に口を閉じて、廊下の方を睨み付けるように見つめた。

耳を廊下側へと傾けるような姿勢。

突然どうしたんだろう。

「どうしたの、正臣くん」

「しー。なんか杏里が悪い噂の絶えない例の変態教師に絡まれてる

っぼいんだけ
だよ」

何だって？

変態教師って

えーと。

この間の、あの嫌な感じの教師かな。

じゃあ、助けに行かないと。

「それなら僕、園原さんのとこに」

「ちよい待てい」

右手を突きだし、僕に制止の意を示す。

なぜ。

「ここは俺が華麗にあの悪党を撃退してくるからよ　まあ見とけ」

悪党って。

仮にも教師なのに。

まあ、園原さんに絡んでる時点で既に尊敬の意志なんて微塵も無いけどね。

誰が尊敬なんかするかよそんな奴。

そんなことを考えていたら、正臣くんが行動を開始していた。

てつきり、二人の間に割り込んで行くものだと思っていたから驚いたんだけど…

…。

何を突拍子も無いことを、みたいな。

正臣くんは、上半身だけ廊下にだしていた。

要するに上半身だけ飛び出てる状態。

……すげえ発想だ。

「那須島センサー。セクハラっすかあ？」

僕も少しだけ、軽く気配を出来る限り消して廊下を覗いた。あの変態教師には、
れない程度に。

見事なまでに硬直していた。

わっかかりやす。

園原さんの肩に手を置いているのが 見えた。

その手に、力が入る。

肩を強く握られた園原さんが、思わず声をあげる。

おいおい。

それを見た正臣くんは府鉄に笑い、那須島先生（だっけ？）をさらに追い詰める。

「わお。いたいけな眼鏡委員長に声まで出させて。いよいよ本格的なセクシャル・ハラスメントってやつつか。でもセクシャルだのハラスメントだのわけわからなくないつかあ？ 寧ろ判りやすくセクシー・ハラショーつかあー？ 英語とロシア語混在作戦で東西冷戦終結つかあー？」

「き、紀田！ ふざけるんじゃない！」

こういう時の正臣くんは強い。でもって普段の饒舌がさらに饒舌になる、というのは知ってる。

那須島先生は慌てて園原さんから手を放し、こちらに振り返りながら叱責の声。

あからさまに必死だ。

わかりやすい。

「おやおやおやおやおや。いけないよねえ那須島先生！。A組のキッチー達ならともかく、うちのマスターサトチーを引き合いに出すなんて」

「……ッ！」

口をぱくぱくさせて、言葉を失う那須島先生。

正臣くん、僕と話ながらも二人の会話を聞いてたんだな。

尊敬に値する。

正直この人、もうこれ以上続けられない方がいいんじゃないかな。

墓穴掘ってるし。

いい加減、止めてあげるかなあ。

気まぐれ。

だけど殺人鬼の気まぐれは、夕チが悪い。

冗談みたいに悪質だ。

「冗談……冗談だからな、園原。勘違いして変な噂とか、流さないでくれよ。な
、な？」

「ハハハ、先生！杏里がそんな軽薄な女に見えますか？」

「うん、その通り」

僕は呟く。

そして続けて僕は“那須島先生の肩を叩いた”。

硬直された。

「……………は？」

「嫌だなー先生。正臣くんの言う通りだって話ですよ。園原さんがそんな下らな

いことするわけ無いじゃないですか。悪い冗談ですよ」

ちよつと苛々してるから、八つ当たり程度に微妙に饒舌になる。

こんな僕はレア物だ。

「冬護 お前、いつの間に。っていつか出てくるなって親切に言っただろ」

「まあまあ、いいじゃないか。僕だって少しくらいヒーロー気分に浸りたい時があるんだよ」

まるで正臣くんみたいにそう答えて、先生の肩から手を放し、園原さんの手をとる。

少し照れるけど、我慢我慢。

女の子と手、繋いじゃってるし。

「お、ま、お前は」

「どーもこんにちは。僕、最近A組に転入してきた深限冬護です。以後お見知りおきを」

お前は何だ、とでも言いたいのか？先生。

何でもない。

ただの殺人鬼です。

なんて、無駄な思考。

ついでに丁寧にお辞儀までしておいた。

……これで文句はないよねえ。

「じゃあ行こうか園原さん　ああ、そうだ正臣くん。当然“さっきの映像と音

声ってレコーディングしてあるんだよね？”」

「……な、おま……」

それを聞いて、再び言葉を失う那須島先生。

そして正臣くんが“握っている携帯電話を見せびらかすように”手をこちらに向

け

「もちのろんだ。この意味わかりますよねえ先生。とりあえず立派な大人になる為の御勉強として まずは、裏っぱい駆け引きの仕方を教えて下さいや。」

“ねえ、先生？”

正臣くんはこちらにウインクを決め、僕はVサインで返し、園原さんは困惑しきつた表情を浮かべていた。

那須島先生は大の大人のくせに泣きそうな顔をしていた。

そして小さく呟く。

「お前ら……打合せでもしてたのか……」

またまた。

悪い冗談ですよ。

「くくく。期末試験の問題一部ゲット。狙い通りだなあ冬護」

「うん。流石だね正臣くん。全く感嘆の限りだよ」

実は期末試験の問題を狙ってたなんて嘘だけど。

初耳だし。合わせただけ。

僕らは校門へと続く道を三人で歩いていた。

帝人くんは遅れるらしい。

その後、正臣くんと僕とで先生と『交渉』し、見事に期末試験の問題の一部を手に入れた。

勿論そんなのが目的だったわけじゃあないだろうけど。

どうも僕の友人は道化るのがお好きなようだ。

「だからお礼は正臣くんに言うべきだよ、園原さん」

「え……………」

「お礼言おうかどうか迷ってたんでしょ？少なくとも僕には言う必要はないから

。お礼なら正臣くんに言って」

だけど正臣くんは、子供みtainな笑顔で言う。

「俺にも言う必要なんてねえよ。俺としては杏里も助けられたし、
期末試験の間

題を入手できたんだから、おあいこだ。相殺、イーブンなんだから
何も言わない

でおくのが妥当だぜ」

僕は言葉を失った。

当然、園原さんも。

だってその台詞は、格好いいと思う。

素直に格好いい。

「だから言葉なんて要らないという事で、とりあえず手を握るところから始めようか」

「怒っていいですか？」

台無しだよ。

でもこの方が正臣くんらしい。

正臣くんは、妙に茶化す癖がある。

僕と似ている。

僕なんかと似ていたって、どうしようもないのに。

「いやっ待て。今そんなことしたら、帝人や冬護に立てる顔がないん？」

何で僕なんだよ。

帝人くんはともかくとして。

「何言ってるんだよ。ちょっとは杏里に気があるんだろー？帝人はマジ惚れベタ惚れだけどな」

「えッ」

遠慮がないなあ正臣くん！

僕が園原さんに気がある？

ないない。

それはない。

「帝人くんはともかく　僕はないから、それ。いや園原さんが可愛くないとか　じゃなくて、僕自身の問題で」

僕の問題。

人を好きになる上での、

問題。

確立した、

問題点。

僕は人を愛せない。

そういう奴だ。

依存するくせに、ね。

迷惑な鬼だ。

「ふーんそうかよ。真意は知らないけどよ。ともかく俺の大親友、竜ヶ峰帝人くんは杏里にベタ惚れだからよ。俺はとりあえず様子を見させてもらうことにした」

勿論冬護、お前の様子もな。

そう加える。

「……………紀田君は、優しいんだね」

園原さんが、顔を赤らめて言った。

優しいんだってさ、正臣くん。

「おっと睨むなよ冬護。お前やっぱり杏里に気が」

「ないない」

茶化すように流しておく。

まだわからないし。

他人のことは勿論。

何より自分自身のことが、一番。

だから嫌いなんだよ、自分のこと。

すると小さな声が耳に入る。

「二人は凄いな。私は 自分がどうしたいのか、わからない」

少女がそう呟いたのが、僕には聞こえた。

正臣くんは、どうだったんだろうか。

と、その時、校門の所で頑張って手を振っている少年の姿が目に入った。

帝人くんだった。

あれ？はや。

ああ、問題ゲットしてる間に来たのか。

納得納得。

「ほーら、ベタ惚れ真っ最中な純真君の登場だ」

僕は、返すことが出来なかった。

だって、僕は園原さんが　　××？

はあ。

所詮は未だに初恋が忘れられない、馬鹿なコドモの呟きだ。

だって、もしかしたらもしかすると。

「それだけは、無いと思うけどなあ」

ライバルかもしれないじゃん。

意識したのが遅すぎた。

まず始めに後悔した。

後悔して後悔して、それでも少しだけの安堵。

僕は油断していた。

完全に油断していた。

全く僕は何をしていたんだろう。

何もしていなかったのかもしれない。

忘れていただけかもしれない。

“ だけどそれが、原因だ”。

僕が原因。

哀川さんと、約束したのに

僕は約束を破った。

僕はそれでも良かった。

だけど、哀川さんはそれを許さない人だから。

『友達と、自分を守れ』

僕は約束を破った。

僕は嘘つきだから 約束なんて意味ないのに。

この大嘘つきに約束を強要したって、意味なんかはないはずなのに。

嘘つきは正直だ。

但し、自分自身に。

“　　ぞわっ”

背筋に悪寒が走った。

痛みみたいに。

どろどろとした、鋭い意識と意思の塊。

殺意の塊。

殺意。 戦意じゃない、殺意。

身の毛もよだつような　濃密な殺意。

帝人さんと正臣さんと園原さんが、前を歩いていた。

いや、ついさっきまでは並んでいたのだけれど、僕が足を止めたのだ。

三人がこちらに振り返る。

どうしたの　と。

聞かれたのだと、思う。

“ 雑意が酷すぎてよく聞き取れなかった。”

僕の、特技。

“ 気配を感知する、能力 ”

その影響で、今必要以上に“ 殺意 ”を受け取りすぎている。

背中をナイフで刺され続けている感覚。

気持ちが悪い。

嫌な気分だ。

大丈夫

返せたかな。

わからない。

自分の発する声すら聞き取れない

少し、用事があったのを思い出したよ。

急用なんだ。

ごめん、あとは三人で行ってきて。

そう言った。つまり。

帝人くんは、苦笑いを浮かべながら何か言って、

正臣くんは身振り手振りでなんとなく何を言ったかわかったけれど、

園原さんは、一回軽く頭を下げ、何か言ったようだった。

お礼か何か言われたらしい。

“ だけど、わからない。 ”

それじゃあね、と言って。

三人と別れた。

……………ふう。

これでひとまずは安心だ。

あくまで直接的にだけど、友達は巻き込まずに済む。

引き続き僕に真っ直ぐに“ 殺意 ” が向けられていて、下手に動けない。

“ 殺意 ” が強すぎて、周囲の音のボリュームが下げられたようだ。

これは色々まずいんじゃないか？

まあ幸いにも、僕にだけ集中して殺意を向けているようだし。

今のところ、周囲のたくさんの人、多すぎるくらいの人間には何一つ関与していない。

だから、下手したら巻き込む可能性が高い。

この手の刺客ってのは、大体一般人を目にも留めないだろう。

無理してここで応戦なんかしたら、面倒だ。

「あーもう。面倒だ」

声に出してみる。

何も変わらなかったけど。

とりあえず。

とりあえず、だ。

この正確に相手の正体もわからない状況を脱するには

僕は出来るだけ歩調を変えないように、つまり誘導しているのがあ
ちらにバレな

いように、この通りから外れることにした。

ここは人が多すぎる。いちいち通りの名前なんて覚えてないから、
どこだかはわ
からないけど。

もう既に辺りは暗い。とは言っても、この大都会だ、夜でも暗さは
あまり気にな
らない。

目はあまり良くない。だから未だに気配に依存してる。

暫く歩いて、人通りの少なそうな細い路地に入り込む。

進んで路地裏の更に裏。

いや、既にどこだか分かんないけど。

僕は立ち止まる。

すると相手も気が付いたようで、僕とほぼ同時に立ち止まった。

緊張状態。

確かに場所に関しては最適だったらしい。

ここなら僕も、枷を外せるだろう。

できればそんな枷、外したくないんだけど。

全力とか苦手。

だけど今回は、そんな戯言を言っている余裕は無さそうだ。

頑張らなくちゃ、かな。

まあ何だかんだで　　戯言だ。

「　　戯言？」

という疑問が、聞こえた。

どこから　などと詮索する必要は無かった。

「……………」

上。

ビルの、屋上。

そこに人影が　見える。

屈んでいる、人影。

誰だ？

多分ていつかほぼ間違いなく、先程のストーカーさんだろう。

「あんた今、戯言だの何だのつつたか？てことは　あんたが標
的でいいんだ

よな」

「さあね　僕はそんなこと知らないよ。知る必要も義務も無いし。
きつと人違

いじゃない？」

なんて。

まさしく戯言だ。

「あっそ。まーいつか。とりあえずあんたが標的ってことにしときやあ、何も問題はねーだろ」

全然よくねえよ。これは僕の眩き。

屋上の人物はぼやいて、立ち上がったようだ。

今度ははっきりと、見えた。

否、「見えるように」相手が仕向けたのかもしれないけれどそこにいた。

「どーもコンニチワ。そんでもってサヨウナラ」

“殺意”が消えた

だけど、どす黒い“戦意”が、僕の意識を貫いた。

(脅迫) 那須島隆志

(教師)

(被害者) 園原杏里

加害者 那須島隆志)

〈発症 零崎冬識（依存症状）〉（前書き）

まずはじめに。

……ごめんなさい！！

戦闘シーンとかなんか色々すみませんでした！！

非常に読みづらいつらいと思いますが、ご了承ください！！

ちなみに今回は戯言仕様となっております。

ワケわかんない設定が多数ありますが、何となく分ければ多分大丈夫です！（多分）

〈発症 零崎冬識（依存症状）〉

「どーもコンニチワ。そんでもってサヨウナラ」

その言葉と同時に、僕に向けられていた“殺意”が、はっきりと“戦意”に切り変わり

「どーん」

“僕に向かって、突っ込んできた”。

……ビルの屋上から！

間一髪で避ける。

爆音 なんてものはしなく、僕に突っ込んできた常識外れなその存在は、華麗に両足で着地した。

落ちてきた時の衝撃はどこへいったと質問したくなるほどに彼が彼女は無傷で、流石に冷や汗がでる。

こんな感覚久し振りだから。

マジバトル。

「ちえー。外しちった。失敗失敗。やるねえ兄ちゃん」

何が失敗だよ。

もう十分にプレッシャーを感じさせてるじゃないか。

攻撃としては、十分すぎる。

「よつと……おお？ふーん、あんた意外にいい顔してんのな。羨ましー」

いかにも冗談めいた口調で、笑う。

あー、苦手なタイプだ。

相手が振り返った為に、姿がはつきりした。

正直、男か女かわからない。

特徴的な長い髪。

前髪をカチューシャで上げている。

じゃらじゃらと、腕につけたアクセサリーが発する音が、酷く耳障りだ。

その容姿が、誰かに似ている気がする。

誰に、だっけ。

「おい兄ちゃん、あんた、名前は？」

“標的”かもしれない相手に名前を聞くななんて馬鹿げてる。そう思ったけれど、言わないと逆に怪しまれる気がする。

いや、屋上から突っ込まれてる時点で怪しまれるもないんだけど。

……いいのかなあ教えて。

多分殺し名だよなあ。

ていうか多分、僕を殺しに来てるよなあ。

でも偽名だし。いつか。

「深限冬護　　だけど。君は？」

すると彼（仮）は、カチューシャをつけ直して、勿体振るよう
に言う。

「うーん、僕？……ま、教えてもらっちゃったし教えてやんよ。特別サービス」

……………。

なーんか見たことあるよなあ。

口が軽いところとか。

思い当たる節が多すぎる。逆に嫌だ。この感じ。

「私は殺し屋依頼人は秩序！十四の十字を身に纏い、これより使命
を実行する！　　なーんてね。ご存知の通りであろう、有名どころ
の殺戮奇術集団、匂宮雑技団。僕はその匂宮雑技団所属　　匂宮歪
無^{ヒスム}つつの。よろしくね」

匂宮

匂宮、歪無？

ニオウノミヤ。

ヒズム。

.....。

まじですか。

本家の人間、だよなあ。

匂宮って名乗っていたんだ。間違いない。

歪無。

..... 出夢ちゃんか理澄ちゃんの兄弟かなにかかな。

匂宮ってたしか、血縁関係なんだよな。

零崎は血流関係だけど。

その違いは、大きい。

大きすぎるくらい。

匂宮雑技団。

殺し名、序列1位。

その本家。

……哀川さんの嘘つき。

分家がどうかという話じゃなかったのか？

分家を相手取るくらいならどうにかなるとは思っていたけれど。

流石に本家とドンパチって色々とまずいんじゃないのかな。

軋兄、ごめん。

何かあつたら後始末を頼むよ

「んで、何悠長に考え事なんかしてんだよっ」

と、ここで歪無くんが僕に回し蹴りを入れてきた。

また間一髪で避ける。

危ない危ない。

「なになに、僕が匂宮だって分かってビビっちゃったのかよだっせー。そんなビビりじゃモテないぜ、きゃはははははー！」

転びそうになる。けれどそのままの勢いで、彼はくるっと器用に一回転する。

その際に足が伸びていたので、また僕は辛うじて避けた。

当たったら、かなりヤバイんだろうなコレ。

何よりそのプレッシャーに、恐怖する。

「いや、君そもそも“標的”っていうのを殺しに来たんだろ？僕みたいな一般人なんかにつ構っている暇なんかあるのかよ」

例えその“標的”が、“零崎冬識”だったとしても

僕はまだ、深限冬護のままだ。

「“一般人”？笑わせんなよ兄ちゃん。僕の攻撃を三回も避けといてそりゃあねーだろ。僕はとにかく、あんたと闘り合うのが楽しくなってきたんだからよ。仕事だの何だのはとりあえず後回しでいいの。例えあんたが“標的”じゃなかったとしても、楽しけりゃあそれでいいーんだ」

……迷惑極まりない思考だな。

どうするか、この状況。

そもそも実際のところ、“標的”は一体誰なんだろうか

「にしても、あんたマジで何者だよ。“標的”になってる奴もそーとーやべーっていうから僕が出てきてんに。あんたみたいな奴がいるなんて聞いてねーし」

本当にマジであんたが“標的”なんじゃねえの？
そう付け加える。

「……さあね。何にしても僕には関係ないよ」

「冷たいの。ヒヤヒヤレベルドライアイス級ってか！」

きゃはははは

と。一頻り笑って歪無くんが、まさに正統派、実に単純に左ストリートを出してきた。

「……………」

予想外。

やば、少しかすっ

そのまま、視界が反転した。

……………あちゃあ。

倒れていく極短い間に、考える。

少し“かすった”だけでこの様か。素直に恐ろしいな。

なるべく急いで立ち上がる。いや、飛び起きる、のほづが正しいかな。

大丈夫、骨は折れてない。

「あちゃー痛かった？兄ちゃん軽いだもーん。羨ましいぜ」

続けて左側。

だけど二回目だ。

流石に当たるわけにはいかないし
と思っただけだ。

残念ながら僕には学習能力というものがなかった。

でも今回は、特別。

アクションの追加、ではなく

アクションの上書き。なので。

「……りゃあつ」

体を右に傾けて、彼が腕を戻していくその一瞬に、左足で歪無くんの脇腹を蹴る！

歪無くんの小さめの体が、いとも簡単に吹っ飛ぶ。

ほら。君の方が軽いじゃん。

「ごめん。痛かった？」

茶化すようにそう呟く。

派手な瓦礫の崩れる音よりも早く、歪無くんが立ち上がった。

ゆらゆらと、俯いたまま、喋らない。

西条ちゃんか君は。

いやあ西条ちゃんは可愛かった。美人さんだ。超好み。大好き。すげえ嘘。

悠長に脳内で突っ込んでいたら、歪無くんが。

「おいおいおい……マジであり得ねーって。吹っ飛ばされちったよーきやははははははは」

怒ってた。

わかりやす過ぎるくらいに、怒ってた。

……単純。

「この僕が吹っ飛ばされるなんてさー。僕を吹っ飛ばせるのなんてマジで兄貴くれーのもんなんじゃん？なにになに、何やっちゃってくれてんのさー」

兄貴

ん？

今、気が付いたけれど。

匂宮って、兄弟とか姉妹とか、そういうので行動するんじゃないかなかったっけ。

あれ。

じゃあ、歪無くんにも

「あーあイラつくー。こんなに面白そーな奴がいんのによー、今仕事中心じゃんかよー、遊べないじゃんかよーあーあ」

ぶつぶつと、呪詛のように繰り返し繰り返し呟く。

やばいな。

この手の相手は、怒らせたら面倒なんだよなあ。

でも。

いー兄なら。

嘘つきで不誠実者な、僕の“大嫌いな”戯言遣いなら

「そんなに遊びたいならこんなところ僕に構ってないでやらと遊んでくれば？」
兄貴と

歪無くんが。

「きゃ、はは、ははは」

“キレた”。

「きゃはははははははははははははははは！なあに言っちゃってんだよ兄ちゃん！きゃは、きゃははははは！冗談キツイぜー」

ぐらり、と。

僕を見る。

「あんたは僕のことなあんにも知らないんだ。そりゃそーだ。知るはずねーもんな、きゃははははは！」

ぐらぐら、と。

酷く背中を丸めるようにして。

僕を笑う。

「僕はなあ、“そういうの”のために“作られた”訳じゃねえんだよ。僕にはなあ、兄弟とか姉妹、っつーのは作られなかったんだ。いらねー訳だからな。だからあんたの“それ”は、全くもって検討違いも甚だしいぜ」

口元を、笑みに歪ませるようにして。

無理矢理に笑う。

「僕には兄も弟も姉も妹もいねえんだよ。　　匂宮の中でただ一人！
僕は“独り”の殺し屋だ！」

成る程ね。

場違いな程のんびりと、僕はそんなことを考えた。

どこかで聞いたことがあるとは思ってた。

多分、軋兄辺りに。

どこかで見たことがあるとは思ってた。

こいつは

「匂宮歪無 《人喰い》兄妹の、複写品！《人喰い（カーニバル）》の弱さと《人喰い（マンイーター）》の強さを“ぶちこまれた”失敗中の大失敗作！表沙汰には出来ないほどに 僕はイカれちまってるってことだよ！」

《人喰い》兄弟。

《人喰い（カーニバル）》の理澄。

《人喰い（マンイーター）》の出夢。

一人で二人、二人で一人。

一人が二人、二人が一人。

殺戮奇術の匂宮兄弟。

強さと弱さを引き離れた、匂宮雑技団最大の失敗作。

その、複製品？

つまり オルタナティブ
代替品？

そんなもの。

そんなもの

“存在していいはずがない！”

「だから僕には実質的に“兄貴”なんていねーんだ さっきのは、
ただの言葉遊びだぜ、兄ちゃん」

確かに。

確かにその通りだ。

歪無くの言うことが本当ならば

彼に兄も弟も姉も妹も存在していいはずがない。

だけど。

“そんなのは実際どうだっていい。”

殺人鬼には、関係ねえよ !

「そんなことないよ。君、本当は“兄や弟や姉や妹が、欲しくて仕方ないんじゃない？”だから、出夢ちゃんのことを、“兄貴”なんていうんだろ」

その続きは、歪無くんの蹴りによって遮られた。
さっきまでとは比べ物にならないくらい、本気の蹴り。

そろそろか。

「知ったよーな口聞くんじゃねーよ兄ちゃん。僕が欲しているだ
あ？訳わっかんねーよ！」

マジギレだった。

無茶苦茶だ。

こんなの、怒りに任せて滅茶苦茶に暴力を振るっているに過ぎない。
言い換えれば癩癩カンシヤクをおこしているだけだ。

だから、見える。

だから、避けられるんだけど。

「わかったよーな口聞くん！あんたなんか僕がわかってたまるか
つての！僕は一人だ　僕は一人だ一人だ一人だ一人一人一人一人
独り独り　独りなんだつつうのがわかんねーのかよ！」

ぐしゃっ。

一発、腹部に入った。

あばら二本ぐらいは、折れたかな。

「うるせーんだよ何だよあんた！うるせえうるせえうるせえうるせえ口を挟むなよ否定するなよ何言ってるのかわかんねーよ意味わかんねーんだよ馬鹿野郎！」

「うるさいな」

歪無くんが

一旦、止まった。

「うるさいよ、君」

僕は続ける。

「黙れないのかな 下らないことばばばーばばーばばーばばーばばー喚かないでくれるかなうるさいんだよ」

とどめ。

さて、どう出るか。

「」

歪無くんが。

大きく腕を降りかぶり。

「《一喰い（イーディングワン）》！！」

叫んだ。

爆、音。

体が 吹っ飛ぶ！

やばいやばいやばい！

歪無くんの腕が、僕の体に触れる迄のその“リーチ”の間。

僕の脳内は恐怖というより、驚愕で埋め尽くされた。

その、技は

だってその技は！

やばいやばいやばい！

こつ来たか なんて悠長なこと言っている余裕はなかった。

……………っ仕方ない！

ああもう仕方ない！

キ ン。

爆音と同時に響く、“金属音”。
聞き慣れた金属音。破壊音。

歪無くんの表情が、揺れる。

“多分、標的の特徴として、教えられていただろうから”。

勿論、“標的”が“零崎冬識”だったらけど　！

「何だよ、それ　」

「あれ、知らなかった？教えられなかった？それは残念だったね。
無念と言うべきか。“これ”を省いたら僕には何にも残らないのに。
中途半端な依頼人だね　勿論、“標的”とやらが“僕だったらの
話だけだ”」

歪無くんは、動かない。

いや、動けなくしてるんだけど。

「じゃあ教えといてあげようか。こいつは僕の獲物でさ　獲物つ
てよいかは僕自身って感じなんだけど。とにかくこいつの名前、
ディペンダンスシンフトン
依存症状”っていうんだ。“嫌な名前だろ？”」

ぺらぺらと。

僕は喋り続ける。

「こいつは元々僕のじゃないんだけどさ　何しろ使い勝手が悪く

てね。前の所有者にすぐに捨てられてしまったんだ。だからそれを僕が拾ったって感じなんだけど。だから僕はいつにたくさんの愛情を注いでるんだ。まあ嘘なんだけど」

歪無くんの首筋に刃を突きつけたままで。

僕は喋り続ける。

「とにかく僕にとってはこいつは自分自身と同じだし獲物としても重宝してる。けどあまり使いたくないんだよね　こんなに目立つ物使うと、僕みたいな地味な奴なんか、すぐに正体バレちゃうから」

笑ってみた。

ひきつった。

「あんだ、もしかして　」

「あー続きは言わなくていいよ。多分この二つのどちらかだと思うから。“ディペンドランスシンプトン”そのものが、“最弱”か、どちらかだよね」

長い長い、僕の獲物。

巨大と言っても過言ではない大きさの獲物、つまりは僕自身。

例えるならそうだな。

“大きいカッター”って感じ。

武骨な柄。

ギロチンのような刃。

かなり薄いのが特徴だ。

「それじゃ、匂宮歪無くん。改めましてこんにちは。僕の名前は“零崎冬識”。ただの殺人鬼だ。仲良くしてね」

歪無くんの首の皮膚が、切れる。

微動だにしない依存症状。

微動だにさせない、僕。

「くっ……そ……」

あ。逃げられた。

あくまで背は見せずに、歪無くんは僕を睨みつつ、転がって立ち上がる。

危うく依存症状を取り落とそうになった。

「あーくそ！ いったやだなー嫌んなっちゃっぜ……」

またぶつぶつと呟き始める歪無くん。

……ちよっとは落ち着いたのかな。

「嫌だな……ほんと嫌んなるぜ、僕のこの“性格”。本当にほんつとーに殺されそうになる時ってさあ、“全っ然楽しくねーのな”」
それは普通だと思う。
一般一般。

羨ましいくらい普通の、恐怖。

「ちよつと兄ちゃん」

と聞かれたから、「なに？」って営業スマイルで返したら嫌な顔された。

「あんた　どんくらい強えーの？」

ふうむ。

「僕は強くないよ　強くなんかない。赤色に言わせれば、最弱だから」

だから、強くない。

だから君が怖いんだよ。

「嘘つけ。あんた絶対え強えーだろ。ま、だから今からじゃ逃げらんねーだろっし」

逃げようとしてたのか。

それもまた、一般的でいいんじゃない？

「あんたみてーな“戯言”を具現化したみてーな野郎からなんて、逃げよーとも思わねーよ」

「……………そ」

それはただの戯言遣いだよ、歪無くん。

だけど逃げるにしろ逃げないにしろ。どちらでも、同じだ。

どちらでもいい。

結局僕は、零崎を再開しなければならぬのだから。

「だからちつとは楽しませてくれよ 零崎冬識、殺人鬼さん」

うーん、どうかな。

やっぱり君次第だから、ね。

「じゃ、今回の演目は 【序幕】 双恋慕」

停止していた“僕”の零崎。

枷を外した僕自身

零崎冬識、復活！

なんて。

「それじゃあ 零崎の開幕だ」

僕は笑う。

殺人鬼と殺し屋の、
代替品と代替品の、
依存症状と複製品の、

僕と彼の、

無意味で無関係すぎる、

殺し合い。

歩いていた。

とりあえず歩いていた。

正確に言えば、迷子です。

正確に言えば迷子なんだけど。

午後9時25分。

さて、どうやって家に帰ろうか。

「……………帝人くん、出るかな」

僕の救世主に助けを求めるしかなさそうだ。
嫌になるよ、全く。

学習能力がないのは、不便極まりない。

そういえば、いつからだっけ。

僕の学習能力が、零に等しくなったのって。

昔の話だ。

覚えてないや。

「ちつくしよー歪無くんめ……………」

柄にもなく少年漫画の主人公風に呟いてみた。
似合わねー。

結局歪無くんには、逃げられたし。

いや、かなりギリギリのところだったんだけど。
要するに逃げられた。

腕を一本失いながら

血だらけで、

血だらけで、

血だらけになりながらも、

歪無くんは、殺人鬼から生き延びた。

「やーっぱ無理だわ。ムリムリ。勝てねーって」

そう言つて、歪無くんは後方に跳躍する。

依存症状の広い間合いから下がって、苦々しく笑った。

「あんた、やっぱ半端無く強えーんじゃん。止ーめだやめ」

胡散臭く道化るように、まるで僕のように、彼は言う。

既に血だらけになりながら。

「僕はあると遊びたいけど、殺されたい訳じゃねー。逃げられるともおもってなんかねーけど、今ならあんたからギリギリで逃げられそーだ」

「ふうん、そう」

僕は、血液でべたべたになった依存症状を、右手に持ちかえた。

元々僕は両利きなんだけど、どうにも依存症状だけは左でしか扱えない。

つまり、僕はもう既に【演舞】を終了しているわけで

逃げるなら逃げればいいと。

そう思った。

こんな中途半端に相手に“依存”しといて、曖昧にもほどがある。理不尽すぎる。

不完全だ。

歪無くんが、ビルの屋上にまで飛び上がった。

「んじゃ逃げるけど　ああ、依頼人には申し訳ねーけどな。きやはは、僕ももうガタが来てるっばいねーきゃはははは！」

多分。

下らない推測だけど。

歪無くんは隠居でもするんじゃないかと、思う。

彼力なら僕からも、匂宮からも、逃げられるだろうし。

それに彼は僕に対して

殺意は、余り向けなかったから。

だから、最初から嫌な予感しか、しなかった。

絶望的に嫌な予感しか、しなかった。

「ちよつと待つて歪無くん。君さ、もしかして“死んだ魚みたいに生気も何も無くてあり得ないくらい濁った目をした奴と、どっかで出会っちやったりとかしてる？”」

歪無くんは、最初に言った。

戯言？

あんた今、戯言って言ったか？

それはつまり。

「ある日、僕はイラついてた。最高レベルでイラついてた。だから適当に憂さ晴らしにでも行こつかなーって感じで、歩いてた」
歪無くんは、まるで昔話を話すかのように言う。

「そこで誰かさんと肩がぶつかつたんだ。イラついてたから、振り返っていちやもんでも付けけるつもりだった」

多分、そこで。

「振り向いた奴の目は、“この世の物とは思えないくらい濁つてて、あり得ねーくらいに混沌としてて、冗談みてーに底が見えないような、暗くて陰湿で寒気のする人間とは思えない目をしていやがったんだ”」

ふうむ、成る程。

これも、ただ単に彼が“不幸”だったってだけの話か。

「正直言つて怖かつたね。怖かつた。だから、とりあえず言つていたんだ、肩ぶつけたんなら謝るくれーしろよって。そしたらあいっは、“はあ、そうですね” “じゃ、すみませんでした” そう

言った。そう言っただけ、なのに」

軽く体を震えさせて、思い出したくもないとでも言うように、吐き気がするとでも言うように、歪無くんは俯いた。

「言っただけ、なのに？」

「そう、言ったただけだ。“ だけど僕は、そこから全速力で逃げ出した”」

俯いたまま、彼は続ける。

「何とも言えねー不快感だった 虫酸が走った。気味が悪かった。何もねえよーな目をしていやがる癖に、僕の全てを覗いているかのようで、僕の中身が全部ぐちゃぐちゃに掻き乱されたようで、僕の価値を見定めたようで、僕を否定しているかのような目だった。人間の物とは、とても思えなかった」

それは多分、いや確実に。

僕がよく知る戯言遣い、だ。

戯言遣いと接触。

それはすなわち、全部狂わされるのと同じだ。

全部全部台無しにされるのと、同じだ。

「だから僕は思ったんだ。“ 今まで何のために僕は何をしてきたんだろう”って。あの目を見ただけで、全部が全部不自然で不可解で不安定で不気味で異質で異常で歪に見えてきた。全てに、今までの

世界の全てに、疑問を持った」

戯言遣いは無意味に無感覚に無関係に無関心に無理に無認可に無謀に無責任に無差別に無意識に自らの周囲を狂わせる。

歪無くんは巻き込まれただけなのだ。

巻き込まれただけ。

それだけで、被害は甚大だった。

「だから僕は何もしたくなかった　こんな気味の悪い世界で息をしていること事態、僕には耐えられなくなっていた。　だから死ぬばいーのかなって、ちいとばかり思っちまったんだ。　“それじゃ、ダメだろ？”」

殺し屋として。

殺し名として。

それは考えては、いけないこと。

死という概念にとりつかれれば、終わりだ。

終わり。

「　だから、僕はダメだ　あんな不快野郎に出会っちまったからには、もうダメだ。全部、分かってる」

「　そ。それは本当、不幸としか言いようがない。同情するよ、素直にね」

「　やっぱ、知ってるよーな口振りだな。まあ、“戯言”なんて呟い

てる時点でそんなん、確實だったけどな　　きゃはははははは！

高らかに笑って、にんまりと清々しい程の笑顔で。

これから様々な意味で死に行くとは思えない程に気分の良い笑顔で。

「んじゃあね。ばいびー零崎冬識。また後で遊ぼーぜ。二度と会いたくなんかねーけどな」

歪無くんは、もう一度笑った。

「僕もだよ　　ばいばい。二度と出会いませんように、心を込めて」

そんなこんなで。

零崎、閉幕。

そして時間を戻して午後9時30分。

僕の眼前に、黒い男が現れた。

戯言遣いとは比べ物にならないくらい、奇しくもそれは人間らしいのか人間らしからないのかわからないような漠然とした目で、僕の大嫌いな目だった。

みんなが二次元キャラみたいキラキラな目をしていたら、世界は平和だろうに。
なんちゃって。

とにかくこの男は。

僕の大嫌いな男であり、

絶対に出会いたくない人種だった。

「お久しぶりです　　会いたくなんかありませんでしたよ」

「冷たいなあ数年振りだろう？まああの頃君には随分と楽しませてもらったけどさあ、懐かしいよねー。俺ももうおじさんになっちゃったのかな」

「　　冗談じゃない」

あんたはそのまま朽ち果てればいいと思う。

本当この人嫌い。

というより苦手だ。

「それじゃ、再会を祝してお茶でもする？」　零崎冬識くん」

「あなたとなんて吐き気がしますよ　　折原臨也さん」

今日は悪いことしか起こらないらしい。

どうせ家にも帰れないし、さあ。

(戦闘 匂宮歪無)

殺し屋)

(被害者 零崎冬識)

加害者 匂宮歪無)

〈発症 零崎冬識（依存症状）〉（後書き）

長くなってしまいました……。

この先はデュラララ原作に沿って進行していくと思います。（多分）

よければ感想とか、よろしくお願いします！

〈旧知 好き嫌いと依頼人〉（前書き）

今回は非常にキャラ崩れが激しいおそれがあります。
ご注意ください。

えーと、これでも頑張りました（特に情報屋の彼）。

短め（？）かもです。

いや、短くないです。

〈旧知 好き嫌いと依頼人〉

失うことはやめること。

補うことは負けること。

間違うことは生きること。

忘れることは死ぬこと。

できないことは無神経。

やらないことは無責任。

させないことは無関心。

知らないことは無意識。

世界というものは、不可能の表面に“無”という曖昧な概念を散りばめたものを言うようであらう。

不可解の深層に“無”という漠然とした思念を浸透させたものを言うようであらう。

不安定の内側に“無”という朦朧とした信念をばら撒いたものを言うようであらう。

不可避で不可欠な不完全の“無”という心の全てを言うようだ

「
？」

少年は振り返った。

素早い風でもなく、ただ平然と、普段通りの行動だというような素振り、少年は振り返る。

「血の匂いがするな　それに、何か懐かしい感じの何かが感じられなくもない」

少年は呟く。

耳に付けた携帯ストラップが音を立てた。

くんくんと、犬の様に鼻を軽く突きだし、呟いて。

少年は笑う。

“顔面の刺青”を綺麗に少しだけ歪ませて

「まあいつか。そんじゃ暇だし、“血の匂い”でも追ってみっかな」

そして少年は前を向きなおし、静かに歩き出す。

最後に一言、誰にも聞こえない程の声で呟いて。

「懐かしいって“あいつ”が、こんなところにいるわけもねーか。

かはは、んなこと考えてること事態」

少年は振り返らない。

あたかもそれが普通だともいっつかのように、懐かしむ訳でもなく、惜しむ訳でもなく、少年は振り返らない。

そして、当然のように歩き出し。

必然のようになんと言った。

「傑作だ」

「で、一体僕に何の用があるというんですか」

東京 新宿某所。

現在時刻は10時20分。

折原臨也の事務所内。

「僕、早く帰りたんですけど」

「そんなに長居する必要はないよ。随分久しぶりだったからさあ、話がしたかっただけだっただけだっただけだ」

嘘つけ。その目は嘘をついてる目だ。

折原臨也。

新宿主体の情報屋。

自称21歳（毎回違う気がする）。

男。妹が二人。

人間大好き、な変人。

僕の大嫌いな人種。

だから嫌いだ。

それに玖渚ちゃんの敵だしね。

「それにしても、まさか君が池袋に住み始めてるなんてねえ。どんな心境の変化？」それとも誰かに指示でもされてここに来た？」

住み始めたとか、何も言っていないんだけど。
この人に個人情報をもつて渡すなんて絶対に嫌だし。

でも流石に早いな。

僕が池袋に住み始めたことぐらいはもう知っているのか。

“指示でもされて”、ねえ。

本当に嫌いなんだよなあ、この人。

「何のことですかね　僕は自身の気まぐれでここに来たに過ぎませんよ。誰の意味でもない　ましてや青色や赤色は全くもって無関係です。変に詮索するのはやめてください」

「失礼だなあ、詮索なんてしてないよ。だけどまあ俺、そもそも情報屋だし」

「……………」

嫌な感じに笑う。

何が情報屋だし、だよ。
だからこそ嫌なんだろ。

嘘つきは嫌いなんだよ。
嘘だけどね。

「あなたこそ、今は新宿にいるんでしょう？あんな美人秘書なんか雇って、“面白いこと”とかはもうないんですか？」

事務所に入る時に見掛けました。

あれはあれで美人さんだよな。

「ああ、波江のこと？おーい波江ー、この子が君のこと美人だってさ」

ソファーに頭を預けて、上にいた美人さんもと波江さんに向かって叫んだ。

無視。

「つまらない女だねえ　君もそう思わない？」

無視した。

あはは、と乾いた声で笑う。

「面白いこと”ねえ。別に俺は快樂主義者じゃないんだけどなあ。あくまで俺は人間が好きただけだよ。あくまで人間が、ね。それに別に池袋から手を引いたわけじゃない。あそこには色々あるからね」

よく好きになれるよな。

人間なんて、気味の悪いもの。

なんか悪者気質だよな、この人も。

「でも最近ほ、あの街も大分混沌としてきたからさ　互いの巨大な勢力がぶつかり合って、どーん。ってなったりして」

両手の人差し指で、衝撃を表現する。

はあ、と適当に相槌。

「本当に池袋つてのは面白いよねえ、面白すぎるくらいだよ。ダラ―ズに軋り裂き魔、今はまだ干渉してないけど　黄巾賊とかさあ、何でこんなにも“俺の思い通りに事が進んでいくのかなあ”」

うわ、タチ悪。

満面の、子供みたいな笑顔。

池袋には、まだまだ執着しているっていうのか。

執着、して。

この人は昔から何一つ変わっていない。

「ただでさえデュラハンとかシズちゃんとか、ぶっ飛んだ奴らが集まっているつてのに、そこに“殺し名”である君が登場って……はははは！全く、最高じゃないか！」

……デュラハン？

何のことだ？

デュラハン？

ドラ エ？

あ、違う。首なし騎士か。

てことは、首なしライダー！

のことも。

あとシズちゃんて誰だろう。

「君がうまく絡んでくれれば本当に最高なんだけど。けど君のバツは少々厄介だから、あんまり手出せないんだよね」

それって本人の前で言うことなのか？
まあ、僕だからいいのか。

零崎冬識のバツク。

成る程、厄介っていつかでかすぎるな、色んな意味で。

だけど。

そんなものなくったって。

「僕だって関わりなんかしませんよ 登場なんて以ての他です。
僕は“なんの物語にも関与できない”ということ、忘れたわけじゃないでしょう？」

関与しない できない。

だからこそ僕は。

誰も巻き込みたくない。

物語の外、なんて。

もどかしいことこの上ないから。

「僕は特定の人間としかつるまない。それ以外なんてどうなるうが

どうでもいい。だけど、僕の管轄内は あなたの好きなようには
させませんよ」

ある意味、宣戦布告。

受け取りようによつては。

「そんな冗談みたいな君の悪質さはわかりきってるよ。まあだから
こそ、“君にさっそくアプローチしてみただけ”」

「……………」

身に覚えがある。身に覚えしかない。

「どうだった？ 匂宮雑技団、しかも本家の殺し屋は」

この人が依頼人か！

けれど、ある意味納得。

僕のことをなんとなく「あ、殺そう」みたいに簡単に考える人なん
で、数えるほどしなかいだろうから。

「どうも何も……………やっぱりあなただったんですか。どうかしてると
しか思えませんよ……………匂宮に“零崎の殺害”を依頼するなんて」

零崎は家賊がすべて。

零崎に手を出せば 報復を受けることになる。

だから、零崎は殺し名の中で最も忌み嫌われている。

家賊愛。

家賊のために。

だからこそその零崎一賊だ。

孤独を皆で消費しようといういかにも人間らしい目的で、僕らはつるんでるんだから。

「まあ一般の殺し名からすればそうだろうねえ。けど、君の場合は話が別だ。君について少しでも知れば、殺すことに何も問題なんてないことに気付いてくれると思ってたんだ」

「……………教えたんですか？」

そこ、重要。
すごく重要。

「零崎冬識は既に零崎とは何ら関係ない”
”そう言ったただけだよ」

いやダメだろ。

匂宮にそんなこと知られたくないよ僕は。

ていつか知られたら哀川さんに殺されます。
確実に。

「大丈夫。多分あの殺し屋は“完全に単独”で俺の依頼を受けてた

だろうからね　本家には伝わってないと思うよ」

マジすか。

ナイス歪無くん！

良かった。

本当に良かった。

哀川さん、大丈夫です！

「言っただろ　君のバックは厄介なんだって。色々と面倒臭いんだよねー、あの青い子」

「そりゃあそつでしょうね。あなたからしてみれば特に」

同情。

ただの同情。

そりゃああの青色サヴァンだし。

臨也さんはわざとらしい手付きで言っつ。

「そつだ、確か君つて、匂宮出夢と理澄とも知り合いらしいじゃないか。どうだった？複製品」

知り合いつていうか何と云うか。

説明しづらい関係なんだよな。

まあ歪無くんの名譽の為にもここはあえて。

「そりゃ強かつたですよ。死ぬかと思いましたがもん。ていうか肋骨

折られましたし」

嘘だけどね。

死ぬまでは思っていないよ、流石に。

それにこの程度の怪我なら、寝れば治る。

「ふうん、そう。つまらないな、やっぱ“標的”シズちゃんにしなければよかったかな」

嘘だと見抜かれた。

だからシズちゃんて誰なんだよ。

しかも至極つまらなそうな反応。

僕は続ける。

「でもやっぱり、勾宮出夢の方がワンランク上って感じですかね
まあ、オリジナルとコピー複写品ですから」

僕も立場的には同じようなもんだけど。

代替品には限界がある。

複写品には限界がある。

「いや、でもホント何やってんですかあなた。僕なんかに構ってて僕を殺せないことはよく知っているだろうに。」

わざわざ殺し屋　しかも殺し名に僕の殺害依頼をだすか？普通。

普通のわけないか。

「君が“弱い”のはよく知ってるよ　俺なんかより遙かに弱い。

“だけど殺せないことも、よく知ってるからね”」

また乾いた笑みを浮かべて。

僕は軽く溜め息をつく。

「成る程　でもないですけど。僕をわかってもらえてるなら、それでいいですよ。どうせ何やったって正当防衛の範囲内です」

正当防衛だから。

ね、師匠。

僕は悪くない。

良くもないけど。

ただ弱いだけなんだから。

弱さを理由にし続けて。

依存するのが、最弱だ。

「“弱い”　だから君の存在は厄介でしかないんだ。うまく使えなきゃ、障害でしかなくなるからね」

ごもつとも。

僕なんか使わなきゃいいんだよ。

弱さ、か。

昔、師匠にも散々言われたっけ。

「それもまた、人間らしくていいじゃないか」

「……………嫌味ですか」

殺人鬼にそんなこと言うかよ。

人間らしい、ねえ。

ついさっき自分でそんなこと言ってた気もしくもないな。

「人間らしさ……か。殺人鬼にはわかりませんよ、そんなの。そんなこと言ってるあなたのほうがよっぽど人間らしいです」

「そうかもねえ。当たり前だろ？俺は人間だからね　まあ俺は人間を好きになる方だから、俺が人間らしければいいってもんじゃないだろうけど」

人間らしくても、人間らしくなくても。

どうせ僕は人間じゃないから。

「ところで、そんな理不尽な君に頼みたいことがあるんだけど」

臨也さんは唐突に切り出した。

仕事、かな。

「明日の夜、南池袋公園で俺の知人と会ってきて欲しいんだよね
ああ、相手は“一般人”だから」

知人と会う　か。

楽そう、なんだけど。

この人からの仕事だしなあ……。

怪しすぎる。

何か裏があるとしたか思えない。

「別に裏があるわけじゃない。ちゃんと報酬もだすって。それなりにいい仕事だと思うけど」

心を読まれた。

うーん、額を聞けば、まあまあ。

ていうか問題はそこじゃない。

折原臨也が依頼する仕事だぞ？

どんな内容であっても本来なら絶対に受けないであろう、折原臨也からの仕事。

情報屋としては信頼できても、折原臨也という“記号”は死んでも信用できない。できっこない。

だって青色の敵だから。
蒼色の敵だからね。

けれども。

現実的な話、生活費が。

家賃とか、借金とか、その他諸々。

……………現実的すぎる。

「どうせ君もお金に困ることがあるだろうから　せめてもの慈悲
として、だよ。君の為にもまあ頼まれてくれない？」

慈悲って……………。

悲しくなってきた。

どうせ貧乏ですから。

生活費vs好き嫌い

ROUND 1。

「うみゅう……………わかりました。南池袋公園　ですか。い
つ頃行けば？」

勝負あり。

生活費勝利。

臨也さんは心底楽しそうに、言う。

「そつだなあ……………時間帯が微妙なんだよね……………君、
“仮にも”高校
生だろ？」

現在時刻が既に遅いし、考えてみれば僕は一応高校一年生という
とだった。

警察とかに見つかりと厄介な時間帯だ。

見つかったら見つかったで逃げるけど。

そりゃあもう全力で。

「じゃ、夜の10時に南池袋公園。どうだい？君なら誰にも見られ
ずに辿り着くことなんて容易いだろう？道はわかるかな？」

こいつ……

堂々と夜の10時を指定してきやがった。

ていうか見られる云々の話より、まず僕が自力で南池袋公園まで辿
り着けるかのほうが問題な気がする。

……絶対着かないよな。

「誰かに電話してもらいながら行けばいい 例えば、君の友達と
かに」

「……………」

この人嫌いだ。

友達、ねー。

完全に知っている態度だな。

帝人くんか……正臣くんか……？
あるいは、園原さんか。

「よろしく頼むよ、零崎くん。ああそうだ。出来るだけこのことは露見させないでね。こちらとしても、君の“大切な人”に知られないよう、努力はしてみるからさ」

「はい　　お願いします」

頼むから本当によろしくお願いします。
心からお願いします！

「で、行って何をすればいいんですか。怖い人と会ってこいと、
そういう餓鬼のイジメみたいな内容だったら怒りますよ」

びっくりイベント不可だ。

ギャルゲーみたいなのも却下。

園原さんレベルならギリギリ。

「会ってくれただけでいい　誰かがいるよ。その人と、ただ会っ
てくれればそれで仕事は終わりだ」

簡単だろう？

にやついた口元で。

僕を弄ぶような、口調で。

だからこの人嫌いなんだよ。
あーもー。

「まさかそんなに重要なことじゃあ無いんですよね？困りますよ、下手に“そっち側”に巻き込まないで下さい」

これはこれで、高校生活をエンジョイしているんだ。

表世界

通常世界で。

池袋にくる前、“普通”のフリを、もうどれだけ続けてきただろうか。

覚えてないよ。

「ただでさえ“池袋”は混沌としている　おかしいんですよ、何が根本的に。ぐちゃぐちゃで、ごちゃ混ぜで、何が何だかわからないような、そんな場所なんですから。僕は出来る限り“普通”の高校生として生活して行きたいんです　裏事情は、あなた方の問題だ」

決して、僕の管轄内ではない。

何より面倒だ。

大人は大人で頑張ってる。

子供には子供の世界がある。

殺人鬼は、いつだって邪魔者だけ。

だけど、それでも。

「裏事情　殺し名にそんなこと言われるなんてねえ。裏事情、なんて言っても君にとっては随分と小さなものだとは思っけ。

そう、君はまだ人間ぶって生きていくのか。ふうん、頑張ってる。俺

は君を好きにはなれないな　だって君は偽物だろう?」

偽物。

紛い物。

どうせ代替品だから。

僕は、人間のフリをしなければ、きっと駄目なんだから。
色んな意味で。

駄目になる。

今だって何かが駄目なんだろうけど。

駄目、だから依存してる。

足りない部分を補って

欠けた部位を補って

誰かと誰かに依存する。

傑作とは、言えない。

ただの依存症状だ。

「依存ってのは　ある意味、病気ですよね」

「　その言葉は君自身を否定しているようにしか聞こえないな」

「　あながち、間違っちゃいないですよ」

寧ろ本筋を突いている。

と、言わざるをえない。

僕は自分が大嫌いだからね。

自己嫌悪を通り過ぎるくらい。

「そういえば、双子ちゃんは元気ですか？」

双子ちゃん。

クルリちゃんとマイルちゃん。

巨乳っ子と眼鏡っ子。

結構好きだったりして。
嘘だけどさ。

「双子ちゃんね　クルリとマイルのことか。知らないよ、俺もあいつらには会ってないし、会いたくもない」

「ほう。そうですか」

珍しく苦笑いでもなく、皮肉に満ちた表情でもなく、本当に苦い顔をする。

あの二人可愛いのに。

「そんな冷たいこと言って。妹なんだから可愛がってあげればいいじゃないですか」

なんちゃって。

オリハラクルリ　オリハラマイル
折原九瑠璃と折原舞流。

折原臨也の双子の妹。

現在中学三年生、だったかな。

この子たちもこの子たちで、色々ぶっ飛んでるからなあ。

まあ、この人の妹だし。

あの二人がおかしいのは絶対に兄の悪影響だよな。

名前もアレだけど。

それは両親のセンスだ。

「冗談きついね 俺はあいつらが苦手なんだよ。君は少なくともあいつらと面識があるし、好かれてるんだから その辺りはよく知っているだろう?」

「僕は嫌いじゃないですけどね。あんな“人間”という“人種”と“記号”も、悪くない」

曲兄、セリフ借りるよ。

事実僕はああいう子、嫌いじゃない。

壊れちゃってる。

狂っちゃってる。

だけど。

彼女たちがいくら壊れていても。

彼女たちは人間だ。

腐ろうが廃れようが腐敗しようが、人間だ。

「あいつらも今頃はどうせ、羽島幽平の追っかけでもしてるんだろう。スタンダードに考えればさ」

「……………」

羽島幽平で、誰だろう。

知らない人だ。

「何をどう間違えれば幽くんに走るかねえ。やっぱり俺のせい？」

などと呟く。

いや、知らないし。そんな事情。

「そもそも俺のあいつらが苦手な第一の理由は、あいつらが目指すもの。それが、“完全な人間”だから、ということもあるんだよ。異常だし、何より“痛い”。完全な中二病患者だ」

うーん、患者。

言িয়েて妙だ。

つまり彼女たちと僕は、概ね同種の扱いを受けてしまうということだろう。

可哀想に。

依存よりは中二病の方が何倍もマシだ。

彼女たちは痛いけど。

僕のは夕チが悪い。

気味が悪い、というか。

そういう感じ。

「だから俺は正直なところあいつらについて余り考えたくない君は同種だろうから、特別だろ」

「かはは。同種だなんて、彼女たちに失礼ですよ。殺人鬼と同じだと言われて喜ぶ“人間”がこの世に存在しえますか？」

或いは、鏡写しだなんて。

極めて戯言だ。

答えは当然、否なんだから。

あの子たちは、人間だ。

どう間違っただいようが、そこまで外れじゃない。

死人でもないし、実験体でもないし、殺人鬼でもない。

ましてや戯言遣いでも幽霊でも何でもなし。

立派で低俗な、人間だ。

「病気は病気でも、桁が違う。僕のはとびきり悪質な　不治ってやつですから」

だから殺人鬼にまで成り下がった。

いや、成り上がったのかもしれないな。

殺人鬼になったことで、家賊ができたんだから。

僕のスタートラインは、既にマイナスだったしね。

端からぐだぐだだ。

「僕は彼女たちを尊敬しますよ。“人間”を目指す、なんて普通じや考えようともしない至極素敵な考え方だ。素敵も素敵、超感動しちゃうくらいです。尊敬に値しますよ」

普通じゃないから。

逸脱してる。

僕はわかりきった上で、話す。

「あなたとは違ってね　彼女らは純粹ですから。あなたとは、全く似てもつかないくらい」

「何それ、誉め言葉？」

「そうかもしれないです」

裏の裏の裏の裏の裏くらいを読めば。

「そ、じゃ与太話はこれくらいにして。妹にはすぐ会えるだろうよ
“シズちゃん”にもね。どちらにしても、君は君の周りで何か
あるとすぐに俺のせいにする癖がある。それはそれで仕方ないけど
さ。あまり俺の邪魔はしないでくれよ。君がいると　どうしよう
もなく不安になる」

全部ぐちゃぐちゃになって。

全部零に還元されて。

リセットボタンでやり直し。

そういったことを、臨也さんは言いたいんだろう。

無理もないね。

僕が臨也さんに対して、異常に警戒するのと、同じことだ。

「仕事、よろしく頼むよ。零崎冬識くん。いや、深限冬護だっけ？」

「どちらでもいいですよ　両方共“記号”ですから」

今更偽名を知られている程度では驚かない。

逆に言えば、それくらいじゃなければ拍子抜けというものだ。

「かはは　戯言だよねえ。っと、それじゃ帰らせてもらいますよ。
仕事は終わり次第報告します」

そう言って、僕は立ち上がる。

外は既に真つ暗で、多分日付が変わりそうなくらいの時間が経って
いたらしい。

暗い。まあ、田舎よりは全然マシだ。
けど、夜道は得意なほうだ。

問題ない。

ていうか帰れるかな。

ここから我が家までの道程が全くわからない。
やべえ。

明日、学校あるよな……。

帝人くん起きてるかな……。
起きてないとやばいんだけどな……。

まあ、何とかなる気もしなくもないし。

大丈夫だろ、きっと。

立ち上がって、事務所の扉のドアノブに手を掛ける。

「あなたには、縁が“合つて”も会いたくないですね　精々、突
然の刺客に注意してください。僕はあなたが大嫌いですから、何が
起こるかわかりませんが」

なんて。

背を向けたまま、僕は扉を開けて外へ踏み出す。

「夜道には気を付けて　なんて、君に言っても無駄だろうけどね。ディペندانズシンプトン、零崎冬識。俺は君が嫌いだから、何が起こったとしてもわからないけれどね」

皮肉に満ちた表情で、明らかに悪役の表情で、情報屋は僕に言っただらしい。

と、いうわけで。

「どついう訳だよっていう突っ込みはガン無視していく方針だからその辺考慮して返答よろしくね」

現在地点、不明。

現在時刻、12時08分。

竜ヶ峰帝人と通話中。

通じたのは奇跡だ。

『……つまり、道に迷ったってことだよね？』

「迷った以前の問題かな」

平たく言えば迷ったんですけど。

「そういうわけで帝人くん、助けてくれ。僕は今自分がどこにいるのかわからないっていうかなりピンチな状態なんだ」

やっぱりどうにもならなかった。

さっぱり無理だった。

ていつか希望が全く見えなかったために歩き初めて20分で諦めた。

情けない。

そう兄には死んでも知られたくないシリーズ第2弾。

『うん、でもその辺りならすぐ帰ってこれるよ。案内するから切らないでね』

おお…………。

頼もしい。

すげえ頼もしい。

「了解した。悪いね、こんな夜遅くに」

本気で反省。

いくらなんでも遅すぎだよな。

『僕なら大丈夫。それにしてもこんな時間まで、何かあったの？急に帰っちゃったし…………』

ああ。そうだった。

僕急に帰ったんだっけ。

忘れてた。

「ちよつと急用でね。長引いてこんな時間になっちゃってさ」

まあ、あながち嘘じゃない。よね。

『そうなんだ。じゃ、多分その辺りに十字路があるから左に……』

てな感じで、帝人くんナビによって僕は九死に一生を得たわけだが。いや、大袈裟だけど。

「あ、見えた」

前を見ると、帝人くんが玄関先で手を振ってくれていた。

軽く振り替えしてみた。

「友達、か」

哀川さんとも約束したし。

この大切な友人は、守らなきゃ。

僕のためにも、彼らのためにも。

だから僕は

「でも、依存するのは卑怯だろ」

自分自身の存在理由を、否定した。

(再会

折原臨也
情報屋)

(加害者
被害者
なし
なし)

〈旧知 好き嫌いと依頼人〉 (後書き)

投稿！

臨也さんはこんなでしたっけ・・・

あんま自信ないです。

文句あったらいつでもどうぞ。

〈仕事 実行（口実）〉（前書き）

注意なんです、稀に主人公が兄を呼ぶ時の呼び方が変わってる場合があります……

駄目な作者の不注意です。

見逃してやって下さい。

〈仕事 実行（口実）〉

「昨日は大変だったね」

帝人くんが、苦笑しながら言う。

本当、帝人くんには悪いと思ってるんだよ？
普通あんな時間に出歩かないって。

斬り裂き魔斬り裂き魔。

危険危険。

「大変だったって、何かあったんですか？」

その横から巨乳眼鏡っ子ちゃんもとい園原さんが心配するよつな表情で僕に言った。

うーんと。

どうしたもんかね。

どう説明するのが無難だろう。

「ちょっと道に迷ってね……帝人くんに助けてもらってたんだよ」

ある意味正直に告白。

夜中の12時過ぎに道に迷って情けなく友人に助けを求める高校生。

何を隠そうこの僕だ。

だってほら、同じような建物多いし。

「それは、大変だったんですね……」

おお。

憐れみと励ましに満ちた目で見られたよ。

どうする僕。

頑張れよ僕。

「でもやっぱり来てはっかりだから、道とか覚えるの大変だよね？
僕も最初は苦労したし……」

帝人くんナイスフォロー。

流石だ。

全くもって感嘆に値する。

僕そついうの向いてないから。

他人の手助けとか、そついうの。

そのくせ変に見栄を張るからいちいち面倒なんだけど。
自分が面倒なのって嫌だよな。

「そつですよな。わからないことがあつたら、私にも言ってく
ださい」

……なんて素晴らしい友人達なんだ。

この人たちはなんだ、あれか？聖人君子なのか？

なんか二人共純粹過ぎない？

ひねくれてる僕が恥ずかしくなってきたよ。

「……………」ありがとう

結果的に照れた。

まともに礼も言えない僕って。

現在時刻、（勿論昼の）12時くらい。

場所、来良学園。

零崎と再会と夜中の迷子から一夜明け、本日も真面目に学校へと登校した。

教師受けが良いからね。（一名除く）

真面目に学校に通う。

頑張ってくれた、兄貴の為にも。

何の変鉄もない、ただの平日だ。

昨日徹夜したから、すごく眠い。

無論軋兄のお手伝いは、放棄した。

そんなものは知らない。

闇に葬り去った。

さようなら。

で、つまり今日は昨夜頼まれた折原臨也からの仕事の日なわけであり

その依頼内容は、今日の夜10時に南池袋公園（だっけ？）で折原臨也の知人と会ってくる、というもの。

意図が読めない。

わけがわからない。

一体あの卑怯者は何を企んでいるんだろう。

どう考えても怪しすぎる。

何か裏があるに決まっている。

ただ、この依頼は請けざるを得なかった。

請け負わざるを得なかったのだ。

なぜかって現実的な話、生活費がね。

“にんげん”はお金で動くけど、“さつじんき”だってお金がないと生活していけないんだ。

ともかく今日の夜10時までには、普段通りの生活を続けなければならぬ。

というわけだ。

説明終了。

と思ったら、明快だった視界が急に暗くなった。

「だーれだっ」

「何をバカツプルみたいなことを……」

かなり長い溜め息をつく、その“気配”が不安定に揺れる。

案の定僕の両目を塞いだ手の主は正臣くんだった。

何か逆に安心したよ。

……この扱って駄目なのかな。

うん、別に良いよね。

「……リアクションが思ったよりも冷たい！」

「悪かったね正臣くん。僕は男は受け入れない主義なんだ。どうしても受け入れて欲しければそれ相応の金銭が必要だよ」

「受け入れて欲しいなんて思っただけよ！しかも目的がかなり汚ねえな！誰がそんな気持ち悪い想いを抱くかよ！なぜなら俺の愛は今杏里に向けられているのだから……」

僕に対し一頻り突っ込んでから、片手を胸に、もう片方の手を園原さんに差し伸べて、演劇の主人公のように宣言する。

何だろう、彼の周りには点描が見える気がする。

……それに動揺する者一名。

「な、何いつてるんだよ正臣!」

「え……えつと……」

「照れなくてもいいんだぜ?俺の純粹すぎるこの気持ちを受け取ってさえくれればな!」

「……私は……」

「正臣くん、暴走しすぎ」

僕の手刀（斬れないよ?）が正臣くんの顎にヒットした。

思いの他痛かったらしい。

顎を押さえて「くおお……」としゃがんで唸っている。

あー、ゴメン。

超加減したんだけど。

いやあ、殺人鬼が一般人に手刀なんて向けるもんじゃないよね。

洒落にならないよ、コレ。

よいこのみんなと悪い殺人鬼は真似しないように。

「大丈夫ですか、紀田くん?」

「杏里のその気持ちだけで俺は元気百倍、顔面アンパンのヒーローを越える程の力を」

「發揮しないようにね」

正臣くんを帝人くんと二人で受け流し（僕も結構慣れてきた）、帝人くんと園原さんの方に向き直って、言う。

「んじゃ集まったし、お昼でも食べようか」

お腹がすいた。

こうして、僕の日常は更新されていく。

無意味に、無造作に。

なんて。

実に、戯言だ。

放課後。

「迷子になった？」

爆笑された。

誰って、正臣くん。

いやいやいや、いくらなんでも笑いすぎだろ。
文字通り腹を抱えて笑う正臣くん。

コノヤロウ。

「マジか……いや、リアルでか？迷子？迷子かよ？つまりあのとき
別れたあと迷子になってたってたってことか？」

「……………肯定せざるをえないな」

「迷子って……………」

だから笑いすぎだろ！

急に恥ずかしくなってきた！

帝人くん！

君が言っちゃうからこんなことに！

責任転嫁。

「いや悪い悪い。なんかこの迷子って響きがよ」

悪かったね。

高1で迷子になんかなくて。

聞き直り。

「紀田くん。あの、深隈くんは池袋に来たばかりなんだから、仕方ないと思うよ?」

「そうだよ正臣。ていうか笑いすぎだよ」

「迷子という単語が冬護にこれ程似合うとは思わなかった……」

誉められてないよね。

寧ろ貶されているのでは。

ていうかそつとしか思えないよ。

ショック。

なんて、戯言だよ……。

「けどよ、それ結構な時間帯だったんだろ?よく誰にも見つからなかったな。今斬り裂き魔で騒がれてつから、巡回してる警察多いのよ」

「僕自身どこを通って帰ってきたか覚えてないから、その辺に関してはなんとも言えないけど」

だってほら、暗かったし。

超言い訳。

まあ、人を避けたり気配消したりするのは得意分野だしね。

「それにしても斬り裂き魔ねえ……そんなにメジャーな存在なの?」

それ」

「今池袋と言えは“斬り裂き魔”と“首なしライダー”だけ？超有名どころだ」

「へえ。超有名、ね」

“斬り裂き魔”とか“首なしライダー”なんて玖渚ちゃんが好きそうなワードだと思っけどな。

知ってるんだろっうなあ。

調べてるのかなあ。

綾南とかに頼んだりして。

そういえば、その玖渚ちゃんにはまだ池袋にいることを伝えていなかった。

伝えておけばよかったな。

後で連絡しておこう。

いー兄には言つといたけども。

じゃあなんで玖渚ちゃんには言ってないんだ。

不覚。

玖渚ちゃんも可愛いんだよなー。

(注意、僕は断じてロリじゃない。ロリはいー兄だ)

「そりゃかなりの人数が被害にあってるし　なんか、怖いよね」

「情けないな帝人。俺は杏里、お前を守るためならば斬り裂き魔だろつが何だろつが関係ないぜ……俺はお前を守」

「聞いてるこつちが恥ずかしいよ、そのセリフ」

「恥ずかしいくらいが調度いいお・年・頃？ていうか寧ろ恥ずかしさを通り越して羞恥心を漢字で書けない年・齡・差？」

「意味わかんないよ」

「つまり俺は自分では操作出来ないほどの愛を抱いているわけだ！」

「自覚してるなら制御法を思索してよ……」

やばい最高。

今の会話というよりコントみたいだけど何はともあれ最高。

すごい面白かった。

笑いを堪えすぎて詰まりそうになる気管を落ち着かせ、あくまで冷静さを装う。

特に意味はないけれど、キャラというかなんというか。

板についてきたというか。

下らないプライドなんだけど。

妙に人間味があつて、中々やめられない。

「そう、つまり斬り裂き魔についても首なしライダーについても知らなかったらしいお前は少しばかり遅れてるって考えた方がいいぜ

「ま、池袋についてはこの紀田正臣くんが直々に丁寧かつ迅速に教養してやるう」

「頼もしいな。ん、僕基本テレビとか見ないから、情報網がなくて困ってたんだ。感謝するよ」

何しろ我が家には家電品が寂しいくらいに存在していないわけで。

冷蔵庫と携帯くらい？

ん？携帯って家電だっけ？

あと玖渚ちゃんからのプレゼント。

黒い箱形の何か。

（なんかパソコンぽかったけど妙にごつかった。あれは家電品としてカウントしてはいけない類の物だと独断と偏見を持ってして勝手に推測 結論付け）

「僕も協力できることがあったら言ってね。機械系は、得意だから」

帝人くんが、照れ臭そうに言う。

機械系が得意だったとは。

僕とは真逆だな。

「私も、深隈くんが早くこの街に馴染めるように協力します」

あー。あー。

なんか照れるな。

モテモテじゃん、僕。って戯言戯言。

ありがたいな、本当に。

友達。

友達トモダチともだち。

やっぱり、なくしたくなんかない。

この、嘘だらけの友情関係を。

だから、誰にも邪魔はさせない。

特にあの情報屋には。

卑怯者に邪魔者の妨害なんて、させない。

哀川さんとの約束の為に。

我が兄貴の努力を報いる為にも。

「ありがと、三人とも」

僕は何だかんだ言っても幸せ者なのだ。

今の時点では、かつてないほどに幸せなのだろう。

無意味に、実感した。

「お前が無意味に何かを知る必要なんて、本当はないんだろうけど
な」

という誰かの咳きは、僕には聞こえなかった。
ことにした。

「ん。ありがとう。着いた着いた。うん、じゃあまた明日」
そう言って通話終了ボタンを押す。

たまに携帯に連絡が来たときに通話ボタンと通話終了ボタンを間違えて押したりしちゃうんだよな。
つい癖で終了ボタンに手が伸びそうになったのを何回阻止したことが。

いや、生粋の戯言だ。

果てしなくどうでもいい独り言だ。

現在時刻、9時47分。

場所、南池袋公園。

今日の仕事の指定場所である。

折原臨也からの、仕事。

知人と会う、だったか。

知人ねえ。

僕とは面識ないはずなのだろうけど、あちらさんは僕の仕事の件のことを知ってるんだろうか。
微妙なところだ。

お互いにすれ違ったらどうするんだろう。

そのパターンだと僕完全に無駄足になるよな。

別にいいけど。

体力的にもまだ平気だし。

元々すぐに疲労困憊するほどの柔な鍛え方は“されてない”もんで。

でもスタミナがあるわけじゃない。

すぐばてるし。

最弱だし。

駄目だ。

僕はファイアーシスターズ（上のほう）みたいに実戦担当じゃないんだよ。

かといって参謀というわけでもない。
当たり前だ。

あー戯言。

「……寒いな」

まだ春は遠い。

冬。寒。

もうちょい厚着してくるべきだった。

風が冷たい。

鼻痛ー。

耳痛ー。

防寒具が欲しい。

「ん？」

時間を持て余していたら、ポケットにいれておいた携帯が震える。

あれ、またバイブのまんまだ。

僕電車あんまり使わないから別に気にしないのに。

でも歩行してるだけで何百人とすれ違ってるんだから、バイブの方がいいのか。

取り出して、だいぶ冷たくなった指先で画面表示された名前を確認

.....
.....。

通話ボタンを、押す。

「久しぶり、軋兄」

『久しぶり、じゃないっっちゃ！何堂々と俺の頼んだ仕事丸投げしてん……………』

「もう、落ち着きなよ軋兄。カルシウム不足？血管切れるよ大丈夫？いい年なんだからもうちょい落ち着きを持ちなよ」

『余計なお世話だっっちゃ！』

「ん……………。で、何か用？」

『だからッ……………』

というわけで、僕に電話を掛けてきたのは軋兄こと、零崎軋識だった。

零崎軋識。

そう兄、曲兄と共に零崎三天王と呼ばれる内の一人（いつも思うけど三天王って微妙だよな）。

シームレスバイアス
愚神礼賛という、平たく言えば“釘バット”を持ち歩いてたりする殺人鬼。

僕の兄貴であり、“一人目”の師。

である。

ついでに言つと玖渚ちゃんが言つところの《仲間》^{チーム}、僕に言わせれば《遊戯囚衆》^{ゲーム}の一員、『街』^{バッドガイランド}式岸軋騎でもあるのだけれど。他の家賊には、内緒ということだ。

少なくともかつて僕は、玖渚ちゃんのもとにいたわけであり

つまりは、《遊戯囚衆》^{ゲーム}の奴らとも、面識はあるのだ。

『お前、今どこで何してる?』

「ああ、もう口癖はいいんだ。別に気にしないけど」

一息あけて、状況報告。
とう一兄貴。

「えーと……公園で、人を待ってる」

『はあ?』

すごい不満気な声を出された。
一応素直に伝えただけだ。

「わかりやすく言つと……折原臨也からの仕事で南池袋公園で折原臨也の知人とやらを待っている、って感じ」

『……折原臨也だど?』

「うにゃ。そつっす」

『本気か？折原臨也は確か “暴君” の敵だろっ？何でそんな奴の仕事……』

「生活費がないんだよ」

『……………』

うわ。

軋兄に呆れられた。

だってしょうがないじゃないか。

僕、高校生。

学習能力ないから普通のバイトとか絶対に無理。

最近は軋兄の手伝いだけが生活の頼りだ。

哀川さんはあまり僕に仕事をくれないし。

ようするに、仕方ないんだよ。

「僕だってあんな人の仕事なんか受けたくないよ……軋兄の言うとおり、玖渚ちゃんの敵だし。けどわかってくれ『街』ハッドカインド。仕事受けないと今月食っていけないんだよ」

『我が弟ながら切なすぎる状況っちゃん……』

口調戻ったし。

そんなに切ないっていつか哀れな状況だったのか、僕の現状。

「そうゆう訳で、やむを得ず大嫌いなあの人の仕事を受けたわけだよ」

『まあ、仕事とやらを受けた理由はわかった。けどそれは俺が頼んだ仕事を放棄していい理由にはならないからな』

「……………色々あります」

『色々？』

「ほら、引越しの片付けとか学校とか……………」

『言い訳無用』

「手厳しいね」

『それくらい重要だっただけだ』

「悪かったよ本当。頑張らせて戴きますよ。んーそつだな、明日くらいには終わらせる」

すると軋兄はかなり意外そうな声色で、言う。

『明日って……………いいのか？お前がいいならそれでいいが……………』

「大丈夫大丈夫。昔から仕事早いのは知ってるだろ？」

長い付き合いなんだからさ。
家賊だし。

それに、ここで“本当の話”をしたら駄目だ。

ようするに、ここで歪無くんの話をしたら、駄目だったこと。

零崎に手を出したら、“報復”を受けることになる。

それには当然殺し名も含まれる、故に。

ただの僕の気まぐれに、家賊を付き合わせるわけにはいかない。
家賊の手を煩わせるわけにはいかない。

だから別に、歪無くんの肩を持つわけじゃない。
キャラとかじゃなくて。

そんな甘いキャラ作りなんかしてないから。

ていうか誰に言い訳してんだ、僕。

『わかった。なら、俺がそっちに行く。それまでに絶対終わらせと
けよ』

「別に僕が届けに言ってもいいけどさ。ん、それなら頑張るよ。出
来る限りで」

『ああ。頑張れ』

「りょーかい」

『それじゃ、またな冬識。あまり厄介なことに巻き込まれるなよ』

「……………いえすまいろーど」

某執事漫画風に言ってみた。
別に主人じゃないけどね。

そこで、通話は途切れる。

随分と手短な会話だった。

軋兄も軋兄で忙しいのかな。

通話終了という表示を数秒何となく見つめて、また服の中に収納した。

振り返ったら、知った顔の男女がすごい輝くような笑顔で立っていた。

「……………あのー、えっと」

「執事？執事？あくまで執事ですか？」

「いやあ黒執事つかあ！いい趣味してますねえ冬護くん！」

「……………」

軋兄との会話に気をとられていたせいか、全く気付かなかった。

正直普通に驚いた。

恐らくは最後の某執事漫画風などこだけ聞いたんだろっけど……………
（そっでないと困る）。

勿論、僕の背後に現れた二人組は遊馬崎さんと狩沢さんである。

「でも少し意外っすね。冬護くんもそんなこという子だったんすか」

「確かに。なんかそういうイメージの雰囲気じゃなかったしね」

「そう、雰囲気っすよ雰囲気。第一印象ってやつっすか？」

「髪はすでにコスプレしてるみたいなのになー」

「全くっす。これで乙女キャラの衣装着せても何にも違和感なさそうっすもんね」

「だよな。やっぱりゆまっちもそう思う？ふふふー私の想像力……いや妄想力を甘く見ないことね！」

「いやいや、俺も負けてなんかないっすよー！」

機関銃のように僕の背後を飛び交う言葉言葉ことばコトバ。

何だこの人たち……

何だこの無駄に置いていかれているような感じ……

いや、誰もついていけねえよ。

色んな意味で高度すぎる。

ていつか、何でここに？

「あのー遊馬崎さん、狩沢さん、何でこんなところに……」

「愚問っすね！俺たちの行動範囲は以外と広いんすよ！」

「仕事終わったからね。ぶらぶらっというか、ドライブみたいなの？」

「ああ、成る程……」

そつえばこの人たち社会人だったっけ。

普通に仕事あるんだな。

って軽く失礼だろ。

すると二人は、僕の顔を覗き込むように言う。

「私たちよりも……冬護くんこそ何でこんなところにいるわけ？」

「今一応、夜は危ないみたいなことになってるんすよね？俺たちはあんまり意識しないっすけど」

確かに今池袋は、斬り裂き魔の影響で軽く緊張状態に陥っている。

そんなときに一人でこんなところを出歩くか？

現在時刻、10時03分。

ていつか普通に夜の10時過ぎに出歩いていたら補導されるよね。

無難な言い訳開始。

「今丁度家に向かっているとところなんです。用事があって……」

「そうなんだ。車だし、送ってこっか？」

「いやいや、大丈夫です。すぐ帰るんで」

折角の親切心を無下にするのは至極辛いことだけど嘘だけどここはなんとか乗り切らなければ。

「それなら、俺たちももう行くつすね。一応気を付けて下さいっす」

「じゃねー冬護くん。おーいドタチーン帰ろー」

「はい。それじゃ、また」

……これで一安心。

遊馬崎さんと狩沢さんは近くの道路に現れた車（種類は……バンかな？）に向かって手を振りながら歩いていった。

僕も逆方向に向かって歩き出す。

二人の“気配”が薄くなったことを確認して、くるりと方向転換し、元の場所に戻った。

うん。大丈夫。人はいない。

待機再開。

……………。
誰もこないんですけど。

もう10時過ぎたよな。

んー……………。

どうしようか。

臨也さんに電話でもしてみるか。

いや、でもそれは僕のプライドと玖渚ちゃんとの仲が許さない。

よって却下。

帰るか？

でも帰ったら仕事放棄で報酬も無しになるよな……………。

よって、却下。

あー、駄目じゃん。

「どーするかー……………」

やたらと語尾を伸ばしてみた。

しゃがみこんでみたり。

んんー……………ん？

……………今、何か聞こえなかったか？

“ブルルルウウウ”って感じで……………

この音、前にも聞いたことがあるような気がする……ような。

「あ

この“異質な黒い気配”と“馬の嘶き”は

確か。

“ブルルルルウウウウウウンン！！！！”

「うおわっ！？」

“黒い影”が僕の目の前に、現れた。

“黒い影”は真っ黒なバイクに跨がり、自身の体も漆黒のライダー
スーツで包み込んで、黒いとしか言い表せない姿で登場した。

……ていうか。

「セルティさん？」

と。

僕が呟くと、影は。

『冬護くん？』

PDAを僕に見せつつ、手に持ったアタッシュケースを落とさないように、バイクから降りる。

そのシルエットは明らかに、女性のものだ。

セルティさんって女、だよな？

『どうしてこんなところに？』

「え……と、セルティさんこそ、何でこんなところに？」

返してみた。

もしかしてもしかすると

『私はちよつと仕事で……』

セルティさんが、依頼にあった“知人”？
つてことになるよな。

……臨也さんと、繋がりがあったのか。

「あの、セルティさん。その仕事ってもしかして」

“ガッ”

『!?!』

突然走ってきた“男”が、セルティさんの持っていたアタッシュケースを奪い取り、僕の姿を見もせずに走り去っていった。

え？

誰だよ、今の。

『まずいつ……冬護くん!ごめん!』

そう伝えて、セルティさんはすぐに再びバイクに跨がり、男を追って走り出そうとする。

それを僕は、止めた。

「待って下さい、セルティさん。僕も行きます。乗せてって下さい」

理由は特にない。けど。

やっとできた知人だ。

僕の知人だから。

僕は。

「困ってる時は、お互い様でしょう?」

この前の借りを、今ここで返すことにした。

(再会

セルティ・ストウルルソン
黒バイク)

(被害者 なし

加害者 なし)

〈噂 影と首〉（前書き）

前回結構中途半端な終わり方になってしまったために中途半端な始まり方です。

私が書きづらいのは自業自得なんですけども。

読みづらかったらすいません。

〈噂 影と首〉

足りない何かを探してた

欠落した部分を探してた

失った箇所を探してた

きつと元には戻らないけれど

きつと何にもならないだろうけど

あるべき場所がない何か

そついう虚像を探してた

あるいは最初から無かったのかもしれない

存在なんて存在せず、

絶対なんて絶対ではなく、

真実なんて真実ですらなく、

ただ単純に思い過ごしだったのかも

ただ単純に勘違いだったのかも

けどそれでも

世界が変わらないと言つならば

私は私ではなく

私は私でもなく

私は私であるしか、ないのだから

此処はそういう世界なんだよ

知ってた？

私たちはこんな世界で生きてるってこと

あの時僕は生きていた。

まだ僕は死んでなくて、

まだ僕は生きていた。

蒼い彼女は僕を見て、

青い彼女は僕を見ず、

彼女は僕に向かって言った。

彼女は僕に向かわずに言った。

そして僕は。

僕でもない誰かは。

あの時、一体何がしたかったのだろう。

「しーちゃんは本当に優しいんだね」

そうかな。寧ろ真逆ですらあると思っけど。

「そんなことないよ。しーちゃんは皆に優しいから、私にも優しいんだよ」

皆に優しくした覚えなんて、更々無いんだけど。

あ、君は例外。

「それでも、例え無意識であったとしても、しーちゃんが誰よりも優しいっていう事柄は、変わるはずがないんだから。結論を言えば、結果的に言えば、しーちゃんは優しいってことになるわけだね」

ふうん。

そっか。

「なんだか冷たいなあ。誉めてるんだよ？」

ん？

じゃあありがとう。

すっごく嬉しいよ。

歓喜も歓喜大喜びだ。

「しーちゃんのそーいうところ、私大好き」

そーいうところって、どんなところ？

「嘘つきで曖昧でよくわかんないところ」

ふうん。

そっか。

何だか僕って、

幽霊みたいだね。

「幽霊 きつとみんな、そっだよ」

「きつとみんな、そっだね」

そう言って、僕と彼女は眠りについた。

目覚めたくなんかないと、独りで願いながら。

でも死にたくはないな、という自分自身を自覚していたから、ただの自覚症状かと、自己嫌悪に苛まれながら。

僕は彼女に依存していたのだと。

今更になって、思い出した。

寒風が僕の体を突き抜ける。

寒いってよりは痛い。

当然だ。

これが冬の恐ろしさっていつか厳しさというわけだろう。

この風（最早刺だろ）から守られているのは頭部のみ。

自分から言い出しといてなんだけど、予想以上に風が冷たい。

結構寒いな。

と、早くも軽く心が折れそうになっていた僕に差し出されるPDA。
暗いし風が強いために読みにくかったけど、暗闇は得意だ。

「大丈夫？寒くない？」

すみませんめっちゃ寒いです。

とは言えない為に、曖昧な返事を返す。

「大丈夫です。セルティさんこそ、走りづらくないですか？」

走りづらいに決まってるよな。

言いながら考える。

そもそも僕が無理を言ったためにバイクに二人乗りという状況にな
っているわけだし。

「私は大丈夫。冬護くん、落ちないように気を付けて」

「はい」

そう言っつて、僕はセルティさんにしがみつく。

セルティさんは、バイクを走らせる。

状況確認。

多分ここまでの一連の流れを思い出した方が正確に伝わるだろう。
というわけで。
回想スタート。

「僕も行きます。乗せてって下さい」

『……………!?!』

セルティさんは正に意表を突かれたかのような驚き方をして、素早くPDAに文字を打ち込む。

『危ないよ！それに私なら大丈夫だし。一人でなんとかなるよ』

「なら、僕も手伝います。危険とかは大丈夫ですし……………この間助けていただいたお返しってことで、どうか」

借りを作つたままにしておくのは好きじゃない。

それに、困ってる人がいたら助けるのが紳士ってものだろ。

僕が紳士のわけないから嘘だけど。

紳士じゃないけれども。

せっかく知り合った人が困っているのを見過ごすような“勇氣”は、僕にはない。

独りになるのが怖いから。

忘れられるのが嫌だから。

理由なんて、付けようとすればいくらでもある。

だけど、“事実”は唯一無二だ。

とあるオンナノコの受け売りだけど。

僕には“勇気”なんて必要ないし。

ただ単純に、事実を遂行できる肉体さえあればそれでいい。

十分すぎる。

十全だ。

『 わかった。それじゃあ、これを被って』

心底不本意といった様子で、セルティさんは僕に漆黒のヘルメットを手渡す。

それを受け取り、被ってフェイスカバーを上には押し上げて礼を言うためにお辞儀した。

「本当、ありがとうございます」

必ず役に立ってみせますから。

そう続ける。

セルティさんは少し慌てたようすで、慌ただしく文字を打ち込む。

『いやっあの私はいいから冬護くんが怪我しないようにていつかただの高校生を巻き込んでる私っ t e E e e e E e e』

いくらなんでも慌てすぎだろ。

変換変換。

「僕のことは心配しないでください。一応、この手のことは慣れているんで」

ただの高校生じゃないからね。

一般人みたいな殺人鬼、もしくは殺人鬼みたいな幽霊です。

幽霊。

僕にとっては、過去の嫌な思い出が蘇る禁止用語^{タブー}。

依存症状以前、それかまだ僕自身が蒼かった時代。

昔の話だ。

家賊を知らない頃の僕は、僕じゃなかったから。

なんて、下らない。

戯言だ。

じゃあ言い換えよう。

殺人鬼になれなかった殺人鬼です。

『じゃあ私の後ろに乗って。振り落とされないように捕まってね』

「わかりました」

……どこに掴まれと。

え、まさか。

セ……セルティさんにでしょうか？

なぜか地の文まで敬語になった。

いや、でも僕はこれでも一応高一だし。

なんか躊躇いが。

でもこんなことで悩んでるのを玖渚ちゃんが知ったら怒られるんだろっな、なんて。

または哀川さんに知れたらどうなるんだろっなー思考するまでもなく確実に半殺し決定。
寧ろ4分の3殺し。

セルティさんがバイクに乗る。

続けて僕も、セルティさんの後ろに乗らせてもらっつ。

セルティさんがエンジンを稼働させると、間近での“嘶き”を感じた。

やっぱり、ただのバイクの“気配”じゃない。

以前よりはつきりと、馬のような嘶きが脳内に響いてくる。

「えと……セルティさんに掴まればいいんですか？」

先程の悩める思春期の少年みたいな素朴な疑問を投げ掛ける。

セルティさんは体にフィットした漆黒のライダースーツという格好だし。

このままでは体のラインがはつきりと分かるまま掴まるといっつか抱き締める形になってしまおうからして。

一応、一応ね。

ほら、一応だから。

何の言い訳してるんだよ僕。

『うん。結構飛ばすから、気を付けて』

セルティさんは何も感付いていないようだ。

無駄に一人で思索しながらセルティさんにしがみつく。

大丈夫。

僕は西条ちゃんが大好きなのだー嘘だけど。

寧ろ玖渚ちゃんらぶーなのだー嘘だけど。

いや存外嘘でもないかもしれない（特に後者）。

わからないから、保留。

自分のこと、知らないから。

嘘じゃない、ことにした。

『行くよ 掴まって!』

そのタイミングに合わせるかのようにエンジン音が高らかに鳴り響き、僕とセルティさんは南池袋公園を後にした。

……………で。

「あ。あれじゃないですか?」

男を追ってバイク二人乗り。

ビルの裏に逃げ込んでいく男の姿を、僕は目視した。

結構逃げ足速いな。

セルティさんに急いで指示を出し、比較的狭い道をバイクで進む。

そして、男を追い詰めた。

『冬護くん、大丈夫？』

「はい……」

思ったよりも寒かったしスピードも速かった。

あのスピード感でのドライブ（ツーリングか？）は精神的に疲れた。

なんとなく病んでる人ってこんな感じかあ、とらしくもなく考えてみたり。

『下がって』

そう言われたため、バイクの影になっている辺りで、待機することにした。

下手にでしゃばったりしたら逃がしてしまうだろう。

それ故の、判断だ。

じゃあ僕一体何しに来たんだよ。

まあ、手伝えれば手伝おう。

適当なのはご愛嬌、ってことで。

セルティさんが、何やら手で構えのよつなものをとる。

何も持っていないようだけど、何をやる気なんだろうか。

と、呑気に見守ってなんかいたから、余計に衝撃が大きかったのだと思う。

「……………ッ！」

セルティさんの足下の“影”が、蠢き、形を成してセルティさんの手に収まる。

それは、所謂鎌というやつだった。

漆黒の鎌。

僕の家賊の中に、よりもよって鎌を使う輩がいるのだ。

だから僕にとっては見慣れた、鎌。

その黒さはまるで、死神の デスサイクス 死神の鎌のようであり。

思い起こされるのは、殺し名序列7位にして“例外”の 石凧。

石凧調査室。

死神。

鎌。

関連性はないとは思っけど。

セルティさんのその立ち姿と手に持つ巨大な鎌は、相性が合いすぎていて気味が悪いくらいだ。

黒バイク　都市伝説。

今のは、何だ。

物質創造能力　か？

でもそれじゃ吸血鬼だろ。

という、無駄な思考。

セルティさんが鎌を振りすると、男の服の一部が避ける。

「ひっ……………」

ひ弱な声で、必死に助けを求めるかのように後退したのはいいけど、結局足を滑らせ、地に腰をおろす結果となった。

後退りする。

じりじりと、距離を詰めていくセルティさん。

それをバイクの影から窺う僕。

男に逃げ道を作らせていない。

いざとなれば、僕が止めるから。

決定的に、追い詰めた。

あとはセルティさんがアタッシュケースを取り返せば終わりだ。

これで仕事終了か。

セルティさんの鎌のことは、非常に気になるところだけれど。

そもそも折原臨也の知人と会ってくるだけという仕事だった筈なのに、途中から単なる僕のお節介となってしまった。

まあ、あの卑怯者は、僕のそういった面まで考えて、この話を持ち掛けたんだろうけど。

ともかく報酬、早く欲しいな。

それだけのために頑張ったんだし。

軋兄の仕事も、片付けなきゃなんないし

と、そこで。

“ ”

僕の精神に、“ノイズ雑意”が入った。

「う、うわああああああ！？」

と、男が叫ぶ。

何だ？

すかさず男とセルティさんのいる方へと意識を移す。

けれど、遅かった。

完全に、出遅れた。

「セルティさんっ！！」

漆黒の鎌を構えるセルティさんの背後に、

“刃物を持った女”が、立っていた。

ゆらゆらと、眠ってでもいるかのように、揺れる。

それこそ西条ちゃんのように。

残念ながらエリミネイターとグリフォンは持っていなかったけれど。

何というか、黒い。

いや、暗いのかな。

影、と言っていていいかもしれない。

そんな、影が。

“セルティさんの右腕に、刃を突き立てた。”

何の違和感もなく、何の躊躇いもなく、セルティさんの腕に、銀色の刃が生える。

「ひ、ひゃああああ!？」

男が叫ぶ。

こんな状況でも、セルティさんは悲鳴一つ上げなかった。

ていうか、ヤバイって!

これが世に名を馳せる“斬り裂き魔”ってやつか!

「せ、セルティさん!」

僕が叫ぶ。

その間にも、男は逃げようとしていたけれど、そんなことを気にしている余裕は無かった。

“斬り裂き魔”が、首をこちらに向けて、僕を見る。

未だ刃物をセルティさんの右腕に突き刺したまま

「
ッ」

その両目は、有り得ないくらいに赤く。

赤く赤く、紅かった。

まるで昆虫のようなそれは、とても人間の物には見えない。

何だよ　こいつ。

何なんだよ、この“歪な気配”は

すると、唐突に。

“斬り裂き魔”が、セルティさんの右腕から刃を引き抜き、

首を、跳ねた。

乾いた音をさせて、冷たいアスファルトに転がるヘルメット。

鈍く光る刃の先。

遠くから男の悲鳴が聞こえた気もするけれど。

何も、受け付けられなかった。

何をしたんだ、こいつ。

“こいつ、何をしゃがった？”

いきなり、首を、跳ねて。

何をしゃがった？

駄目だ僕、何も考えられてねえよ。

“斬り裂き魔”が、僕に向かって揺らぎながら歩いてくる。

どう、するか。

こんなところで、零崎を？

でも、セルティさんが。

僕の知人が。

首を、跳ねられたんだぞ？

だけど、でも、それでも、

何故だ？

急行過ぎるって。

やばい。

これは、まずい。
そんな気がする。

でも、何故だろう。

“さつきから、一滴たりとも血液が流れてこない

”

と、その時。

漆黒の鎌が、僕の眼前を横切った。

「ッセルティさん」

僕の声とほぼ同時に、“斬り裂き魔”が揺らめきながら、逃げ出した。

振り向いたけれど、既にその気配は歪に歪んで、街の中に溶け込んでいた。

あー、くそ。

何もできなかった。

何もできなかった自分自身に、腹が立って仕方ない。

「ひ、ひあああああううああ、く、くくくくび、くび」

男が弱々しく言った。

くび？

と、改めて顔を上げると、そこには。

“くび”のない、

セルティ・ストウルルソンが、

鎌を携え、立っていた。

「
」?

首がない。

本来首があるべきその場所には、ただ黒い煙のような“影”が、ゆるゆると蠢いている。

“そっち”に関しては、少しばかり知識があるけれど、あくまで副業だ。

僕自身、普通の奴から見たら化物みたいなものだし。

戯言だけだ。

『えっと……これは、その……』

セルティさんがPDAを僕に見せる。

明らかに慌てているようで、肩が震えている。

『私はその、なんというか』

「デュラハン” ですか？」

“デュラハン”。

アイルランド辺りでそんな存在がいるという話を、聞いたことがある。

デュラハン。

“首のない精霊”

だったはずだ。

鎧を纏った首のない女が己の首を抱え、死期の訪れる人物の元へとやってきて、盥いっばいの血液を浴びせて去っていくという話。

そういう話を、昔聞いたことがある。

「あなたは“デュラハン”で、存在そのものが“怪異”なのだとしてたら、鎌が現れたのも、傷が治っているのも、僕なら納得できるんです」

その手のものに、遭遇したことがあるから。

過去を思い返しながらかえる。

「物質創造能力というのは言わずと知れた“吸血鬼”の能力だけど、あなたが持っていておかしいことはない」

そんなことを言いながらも、僕が不安を抱いているのは確かだった。

“怪異”というあやふやなものを相手取るのは、“呪い名”とやりあう次くらいに不安だから。

恐怖はしない。

けれど不安だ。

「だから、僕はあなたが“デュラハン”だと思う。違いますか？」

こういう言い方はどうにも確信を持った言い方のように聞こえるけれど、そんなことは微塵もなかった。

違っていたら嫌な空気になりそうで本当に不安だ。

セルティさんはゆつくりと、PDAを僕に見せた。

『私にもよくわからないけど、多分私は冬護くんの言うように“デ
ユラハン”という存在なんだと思う』

そのまま続ける。

『私はこんな“化物”だから、君を巻き込みたくはなかったんだけ
ど……』

巻き込みたくないというのは、セルティさんという“怪異”につい
てだろうか。

それとも、この街の裏側についてだろうか。

何か言わなきゃと思った。

ただそれだけを考えた。

「そんなこと、いいんです。僕もセルティさんのように ある意
味曖昧な存在だし、一般人とは少し違うんです。“普通”のフリを
している、ただの異端なんです」

ある種の人間が見れば、僕の“違和感”は分かるんだろうけども。

多分セルティさんは“殺し名”のことなど、知らないだろう。

知る必要もないのだろう。

“化物”だろうと“怪異”だろうと、あくまでセルティさんは“普

通の世界”の住人なのだから。

だから敢えて僕は、曖昧な表現をした。

少なくとも“デュラハン”を目の前にしても微動だにしない人間を見て、セルテイさんも僕のことを“普通”だとは思わないだろうし。

これでいいんだ。

これでくらいでいい。

『よくわからないけど、そうみたいだね』

僕は頷く。

僕自身について話すことなんて、これくらいしかない。

話したくもないしね。

セルテイさんは間を開けて、どこかやり辛そうな感じで、僕にPD Aを見せた。

『それで……実を言うと、私があやふやな答え方をしたのも、私が記憶をなくしてるからなんだよ』

「え……………」

記憶を、なくしているだと？

記憶。

脳の記憶。

身体の記憶。

心の記憶。

記憶とは自身を形作る部品パーツみたいなものだ。

自己の作成は、記憶から成される。

自我の生産は、記憶から成される。

記憶とは自分自身。

記憶とは自分そのもの。

そういうものだ、教わった。

「それって、どの辺りの記憶ですか？」

『えっと……首をなくす前かな』

そうだ。

改めて見れば、セルティさんは“自分の首”を持っていない。

デュラハンとは、自分の首を抱えているはず、なのに。

「首をなくした？」

『正確に言うと、盗まれたみたいなんだ』

盗まれた？

そんなこと、誰が？

なんて聞くのは流石に野暮か。

だけど“化物”の首を盗むなんて、怖いやつだ。

嘘だけど。

ということは、セルティさんは盗まれた首を探して池袋イケにいるのか？

ただそれは、首を盗まれた場所というのが池袋でなかった場合の話だ。

「セルティさんは、首を探しているんですか？」

「故郷で、首を盗まれて。首を追って随分前に池袋に来たんだ。ついこの前までは、必死に首を探してた」

でも、と。

間を開けて、セルティさんは続けた。

「私のことを想ってくれる人がいるから、首はもういいんだ」

セルティさんは、若干照れながら僕にPDAを見せた。

想ってくれる人がいる。

そっか。

それなら、セルティさんは大丈夫だ。

僕なんかよりよっぽど、人間らしい。

「そう、ですか」

それ以外、言えなかった。

言うべきではないんだろうな、と考えた。

だから僕は

『ていうかつまり冬護くんは、“一般人”じゃあないんだよね？』

「まあ、簡単に言えば……そうですね」

『もしかして臨也が言った“少年”って、冬護くんのこと？』

「……………」

うわぁ。

あながち間違っただけなわけか。

つまり、折原臨也は僕とセルティさんを会わせたがっていたわけだ。

成る程ねえ。

何か魂胆が読めてきたぞ。

『いや、違ったらいいんだけど、あいつは“どこかで荷物を狙ってる少年がいる”って』

嵌められた！

あの野郎嵌めやがった！

顔面蒼白というか血管が浮き出そうになる。

何がしたかったんだ

僕を潰そうとしたのか？

いや、裏を読めば、こうして僕とセルティさんを“通じさせる”のが目的だったのかもしれない。

そもそもセルティさんが僕を殺す訳がない。

何らかの方法で和解させ、僕とセルティさんの間に“関係性”を作り出そうという目論みだったのかもしれない。

どちらにしても性悪だ。

こんなに苛ついたのは、最後に害悪細菌もとい不快感の塊と話したグリーンケグリーングリーンとき以来かもしれない。

今度会ったら一回殴る。

折角の僕の友好関係を潰そうとしたわけだから。

その分の制裁は受けていただく。

「恐らくその“少年”は僕ですけど 別に荷物を狙っていた訳じゃないやありませんよ。折原臨也とは……まあ、知り合いなので、多分嫌がらせです」

断言する。

完全に一方的ないじめだよな、コレは。

現代社会でのいい年した大人が高校生に嫌がらせするなよ。

『やっぱりそうだったんだ。私も少しそう思ってたんだけど……』

それは多分、僕“少年”だと思っていたという話だろう。

首を縦にふって肯定する。

『よかった。これで私の誤解だったわけだよ』

「いや、ただ単に折原臨也が悪いだけです」

苦笑しながら言ってみただけど、相変わらず顔がひきつった。

「はあ……でも、これで仕事は終了ですよ？」

『うん。手伝ってくれて本当にありがとう。助かったよ』

そう打ち込むセルティさんは、少しだけ微笑んだように見えた。
気のせいかもしれないけど。

『もう夜も遅いけど、送っていいこうか？』

「いや、大丈夫です。なんとかします」

多分今日は我が家には帰れないだろうけど。

セルティさんにこれ以上迷惑かけるわけにもいかないし。

どうにかするしかないよなあ……

また迷子か？

傑作ですらないな。

『わかった。それじゃ、また会おう』

「はい。セルティさんも、気をつけて」

セルティさんは手を振り、僕は右手を軽く上げて、僕らは別れた。

お互いに、別の道を進む。

必ず会えるという、寧ろ確信のようなものを持って。

僕らは別れた。

「……………どうも」

ちゃんと挨拶をしながら、ドアを開ける。

生暖かい空気と、仄かに香る珈琲の香り。

室内最高。

この場所嫌いだけど、外よりは幾分かマシだ。

一応仕事を完了したことを報告しにきた。

もう二度と入りたくねえ、とか考えながら会話を極力せずに報告をしようと思考する。

僕が部屋に足を踏み入れると、ソファアの辺りから声がした。

「やあ。仕事、楽しかったかい？」

んな訳あるか。

やっぱり知ってたんだな。

セルティさんはデュラハンだということ。

それに、僕が“甘い”ってことも。

赤色に酷似しているのは、甘さだけだ。

なんて、戯言だけど。

「そもそも君に頼んだのは俺の友人に会ってきて欲しい、ってことだったんだ。そこから先は君の独断による行動だろう?。」

「……まあ、確かにそうですね」

苦情は受け付けない、という顔をされた。

結局のところ、自業自得だったわけだし。

反論の台詞が思い付かない。

これだから戯言擬きなんだよ。

嫌だねえ、偽物は。

「何があつたか」は聞かないこととして 頼んだことはちゃん
とこなしてきてくれたみたいだからね。はい、これ」

そういつて、茶色い封筒を手渡される。

念のため、中身を確認。

うにゃ。満足満足。

これぐらいないと生活できないんでね。

……………我ながら切ない状況だから。

「ありがとうございます」

短く簡潔にそう告げ、鞆が無かったためにジャケットのポケットへ。

落としたら洒落にならないけど、そのまま持ち歩くよりはマシだろ。

そして立ち上がる。

一刻もやくこの部屋から出たい。

「じゃあ、僕はこれで」

「まあまあちょっと待ちなっつて」

「……………」

そういう時に決まって声を掛けてくるのがこの情報屋の嫌なところ
その1なんだよ。

全く、何で好き好んで精神を逆撫でするような性格にまで歪んだん
だろっね。

僕が言えた義理じゃないけど。

歪なのは僕も大して変わらない。

「そうそう。君には伝えておこうと思うんだけどさ、最近“斬り裂き魔”とかいうのが流行ってるだろう？だから君も気を付けないじゃない？」

「はあ……」

何で今こんなことを言うんだろう、なんて考える必要性は皆無に等しかった。

「またあなたが絡んでるって訳ですか」

「失礼だな、そんなことは一言も口に出してなんかないよ」

口には、ね。

別に僕は読心術を身に付けている訳じゃないけど、なんとなく分かる。

“気配を読む”というのは、突き詰めれば読心術と大差ない。

「これはただの親切心だよ。君のことは大嫌いだけど、情を寄せられるだけの間柄はあるからね」

「確かに付き合いだけは長いですけど。ただ単に僕が邪魔だと言いたいだけでしょう？」

周りくどくそう言っているのと同じだ。

露骨に不満を顔に出す。

実に不愉快に、臨也さんは笑う。

「ははは。俺がそんな奴に見えるかい？君、よく嫌な奴とか言われ
ない？」

「少なくともあなたよりは言われてませんよ。あなたこそ、よく歪
んでるとか言われませんか？」

お互いに、笑い合う。

けれどやはりお互い、目は笑っていない。

快くは思わない笑みを、浮かべている。

暫くは様子見をしろってわけか……

成る程ねえ。

うん、たまには傍観者気取りしてみてもいいかもな。

それはあくまで、僕に行動理由がでなければの話だけど。

ひねくれてるからね。

捻れてるからさ、戻せないくらい。

「じゃ、帰ります。報酬ありがとうございました」

お願い

どうか助けてください

いやなんだ

いや、なんだ

ぼくをたすけて

たすけて

たすけて

もう、夢なんか見たくない

(出会い

斬り裂き魔

都市伝説)

(被害者

セルティ・ストウルルソン

加害者

斬り裂き魔)

〈噂 影と首〉（後書き）

一話分をまとめる努力をしようと思います。

……………今さらながら。

〈喫茶店 放浪（奉公）〉（前書き）

デュラララに戻れない……

〈喫茶店 放浪（奉公）〉

うん。

僕はこれでも一応殺人鬼であるわけで。

まあ、当然“悪いこと”とかもしてきたと言えはしてきたよ。

自覚がある場合もあれば、無意識という場合もある。

それは些か仕方のないことだとは思っけれど。

“悪いこと”をしてきた。

だけどそれは人間であつても殺人鬼であつても変わることはない。

特に目立つた差異はない。

“悪いこと”という前提があるからこそ、“いいこと”が“良い”ことなのだと認識されるわけで。

承認されているわけで。

それに“悪いこと”を全く零と言つてもいいほどに行わず、明らかに誰からも認められるような善行ばかり行ってきたような輩が認められていいものか。

そんな奴がいるものなら、一生に一度までとは言わずとも一人くらいは見てみたいものである。

ていうかそんな奴、人間としてのレベルに収まっているのだろうか。果たしてそんな奴を人間としてカウントしていいのだろうか。

ただの誠実な人間、と称していいんだろうか。

例えば僕のように、明らかに悪行を重ねてきているような真正正銘の“悪者”は、そんな奴と面を向かい合わせることができるのか。

様々な仮説が立てられるが、断定の仕様がなない。

よって独断と偏見による下らない僕の一意見、つまりは戯言になっ
てはしまうのだけど。

僕は、消されてしまうのではないかと恐怖する。

僕の存在理由が消失してしまうのではないかと、無意味な幻想に恐怖する。

そんな幻想にまで恐れを抱く僕だからこそ、誰かに依存し続ける
く必要があるわけだし

依存し続けていく必然性が、あろうことが生まれてしまうのかもし
れない。

僕は僕を保つために、

僕は僕を生かすために、

今まで依存してきた。

僕がぼくを嫌えるように、

僕がぼくを殺せるように、

そこには何ら意味や理由などは無いけれど。

確かに維持すべき何かは存在しているわけであり。

維持するということは即ち僕やぼくにとって、他者に依存することと変わらないのだから。

僕やぼくにとっては、ぼくと僕に依存することと変わらないのだから。

「まあ、結局は戯言なんだろうけどさ」

と。

コーヒー（ミルク・砂糖多め。甘党だからね）を口に運び、軽く息のみを吐き出す。

茶色い液体飲料に染色された口内に、苦味と甘味が交わずに溶け込む。

飛び抜けて美味しい訳でなく、苦情を出すほどに不味い訳でもなく、大した感想も持てないようなよくある味だった。

敢えて言うならば、猫舌な僕が舌を火傷しそうになるくらい液体温度が熱かった、といったくらいか。

という感じに目の前の事実（辛すぎる現実、ともいう）から目とか鼻とか嘘つきな口とか各器官を反らし欺き騙す為に、適当な事を脳内で語り尽くす。

何故こんなにも悲観的なのかといえ、勿論“それ”は目の前にある“現象”であると認めざるを得ない。

「……………どーすんのさ、軋兄」

「どーしたもこーしたもないだろ。何で全部俺に責任転嫁するんだよ」

僕の現在の状況をお伝えしよう。

先ほどの描写からわかるように、場所はとある喫茶店（チェーン店）である。

同席しているのは僕の兄貴兼師である零崎軋識だ。

ちなみに現在の服装はいつもの麦わら帽子に釘バット（どんな奴だよ）ではなく、全身ブランド物のスーツ姿。

つまり『^{バッドカイン_下}街』式岸軋騎の服装という訳だ。

うん。

僕の兄貴は外面が良いらしい。

僕は素直に自分の兄の長所を絶賛した。

嘘だけ。

「そもそも軋兄が氣い抜いてきたのが悪いんじゃないか。僕に責任はない。全責任は軋兄が負うべきだ」

僕は軋兄に喰って掛かる。

軋兄も電話した時のように激昂したりせず、顔を苦々しく歪めて言う。

「確かに俺が悪い部分もあるだろうよ。けどそれはお前が責任を逃れられる理由にはならない！」

「な、何だと！軋兄、あんたにはまだ反抗の材料になるような話があるとしても言うのか！」

「まだまだ甘いな冬識。正論でお前に負けるほど俺は落ちぶれちゃいない……」

「なんてことだ……まさか軋兄、あの百練自得をも会得したというのか!？」

「それはどうかな弟。俺の力、目に焼き付けるがいい!」

馬鹿な兄弟だった。

こういふところをみせるのは多分、軋兄くらい。

心を許しているともいえるのだろうか。

とにかく僕にとって、零崎軋識は“そういう”存在なのであり。

同時に、依存対象でもあるわけだ。

「そんなことよりどーするかって話だよね」

「俺だって“こんなこと”になるとは思ってもみなかったさ」

「そもそも“こんな”とこ指定したのがいけなかったんじゃない？」

「知るか。だれが“こんな”事態になると予想できる？」

「時宮時効さんか真田女史？」

「具体例を挙げるな。それに二つ目は他の某有名作品の時見だろうが」

僕は類いまれなる読書家なのだ。

嘘だけだ。

「んー……。こっ、東京だよな？」

「そうだろ」

「池袋だよね？」

「そうだろ」

「……………じゃあどうしてあんなところに“ひい兄”がいるのさ」

「……………」

そう。

つまり僕は、絶体絶命のピンチを迎えているのだった。

ひい兄 零崎人識。

普段は各地をふらふらと彷徨っており、巡り会うのは困難だ。

僕なら会おうとすれば会えるんだけどさ。

そんな放浪癖のあるひい兄を僕は尊敬しているし、ある意味憧れだ。

そんな兄が

顔面の奇異な刺青を強烈なまでに目立たせ、そこにいた。

軋兄とはだいぶ前からこの席で話をしていただけけれど、ついさっきふと外を見てみたら、見慣れた顔（特に刺青がね）が街を闊歩し

ていた。

超驚いた。

衝撃を正面から受け、コーヒーを喉につまらせそうになりながらも、その“気配”を必死に探し当てる。

必死にならなくとも、すぐにわかった。

黒々しく底の見えない、銃口のような殺意。

そんな“殺意の塊”が、一般人の中に堂々と紛れ込んでいた。

「うん、やっぱりアレはひい兄だね」

「ああ　これだけ近づけば、俺でもわかる」

ていうか顔面刺青でなんだかすぐ外れてるファッションでまだらに髪を染めていて三連ピアスに携帯ストラップの少年（見た目）なんて、ひい兄以外に聞いたことも見たこともない。

他にいないだろそんな奴。

個性強すぎ、うちの家出兄貴。

幸いにも、ひい兄は僕らに気が付いていないらしい。

それはそうだ。

僕は殺意を極限まで抑え込み、尚且気配を消しているし、軋兄は軋

兄で今は式岸軋騎モードだ。

普通ならば殺気溢れるいかにも怪しい二人組になってしまふところだが、今は変な髪の色的高校生と、サラリーマン風の青年ぐらいにしか見えないだろうし感じないだろう。

いや、文面上充分怪しいんだけどね。

気付かないひい兄もひい兄なんだけどさ。

「まずい状況ではある。人識がいつ俺たち 特にお前に気付くかわからないしな」

「このままどつかいってくれればいいんだけど、もう一つ“気になること”があるんだよね」

ひい兄に“存在を感付かれてはいけない”のは僕だけだし。

軋兄行って気をひいてもらうという策もなくはないだろう。

だけど僕には嫌な予感がしていた。

“気配を感じ取る”僕にだけわかるような、とてつもなく小さな気配。

しかしその“濃度”がハンパじゃない。

一般人にしては気配が濃密過ぎる。

強大過ぎるのだ。

じゃあ、一体何者なのだろうか。

殺し名か、呪い名か？

それとも、他のところからの“刺客”かな？

なんて、後者はあり得ないんだけど。

「……何か、“感じる”のか？」

そういう軋兄に対し、僕は何でもないように言う。

「まあね。まだよくわかんないけど、放っては置けないような気配だよ」

あながち外れてはいないだろう。

並々ならぬ“何か”を、確かに今僕は感じているのだし。

僕の唯一の特技を、間違っても軋兄が疑ったりしないことを、わかっているから。

僕は心して報告することができる。

「ひい兄、気付いてるかな」

「さあな。あいつのことはわからないし、知らないからな。たとえ気付いていなかったとしても、あいつなら何とかするだろ」

「んー……………」

それには同意する。

けど、“どこかで感じたような気配”なんだよなあ……………どうも。

それがはっきりとしない限り、簡単にひい兄や軋兄に事を任せてはいけない。

僕の問題だったら、嫌だしね。

「……………おーけい。この“よくわからない気配”は僕が請け負うよ、軋兄」

「請け負うって……………勝算はあるのか？」

「殺し合いに行くわけじゃないんだし、ちょっと様子見てくるだけだよ」

だから、と。

僕は続ける。

「ひい兄が僕を見つけないように、頑張ってくれると嬉しいかな”」

かはは、と僕は人間失格のように笑い。

欠陥製品のような口振りでそう言った。

なんてね。

ザレゴト、だけど。

「当たり前だろ　お前のことは、わかってるし知ってるんだから」

軋兄はそう言って、少しだけ薄く、笑った。

そしてコーヒー（無糖、つまりブラック）を啜る。

僕もそれに呼応し、一口。

苦。

口周りを丁寧に拭き取る。

僕らはお互いを見合わせて、微笑した。

それを合図に、ほぼ同時に立ち上がる。

すたすたとレジへ向かい、軋兄の奢りで会計を済ませると、店の外へ。

くるり、と無言で背を向けて、互いに別方向へと歩き出す。

若干離れただろうか。

人混みに吞まれながら、僕は振り向いた。

すると軋兄も全く同時と言っているいいタイミングで振り返っていた。

「元気でな、冬識」

軽く手を振り進んでいく軋兄を、特に意味もなく見つめていた。

見えなくなつた。

但し、感じ取れるくらいは近く。

そんな微妙な位置関係。

僕らのような距離感。

「軋兄は、」

何も変わらないね

誰にともなく、そう呟いた。

「ようし」

と、らしくもなく気合いを入れる。

家賊のために。

兄のために。

自分の責任にしておくために、ね。

とは言っても。

まともはこの後のことを考えていなかった。

計画もないまま軋兄と別れたわけだ。

よくもまああんなに自信満々に物申せたな、僕。

びっくりだよ。

「さて、と

」

どうするか。

とりあえずは近付いてみるしかない。

この位置からでは正確な“気配”は読み取れないし、立ち止まった
ら周囲の人たちに迷惑だろ？

配慮を忘れない、みんなのことを慮る僕なのだった。

嘘だけだ。

んー。

どうにかするしかない。

何だとしても、どうにかするしかないんだよな。

頑張るか。

うん、頑張ろうか。

「……………」

あれ。

……………あれ？

“気配”が、消えた。

僅かに感じていた気配が、消えた。

どこへ行った？

感付かれたのか？

いや、それは“普通”なら有り得ない。

僕の唯一の突出した能力だ。

“ある程度”のプレイヤーに凌駕されるレベルじゃない。

自画自賛、ではなく。

哀川さんに、唯一認められている能力だから。

“普通”ならば。

そんじょそこらのプレイヤーに、感付かれる筈がないんだ

「あらあら」

と。

僕の背後から、

「一体全体何を探しているんですかねーえ？」

木霊するような、反響するような、ソプラノ声が。

「いやいや、“誰を探しているのか”と行った方が良かったですかーあ？」

綻びるような、崩れるような、存在感が。

「何はともあれお久し振りです冬識さあーん。背、伸びましたーあ？」

僕が咄嗟に向けたナイフを気にも留めず、

呑気にゆったりとした喋り方。

余計なお世話だ。

伸びてないっての。

「あらあら。それは喜ばしいことですねーえ。感激しますよーお」

「……お久し振りです。“時宮時効さん”。相も変わらずお元気そうですねー」

時効さんは、尚も微笑し続けていた。

……非常に喜ばしくない事態だ。

偶然とはいえ軋兄に任せなくて正解だったわけだ。

“これ”は僕の問題だ。

僕の責任問題だ。

兄に任せるわけにはいかなかった。

そういう類いの、問題だ。

成る程。

“この人”だったのなら、僕が気付けなかったのも、感付かれたわけも、理解できる。

理解したくなかったけれど。

認めたくないけれど。

だけど、わかった。

おーけい。

「とりあえず」

「冬識さんのお家にでも、お邪魔させていただきましようかーあ」

「……………」

反論の余地は無さそうだった。

僕はこの人には基本的に逆らえない立場なんだ。

面倒だし、虫酸が走るけど。

そういうものだ。

仕方ない。

割り切れ僕。

「それでは行きましようかーあ。道案内よろしくお願いしますーう」

何故か、弾けるような笑顔で言われた。

嫌な予感しかなかった。

〈自宅 訪問と動機〉（前書き）

苦難と必然の、“トモダチ”との再会のおはなしです。

〈自宅 訪問と動機〉

俺は暴力が嫌いだ。

なぜか？

暴力は俺の周りの物をことごとく壊していくからだ。

俺の周りの人をことごとく傷付けていくからだ。

俺の体を酷使し、

俺の体を少しずつ強化しながら。

そして俺は、

少しずつ少しずつ、

確実に壊れていつている。

始まりはとてつもなく些細なことで。

何を間違ってこうなってしまったのかわからない。

ただ無意識にわかるのは。

いつか俺は自分自身を壊しちまう、ってことだ。

俺は破壊を繰り返して。

いつか必ず俺は壊れるだろう。

今までずっとそうだった。

気に入らねえ物は何でも壊して、

感情のままに壊して、

体は壊れれば壊れるほどより強く再生され、

また何かを壊して、

そんな繰り返し。

だからわかる。

いつか必ず俺は自分自身を壊すだろうと。

けど、そんなわけにもいかなかった。

俺には友達がいるし、

弟がいるし、

ノミ蟲を潰してねえことにも気がついた。

俺が俺を壊さないように、

だからこそ俺は強くなりたいと思う。

強く強く、誰よりも強くなって、俺の中の暴力を抑え込むことができるほどの強さを。

そうすれば、

もう何も傷つけずにすむんだからよ。

だから俺は強くなりたい。

俺よりも強くなるために

「この家には客人をもてなすというおもてなしの心、いや寧ろ機能が備わってないんですかーあ？住人が住人なだけ仕方ないんですかねーえ」

場所を移し、まいほーむ。

より正確に表すと、今僕の目の前に座るこの女（成人）にケチを付けられた築30年（推測）激安倒壊寸前のボロアパート隣人は同じクラスの高校生その他謎の住人ら（近日公開。嘘だけど）家電用品が見受けられない生活感ゼロな薄暗い部屋。

相向かいに座る女性。

コップに入れた水道水を持ってくる僕。

テーブルに水滴を落とさないようにコップを置き、座る。

座布団？

そんなものないよ。

直に座っていただくしかない。

申し訳ない気持ちでいっばいだ。

嘘だけど。

「客人にだす飲み物が水道水なんて家聞いたことないですーう。寧

るあなたのアイデンティティーにしたらどうですかーあ？」

「残念ながらもう一人そんな人種がいますよ。僕に似てるけど似てもつかないような奴がね。安心してください。安心しければいい」

「それはまた悪いご冗談ですよーお。あなたみたいな人間擬きが他に存在しているわけがないんですからーあ」

「嘘じゃないんですけど」

「嘘つきーい」

「……………」

何だこの不毛な会話……………。

気持ち悪……………。

バカップル並の不毛さだ。

「何はともあれーえ。私に何も伝えずに引越しちゃうなんてーえ、随分冷たいんですねーえ。私たちの仲はそんな薄っぺらいものだったんですかーあ？」

「薄いもなにもそんな仲良しでしたっけ、僕たち。その類いの記憶が飛んでしまっと思って思い出せないんですすみません」

「人格も飛んで破綻すればよかったのにーい」

「あなたはすでに色々飛んでますね」

人格どころの話じゃない。

頭の螺とか絶対飛んでるよ。

う。
間が開いたけれど、とりあえず彼女、時宮時効について語る

時効さんは、れっきとした時宮である。

時宮。

呪い名序列一位。

殺し名序列一位の匂宮。

匂宮雑技団の対極の対極の対極。

その、時宮。

操想術の使い手。

つまり操想術師。

眼鏡。

下で二つに髪を結んでいる。

仕事着。

ゆったりとした口調。

僕を小馬鹿にする態度が必要以上に鼻につく。

ていうか何しに来たんだ、この人。

さっき伏線張ったばかりなのに。

「伏線回収も私の仕事ですーう」

「仕事が早くて優秀ですね。ていうかこういうことは違う人にやらせましようよ」

勝手に伏線回収するな。

張ってから登場までが早すぎる……。

にしても、わざわざ僕の家に来て押し入って来て一体何の用があるというのだろう。

出来れば早く帰っていただきたい。

いや、既に家の場所が割れてしまっているので、大した意味は無いのかもしれないけれど。

「そうですねーえ。とりあえずーう、お受けした依頼についての報告に来ましたーあ」

「あ……あー。そんなこともありましたね」

「随分と時間をかけてしまいましたーあ。その点についてはお詫びいたしますーう」

ただーあ。

と、時効さんは続ける。

「あまりご期待に添えた結果には至りませんでしたとーお、まずは伝えておきますねーえ」

「……引き受けていただけただけ、感謝してますよ」

苦笑いする。

口では謝罪したくせに、時効さんは笑うのを止めようとはしなかった。

「結果についてはーあ、後程こちらの報告書に目をお通しくださいー
い」

そう言つて、僕に書類を手渡す。

「どうも」と軽く一言告げ、それを受け取る。

まあ、これは後でゆっくり一人で読ませてもらうとして。
(一人つてところがポイントだ)

改めて時効さんに問う。

「で、用はそれだけですか？」

「いえいえー。それよりもーお、久方ぶりの再会を祝い合おうじゃありませんかーあ」

ににににされた。

にににに返しなかつた。

「いやーあ、一体いつぶりですかねーえ。私たちの感極まる出会いから早12年……」

「捏造するな」

「全くーう。あの頃の冬識さんは初々しくて可愛かったのにーい」

「僕の過去を改変するな……」

「寧ろ私たちの出会いは前世からでしたっけーえ？」

「前世に介入するな！」

しまった。

キレてしまった。

仕切り直し仕切り直し。

落ち着こうぜ、僕。

「それにしてもーお、冬識さんのお宅に辿り着くまでが大変でしたよーお。時間もかかりましたしーい」

まあ、僕は時効さんだけでなく、哀川さんにすら何一つ伝えずに東京に来たわけだし。

見付からないのは当然だ。

時効さんに気配を読む能力はほとんど無いのだし。

「何しろ痕跡が無いものでーえ。“たまたま見掛けた殺人鬼”を尾行していたらーあ、偶然にも冬識さんと再会することが出来たのでーえ、まあ良しとしますかねーえ」

「……あなたに偶然なんて、あるわけないでしょうに」

恐らくは何かしらの根拠があつて、ひい兄を追ってきたんだろう。

それに、例え理由はなくとも、この人は“あの”時宮時効なのだ。

この人を知っている僕は、納得せざるを得ない。

「いやいやーあ。偶然ですよーお。少なくとも零崎一賊の殺人鬼を尾行するという危険リスクを犯してまで来たんですからーあ。会えなかったらシヨックでしたけどーお」

「別に殺人鬼を尾行する必要は無かったんじゃないですか？誰かに聞くとか、そういったことはしなかったんですか？」

すると時効さんは、シニカルに笑い、

わかりきったことでも言うかのように、シニカルに笑い、

「私の行動には“何かしらの意味や意図が付き物”ですーう。“あなたの行動に不幸や害悪が憑き物のようにーい”」

だからこそ、と。

笑みを崩さずに、

「私は“時宮でありながら時宮ですらない”ということをお、忘れた訳ではないでしょーお？」

「……………ええ」

「ですからーあ」

わざとらしく人差し指を突き立て、身を乗り出すようにして。

「私が“零崎人識さん”を尾行してきたということにもーお、きちんと意味が在ったということなんですよーう」

わかりますーう？

と、続ける。

……………。

成る程。

もう何が成る程なんだかよくわからなくなってきたけど、成る程ね。

つまりひい兄は時効さんにうまく誘導されていたわけだ。

恐らくは、僕のいる場所まで。

全く、本当に嫌な嫌がらせをしてくるよなあ。

この人に昔のことを教えた覚えは無いけれど、他人の苦手分野を見つけるのが神憑りのにうまいのだ。

そしてそれを本当に嫌なくらいぴったりドンピシャなタイミングで仕掛けてくるのだから、こちらとしては堪ったもんじゃない。

要するにDSなのだ。

最悪だ。

破滅的な性格に加え、この人には実力がある。

非戦闘集団、呪い名。

戦わずにして勝つ。

ということとは、それ相応の実力が無ければならないということに直結する。

そもそも能力が無いければ、あの黒々として毒々しい暴力の中は生きられないし、生きていけない。

殺し名と対応する呪い名

昔、軋兄に言われたことがある。

“呪い名には、手を出すな”

と。

まあ、無視しちゃったんだけどね。

若気の至りってやつ？

兄の優しい忠告をガン無視するのはいつものことだ。

それで結局、何もできなくて助けを求める。

ほんと、ただの人間みたいだ。

弱くて弱くて弱くて弱くて、

弱いから集まって、

弱いから散らばって、

弱いからこそ、強くあろうとする。

僕なんてその向上心すら欠落してしまっているのだから、救いようがない。

さしものカミサマも手が出ないのだろう。

昔からカミサマに祈ったりしても救われた覚えがない。

戯言だけだね。

……うん、戯言遣いさながらのキメゼリフが出たところで、思考対象を戻そう。

意味。

意味、か。

ひい兄と僕の意味、ねえ。

いや、こう言うとなんかニュアンスが違っただけだよ。

時効さんは知っているのだろうか。

僕がひい兄に出会えない理由。

“合”えない理由。

もう誰にも語りたくないような、記憶。

そう、記憶だ。

この忌々しい記憶こそが、“合”えない理由、なのかもしれない。

わからない。

わからない。

「あなたが“零崎一賊との縁を切っている”というのは前々から存じていましたがーあ、私は“トモダチ”の過去を詮索するような下らない真似は致しませんのでーえ、詳しい事情についてはわかりませんよーお」

「……でしょうね。逆に安心しましたよ」

零崎冬識のトップシークレットは、僕自身が信用している人にもみ伝えている。

信用ねえ。

自分で言ったけど、胡散臭。

何が信用だよ、人間擬き。

「僕のことは広まらないよう、嚴重ロックにかけてありますから。とても簡単に探れるようなレベルじゃあない」

そんな所業が可能なのは、綾南くらいのものなのではないだろうか。

僕についての全ては、禁止だから。

僕について、特に僕の過去についての全ては、知られる必要の無い、全てが全て暗黒時代だから。

そう言って、誤魔化し続けてきた。

茶化して惑わせて、誤魔化し続けてきた。

「だから お願いです」

だから。

だから。

だから。

僕は。

「僕はひい兄に会うわけには ひい兄に“合”うわけには、い
かないんです」

泣きそうな声で、そう言った。

時効さんは、まるで人類最強の請負人のように、僕の頭を軽く撫で、

「あは」

と、シニカルに笑った。

屈託の無い笑顔で、僕を見ていた。

「全く、私がどういう時宮かどうかご存知の筈でしょーお？それで
なくてもーお、私は人が嫌がるようなことはしないしできないんで
すよーお？」

飄々とした時効さんの態度が、何となくあの情報屋のようであり。

「……悪い冗談ですね」

「あは。だけど冬識さん。あなた、どうにかしないとどうにもならなくなりますよーう？それこそ人間では無くなってしまいますよーう？」

人間では無くなってしまおう、か。

既に殺人鬼だけどさ。

結局のところ、僕は成り損ないなわけで。

かといって人間に戻れたわけでもなく。

言うならば、零崎でありながら零崎ですらない、ということか。

「何だかんだ言っても、僕らって似てるのかもしれないね」

「最高の誉め殺しですねーえ」

「あなたなんか殺しませんよ。殺せませんし」

「ありがたいですーう。あなたなんかに殺されるのだとしたらーあ、手も足も出ないじゃないですかーあ」

「最高の誉め言葉ですよ」

零崎は僕であり、

零崎は零崎であり、

僕は零崎ではなかった。

だから、僕にとっての殺人は何なのか、わからなかった。

「ではではーあ、そろそろお暇させていただきますーう。何分、時宮から収集が掛かっているものでーえ」

「ああ、はい。今日はわざわざありがとうございます。但し二度とひい兄を尾行なんてしないでくださいね。殺されますよ」

「私は殺したくらいじゃ死にませんよーお」

あは、と笑い。

「ではまたお会いしましょーお。困り事があるならば連絡くださいねーえ。それと、小唄と零崎さんに宜しくお伝えくださいーい」

「了解しました。機会があれば、ですけど」

「十分ですーう」

そう言うと時効さんは僕に背を向け、片手で軽く手を振りながら、部屋を出ていった。

扉を閉めずに。

……これを何かのメッセージだと受け取るのは、些か度が過ぎるのかもしれないけれど。

時効さんの訪問の本来の目的は、一体何だったというのだろう。

無駄な考え事を続けながら、扉も閉めずに書類を手に取る。

事務的で一般的な、ただの書類だ。

ページをめくって、流し読み。

ふんふん。ふむふむ。

「無理もないか」

呟く。

そもそも依頼事態、そんなに期待してはいなかったし、こんなものだろう。

時効さんはよくやってくれたと思う。

素直に感謝したい。

「やっぱり、自分でやるしかないってことかー」

そう。その通りだった。

遠回しに時効さんはこう言いたかったんだろうと、今更になって気付く。

時効さんは。

まるでどこかの情報屋のように、笑っていた。

まるでとある大泥棒のように、笑っていた。

「　　かはは」

傑作かもねえ。

嘘だけどさ。

僕も、人間失格のように笑うことにした。

そうしなければ、崩れそうだった。

自分の重すぎる過去に。

否、重すぎる人生に。

重すぎた思い出に、壊されてしまいそうで。

内側から融解していくような、気味悪さ。

内部から消滅していくような、この感じ。

何故だか急に。

青い蒼い少女に、会いたくなかった。

“合”いたく
なつた。

(再会)

時宮時効

操想術師)

(加害者
なし)

被害者
なし)

〈自宅 訪問と動機〉 (後書き)

次回、やっと主人公くんが話を進めてくれそうです (笑)

〈竜ヶ峰帝人宅 雑談（決断）〉（前書き）

あけましておめでとうございます。

今年もこんな駄作をよろしく願います。

はい、新年の挨拶的なものは置いといて。

主人公、はやく話進めて。

〈竜ヶ峰帝人宅 雑談（決断）〉

「ダラーズねえ」

「そう、ダラーズ」

英字にするとDOLLARS。

ダラーズなんて、ネーミングセンスがあるんだかないんだか。

巷で噂のカラーギャング、ダラーズ。

普通、カラーギャングとはその名の通りチームカラーと呼ばれるチームごとの色とやらを持っているらしい。

黄巾賊というチームは、黄色。

ブルースクエアというチームは、青と言った具合に。

カラーギャングと呼ばれる由縁でもあるのだ。

だが、ダラーズにはそれがない。

無色。

無色のカラーギャングという、前代未聞奇想天外なチームというわけだ。

だからダラーズは、“誰が加入しているのかわからない”。

無色、ということとは目印がないということだ。

まとまりはない。

チームとしての繋がりもない。

だが、最早一種の掲示板サイトとして馴染んでいるダラーズは、その数が尋常ではないくらい多いのだという。

規則はない。

過去に行われた集会は一度きり。

リーダーはいない。

創始者も謎のまま。

正体不明の創始者が、今は実質的なリーダーとなっているようだが。

それゆえに、ダラーズは脅威になりえる存在だ。

規則や束縛がないのだから、いつ暴走するかわからない。

いつ崩壊してもおかしくない。

あやふやな、その存在。

無色透明なカラーギャング。

それが、ダラーズだ。

「ダラーズには凄い人たちも入っているらしくて、どんどん人数が増えてるんだって」

「凄い人たち？」

「つていうのは全て受け売りで、実際僕はダラーズのことなど何も知らない。」

「それどころかカラーギャングって何？」

「というレベルの問題なのだから仕方ないといえば仕方ない、よね。」

「うん。前に正臣が言ってた池袋の怖い人たちも、ダラーズに入ってるらしいよ」

「へーえ。」

「ご苦労なことだね。」

「確かに正臣くんがそんな話をしてくれた覚えがある。」

平和島静雄

折原臨也

そして、ダラーズ

池袋で、“敵に回しちゃいけない人物”。

喧嘩人形

情報屋

カラーギャング

……。

最早“普通の世界”に留まっていないような気もするけれど、割愛
割愛。

割愛って使い方あつてんのか？

「それにしても帝人くん、詳しいね」

何気なく誉めたつもりで僕が言うと、帝人くんは頬を赤く染め、手をぶんぶん振りながら言う。

「い、いや！僕、そういうの少し興味あったから前に調べてみたんだよ」

「あー、そうなんだ。池袋来てから結構長いつて言ってたもんね」

そうでなくても常識なのかもしれないけどさ。

そもそも一般常識を僕に強要すること自体が間違っているんだよ。

うん、そうなのだよ。

基本的に情報収集は苦手分野なわけで。

「何で帝人くんは池袋に来ようと思ったの？他にいくらでも選択肢はあっただろうに」

確か正臣くんに誘われて来たって言ってたな。

わざわざ、東京まで。

そりゃまあ、古くからの友人の誘いつてもあるんだろう。

帝人くんと出会って、近くで過ごしてきて感じる浅い感想だけれど、帝人くんは自分からあまりどうこうするタイプでは無いんだと思う。

表面上から限定してみれば。

深くまで知っている訳じゃないし、お互いにまだ知り合ってから日も浅い。

帝人くんが裏では実はグレてましたーみたいなことになっていたりしても、まあ否定は出来ない。

逆に僕が血みどろの黒々しい吐き気のするような気味の悪い世界で生きてきたことを、彼は知る由もないのだから。

でも、だからこそ僕はふと疑問に思ったのだ。

彼は何故池袋に来たのか。

何かしらの理由は、あるのかなって。

「うーんと……何て言ったらいいんだろう。前にも言った通り、勿論きっかけは正臣が誘ってくれたことにあるんだけどね」

そう言つて、苦笑しながら続ける。

「変えてみたかったんだ」

「……変える？」

僕が思わず呟くと、帝人くんは頷き、

「なんていうのかな。普通過ぎる日常を変えたかったっていうか、非日常に憧れてたんだ。だから、池袋に行けば何かが変わると思ってた」

“非日常”。

非日常か。

成る程、ある意味誰もが抱く“普通”の感情なのかもしれない。

毎日がつまらないと豪語して、無駄に異常に憧れる。

それはやはり、僕のような異常の塊みたいなやつと、全くもって相容れないような奴なんだ。

相容れようのない奴なんだ。

日常とは、どんなものをいうのだろう。

非日常とは、どんなものをいうのだろう。

境界線がわからないし、理解しようがない。

だって多分僕は日常の一部として生きてきたことなんてないから。

“普通”の行為や思考を放棄しなければ、生きていけなかったから。

池袋に来てからも、その前からずっとだ。

僕が“普通”に溶け込めたことなんて、一度だってありはしない。

あり得ないし、在り得なかった。

殺人してた頃も、修行してた頃も、テロってた頃も、恋焦がれていた頃も、いつもいつもいつも。

そりゃあもう当たり前前のように、ことごとく僕は“普通の世界”とやらに拒絶されていた。

だからわからなかった。

帝人くんという“非日常”が何なのか、全然全くと言っていいほどに、無理難理解不能な事柄のように思われた。

意味不明だった。

「今は池袋に来て良かったと思ってるよ。園原さんや、冬護くん、それに色々な人と知り合えたし、僕にとっては劇的な変化だったんだから」

そういう帝人くんが浮かべた笑顔は、本当の本当に嬉しそうな笑顔で。

まるで子供のような笑顔で。

“彼女”を思いだしそうになったら、吐き気がした。

だから頑張って、平静を装って、

「それはありがたいね。帝人くんという“劇的な変化”とやらの一部に組み込めるなんてさ」

「そ、そうかな」

「そうだよ」

きつとそうだよ。

他人の価値観に食い込んでる気分。

なんて、ある意味戯言だけど。

「冬護くんはどうして池袋に来たの？」

「ん、僕？」

普通に驚く。

返されてしまった。

「まあ、家の事情っちゃ事情なんだけど……」

と、結局お茶を濁す。

あながち間違っちゃいない答えなんだけどなあ。

家ってよりは、家賊か。

一身上の都合によりってことで。

「それなりに理由はあるんだよ。そう思っておいて」

なんて、誤魔化す。

事実、理由は特に無いというのが一番正しいんだろうし、目立った目的があって来たわけじゃあない。

あくまでも気まぐれ。

気まぐれ、ということにしておこう。

「失礼かもしれないけど、僕嬉しかったんだ。普通、こんなときに転校してくる人なんていないでしょ？なのに、そんな人と知り合えて仲良くなれて、こうやって友達になれて……嬉しかった。今も、

嬉しい」

嬉しい。

僕と、友達になれて？

トモダチ。

うううううう。

うううううううー。

うあーあああ。

「だ、大丈夫！？調子、悪いの？」

「いや

あうー。

「かはは……嬉しいよ、僕も」

なんだか吐き気が止まらなくて。

なんだかすごく辛くて。

なんだかよくわからなくなった。

わからない。

餓鬼みたいだ。

駄々をこねる子供のように、自身のことかわからない。

「情けねーな、本当に」

帝人くんに聞こえないように呟いて、自分自身を落ち着かせる。

大丈夫大丈夫。

いける。

「ほ、ほら。なんか照れたっていうかなんというか友達とかその面と向かって言われたことないしなんかほんと嬉しいDEATHみたいな感じで」

「明らかに壊れてる!?!」

「なっ、なんのことかな？僕はこの通り元気一杯通常モード、寧ろ髪の毛が金色になってしかも全部逆立ってしまいそうなくらいのテンションだよ？」

「流石に無理がありすぎる弁解だよ!」

とまあ、ギャグ路線はこれくらいにして。

溜め息を吐いて、弁明するかのように言う。

「本当に、嬉しいだけなんだ」

僕には友人と呼べる人が数えるほどにしか存在しない。

僕自身がこんなにも中途半端で危険とも言える存在なのだから、仕方ないとは思ってる。

思っではいるけれど。

やはり、どこかで“寂しい”という感情が残っているのかもしれない。

いかにも人間らしい、弱々しい感情が、残存しているのかもしれない。

それは喜ばしいことなのかはわからないけれど、何であろうと僕は殺人鬼であるわけで

それと同時に人間であるということも、確かで不確かなのだ。

信憑性もなにもない、人間であるという決め手がないのでどうにも言えないが。

それでも僕は、人を失ったりしてはいない。

これも、約束だから。

大切な人との、約束。

「なんか……僕も、照れるな……」

「……ごめん」

照れあつてるなんか変な二人組だった。

和やかな感じ。

「あ、もうこんな時間か」

携帯に表示されている時計を見て、ふと呟く。

帝人さんと長々と話していたら随分と時間が経ってしまった。

こんなにも話し込んでしまつとは、不覚。

また迷惑掛けちゃ悪いよね。

「ほんとだ。ごめんね、遅くなっちゃったかな」

「いや、まあ大丈夫なんだけど。どうせ隣だし」

「それもそうだね」

あ。

言い忘れていたけど、ここは帝人くん宅である。

つまり僕の部屋の隣だ。

部屋で発する大きい音なんて筒抜け状態な程の薄くて弱々しい壁一枚に隔たれた部屋。

だから今日は迷子になる心配はない。

良かった良かった。

「今日はありがとう。僕の勉強に付き合わせちゃって」

帝人くんが照れた感じで言う。

「いいっていいって。ていうかあんまり力になれなかっただろっけど」

「そんなことないよ」

当初の目的は勉強だったんだけど。

いつの間にか話し込んでしまったし。

……逆に迷惑かけたかな。

「それじゃ、また明日」

軽く手を挙げて、靴を履く。

帝人くんも手を振りながら、

「うん、またね」

と言って、別れた。

外に出る。

そのまま右に曲がって、まいほーむへ。

怪しく軋む扉を開ける。

見渡す限り全く同じ造りの部屋。

但し、生活感があり得ないほどない。

まるで人間なんて住んでいないかのような、無機質さである。

「ただいまー……っ」と

靴を脱ぎ、愛する我が家に向けて精一杯の帰宅の挨拶を送った。

嘘だけ。

「……………」

うん。

やることはない。

何しろ物が少なすぎ。

暇潰しになるものもない。

畳に直に寝転んでみる。

携帯を取り出して、弄る。

「ダラーズかあ……」

思っていたよりも大きな組織だったらしい。

小規模なものかと勝手に想像していたのだけれど、帝人くんとか臨也さんの話を聞く限り（臨也さんに聞いたのは結構前だったはずだけど）、結構な規模のものなのだと伺える。

カラーギャング。

ダラーズ。

「あ、成功」

画面に映し出される“DOLLARS”の文字。

ロゴマークが浮かび上がる。

へえ。

見た目はほんとに普通のサイトのように見えるんだ。

まあ、見た感じね。

表示される画面を見つめる。

「……………えい」

ぼちっとな。

“登録が完了しました”

うん。

まずは、内部を探る他ない。

そのためには。

「入っちゃうのが一番だよねえ」

現時点から高校生、深限冬護はダライズのメンバーになったわけだ。言い直せば殺人鬼、零崎冬識は現時点をもってダライズの一員となつたわけだ。

まあ、特に何かが変わるわけでもないんだけど。

とりあえずは、ダライズの“中身”とやらを観察せねばならないのだ。

“軋兄に依頼された仕事の一つ”

要するに、僕のおともだち、玖渚友からの依頼。

“ダライズ”について調べること。

先日軋兄と会つたのは、大方この仕事についての確認の為だ。

何故玖渚ちゃんがこんなことを頼んだのか、なんてことは特に興味はないし知る必要もないだろう。

大方、ただ単に気になったぐらいのものなのだろうし。

玖渚ちゃんからのお願いだ。

別に断る理由もない。

ちよこつと面倒だったのは事実だけど、折角おともだちが頼ってくれたんだから、期待に応えなきゃね。

僕と玖渚ちゃんとの関係は少しばかり複雑だ。

確かに《ゲーム遊戯囚衆》に加担してはいたけれど、玖渚ちゃんに忠誠心とかそういうものは向けたことがない。

あくまで、ともだち。

おともだち。

僕らの関係は主従関係じゃない。

それだけは断言できる。

だけど、僕らの繋がりをうまく表せる言葉が見付からなかった。

仲良しとでも言えばいいのだろうか。

よくわからない。

それは多分、玖渚ちゃんも同じだろう。

いや、もしかしたらわかっているのかもしれない。

だってあの子は青色サヴァンなのだから。

まあ、ともかく僕らは仲良しだ。

仲良しであり仲好しだ。

だから好意を見せることを惜しまない。

お互いにね。

だって僕らは“ともだち”らしいからさ。

傑作だね。

そういう意味では僕は良い奴なのだ、基本的に。

一応言っとく。

嘘だけど。

こうしてダラーズに潜入した僕だったが、この行為が後に凄く面倒

なことになるだなんて、思ってもみなかった。

そもそもよくわからない内に潜入してしまったのが悪かったのかもしれない。

けれど、何にしろこれでダラーズには危険要素がプラスされてしまったわけだ。

門田京平にサイモン・ブレジネフ、平和島静雄。

そして首なしライダー、セルティ・ストウルルソンといった“ダラーズのビッグゲーム”に一つでも関係性をもってしまったこと。

殺人鬼としての領分を分かっていたいなかったこと。

そしてここは池袋であり

歪んだ街であるということ、僕はこの時知る由もなかったのである。

なんて、戯言だけだ。

（談笑

竜ヶ峰帝人

高校生）

（被害者　なし

加害者

なし

〈竜ヶ峰帝人宅 雑談（決断）〉（後書き）

感想、誤字・脱字報告等、よろしくお願いします。

〈校内 質疑と応答〉（前書き）

遅くなりました。

ぐだぐだ書いていたツケがまわってきていますね。ははははは。

それでは今回もよろしくお願いします

〈校内 質疑と応答〉

さて、君は確か池袋に来てそんなに経ってはいなかったらしいな。

何故そんなことを知っているかだつて？

そんなことはどうでもいい。

で、君は一体何が知りたいんだ？

ふん、成る程。

ダラーズについてか。

俺は池袋に長いこといるが、あのチームは何もかも規格外だな。

常識外だし、予想外のチームだ。

あくまで俺に言わせればだが、あのチームはそれほど危険視する必要はないと思つぜ。

あくまで今の時点では、だけどな。

あのチームにはリーダーはいないが、もし上に立つような奴が現れ、そしてうまく巨大な組織を扱えなくなった時は、どうなるかわからない。

なに？俺の結論に文句でもあるのっていつのか？

仕方ないだろ。

大方俺が考えているような“ダラーズ”ってのは君が想像しているようなものと大差ないだろう。

俺はあくまで人間だし、君もあくまで人間、だろう？

知ったような口振りだった？

まさか。俺は俺の意見を口にしたまでさ。

怒るなよ、らしくない。

ともかく、俺が言えるのはダラーズにはリーダーと名のつくものは、究極的には存在していない、ということだよ。

だがな、創始者の一人は今、池袋にいる。

お遊びで作ったはずの“チーム”は、既に形を持ってこの街に存在している。

ある程度の力を持って、既に存在しているんだ。

意味がわからないって？

今はそれでもいい。

だがな、池袋にいる以上、この街を楽しまなきゃならないのは必

然だろっ？

この街が俺たちを楽しませてくれるように、

俺たちも、この街を存分に楽しまなきゃならないんだよ。

だから俺はこの街にいるし、君もこの街にいる。

ん？俺が何者か、だつて？

そんなことはどうでもいいが、名前くらいは名乗っておっつか。

俺は九十九屋真一。

しがない池袋を愛する人間の一人さ。

歓迎するよ。

この街は、きつと君を楽しませてくれるだろっつからな。

愛、とはなんだろう。

僕は生まれてこの方、その手のものを見たことがないし食べたこともないので、はっきりと思い浮かべることができない。

愛、とはなんだろう。

例えば母親が子に注ぐ愛だとか。

例えば恋人が相手に贈る愛だとか。

例えば家族に向ける愛だとか。

愛と称されるものはこの世界にはたくさんあるらしい。

たくさんたくさんあるらしい。

ただ僕だけが、検討のつかないものとして愛とやらを拒絶しているだけなのかもしれないし、本当は愛なんてものは存在していないのかもしれない。

昔聞かれたときも、よくわからなかった。

今でも理解していない。

では、僕の周りにいる（稀少な）人は、どうなのだろうか。

愛とやらを知っているのだろうか。

ふと疑問に思った。

特別な意味はない。

ただ思っただけ、だ。

無理に意味合いを持たせることはしない。

持ったら持ったで、面倒だ。

なんて、戯言だけど。

「愛？」

ケース1。

「そつだな。愛ってのはよ、人それぞれの形があるんだ」

人類最強。

「誰が見てもわかるようなでけー愛も、他人どころか自分でも気づかないほどの小さい愛も、愛は愛に違いねえ。人を傷付ける愛もあれば、何も変わらずただそこにある愛もある。如何にも人間らしい素敵なもんが愛と呼べるものだど、あたしは思っぜ」

だから、その愛ってのは何なのかが知りたいんですよ。

よくわからないんです。

その、“愛”とやらを感情としてカウントしていいのとか。

「……………」

そんな顔しないでください普通に怖いです。

「あーもう、じゃああれだ。今あたしが冬ちゃんに向けてんのが愛だ。全身全霊全力投球の愛だ」

はあ。

そういうものなんですか。

「そーいうもんだ。所詮、愛なんて目に見えねーもん、あたしが冬ちゃんに指し示せるわけないし」

まあ、確かにそうですね。

「つつかよ、こんな恥ずかしー質問すんじゃねえよ。照れるだろ」

えーと。

ごめんなさい。

「深隈くん」

呼び止められた。

一体全体誰だろう、とか考える必要はなかった。

何故か。

僕を呼び止めた眼鏡ちゃんは言うまでもなく我らが委員長、園原杏里だったからである。

「あ、園原さん。どうかした？」

特に呼び止められる理由が見付からなかった為に、そう返す。

ていうか園原さんが僕に声を掛けてくるなんて、至極珍しい。

何かあったのか、と考える方が自然だし、妥当だ。

「いえ、その、大した用ではないんですけど」

少々たじろぎ気味に園原さんが言う。

若干溜めて、なぜか申し訳なさそうに。

「……………お願いがあるんです」

ほう。

お願いとな。

園原さんが僕にお願いねえ。

これはまた珍しいこともあるものだ。

園原さんは余り人を頼らないところがあるようだから、頼まれ事というのは今まで一度もされたことがない。

うん、頼ってくれるのなら承りたいものだね。

いや、別に僕がパシリ性とかそういうわけじゃあないよ。

“友達”として、協力出来ることがあるならば張り切って手伝いたいとか、そういう感じ。

「お願い、か。何かな？出来る限りのことはするよ」

「本当ですか。助かります」

小さく微笑んで、何やら鞆に手を突っ込む。

探しものをしているようだ。

そして取り出したのは、小さな包み。

女の子らしいリボンに包まれた淡いピンク色の包みで、見た目はプレゼントのようなものだった。

「……………これは？」

「プレゼントなんです。これを、私の友達に届けてほしいんです」

友達が。

うんうん、なんだかやけにファンシーだとは思ったけど、友達にか。

別にながかりしたわけじゃないよ。

嘘じゃないさ。

「深隈くんにこんなことを頼むのは悪いとは思ってますけど、その……………先生から呼び出されてしまって」

「ああ、成る程」

確か今日は帝人くんも正臣くんも用事がある、とか言っていた。

どうせ暇だし、園原さんのお願いだし。

「その、友達って？」

基本的に周囲の人間以外は記憶していないために、多分名前を言わ

れてもわからないと思う。

同じクラスの人でもわからないだろうな。

園原さんもそれをわかってくれたのか僕には理解できなかったけれど。

「多分、中庭の辺りに男の人と………えと、彼氏さんと一緒にいると思います」

そう、説明してくれた。

流石は園原さん。

判断能力が高いね。

「中庭、ね。おーけいわかったよ」

包みを受け取り、軽く眺めてから左手に持ちかえる。

見た目と重量からして、ストラップかなにかと推測される。

別に何でもいいんだけど。

手に取ったものは何でも知りたくなっちゃう非常に困った体質なのだ。

嘘だけど。

「じゃあ頼まれたよ。また明日、園原さん」

と、「ここまで言ってから気がついた。

名前、一応聞いておかないと。

忘れるかもしれないけどさ。

「その子の名前は？」

「あ、はい。名前は」

「愛だと？」

ケース2。

「愛、か。すまないな。生憎今の私に恋人はいないから、そういう話は苦手なんだが」

剣客のおねーさん。

「恋人に向けるのは恋か？いや、でも愛とかもよく使われているのか？」

いや、あの、軽く答えてくれるだけで嬉しいんで。

そんなに悩まなくても。

「そうか？ならば私が考えるに、友達への思いも、愛と言えるんじゃないかと思うよ」

友達への思い、ですか。

友情も、愛というカテゴリーに含まれると。

「というより、その人を大切に思うのなら、そこには愛があるんじゃないか？」

深いですね。

「まあ、愛だしな」

やっぱり、そういうものですか。

難しいものなんですかね。

「そうでもないと思うけどな。冬護、お前にだって大切な人くらいいるのだろう？大切に思う人がいるのなら、愛は必然的に在るんだよ多分」

必然的にある、愛？

当たり前のようにあるもの

例えば、“心”のような？

「私が言えたことじゃないけど、やっぱり曖昧なんだろうよ、愛ってやつは。だから冬護、お前みたいなのやつはすぐに見失ってしまうんだろうな」

見失う

それは初めて言われました。

とは言っても愛というものがはっきりしてないんで、見失っているのかどうかすら、それ以前に見つけられているのかどうかすら怪しいですよ。

僕の場合は、特に。

そういうの、何故か疎いので。

「そうか？まあ結局、私にもよくわからないよ。それにしても冬護。最近帰りが遅いだろう？物音を立てないようにな。崩が頂垂れていたらぞ」

まじですか。

謝んなきゃ。

「こんにちはは初めまして！私、張間美香です！誠ニ共々宜しくね！」

と。

僕に向かってご丁寧に、少し気になる部分もあるけれどまあまともな自己紹介をしてくれたのは、例の人物、張間美香さんだ。

なんだか想像していた人物像と違う……。

園原さんの友達っていうから、もっと大人しい感じなのかと勝手に想像していたけれど。

園原さんのようなタイプとは真逆といってもおかしくない、そんな第一印象だった。

うむ、僕の一人予測はもの見事に外れてしまったな。

まるで検討違いだ。

軽く落ち込んだ。

まあ嘘だけど。

「矢霧誠二だ」

手短に言うのは、張間さんの隣に座る人物。

矢霧誠二くんだった。

張間さんとはお付き合い中。

校内でも有数のバカップルぶりを毎日飽きもせず発揮しているらしい（園原さんからの説明を勝手に解釈 要約）。

うん。

なかなかお似合いのカップルサマだった。

とうかさつきから二人は腕を組んでいるところではない、既に張間さんから抱きついているような状態で、僕に自己紹介をしてくれたのである。

なんだか凄く邪魔をしまっているような気がしなくてもない。

まあいつか。

「深限冬護。改めましてよろしく」

「ていうか、私たち同じクラスだよな？でも流石に接点なければ覚えないか。あ、違うよ？誠二以外の人に意識してほしいって言うてる訳じゃないんだよ？」

「わかってる。あんな短期間じゃ、深限もまともに名前なんか覚えられないだろ」

わー。

らぶらぶむーどがすごいです。

でも矢霧くん、フォローありがとう。

至極感謝。

「やっぱり誠二は優しいね！そんなの当たり前だけど、改めて誠二は私の運命の人だって確信しなおしたよ！」

張間さんは満面の笑みを浮かべて、そう言う。

「それで、何か用か？」

と、彼女さんを軽く流した矢霧くんに言われたために慌てて目的を提示する。

「そうそう、張間さんに少し用があつて」

言いつつジャケットのポケットの中を探る。

勿論大切に扱ってきた。

潰れたりしないように、ただ歩くという動作だけでもずっとジャケット内を気にかけてながらここまで歩いてきたんだ。

指先に触れる。

発見。

取り出しながら言う。

「これを渡して欲しいって頼まれたんだよ」

底を掌に乗せるようにして、包みを張間さんに手渡した。

張間さんはそれを受け取って、じっと眺めながら言う。

「えーっと、杏里からかな？深隈くんが届けてくれたってことだよ
ね？態々ありがとう」

「あ、うん。そう」

わかってくれたらしい。

説明の手間が省けた。

よし。

これで用件は終了したわけだ。

帰るか。

うん、帰ろう。

「じゃあ、僕はこれで」

固まった。

その先の言葉を綴るのを忘れた。

……えーと。

僕が、目視したのは。

明らかに“普通”に分類される類のものではなかったからだ。

明らかに他から浮き出ている、歪で不自然なものだったからだ。

垣間見えた彼女の“首”には。

痛々しい“傷跡”が、刻まれていた。

まるで、“首を切断したかのような”傷跡。

張間さんの端正な顔立ちや、細目の体つきに似合わない、歴然とした傷跡だった。

どうして、“首”にこんな傷跡が？

どうしても疑問に思えてしまう。

異質だ。

気になって仕方がない。

しかも、この傷。

“何故だか、傷の痛みを感じない。”

痛みとやらが、僕に干渉してこない。

おかしいな。

変だ。

何か、違和感がある。

どうしても拭いきれない、違和感が。

「……………どうかした？」

「あーいや。何でもないよ」

誤魔化する。

軽く微笑んで和やか空気を演出してみた。

嘘だけ。

まあ、そこまで気にかけることじゃあないか。

寧ろ失礼とも言える。

「それじゃ、今度こそ」

方向転換回れ右をし、静かに歩き出す。

丁度いい別れの言葉を見付けられるほどの間柄でもないし、無難に一言告げるといふ気遣いはしてみたのだった。

若干嘘混入。

「また教室でねー」

と、張間さんの声が響く。

残響システムは健全のようだった。

おそらく嘘だけだ。

張間美香。

首に傷を、持つ少女。

矢霧誠二。

その彼氏。

“首”というキーワードについて、僕が思い浮かぶことも勿論在るわけで。

僕の“友人”に関連性があるという可能性は無視出来ないのだろう。

ある程度思考を巡らせなければならぬわけで。

あの時。

つまり、僕が首についての見解を脳内で語り尽くしていたとき。

貫くような、穿つような視線を感じていたのは間違いがないわけであり。

その視線を真っ直ぐに僕に向けていたのが矢霧くんだったという“事実”を、僕が見逃す筈がないというのもまた、偶然のような必然であるのかもしれないと、意味もなく考えていた。

「あい？」

ケース3。

「うにー。しんちゃんがそんなこと聞くの、珍しいね」
青色サヴァン。

「メルヘンチックなしんちゃん、何か変」
そう？

ていうか、メルヘンだったの？僕。

「ちょこつとねー。でもしんちゃん、何で僕様ちゃんにそんなこと聞くの？」

何で、か。

特に理由とかはないけど。

これを聞いて回るのが今の僕のマイブームで。

「あ、嘘ついた」

嘘嘘、ほんとほんと。

でも、少し疑問に思ったただけだよ。

特に意味はないから、答えたくない場合に執行可能な拒否権は、当然のように君にある。

「愛ねー。僕様ちゃんはチームの皆も直くんも、勿論しんちゃんも大好きだよ。でも、愛してるのはこの世界で一人だけ」

好きと、愛。

この2つの明確な違いってなんだと思う？

好きの発展型が、愛？

「ぶっぶー。違うよ」

ふうん。

そうなの？

「そうなの。好きと愛は全く別物だと言っていい」

全く別物。

そうなんだ。

それほどまでの違いが、理解力の乏しい僕にでも理解できるほどの大きな違いが、あるの？

「うん。だから僕様ちゃんの言う“好き”と“愛”には結構大きな差があるわけなんだよ。わかるー？」

そっか。

難しいからなのか、よくわからなくなってきたな。

余計にこんがらがってきたよ。

「うにー。けどしんちゃん、しんちゃんはそれでもいいんだと思
うよ」

どうして？

少なくとも僕は、それじゃ駄目な気がしなくもないんだけど。

「しんちゃんはしんちゃんであってしんちゃんじゃあないから。し
んちゃんはしんちゃんであってしんちゃんでもないから。しんちゃ
んは多分、好きとか愛してるーとか、よくわかんないでしょ？」

うーん。

まあ、よくわかっているわけじゃあないな。

嘘じゃないから、ほんと。

「よくわかんないものを番付するのはきつと大変だよ。よくわかんないものを区別するのはきつと大変だよ。だから、いいんじゃないのかな」

つまりさ。

僕はそういった類の感情を苦手としてるってこと、なのかな。

ヒトの中の、明るい綺麗な感情とか。

残念なことに、自覚症状ないし。

「そうかもしんないね」

うにゃ。

そうかもしんないっす。

「うにゃー。それより僕様ちゃん、久しぶりにしんちゃんの手料理食べたいな」

ん？

僕、料理なんてできたっけ。

そんな設定知らないんだけど。

嘘だけど。

料理ねー。

まあ君のためなら頑張るけど。

あ。

それとさ。

君の愛してる人って、誰？

「……………聞かなくてもわかってるくせに」

まあまあ。

僕は知りたがりなんだよ。

嘘だけど。

教えてくれる？

元暴君。

「決まってるよ。ためらう必要もない」

「僕様ちゃんが愛してるのは、この世界でいーちゃんだけなんだから」

(出会い

張間美香

矢霧誠二

高校生)

(被害者

加害者

なし

なし)

〈校内 質疑と応答〉（後書き）

なんだか戯言メンバーとの関係性が見えたり見えなかったり。そのうち明かされる・・・でしょう。いや、がんばります。

誤字・脱字に加え感想等、おまちしております^^

・・・少しだけ次回予告。

作者、初めての挑戦（笑）
委員長のお話になるはずです。

〈雨 過去想哀（加護相愛）〉（前書き）

微妙な日に更新してしまい申し訳ありません。
とりあえず、謝罪です。

ではでは、今回は本編とそんなに関係ないです。
忙しかったら読み飛ばしてくださいね。

〈雨 過去想哀（加護相愛）〉

限りなく零に近い可能性を、それでも僕は捨てきれていなかった。

果てしなく無に等しい虚脱感を抱え、

下らない疲労感を蔑ろにしてまで、

僕は一体何を信じたかったのだろうか。

今だからこそ気が付いたのかもしれない。

今だからこそ、僕は思考がスムーズに進めているのだろうかけれど。

逆に言えばあの時気づけなかった時点で、既に手遅れだったのかも
しれないけれど。

いつしか振り返る思い出か何かのように、それは変更不可能な理で
あることに、変わりはないわけで。

「みたいなセリフは昔言った」

気がする。

僕の人生において、失敗のなかった時なんてない。

失敗しなかった時など、存在しない。

だから僕は毎回うんざりするほど、いくつかの傷跡と後悔とトラウマを残していく。

あくまで僕自身の悪影響ならば何ら問題はないが、それが周囲への影響だった場合、困る。

僕自体、直接的にはないが、僕の母親（仮）に怒られてしまう。

それは嫌だから。

嫌だけれど。

どうやら僕は相当のトラブルを受け入れてしまうようであり。

一度だって成功したことはないのだ。

一度だって叶ったことはないのだ。

だから、ということはないのだけど。

成功を知らない僕にとって、失敗は大したことじゃあなくなっているのかもしれない。

それはかなりの大問題だが、僕は僕でこういった面倒な性格をしている。

僕は僕で、思い返したくもない重くて重くて辛くて辛い過去に。
押し潰されてしまいそうな過去に。

失敗を、繰り返し繰り返し絶賛リピート再生中。

嘘だけど。

嘘。

嘘つきは嘘憑きと紙一重。

嘘と戯言なんて存在意義は大差ない。

それこそ、失敗と成功の意味合いが違わないように。

だから僕はぼくを止めたかった、のかもしれない。

昔々、あらゆる意味で消去された暗黒時代。

いつかは向き合わなければならぬのだろうか。

僕とぼくの過去に、向き合わなければならぬのだろうか。

それとも

「冬護ー」

「冬護くーん？」

あ、呼ばれた。

机に突っ伏していただけるさの残る体を、ゆっくりと持ち上げる。

寝不足だ。

瞼が重い。

そんな頼りない視力で、辺りを見回す。

時間が時間なために、もうほとんど我が教室には人は残っていないかった。

目につく夕焼け。

オレンジに塗り潰されていく青色。

藍色に塗り潰されていくオレンジ。

うん、まるで僕の心境を写したかのような空模様だ。

嘘だけど。

ふと額に手を当てると、指先が湿っていた。

汗が酷い。

ベタつく。

異常な程の量である汗が、僕の皮膚上を全面的にコーティングしていた。

軽く、溜め息をつく。

重くて苦い何かを吐き出すように。

辛くて痛い何かを誤魔化すように。

長い髪は、今の時点では邪魔にしかならなかった。

「おい冬護、早くしろよー」

「目玉親父風にもう一度」

「おい冬護………って何をやらせんだよ！」

ノリ突っ込みしてくれた。

少し感動。

なんて、笑いながら席を立つ。

さてさて、僕の大切なご友人方を待たせてはいけないな。

暗くなりかけているし、早めに家に帰った方が良さそうだ。

「今、行くよ」

特に感情も込めずにそう言って、鞆を手に持つ。

「どーすつか。どっか寄っていくか？」

「でも、今日園原さんいないし……………」

「なんだなんだーおい！お姫様がご不在で落ち込んでんのか？」

「べ、別にそついう訳じゃ」

「そつかそつか。うんうん。野郎一人じゃ釣り合いにならないってか…………。酷い話だ。ああ、涙が」

「違つってば！」

「とにかく、杏里がいなくてテンション下がってるのは本当だろ？」

「……………」

「ほらみる、図星じゃんか。照れるなって、格好つかないぜ？」

「正臣はいつも勝手に話を進めすぎだよ……………」

かは、と軽く笑う。

相変わらずに変わらないなあ、この二人。

いつまでも聞いていたいと思うよ、この攻防。

「正臣くんの提案は極めて名案だけど、今日はもうすぐ雨降るらし

いよ」

それを聞いて、正臣くんが苦い顔をする。

「げ、マジかよ。こんなに晴れてるのにか？」

「何を言っているんだ。これでも地元じゃ『天気予報士の予報士』
って呼ばれていたのだよ」

嘘だけど。

「それってただの天気予報士じゃ……」

帝人くん、わざわざ的確な突っ込みをありがとう。

僕は君がいるから簡単に嘘が吐けるよ。

なんて、嘘だけど。

「土砂降り、だってさ」

情報源はどこかの時宮なので、外れることはないだろう。

ていうかあの人、操想術師じゃないのかよ。

まあ、例外だし。

いつか。

「じゃ、急いで帰るか」

「そうだね。濡れたら面倒だし」

「うん。あ、でも園原さん帰る時大丈夫かな……」

心配そうに言う帝人くん。

わあ。

帝人くん、優しい。

感嘆。

「ああ、確かにな」

正臣くんが二回頷く。

腕を組んで、悩みの姿勢。

「傘置いてくとか？」

と、何気なく僕が言つと

「ナイスアイデアだ冬護！傘を持っているやつは拳手！」

「拳手制に一体何の意味があるのかわからないけど、僕なら持つてるよ」

正臣くんを右から左へ受け流し（勿論嘘だ）、折り畳み式の傘を取り出す。

とりあえず持ってきて正解だったみたいだ。

友人の役に立つなら尚更。

「じゃあ、メモと一緒に置いておけば大丈夫かな？」

言いつつ、帝人くんが紙をくれる。

気のきいた良い人だ。

「えーと、園原さんへつと……」

歩きながら書いたために若干文字が歪んだ。

多少ならば問題ない、はず。

「はい。書けたよ」

メモと共に傘を帝人くん到手渡す。

帝人くんはそれを、園原さんの靴箱の中へと入れた。

良いことした感、満載。

「よし、これで大丈夫だな。帝人も安心、って感じか？」

正臣くんはにやにやしなから、肘で帝人くんをつつく。

帝人くんは苦々しく笑いながら、僕に言う。

「でも冬護くん、傘大丈夫？僕も持ってないんだけど………あ」

そんな声を出すので、ふと空を見上げてみると、滴が頬に落ちてきた。

当たり前だが、雨。

もう降ってきたのか。

やばー、走って帰らなきゃね。

「はやっ！もう降ってきたのかよ？傘ねえし、ダッシュで帰らなきゃじゃねえか？」

頷きつつ、

「確かに、こんなに早く降ってくるとは予想外だよ。強くなる前に帰れるかな」

「走ればなんとか………」

苦笑いする帝人くん。

おっと。

走るのが……。

走るの苦手なんだよね。

基本的に運動とか嫌いだし。

まあ、我が儘を言っている場合でもないよな。

頑張れ僕の運動神経。

唸れ僕の筋肉。

嘘だけど。

「……………走るつか」

裾に雨水がはねそうだ。

髪が早速水分を吸いにとって重くなり始めている。

雨は嫌いだ。

ていうか濡れるのが嫌いだ。

仕方ない。

沈没しかけの精神力と、落ちてきそうな厚い雨雲に反抗しながら、家に帰るとしますか。

戯言だけど。

私は幸せだった。

家族で囲む食卓。

小さなものだったけれど、私にとってはその食卓こそが、幸せの居所だった。

強くて大きなお父さん。

優しくて綺麗なお母さん。

決して裕福だったわけではないけれど、家族がいれば幸せだった。

今日は杏里の好きなものばかり揃えたのよ。

わあい、やった！

良かったな、杏里。

さあ、早く食べましょう。

いただきまーす！

楽しかった。

楽しかった。

嬉しかった。

幸せだった。

けれどそれは、多分夢の中で。

ふわふわした気分になるのは、夢の中だからだろうか。

お父さん。

お母さん。

夢の中の私は、幸せそうだった。

そんな世界が。

くるくる廻る。

何だろう、目が廻る。

視界が廻って、廻って廻って。

ああ。

夢だったんだ、って。

落胆と、少しの安心が。

私の視界を覆う。

覆せない現実と、

叶いもしない幻想に、

私はいつまで依存し続けるつもりなんだろう。

幸せな食卓。

幸せな家族。

私をもっと、

もっとももっとも、

自分に優しくなれたなら。

自分に依存できたなら。

そんなのは全部、

“ウソダケド”

って、誤魔化せるのに。

そう。

夢の中。

そんなのは夢でしかない。

実際には幸せな食卓も、幸せな家族も存在しなかった。

私が私の中に作り出した、ただの夢。

まやかしでしかない。

本当のお父さんは私とお母さんに暴力を振るっていた。

本当のお母さんは虐げられる私を見ようとはしなかった。

幸せなんてなかった。

あるはずもなかった。

だけど、二人は死んだ。

私を残して、死んでいった。

良かった、のかな。

嬉しい、のかな。

だけど、どうして。

温かな紅い雫よりも、頬に伝う冷たい感覚が広がっていく。

なんで。

どうして死んだの？

幼い私はわからなかった。

どうしてお母さんが刀を持っているのか。

どうしてお父さんが血だらけで倒れているのか。

どうしてお母さんは、自分自身を斬ったのか。

どうして目の前に、刀が転がっているのか。

何もわからなかった。

そして、

“頭に響く声” さえも何なのか、

わからなかった。

自分自身を閉じ込めて。

心の中に押し込んで。

まるで外から額縁の中を覗いているような、そんな感覚。

額縁の中では奇妙な現象が起きていた。

あい。

あい、してる

あい。あい。あい。あいあいあい愛愛愛愛愛愛愛あいアイアイあい愛
あい愛アイ愛あいアイ愛アイ愛あいあいあい。

愛してる。

愛してるわ。

何をつて？決まってる、人間をよ！

私は人間を愛してるわ！

全部全部全部好きよ愛してる。

私は人間を人間をあなたをあなた人間人間を愛しているわ！

理由なんてなくていいだって愛しているんですもの！

愛してるの愛してるそうよ愛してる。

愛してる愛してる愛してるあいしてるあいしてるあいしてる愛して
るアイしてるアイしてるアイシテルアイシテルアイシテルアイシテ
ルアイアイアイ愛愛あいあいアイ愛あいあいあいアイ愛

？

“これ”は一体何だろう。

愛してる？

ああ、そっか。

私、また頼ったんだ。

愛、なんて私は知らない。

だから依存したんだ。

否、寄生した。

この“おかしな声”は、この刀から響いているらしい。

あれ、変だな。

私なんだか落ち着いているみたい。

まるで最初からわかっていたかのように。

まるで最初から知っていたかのように。

私はこの刀を、受け入れているようだ。

そっか。

“そっか”。

目が紅かったお母さん。

紅い紅い日本刀。

私は、手を伸ばした。

掌で、掴む。

額縁の中でより一層、“声”が強くなる。

愛してる、と叫んでいる。

絶叫。

さながら、断末魔の叫びのように。

だけどそれも、額縁の中。

私は傍観しているだけ。

愛してる愛していると叫ぶ“彼女”を、ただ見つめていた。

そして。

そして

「……………あれ」

少しうとうととしてしまったようだ。

雨の音で意識が覚醒していく。

「傘……」

持ってくるのを忘れていた。

まさかこんなに大粒の雨が降るなんて。

どうしよう。

濡れるのを承知で、帰るしかない。

それにしても。

何だか、疲れた。

夢を見た。

……昔の夢。

昔見た夢の夢。

夢うつしの鏡映し。

ただの言葉遊び、だ。

なんて、どうでもいいような何でもないことを考えながら歩いてい

たら、靴箱の前に辿り着いていた。

あ、靴も濡れちゃうかな。

考えつつ、靴箱を開ける。

「……………?」

見覚えのない傘が入っていた。

誰のだろう。

メモが置いてあった。

「『園原さんへ』」

メモには続けてこんなことが書かれていた。

『園原さんへ』

僕の親愛なる友人、つまり君の王子様が、雨の中帰宅するであろう君のことを随分と心配していたので、傘置いとく。好きに使って。

君の言うところの深隈くんより。』

「……………深隈くん」

自然と顔が綻ぶのを感じた。

嬉しい。

素直にそう思う。

だけど同時に、私なんかには勿体無いと、確かに思った。

私には、出過ぎた真似だと。

ただの人間の真似事だと。

私の中のもう一つの“声”がそう言っているようで。

恐ろしくなって、哀しくなって、いつものように額縁の中へと押し込めることにした。

握った傘を、離さないように。

触れている傘を、無くさないように。

結局借りた傘を使用して私は帰路についた。

汚さないように頭上にはかり気を遣いながら、慎重に進む。

雨は止みそうもなく、寧ろ強まったような印象を受けた。

ああ、何と言って返せばいいのだろう。

ありがとう？

助かりました？

お礼はしたほうがいいのかな。

だけどメモを見る限り、どうやら三人で帰っていったようだし。

そうだとしたら、三人にお礼を言わなきゃ。

ありがとうございます、って言って。

どうしよう。

優しさを優しさで返すのは容易い。

優しさを優しさで返すのは当たり前。

だけどそれが、私にはできない。

優しさをやり過ごすのは簡単で。

優しさを噛み締めるのは日常だ。

私には何も無い。

返すための何かはない。

だから私は寄生する。

足りない何かを誤魔化す 否、補うために。

だから私は寄生する。

足りていない何かを、何一つとして理解していないくせに。

他人と関わるのは寄生？

他人とふれ合うのは寄生？

他人とわかり合うのは寄生？

だから、寄生虫。

私は寄生虫。

わかってる、そんなことは。

わかっていた。

だけど、私は私を変えられなかったし、変えることもなかった。

私は自分を否定したくないらしい。

図々しい。

図々しいにも程がある。

寄生するくせに、なにが自分だと言うのだろう。

なにが自分だと言うのだろう。

私は今日も何かを間違っただまま生きている。

友達を友達と呼べるようになるまでは、頑張ってみた方がいいのかな。

私は今も寄生している。

寄生して生きている。

私は。

園原杏里は。

己の中の日本刀にさえ、寄生しているのだから。

（思考）

園原杏里

高校生）

（被害者

園原杏里

加害者

園原杏里）

〈雨 過去想哀（加護相愛）〉（後書き）

まあ、ある意味初挑戦ですよね？
思ったより短めでした。

次回更新は遅くなるかもしれませんが。
ご了承くださいです。

予告

迷子になりすぎる主人公。

ではではまた次回！

本作品に関して

誤字脱字・感想・質問等お待ちしております^^

質問にお答えできるかは微妙ですが。

〈街中 生態と確認〉（前書き）

へんな時間に投稿してしまい申し訳ありません・・・

〈街中 生態と確認〉

世界というものは規律とやらを好む。

世界というものは秩序とやらを好む。

世界というものは正しさとやらを好む。

世界というものは正義とやらを好む。

だから世界は4つに分裂した。

世界は規律を守るため

世界は秩序を守るため

世界は正しさを守るため

世界は正義を守るために

4つの世界に別れた。

四神一鏡の統べる世界。

この世界は財力の世界だ。

だからこそ“普通”には近いのかもしれないが、ある程度には“ずれている”。

玖渚機関の統べる世界。

この世界は権力の世界だ。

世界の四分の一を支配する超機関。

玖渚機関。

特に関わる機会もないような存在だが、裏を返せばそれくらいに密接した繋がりを持っているということだ。

だから玖渚は“外れている”。

殺し名七つ、呪い名六つの統べる世界。

いや、正確に言えば統べているわけではないのだけれど、これらの勢力が中枢となっているのは間違いではない。

この世界は暴力の世界だ。

魑魅魍魎の殺伐とした、それこそ夢のような世界。

“普通”とはかけ離れた、人外の集まる世界。

だが、それはつまり、“普通”のすぐ裏に在るということだ。

裏に在つて、表には無いけれど。

見方によってはこの世界そのものが、“普通”と常に表裏の存在で在るということになる。

そして最後に、普通の世界。

一般人の一般人による一般人の為の危なくない平和で規律の取れた世界。

さて、ここで一つ疑問だ。

ここで言う“普通”とは、一体何を指しているのだろうか。

平均？

平凡？

普通とは一人一人の価値観や世界観によって大きく異なると予想される。

どこまでが普通でどこからが異常なのか。

結局のところ、そんなことを思索している時点で十分“普通”に分類されるのだろうし、少なくともこの世界に在る全ての物や事は“普通”と断定される。

それがどんなに非道的で悪質的で異常であつたとしても、それでも全ては“普通”と分類される。

“普通”という語句を明確に表すのは困難を極めるし、的確にその意味や存在を理解することなど不可能だ。

だって、こんなおかしな世界でさえ、“普通”と分類されてしまうのだから。

こんな可笑しな世界でさえ、“普通”と認識されてしまうのだから。

ある意味この世界は間違っている。

狂っている。

だけど、その狂いさえも“普通”なのだ。

そう思いたくないから、誰かが誰かのために異常を欲するんだ。

普通を望む奴だって、世の中にはいるっていうのにな。

夜だ。

流石にこの時間になると暗いが、街中に居ればそんなことには気にしなくなるくらい電気と科学の力に圧倒される。

嘘だけど。

とにかく今は夜であったが、僕は街中を歩いているために、暗さはそこまで気にはならなかった。

少なくとも、普通に歩くぐらいのことには何の支障もない。

流石は都会。

うるさく光る電灯やらが鬱陶しく素晴らしいね。

ああ寒い。

そろそろ春に向かうべき頃だというのに、何だろっこの寒さは。

指先の感覚が乏しい。

まあ、いつものことながら手薄な装備品で寒波に挑んだわけだから仕方ないのだけど。

結果は目に見えて惨敗だった。

あー。

すれ違う人の暖かそうな防寒具が羨ましくて仕方がない。

じゃあ厚着しろよ、という意見は聞き入れがたい。

何故なら僕は驚くほど衣類を持ち合わせていないのだ。

寧ろこれだけの数を持っていること自体、奇跡と言っても過言ではない。

買い物が嫌いなのだ。

人混みを嫌う。

今所有している衣服は全て、僕以外の人間が選んだ代物だ。

いらぬ喪服とかある。

一体僕に誰の冥福を祈れと言っのらう。

そう思いもしたけれど、結局しまわれたままお目にかかっていない。

確か殺人鬼だったはずだよね、僕。

初期設定、しかも一番重要な部分を忘却しかけている人間臭い殺人鬼（仮）なのだった。

嘘だけど。

で、だ。

僕は夜道を歩いている。

斬り裂き魔の影響により、人の数は余り多くはない。

それでもまだ、溢れんばかりの人間が、この街に存在していることは変わりなく。

今更ながら考えてみれば、結構目立つ髪の色をしている僕も、この人間という流れの中に紛れ込んでいるのかもしれない。

それに加え、今は夜だ。

多少の違いはわからない。

まあ、奇抜なことは変わりないのだけど。

家賊の中にいれば、僕なんか良い感じに隠れるのに。

皆が皆、特徴と個性が強すぎるんだよ。

いいことだよな。

戯言だけど。

あー、違う違う。

そうそう。

僕は夜道を歩いていて。

だらだらと思考を続けているわけで。

ようするに。

「迷った」

と、いうことだ。

流石にここまでくると予想もできたと思うが、懲りずにまたやってしまった。

池袋に来てから結構経ったが、未だに駄目だ。

何故迷うのかわからない……

僕、何で迷うんだろう……

もう駄目かもしれない。

僕のこの迷子っぷりは軽く常識を逸している。

何しろ原因がわからないし、帝人くんや正臣くんと一緒に歩いたル

ートさえ、まともに行くことができないのだ。

最早特技と言っている。

特技、迷子。

あと気配を読むこと。

……全くキャラの読めないプロパティだ。

だがそう、諦めるのはまだ早い。

ここにはまだ明かりがある。

ということは、大通りからそんなには外れていないということだ。

何か特徴ある建造物を発見できれば、帰れる。はず。

まだ望みはある。

きつと帰れるよね。

うんうん。

だってほら、いつもならば明かりすらない路地裏にいるじゃないか。

マシだよマシ。

誤魔化し誤魔化し。

で、どうするか。

とりあえず迷子であることが発覚した以上、安易に歩き回るのは危険だ。

下手すればこの場にすら戻れなくなる。

だからと言って、このまま突っ立っている訳にもいかないのも現状だ。

うむ。

歩くしかない、ようだ。

自宅に通じるヒントさえあれば、きっと帰れる。

きっと帰れるはずだ。

よし。

「うんじゃ……………」

まあ、交番に行く、というのも一つの案なのだが。

僕は余り警察やらの機関に頼りたくない。

それ以前に、交番自体が見付からないしね。

はい駄目。

となると歩くしかない。

また帝人くんに頼る、というのも悪いし。

頑張らなければ。

「うん、頑張る」

誰にともなくそう言って、僕は少しだけ早く歩く

瞬間、だった。

“ ”

刹那と言ってもいい。

“ ”

“じじじじじじ”、と。

僕の中に雑念ノイズが入る。

周りの変わらない筈の景色が、反転反転反転。

何やらおかしな“気配”がする。

何やらおかしな、強い強い“気配”がする。

そう。

この時点で、この“気配”は殺し名や呪い名の類では無いことがわかる。

プロのプレイヤーと呼ばれる輩は、少なくともこんな街中で、あからさまに気配を発することはまずないからだ。

僅かな気配でも、僕は読み取れる。

僕だからこそ読み取れる。

“これ”は、明らかに素人のものだ。

いや、素人というよりは

「人外、かな」

つまり。

斬り裂き魔。

世を騒がす斬り裂き魔

セルティさんの仕事を手伝ったときに現れた、斬り裂き魔。

あの歪な、気味の悪い“気配”と同じものを、今僕は感じている。

あの時に感じた気配は、明らかに“人間”のものではなかった。

それに僕は、斬り裂き魔の“赤い目”を目視している。

昆虫のようなそれは鈍く光り。

余計に人外さを拍車させていた。

“同じ”だ。

あの時と同じ。

「うー……。けどなー……」

この人混みの中で襲われることはまずないだろう。

そんな馬鹿な真似をあちらもしないだろうし

かといって、このまま帰るわけもない。

このままでは、僕が襲われてしまうじゃあないか。

そうでなくとも、僕以外の誰かが襲われることは目に見えている。

ふむ。

どうするか。

正義の味方でも気取ってみるか？

それとも、いつものように逃げるか？

ただその内、斬り裂き魔は僕の“仕事”に支障をだす可能性もある。

もしかしたらもしかすると、斬り裂き魔についても調べる必要があるかもしれないし。

楽観的、ポジティブに考えれば、この状況はある意味でチャンスなのかもしれない。

邪魔なバグの処理、兼、仕事の延長ということ。

まあ、理屈をぐだぐだ並べたところで、最初から僕のやることは決まっている。

例えばそれが、不幸や害悪と憑き物なのであったとしても

あの人が僕のことを“息子”と呼んでくれる限り、僕が行動しないわけがない。

さてと。

「それじゃあ、開演準備とってみようか」

戯言だけど

は、今回はお休み、ということだ。

「ああ、思い出した」

確かこの辺りは、歪無さんと仲良くストーカーごっこを繰り広げていた時に使用した場所だ。ステージ

勿論彼はストーカー役。

ルパンを追う銭形警部をも越える、脅威の足の早さだったよ。

歪無くん、ふぉーえばー。

とまあ、戯言はこれくらいにして。

路地裏である。

一気に暗くなり、目がまだ慣れていない。

ただ僕は多少、第六感的なものが働いていたりするので問題はない。

あながち嘘でもなかった。

これを第六感と呼ぶのは、抵抗があるけれど。

路地裏。

つまり、明かりと共に人通りも極端に減るわけであり。

僕が感じる限り、僕とストーカーさん以外には誰もいないようだった。

さてさて。

客観的に見れば、これは斬り裂き魔にとって絶好のシチュエーションだ。

その気になればいつでも僕を刺せるだろう。

そのくらいここには人間が存在していないわけで、僕も少しばかり人だかりが恋しくなってきたところだ。

勿論嘘だけど。

まあ、あの得体のしれない“気配”を所有している斬り裂き魔を、人間とは思いたくない。

多分人間ではない。

“あれ”は俗に“怪異”と呼ばれる存在なのではないかと、勝手に

推測する。

“怪異” 怪奇現象やらなんやら。

理屈の通らないような現実離れた事件や事故は、“怪異”が起
したものだど、教わった。

“怪異”は、“そこにいる”と認識すれば存在する。

“怪異”という存在を肯定すれば、現れる。

そこにいるようでない。

そこにあるようでない。

あやふやで曖昧な、存在。

ある時は神様であったり、ある時は悪魔であったり、またある時は
妖怪であったりする。

人外と呼べる存在。

それに近いものを、僕は斬り裂き魔に感じた。

あやふやな感じ。

気持ちが悪い。

僕は“怪異”を好まないのだ。

好むわけがない。

実際、信じているか否かと言われれば半信半疑だ。

だけれど、肯定せねばならないような事態を目にしたことがあるので、否定するわけにもいかない。

僕は“怪異”が嫌いだ。

だって“怪異”というものは、世界そのものなのだから。

そういう風に、教わってしまったのだから。

ふむ。話を戻して。

逆に主観的に見れば、僕は絶対の危険に晒されていることになる。

いつ刺されてもおかしくない。

刺されない自信はあるけど、あくまで一般論だ。

端から見れば、僕なんてただの間違った高校デビューをしてしまった可哀想な高校生、ぐらいにしか見えないだろうし。

嘘だけ。

嘘でもないのか？

「何はともあれ」

刺されるにしても刺されないにしても。

今現在、僕は斬り裂き魔と一対一マンツーマンで対峙できるといふことだ。

邪魔は入らない。

最高のシチュエーションじゃあないか。

僕の“舞台”は誰にも見てほしくはない。

よし。

場所ステージも役者キャストも揃ったわけだし。

あと足りないのは、脚本ストーリーだけ。

それは僕が、創る。

そんじゃ。

「いつちよう零崎、いってみますか」

立ち止まる。

振り返る。

人影。

確認。

目先と、僕の腕の位置。

足音が響く。

明らかに近づいている。

一步一步、踏み締めるアスファルトの擦れる音。

拓けた空き地。

他に人影はない。

十分な距離感。

十全だ。

嘘だけど。

こんばんは初めまして。

斬り裂き魔さん。

刃物を握っていた。

赤い雫は見えない。

「……………ん？」

違和感。

歩みを止めない斬り裂き魔に、何か違和感を感じた。

まさか。

まさか。

まさかまさか、か？

「 違う ” 「

“ 違った ” 。

僕の方へと進んでくる斬り裂き魔。

“ 男 ” だった。

男。

僕よりもかなり長身な、見るからに成人していると思われる男。

おかしい。

前回、初めて邂逅したときは、斬り裂き魔は“ 女だった ” 。

複数犯？

そういうことも考えられる。

そもそも、あんなにも大量の被害を1人で出せるものなのか？

そういったことを考慮すれば、複数犯という可能性は捨てられないな。

「 困った」

挟まれていたりしたら厄介だ。

斬り裂き魔が複数犯であるという推測が有力である以上、既に僕は回り込まれているのかもしれない。

だとしたら手の打ちようもないな！。

嘘だけど。

ゆっくりゆったりと思考を楽しんでいたら、斬り裂き魔さんはかなり距離を詰めてきていた。

こうなるとやっぱり、僕を刺すというのは必須事項なのかな？

全く、いい迷惑だ。

刺される方の気持ちにもなってみなよ。

ああ、それが無理なのだと知っているから此処にいるんだっけ、僕。

男が包丁を振りかぶる。

距離を取ろうとしたが、相手がそれを許さなかった。

「
」

殆ど無音の状況で突きだされる包丁。

一撃目は、辛うじて避けた。

風を斬る刃の摩擦音だけが、嫌なくらい耳につく。

斬り裂き魔はにこりとませず、表情を窺えないくらいに体を折り曲げ、二撃目をいつでも繰り出すことのできる位置に刃を添えている。

僕は勿論、今のところは手ぶらで挑んでいる。

「
x x、
」

ん、何か言った？

と問いただす前に、斬り裂き魔は二撃目を繰り出そうとしていた。

いや、遅いな。

タイムロスが大きすぎる。

僕が悠長に思考を続けている、続けられているという時点で、既にあちらの力量など知れていた。

重いよ、その動き。

軽く鼻で嘲笑した。

嘘だけど。

僕は走る。

両足の瞬発力に依存し、思い切りダッシュする。

靴が余り適していなかったな。

砂ぼこりが若干宙を舞う。

僕は背から相棒（嘘だ）、ディペンダンスシンフロン依存症状を取りだし、その武骨な柄を左手で何とか持ち上げる。

そのままの勢いで斬り裂き魔の死角　不意をつくためにしゃがみ、左手兼左腕を突きだして斬り裂き魔の首筋に向かわせる。

長さは足りないが問題ない。

“ががががががが”と、骨を砕いて潰したかのような不快音と共に、薄いギロチンのような刃が現れる。

刃は当然のように、斬り裂き魔の首筋に。

空気が震えたのが、依存症状の刃から伝わった。

今回は獲物を使うのを、躊躇しない。

沈黙。

僕は喋らないし、斬り裂き魔は汗一つ流さない。

大した犯罪者だね。

僕が少し依存症状を動かせば、首が飛ぶというのに。

思わず笑いそうになる。

なんだこいつ。

気味が悪い。

「……………××」

……………何だ？

聞き取れない。

斬り裂き魔はそこからただ口だけを達者に動かして、音声を再生しない。

首筋にカッター擬きのような凶器を突き付けられて、一体何を呟いているのだろう。

なんて。

僕はまた

依存し損ねた。

そろそろ腕が疲れたから下ろしたいんだけど。

全く、年をとるのは恐ろしい限りだ。

嘘だけど。

そうこうしている内に一瞬の隙を見て、包丁を残したまま男は回れ右、僕に堂々と背を向けて走り去ってしまった。

「おっと………」

頭を軽く押さえて、よろめきながら立ち上がる。

うーん、頭が痛い。

何だったのだろうか、今は。

怪異、としか考えようがない現象だった。

斬られた時に流れた衝撃。

あの感覚は、覚えがある。

怪異の感覚。

だからといって、あの斬り裂き魔の正体はつきりするわけもなかった。

あくまで推論。

まあ物が手に入っただけ、今回の迷子には意味があったといえるのかな。

足下に転がる包丁。

素手で拾うことに躊躇いを覚えたので、爪先で持ち手の先の部分を蹴って回転させる。

仕方がないので、ジャケットのポケットにくるくる回転しながら落ちてくる包丁を収納。

手には触れずに持ち帰りたい。

まあ、布が割けることはないだろうし。

お巡りさんとかに見付かったら面倒なことになりそうだ。

依存症状の刃を仕舞う。

粉碎音が耳を穿つが、流石に慣れだよ慣れ。

柄だけになったカッター擬きを腕を背後に回し、収納する。

僕の背中には縮小版四次元ポケットが仕込んであるのだよ。

嘘だけ。

「……斬り裂き魔ねえ」

少しでも斬り裂き魔が“怪異”だという可能性があるならば、一度

“あいつ”に連絡をとる必要があるかもしれない。

“あいつ”。

「でもなあ……」

僕からは余り迷惑をかけたくない。

何だかんだで僕は“あいつ”のような奴には弱いし、あちらの生活を崩したくはないのだ。

ないのだろう、多分。

“怪異”という不得意分野、手など出したくないんだけど。

どうしようもならないのも、事実なのかもしれないだし。

どうしたもんかね。

「まあ、本命はダラーズなんだけど」

そうだったはずだ。

ダラーズ。

ダラーズダラーズ、だらーず。

本音を言えば、調べようがない。

何しろ僕は機械系に弱いのだ。

無線LANの意味を最近知ったような高校一年生だ。

だとすれば。

“直接、ダラーズに接触する他ない”。

まだダラーズのシステムを把握したわけではないのに、実質的な行動には移せないが、考えておいた方がいい策だろう。

どうしろっていうんだ、というのもぶっちゃけた話本音だ。

まあ、何にせよ。

「 帰れるかなあ 」

ここから帰ることの方が、今は重要事項なわけで。

（再会？

斬り裂き魔

都市伝説）

（被害者 零崎冬識

加害者 斬り裂き魔）

〈街中 生態と確認〉（後書き）

えー、ぶっちゃけた話、今回はフリです！
次話からやっと本格的に本編合流です！

というわけで次回予告

「友達のため」「あの友達のため」「その友達のため」
「・・・まあ、嘘だけど」

本作品に関して

誤字脱字・感想・質問等お待ちしております^^

〈街中 焦燥無害（上昇被害）〉（前書き）

予告通り本編突入です。

地震、皆様大丈夫だったでしょうか？
ご無事をお祈りしております。

では、今回もお付き合いください。

〈街中 焦燥無害（上昇被害）〉

「街がざわついでる」

「え？ああ、うん」

正臣くんが急にそんなことを言い出したので、普通に驚いた。

僕の驚きの元凶である茶髪くんは、くるりと体ごと振り向いて、そう言った。

深刻そうな表情で。

「……微妙な返事だな。だってよ、そう思わないか？何だか最近この街も騒がしいんじゃないの、って。思わない？そりゃあいけねーぜマイフレンド。ここは話の核を持ち出した俺に賛同すべきだッッ」

自分で自分に頷きながら器用に後ろ向きで歩く正臣くん。

よいこは真似しないように。

嘘でもない。

ていうかマイフレンドという言葉にときめいたりしたりしなかった

り。

ふむふむ、ざわついているとな。

まあ、確かに。

近頃面倒な事件やら何やらが増加しているために、何かと物騒な街にはなっているしな。

あの手の事件に、メディアやマスコミが食いつかないわけがないし。表沙汰になっている危ない事件だけでも、もう結構な数になったのではないだろうか。

危ない事件か。

全く、嫌な世の中になったものである。

無駄に老成してみる。

嘘だけど。

色々面倒なことになっているのは間違っていないけどね。

相も変わらず、“普通の世界”は面倒臭い。

そんなものか、と事後処理した気分になり、強制的に思考終了。

「物騒な事件が相次いでるってこと？」

「そうなんだが、どうもそれだけじゃないらしいんだわ」

ちゅちゅ、と発音しつつ、僕の隣に並んで歩き始める正臣くん。

激しい身振り手振りは変わらない。

「どうも、最近ダライズの動きがア・ヤ・シ・インだよな。前々から変っていつか変わったチームだけだよお」

「溜めの意味はあったの？」

ボケを軽く流して、思考再会。

ダライズの動きが怪しい？

へー。

うーん。

僕、確かこの間ダライズ潜入成功おめでとっパーチーやったんじゃないかってたっけ。

後半嘘だけど。

ああ、そういうえば最近携帯電話を使用していなかったな。

いまいち使い方を理解していないので、ダライズに入ったのは良いけれど有効活用出来ていないのだ。

意味がない、とか言わないでほしい。

寧ろ僕に機械的要求をすること自体無茶だ。

間違っている。

「ダラーズが不穏な動きを見せてる、つってもっぱらの噂だぜ。大体あのチーム、普段からどんな状態なのかもよくわからないしな」
成る程。

そういうことか。

ダラーズも、事件発生に合わせて動きを見せている、と。

「なんか、難しいね。この街」
軽く本音。

「まあなー」

微笑する正臣くん。

そつと携帯を起動させ、ダラーズのトップへと通信を開始する。

表示されるトップページ。

僕はロゲインをクリック。

ハンドルネームが表示され、まず目についたのは奇妙な書き込みだった。

【斬り裂き魔に、ダラーズのメンバーが襲われた。情報求む、情報求む、情報求む　　】

情報求む、という簡潔な言葉。

そこからは、焦りと不自然さしか感じられなかった。

斬り裂き魔にダラーズのメンバーが、ねえ。

どうしてそんなことがわかる？

ダラーズは集会のような、チームとしての活動は行わないようなことを聞いた。

どこからメンバーの情報を入手したというのだろう。

……まあ、そんなことが僕にわかるはずもない。

もしかしたらメンバーになった瞬間、データのようなものを“管理者”に送られているのかもしれないし。

文面を見て、自信の無さを感じてほしいな。

にしても、この書き込みは誰のものだ？

どうやらメンバー全員に、一斉送信されたようだけど。

これが、“リーダー”？

いや、厳密に言えば“創始者”だったか？

リーダー、創始者。

斬り裂き魔。

襲われた。

ダラーズ。

うむ。

どうやらこの一連の“事件”、そうとう歪んでいるようだ。

斬り裂き魔と、カラーギャング。

複雑に交じり合っていて、互いがぶつかり合っている。

そこに厄介な“個人”の陰謀やら野望やらが混入しているために、尚更面倒なことになっているようだ。

特にあの情報屋とか。

どこの都市伝説とか。

未だ不明であるダラーズのメンバーとか。

カラーギャングとか。

「んー……………」

わからないな。

やはりこの世界はわからない。

ぼちっと決定ボタンを押す。

移動する画面表示。

ダラーズでは、それぞれが各コミュニティを作り、交流を深めている。

そういうシステムになっているのだ。

僕はというと、一部のメンバーとよく通信接続するくらいで、目立ったことはしていない。

中でも良くしてくれるのは、“MONTA”というハンドルネームの人だった。

僕にシステムやら何やらを教えてくれたのは、この人である。

顔は知らないが、面倒見のいい人柄であることは間違いなかった。

文字を打ち込む。

打ち込みながら少々会話。

「正臣くん、随分と裏事情に詳しいんだね。何か情報ルートでも持ってるわけ？」

片手で文字を打ちながら、正臣くんは何気なく聞いてみた。

そういえば帝人くんも、その手の事情には詳しくかったな。

「そんなでもないさ。まあ、何て言うの？俺の場合、居るだけで情報から集まってくるというか？そういう？」

自信満々に言われた。

いや、反応に困るから。

そういう？とか言われても。

「つまりは正臣くんは情報通だということだね」

「スルーかよ！そこで落ち着いちゃダメだろ！」

「つまりは正臣くんは情報キラーだということだね」

「キラーで！既にニュアンスが違うだろ！もうちょいいい表現はなかったのか？」

「つまりは正臣くんは情報コンプレックスだということだね」

「略して情コンか！？」

とか素晴らしい攻防（いや、正臣くんがね）を繰り返している内に、

やっと打ち終わったので再び決定ボタンをぽちっとな。

携帯を折り畳む。

谷折り。

「素直に凄いと思うよ。尊敬さえする」

「そんなに凄いことじゃねえよ。世の中には便利な機能が大量にあるんだぜ？俺のはただの知ったかだよ。別に知ってて特もないしな。女の子が寄ってくるわけでもない」

当たり前だ。

突っ込んでみる。

歩調を上げる正臣くん。

僕の一步前を歩いて、再び振り向く。

後ろ歩き再開。

「だからこそ、俺は知ったかぶりながらお前に情報を横領できるとわけど！」

「開き直ってるんだね」

「綺麗にまとめられた！」

あー面白い。

飽きないな、この会話。

帝人くんがいれば最高。

「ただだよ、確かに物騒だよな」

改めて正臣くんが言う。

今度は最初の位置、つまり僕の隣に戻ってきて並んでの会話となる。

「もうすぐ五十件いくらしいぜ、例の斬り裂き魔事件」

「……結構な数だね、それは」

染々とそう思う。

ここまでくると、《暴力》の関係性を見出だしたくなる、ウソダケド。

殺し名が、大それた事件を起こすはずがない。

しかも通り魔と言っても、死人は出ていない。

ということとは、《暴力》の仕業である可能性は非常に低くなるわけだ。

犯人が気まぐれ屋さんだったりしたら話は別なんだけど。

これが子荻ちゃんの仕業だったりしたら面白いんだけどな！。

あの子はこんなシヨボいことは考えないか。

じゃあ、やはり“怪異”である線が有力となるのか。

一番嫌なんだけどな。

どう考えてもここに行き着くのか……。

ダラースを調べるうえで、障害になるし。

二度接触してしまったし。

後悔既に遅し、か。

「街出歩くのが怖いー、みたいな感じで女子が少ないんだよ!」

「へー」

生返事した。

止めて、涙目にならないで。

「斬り裂き魔に、ダラースかあ……」

これは眩き。

眩いたところで何も変わらない。

それは重々承知しているけれど、正直斬り裂き魔については、あま

り関わりたなくない。

面倒だから。

だけど、そんな思いは打ち消されることとなった。

正臣くんのある発言で。

「……俺は、許せない」

正臣くんは突然、誰にもなく言った。

「……？」

「許せねえよ、斬り裂き魔」

正臣くんって、そんなに正義感溢れるキャラだったっけ？

動揺。

「……なーんてな。別にそこまで怒ってるわけじゃない。けどよ、自分自身の世界を壊される危険性ってのは、好きになれねーじゃん？」

少しだけ笑って、でも無理矢理笑顔を作って、正臣くんはそう言うて。

僕は、単純に思った。

その通りだ、と。

だけど。

「俺は今の生活、好きだからさ。斬り裂き魔なんてもん、あんまり関係なんてないんだけどよ　　だけど、今が大事だから」

「正臣くんは、変わりたくないんだね。変わらせたくないんだね」

呟いた。

正臣くんは少しだけ驚いて、僕を見る。

「自分の世界は大事だよ。大事も大事、当たり前だ。みんな自分が大事に決まってる。だけど正臣くんは、自分の大事な人の世界も守りたいんだろう？いや、自分以上に大事な人を守りたいんだろう？間違ってるよ。間違ってるんじゃない。だけど正臣くん」

僕は続ける。

こんな話は無意味だと、わかっているけど。

「この世界は、理不尽だよ」

苦笑した。

自分に言い聞かせるように。

正臣くんは、自然に笑っていた。

「意味深、だな。お前今、過去に何かあった敵キャラみたいなこと言ってるぜ」

「さっきの正臣さんの台詞も、過去が気になる伏線のようにだったよ」

二人で笑った。

なんとなく。

嘘じゃない。

「案外似てるのかもな、俺たち」

正臣さんがどこの操想術師のようなことを言い出すので、何だか可笑しかった。

「そうかもね」

……嘘だけど。

正臣くんも、笑っていた。

まあ、ハートフルな話で終わりにしないのが零崎冬識くんだよ。

それが売りだからね。

嘘だけど。

現在地、よくわからないけど、とりあえず街中。

迷子になっているわけではないので、「ご安心を。」

誰に安心しろというのか。

自分でも不明だった。

早い時間ではない。

日はとつくに沈んでおり、悪い子はいぬのお巡りさんに補導される時間。

要するに日付を跨げる時間帯だ。

僕がこんな時間に夜遊びをしている理由は他でもない。

いや嘘だけど。

理由は簡単。

僕の友人の生活を守るべく、斬り裂き魔を探索しているのだ。

僕にしては珍しく正統な理由。

寧ろ理由が在ること自体珍しい。

僕の場合は単純に迷子になっているパターンが多いからね。

嘘ではないのが残念だ。

嘘だけど。

うん、最近妙に深夜街中にいるので、軽く寝不足である。

深夜徘徊。

お目当ての斬り裂き魔と遭遇できたとしても、まともに立っていられるか危うい。

僕は人より睡眠の重要性が高いから。

理由は後程。

嘘だけど。

まあ、そんな危うい足取りで、街をパトロールしているわけである。

これで今日から顔面食料の孤独なヒーローとも友達だ。

明らかに嘘だけど。

未だ、はっきりとは気配も感じられない。

もしかしたらまた、違う気配を発しているのかもしれないし。

そうだとしたら厄介だ。

ただでさえ人の多いこの街で、知りもしない相手の気配を探るのは難しい。

101匹わんちゃんの中から目当ての1匹を見つけ出すようなものだ。

比喻の方がわかりづらいかもしれないな。

まあ、割愛割愛。

完全に割愛の使い方を間違っている気がするな。

いつか。

気配探知に集中していると、感じなれた小さな気配を、感じ取った。

この気配は

「園原さん？」

僕らの委員長（眼鏡っ子）、園原杏里の気配だ。

こんな時間に、“あの”園原さんが出歩いている？

園原さんが？

何かあったのだろうか。

少なくとも、気配を読み間違えていることはないだろう。

よく感じている気配だ。

間違えるはずがない。

そこで。

僕は園原さんの気配を追う。

あたかも偶然であるかのように気さくに園原さんに話しかけ、そこから園原さん宅に送る……という寸法だ。

園原さんをこんな夜中に一人で出歩かせるわけにはいかないよね。

何かあったら後で僕が二人に怒られる。

それは嫌だし、そんなことにはさせない。

大事な大事な友人を、守らなくてはいけませんな。

そういう約束だ。

そう言うて言い訳にしているのは見え見えだけど。

単純なほつがモテるって。

理由が不純だ。

嘘だけど。

気配を感じ取りつつ、足音をさせないように小走りで進む。

風が肌に突き刺さるが、気にしない。

暗闇の中を、とりあえず園原さんに向かって走る。

“ ”

もう少し、というところだった。

あと少しで園原さんの姿が見える、という辺り。

最悪だ。

まず思い浮かんだのは、“嫌な”言葉。

“嫌いな”言語。

それこそ絶対的な最悪とまではいかないけれど、良い状況ではないことは明らかだった。

この雑音。^{ノイズ}

何でこう、タイミングが悪いのかな。

僕のせいか。

日頃の行いかな？

いや、ふざけてる場合じゃあない。

走れ。

走れ走れ。

自慢じゃないが、僕は普通の人より少しばかり足がはやい。

詳しく言えば、強制的にスピードを上げられた。

師匠その1に。

若き日の良い思い出すな。

嘘だけど。

走る。

ああ駄目だ、街灯少ない。

灯りが無いのは嫌だよな。

じじじ。

雑音ノイズが強くなる。

それは、気配をより強く感じ取っていることと同様だ。

不味いな。

相当不味い。

まさかこんなタイミングで現れるなんて

「 園原さんっ」

叫ぶ。

「 えっ」

僕が目にしたのは。

“包丁”を手にし、彼女に向けて振りかぶっている男と。

振り向き、驚愕の表情を浮かべている、園原杏里だった。

走って。

とにかく走って。

僕ががむしゃらに走って、園原さんのもとへと急いだ。

走る。

依存症状を取り出している暇はない。
ディペンダンスシンдром

何かを叫ぶ園原さんを黙視し、二人の間に強制介入。

しようとした、直後。

「深隈くん、後ろ」

園原さんの声。

後ろ？

いや、“声はかき消されている”。

現状を把握し、て

激しいクラクションの中心に、自分がいることに気が付いた。

クラクション。

耳を貫くような。

僕は咄嗟に園原さんを“抱き抱え”、跳躍した。

要するにお姫様抱っこ。

腕と足の筋肉に依存して、どうにかクラクションを発生させている物体の射程範囲から抜け出す。

僕たちの痕跡を残したその場所を、

「ぐあっ」

包丁を持った男と共に、“一台のバンが撥ね飛ばした”。

男はそのまま押し出され、壁に激突する。

破壊音と、追突音。

男は崩れ落ち、壁に背中から寄りかかるように倒れ込んだ。

男の復活と激突してきた車への警戒の為、後ろに下がる。

男は動かないが、バンの扉が開かれ、中から人影が降りてきた。

「おい、そこの二人、大丈夫か？」

まず降りてきたのは帽子を被った男性で、大人感溢れる低い声でそう言われた。

二人とは当然、僕と園原さんのことだろう。

他に誰がいる。

少し返事に迷い、返そうとした。

ら、知った顔が2つ、バンの後部座席から降りてきた。

「おやおやおや！そこにいるのはもしかしてもしかすると冬護くん
つすか？」

「うわー、すごっ。見てゆまっち。すごい、この子すごすぎるよっ
！現実^{リアル}でお姫様抱っこだなんて半端じゃない！青春ポイントがもう
ヤバイ！君は一体どこのハーレム体質主人公くんなのー！？」

お分かりの通り、降りてきたのは遊馬崎さんと狩沢さんだ。

無駄にハイテンションだった。

「み、深隈くん……もう、大丈夫ですから………」

「ん？あ、ごめん」

お姫様抱っこ状態だったのをすっかり忘れていた。

酷く赤面する園原さん。

いや、何だか悪いことをしてしまった。

こっちまで照れてきた。

「むむむ、でも微妙なところす。今の状態から見て、ロザリオ・T
O L o v e r パターンと、禁書・ゾンビパターンがあるんすよ！」

「少年マンガの健全な男子高校生パターンとライトノベルで幻想殺
しパターンがあるってわけだねゆまっち！」

「そつつす！丹羽くんもびっくりな青春ポイント大量発生イベントの幕開けっすよ！」

白熱、というか爆発的にデッドヒートしていく二人の会話を引き裂くように、先ほどの帽子を被った男が呆れたように言った。

「何だ、お前らの知り合いか？」

「そつつすよ。こちら紀田くんのお友達、深限冬護くんっす」

両手で僕をアピールしてくれた。

いやいや、ありがたい。

態々紹介してくれるなんて、申し訳ないくらいだ。

「そっちの子は知らないけどね。冬護くんの友達じゃない？」

狩沢さんが、顎に手を当てて言う。

というか、そうだったのか。

僕はてつきり、紀田くんの知り合いである二人とは、園原さんも面識があるものだと思っていたのだけれど。

どうやら違ったらしい。

お二方と園原さんは初対面のようだ。

「園原、杏里です……」

緊張しているのか、闇に倒れる男に未だ恐怖しているのかわからな
いけれど、少し間を開けて園原さんはそう言った。

すると帽子を被った男は、続けて僕らに告げる。

「俺は門田だ。門田京平。お前ら、紀田の知り合いだったのか。な
ら、尚更こんな時間に彷徨くもんじゃないぜ。こいつみたいな、頭
のおかしい野郎だっているんだからよ」

倒れている男を横目で見ながらそう言う門田さん。

門田 門田京平。

正臣くんが紹介する、と言っていた名前と一致している。

遊馬崎さんと狩沢さんと共にいる、ということは、正臣くんの言う

“門田さん”と同一人物であることは確実だった。

成る程、彼が門田さんか。

車で人を轢いている時点で、余り善良ではなさそうだけれど、僕た
ちを助けてくれたのは確かだ。

いい人ってことだね。

自己中心的思考により結論。

「深限冬護です。門田さん、どうもありがとうございました」

とりあえず名乗る。

そしてお礼。

僕は善良ではないので、深夜徘徊をしても罪悪感には囚われな
いのだよ。

微妙に嘘だけど。

そんな中、僕はぼんやりと、違うことを考えていた。

勿論、正臣くんの言っていた“いい人”である門田さんに、こんな
場所で行くわしたことも充分驚きの対象であるのだけれど。

だけど、それ以上に気掛かりなことがある。

僕ら、いや園原さんか？

とにかく僕らを襲った斬り裂き魔（仮）。

あいつ

あんな気味の悪い気配を纏った奴が、この程度で倒れるものなのか？

確かに、先ほどの動きは明らかに素人だった。

少なくとも、殺すための動作にしては遅すぎるし、余りにも鈍い。

殺すために特化しているわけではなかった。

あの斬り付け方は、正直厄介だ。

素人であるがゆえに、完璧に殺せないために、僕は動きを制限されてしまう。

僕はどうしたって殺すためにしか動けないのだから、下手をすれば園原さんの目の前で“あいつを殺してしまっ”。

それは駄目だろう。

それは、駄目だ。

約束したしね。

普通の人を殺してはいけないと。

僕は彼女に殺人を奪われた。

だから弱い、へどがでるくらいに。

僕から殺人鬼を奪ったら、何もなくなってしまうのに。

僕は殺せないから、素人相手には太刀打ちできない。

例えば歪無くんのように、殺しのプロ、プレイヤーを相手取るくらいなら、殺す気で挑むくらいで充分だ。

だけど殺してはいけない相手に、手加減ができない。

だから、あいつが不意討ちを狙ってきたりしたら、僕はどうしよう

もできない。

ギリギリ身を盾にして、園原さんを助けられるくらいか。

危うい状況であることに変わりはない。

門田さんや遊馬崎さんがいるとはいっても、斬り裂き魔相手にどうしろというのか。

僕にしてみれば園原さんを含め、他人がいる時点で殺人など出来るわけがないのだ。

今の僕は深限冬護であり、零崎冬識ではないのだから。

殺人鬼ではなく、出来損ないの人間擬きなのだから

「!?!」

倒れていた男がいつの間にか立ち上がっていた。

手には包丁。

容易に人を傷付ける、凶器。

「!おいつ!」

門田さんが叫ぶ。

男の絶叫と、絶妙なハーモニーを産み出したりしていなかった。

嘘じゃない。

男は、こちらに刃を向け、走り出していた。

狙いは　　僕じゃない。

つまり。

「園原さんか………！」

どうしよう。

どうすればいい。

思考を進める間にも、男は距離を縮めていく。

蒼白になる園原さん。

刹那刹那刹那の出来事。

こうなったら、手掴みでもするしか

ブルルウウウウウウウウウン！！

目の前を、漆黒が塗り潰す。

聞こえたのは馬の嘶き。

そして見えたものは、黒い人影。

斬り裂き魔の上にバイクで乗し掛かる。

但し、影は 2つあった。

「首なしライダー……………と……………静雄!？」

(出会い

門田京平

一般人)

(被害者

園原杏里

加害者

斬り裂き魔?)

〈街中 焦燥無害（上昇被害）〉（後書き）

では次回予告

「最強つてどのくらい強いと思う?」

「簡単だよ。常識が通じない、想像を絶するような明らかな“強さ”。それこそふざけてるんじゃないかっていう」

「まるで知っているかのような口振りだね」

「ああ。知ってるからね。“人類最強”と呼ばれるあの人と、“池袋最強”と呼ばれるあの人を、さ」

本作品に関して

誤字脱字・感想等お待ちしております^^

〈対峙 告白と戦い方〉（前書き）

とある最強の登場です。

では今回もよろしくお願いします。

〈対峙 告白と戦い方〉

「首なしライダー……………と、……………静雄!？」

嘶きと共に斬り裂き魔に乘し掛かる、漆黒のバイク。

それはまさに影のように、底の見えない銃口の黒さ。

漆黒の塊を操るのは、アーティスティックなヘルメットを一際目立たせる妖艶なシルエット。

頭部以外はバイクと同じく漆黒に塗り潰されていて、だからこそヘルメットが余計に異質に見えた。

そう、勢いよく視界に現れた人影はやはり、池袋の“都市伝説”であり“デュラハン”であるセルティ・ストウルルソンだった。

セルティさんは持ち前のバイクの運転テクニックを持ってして、先ほど車で撥ねられたばかりの斬り裂き魔を前輪に体重を傾けて押し倒したのである。

夜の闇に溶け込んでしまいそんな異様な程の黒さが、余計に不気味さを拍車させる。

しかも今回は、“違った”。

いつもとは違う。

その差異を真つ先に口にしたのは、門田さんだった。

「静雄……………？」

門田さんが口にした、“静雄”という言葉。

静雄、静雄、しーずーお。

よくわからない。

しかし改めて見てみれば、セルティさんの後ろ　つまり後部座席に、もう一つ人影があるのがわかった。

誰だ？

あれが、“静雄”？

呑気にそんなことを考えていた。

だが、僕の目の前で起きているアクションは、停止することがなかった。

ブルルルウウン！！

嘶きが強まる。

タイヤの摩擦音が響く。

すると急に、後部座席の人影が飛び降りた。

軽く着地、

し、
“ た

“ ああああああああ？ ”

雑念ノイズよりも酷い、いや荒々しい“何か”が、僕の感覚器官を貫く。

“ なんだ、これは。 ”

“ 誰だこいつは。 ”

震え、る。

体の軸がぶれている。

“ これは危険だと、僕は理解している！ ”

気味が悪いのではない。

ただ 怖い。

“ 怖い。 ”

圧倒的。

圧倒的な、恐怖。

酷く恐ろしかった。

こいつが発する何かが、怖い。

理由も何もそんなものは関係なくただただ怖い怖い怖い。

必死に震えを抑えた。

これ以上、こいつの“気配”を感じ取らないようにしなければ。

恐怖。

恐怖だ。

今感じたのは紛れもない

恐怖。

久しい感情だ。

暫く振りの恐怖という感覚。

こんなにも恐ろしい、おぞましいものであるということ、忘れていた。

しかし本当に、誰なんだ。

こんな“気配”を発する人間を、僕は今まで三人程しか見たことが

ない。

異質だ。

異常なのだ。

だから、恐怖した。

正体不明の全くわからないものに、恐怖した。

その“気配”を発した人物の姿が、距離が縮まったことによりはつきりと目視できた。

暗いけれど、大丈夫。

暗いのは大歓迎。

嘘だよ。

その人影を一言で表現するとすれば

バーテンダー。

バーテン服を着た、シルエットからして背の高い青年のようだ。

被っていたヘルメットを外す。

一連の動作には、彼の“感情”、どうやら怒りのようなものが含まれているようだった。

いちいち手つきが乱雑なのが、見てとれる。

感情が出やすいタイプであるというのは、直ぐにわかった。

秘技、観察眼。

嘘だけだ。

そのバーテン服で金髪の青年は、斬り裂き魔から離れるセルティさんと並んだ。

不思議な光景である。

バーテンダーと首なしライダーだ。

奇妙とも言えた。

そんな奇妙な光景を築き上げている僕の友人、首なしライダーことセルティさんは咄嗟に僕と園原さんの方へと駆け寄ってきた。

どこからかPDAを取り出し、何か文字を打ち込んで見せる。

『二人共、下がって』

何も語らないその無機質な文字を読解し、反射的に園原さんの手を取って後ろに下がった。

「えっ、え」

園原さんが驚きと戸惑いの混じりあつた声を出す。

僕は答える。

「大丈夫。僕も何が起きてるのかいまいち理解してないよ」

苦笑いした。

苦笑するほかなかったから。

いやいや全く、何が大丈夫なんだろうね。

園原さんの手を放さないまま、僕はセルティさんに言った。

「セルティさん………どうしてこんなところに？それに、あの人は一体誰なんです？」

セルティさんは、素早く文字を打ち込んで、僕に見せる。

『詳しい説明は後でするよ。とにかく今はそこから動かないで』

セルティさんは何も口にはしないけれど、僕にはその意思がはっきりと伝わった。

あくまで推測、だけど。

実際ここからは動かない方が良さだろう。

もし僕が今フリーだったら嬉々として（嘘だ）セルティさんの手助けでもしていたのだろうが。

何といつてもセルティさんは友人なのだ。

友人は助けるべき存在、だろう？

けれど今は違う。

今だけは違う。

僕の傍に園原さんがいるのだから　動くわけにはいかない。

園原さんを、危険に晒すわけにはいかない。

この状況がどれ程奇妙で危険なものなのか、彼女が理解しているかどうかは怪しいところだけれど。

とにかく今は園原さんの傍からは離れない方が断然いいだろう。

守りに徹するわけだ。

悪くない。

はず。

「みか、ぎりくん　」

確かに僕の名前は深限だけど。

今の空気の中茶化すのもアレなので、真面目に答えました嘘です。

「ん？」

「その……、あの人は一体誰ですか？」

あの人。

その代名詞（だよな？）は一体誰を指しているのだろう。

その台詞だけでは真意は読み取れなかったが、とりあえず説明できるセルティさんについて話してみることにした。

「あの人、あの“黒バイク”のひとは僕のトモダチで

」

園原さんに言いかけた、その絶妙のタイミングで。

「静雄………？」

今度は斬り裂き魔がそう言った。

立ち上がって、軸のない玩具のように揺れる斬り裂き魔は、笑っていた。

まさに身の毛もよだつような、そんな笑みを浮かべて。

下劣に笑っていた。

「うふふ……あなたがそうなのね……。静雄、静雄、平和島静雄」

笑いながら笑いながら笑いながら、斬り裂き魔は呪文のように繰り返す。

気味が悪かった。

斬り裂き魔は止まらない。

「平和島静雄平和島静雄平和島静雄、愛しているわ愛してる愛してる。とつてもとつてもとつてもとつてもとつても会いたかったの……ウフ」

「わかった。殺す」

「愛しているわ、みんな平等よ。だからあなたのこと愛してあげる！嬉しいわ……嬉しい嬉しい！とうとう会えたのね、“私の愛する人”」

「嬉しいか、じゃあ殺す」

会話が恐ろしいくらい成り立っていない。

最早会話とはいえなかった。

会話というより、当て字にすれば壊話。

かっこわるい。

門田さんが後ろで、

「え……………？オカマ？」

と呟いたのが聞こえた。

狩沢さんがご丁寧にも、

「女装してるわけじゃないからオカマとかニューハーフとは違うよ、ドタチン」

と冷静に説明を返しているのも聞こえた。

今すぐくどうでもいいとは思っけど。

この状況でそんな風に冷静に会話ができるなんて、あの二人もなんやかんやで修羅場を潜ってきていそうだ。

戯言だけだ。

そう、だが、確かに。

あの斬り裂き魔。

急に女性口調を流暢に操りはじめたのだ。

「愛しているわ

愛してる、平和島

静雄」

下らないことを考えているうちに、斬り裂き魔がよろめきながら再び包丁を振り上げている。

危ない

明らかにあの平和島静雄という人が狙われている。

単体で、だ。

何故だかは知らないけれど、とにかくあの人が危険に晒されているというのには嫌というほどわかってる。

「俺は、真剣白刃取りなんざできねえ」

“平和島静雄”は 笑っていた。

押し殺したような、何かを圧殺したような、笑み。

「そんな俺に包丁を振り回すってこたあ……………殺されても文句は言えねえよなあ……………」

笑っている。

威圧感、でもない。

ただ何か不思議な感覚に、支配されているようだった。

それでもセルティさんがびくりと肩を震わせたのは、わかった。

斬り裂き魔はそれにさえも気付かないのか気にしていないのか、歪んだ視線を“平和島静雄”から外さずに口を開く。

「何をしても無駄よ。私の剣が避けられるとも思ってるの?……………
…貴方と私が愛し合うのに必要なのは、ほんの少しの“かすり傷”

でも充分なのよ？」

意味がわからなかった。

それはセルテイさんや門田さんも同じだったらしく、首を傾げているのがわかった。

「そうか！よくわかんないけど、きつと切っ先に毒でも塗ってあるっすよ！一滴でG級モンスターもオダブツってぐらいの毒を！」

「もしくはあれよ。傷口さえ作ればそこに寄生虫とか花の種を植え付けてじわじわとオダブツってわけね！」

という御二方の意見は丁重に無視させていただいた。

分かりやすく言うと受け流した。

それが正解だったのかはわからないけれど、斬り裂き魔は相も変わらず笑っていた。

………そういう考えもあるのか。

斬り裂き魔が伝染型の“怪異”なのだとしたら、厄介だ。

今までの斬り裂き魔を考慮して考えれば、まず一人という可能性は零に近い。

僕が見た斬り裂き魔は“全てが別人”だった。

男女問わず。

グループ犯罪という線もあるが、その可能性も高くはないだろう。

“怪異”という可能性がある限り、それが有効になるといいうのは変
わりないのだ。

まあだけど、そもそもが全て“怪異”だったら

根本的に、身も心も全て斬り裂き魔が“怪異”と呼ぶべき存在なの
だとしたら。

僕が容赦する必要は、なくなる。

それこそ老若男女、容赦なし差別なし、だ。

そうだという確信が持てればいいが、何分今現在の状態での判断は
難しかった。

もしかしたら操られている、というのもなくはない。

むやみに人をコロサナイ。

僕はコロサナイ殺人鬼だからね。

嘘だけだ。

「門田あ……ドア借りるぞ」

“平和島静雄”が、低い声でそう言った。

言われた側である門田さんも、訳がわからないといった顔をしている。

ドア？

何の？

という疑問はすぐに解決した。

“平和島静雄”は、一言告げるなり門田さんたちが乗っていたバンの方へと歩み寄り

宣言通り“ドア”を、腕力だけであっさり取り外した。

どれくらいの力があの細腕にあったというのだろう。

“みし、みし”という軋む音を盛大に発しながら、ドアが無理矢理車体から強制撤去されてしまった。

それだけでも十分に驚いたのだけれど、一体この人、ドアをどうする気なのだろう。

斬り裂き魔は包丁を“平和島静雄”へと向けていた。

いよいよ危険な状況になってきている。

斬り裂き魔はいつ走り出してもおかしくない。

緊張状態。

その時。

「あ……………」

呆けたような、斬り裂き魔の声。

先に動いたのは、“平和島静雄”のほうだった。

「俺は理不尽に生きてるからな。素手で戦うほどお人好しじゃあ……………ねえッ!」

怒声と共に、先ほどぶち抜いたドアを“盾のようにして、斬り裂き魔に向かって突進した”。

容赦ない　体当たり。

べき、という鈍い音に続き、包丁を握ったままの斬り裂き魔はその衝撃により、“ふっ飛ばされた”。

情けない音が響き、斬り裂き魔が着地失敗する。

見事な失敗だった。

嘘だけだ。

そして、体をおかしな方向に拉ヒシヤげられた斬り裂き魔に、再び体当たりを仕掛ける。

そのままブロック塀まで強引に押し進み

そこでようやく、止まった。

斬り裂き魔が、塀とドア（元）にサンドイッチされた形で。

その一連の動きを見て、僕はまず思った。

“この男は 何者だ？”

と。

何だ、今の衝撃音は。

“まるで車の衝突事故のような音がした。”

いや、正確には“車を遥かに凌ぐ威力”だった。

でたらめだ。

荒々しい、滅茶苦茶な 強さ。

こんな一般人がいていいものなのか？

ああ、だけど哀川さんも一応一般人なのだったか。

少し納得できた。

うまく丸め込め、自分。

そこまで考えて、自分が酷く恐ろしい想像をしていることに気がついた。

この男、明らかに“ステージが違う”。

かはは。

……いやいや。

悪い　冗談だろ。

この人は、一般人だろうか？

傑作すぎるよ、それは。

「平和島、静雄……………」

池袋の自動喧嘩人形。

ダラーズ。

金髪サングラス、バーテン服の男。

“ダラーズ”の中で少しは話を聞いていたけれど。

これほどまでに衝撃的だとは、思わなかった。

僕が目にしたのは、“強さ”だ。

確固とした、断絶された強さ。

この人は強い。

実力勝負じゃあ、勝てるかもしれないけれど。

というか多分、勝てるだろうけど。

正直何というか、“勝てる気がしなかった”。

というより、勝とうという気が起きなかった。

そういう“強さ”。

ステージが 違う。

色々な意味で。

僕はこの人と対等に戦うことなんて、できない。

そう思わせる“戦い方”。

だからこそ、この人は“人類最強”とおなじような強さを持っているのだ。

そう、感じる。

感じるしか、なかった。

「……………で、ドアの修理代は誰に請求すりゃいいんだ？」

バンの運転席から降りてきた男の一声で、ようやく我に返った。

傍観していた人々も、どうやら同じようだったけれど。

「気味が悪いわ」

薄暗い照明が覆う、とあるマンションの一室。

真っ直ぐに伸びたロングの黒髪を軽くかきあげ、腕を組ながら女は言った。

心底、嫌そうな表情で。

「随分と端的な意見だね。まあ、実際そうなんだけどさ」

ソファーに座る青年は、テーブルに乗せたパソコンを見つめつつ、そう言う。

口調とは裏腹に、とてもとても楽しそうな、子供のような笑顔が浮かべていた。

「何にせよ、パーツは揃いかけているわけだし、もうすぐ俺の望んだ愉快的構図が出来上がる。完成した暁には、そうだなあ。波江、君、何か料理でも作ってよ」

すると波江と呼ばれた女　　矢霧波江は青年を睨み付け、吐き捨てるように言った。

「嫌よ。大体、どうしてあなたってそう悪趣味なのかしら。見ていて気持ち悪いったらないわ」

「相変わらず毒舌だなあ。毎回言うけど、少しは立場を考えなよ」
口ではそう言っているが、楽しそうな表情は崩さない。

波江は溜め息を吐きつつ、青年の右手を見つめていた。

「給料だってやってるんだし、雇い主にはそれ相応の態度ってものがあるんじゃない？」

「給料さえ貰えれば仕事はこなすわ。文句があるなら言いなさい。特に聞き入れる理由はないわ」

「全く、君は怖い女だよ」

乾いた笑いを止めようとはしない。

青年は、右手を無造作に動かし始めた。

「ほら、見てみなよ。池袋で話題の“斬り裂き魔”。あとはこいつがどうにかしてくれれば、俺の盤面^{ボード}はやっと完成するんだ」

パソコンとは逆の位置に置かれたチェス盤の上に、いくつか駒を乗せ始める。

チェスで使用するものだけではなく、将棋の駒やオセロまで混じっている。

中央に、3つの駒を向かい合わせた。

「ダラーズ、^{ニエカウハルナ}贅川春奈を引き金とした斬り裂き魔の集団、再建された黄巾賊 あはは、楽しみだなあ、楽しみだなあ。全部上手くいつてる。自分でも怖いくらいだ。上手い具合に戦場^{ステージ}が整い始めるんだから」

3つの駒を、舐めるように見回す。

本当に楽しそうに。

「順調。特にダラーズと黄巾賊なんて、楽しみで仕方ないよ」

「……………あらそう。大した自信ね。“失敗する”という概念はないのかしら？」

波江が、呆れたように口にする。

途端、青年は表情を崩し、不機嫌そうに眉に皺を寄せる。

「俺だって、せっかく築いた戦場ステージを壊されるのは面白くない。今のところ危険分子は2つ」

騎士ナイトをひよい、とつまみ上げ、3つの駒の中央に置く。

「1つは、あなたの大嫌いな平和島静雄でしょう」

波江が言うと、青年はまた別の駒を探し始める。

「大正解。そう、1つはやっぱりシズちゃんだ。何をやらかしてくるのかわからないのがシズちゃんだし、だから俺はあいつのことがこの世で一番嫌いなんだよねえ」

がちやがちやと駒同士がぶつかり合い、麻雀パイを混ぜるような音が部屋に響く。

混ぜきり、そこから1つの駒を取り出した。

いや、駒ではない。

駒よりも大きな、バタフライナイフ。

「もう1つあるんだ。波江、君にはわからないと思うけど、今池袋には“シズちゃん以上に厄介な存在”がいるんだよ」

「平和島静雄よりも、厄介？」

思わず波江が聞き返した。

青年の口からそんな言葉が出てくるとは思わなかったのだ。

青年は、右手に持つバタフライナイフを遊びながら、続ける。

「あらゆる意味で厄介なんだよねえ。厄介というか、最大級の障害物。邪魔をする為だけの存在と錯覚するほどの、無意味な存在感を溢れさせたような奴が、今この街にいるんだよ」

向かい合わせた3つの駒。

中央の騎士^{ナイト}。

それらを囲む、多くの駒たち。

青年はやはり顔の骨格を歪ませ、バタフライナイフを振り上げた。

チェス盤目掛けて、降り下ろす。

「零崎っていう、とっても嫌な名前の奴がね」

折原臨也は、笑いながら模擬戦場^{ゲームステージ}に、ナイフを突き刺した。

少しだけ昔話をしよう。

まだ僕が今の僕じゃなかったころ。

まだ僕が昔の僕らしかつたころ。

だけどやっぱり僕は僕であり、あの出会いを否定しようという気など毛頭ない。

あれは僕が、疲れていたころ。

どうしようもない疲労感に、支配されていたころ。

だからあの出会いは失敗だったのだと確信できる。

僕はあの時人生最大の失敗をして、だからこそ僕は結果的にいろんなものを失うことになった。

僕は初めから終わっていて終わっていて、何もかも終了した後で。

だからこの昔話は昔話なんかではなく。

あえていうなら、最終回の序章みたいなものだったのだ。

「…………へえ」

最初の出会いは夏だった。

真夏。

僕が初めてあの人に出会ったのは、汗滲むうざったい夏だったのだ。

「確かにぼくは君の思い描いたような奴じゃ、なかつただらうね」

僕があの人に出会うまでの経緯は、まあ複雑だし色々あったといっ
てしまえばそれで終わりなのだけれど、数少ない友人の多大な協力
のお陰というのが大きいだろう。

友人は言ってくれたのだ。

君が変わるためなら、私はいくらでも協力すると。

私は君の友人なのだから と。

彼は言ってくれたのだ。

「当たり前、とも言えないけど。ぼくはそんな出来た人間じゃない
よ」

だから僕は頼って頼って依存して、あの人に会いにいった。

僕が彼女との区切りをつけるために、あの人に会いに行った。

昔々、世界に喧嘩を売ったあの人に。

「 戯言だけど」

第一印象は、死んだ人間。

ていつか死んでるんじゃないかと思った。

別の表現をすれば、生気がなかった。

生きている人間だと認識できなかった。

「まあ、口癖みたいなものだよ。気にしないで。それこそただの戯言だ」

無論、今現在よりは僕自身の能力も低かったのだけど。

“殺気”を感じ取る“殺人鬼”の能力を、一番有益に使っていたのも、やはり僕だった。

だから、不思議と浮かんできた感情は恐怖ではなく、小さな親近感だった。

「で、君、一体ぼくに何の用？」

僕はその時まで死んでいなかったけれど。

あの人に1つでも、自分と“似ている”部分を見付けてしまったのだ。

気付いた時には遅かったのだけれど。

「会いに来た？ご苦労なことだね。その為に態々こんなところまで旅行に来たの？」

僕はあの時、失敗したのだ。

あからさまな失敗だった。

だから僕は。

“だから僕は、死にたくなかったのだ。”

「……………直さんか。ぼくは今、玖渚とはどうにもなっていないんだけど」

あの時あの場所であの出来事を体験してしまったことにより。

僕は死にたがってしまったのだ。

「ああ、そう。そういえば君」

出来損ないの人間から、殺人鬼に。

殺人鬼から、死にたがりの殺人鬼に。

僕は、あの時確かに死にたくなってしまった。

そう、とある殺し屋のように。

「何処かで会ったことない？……いや、別にいいけど。別段気になつた訳じゃない。強いて言うならやつぱり」

その責任をあの人に負わせる気は更々ないけれど。

あの人に出会つたことで、僕が死んでしまったのは確かなのだ。

あの人と出“合つた”ことで、僕が殺されてしまったのは紛れもない事実なのだ

「戯言だよ」

(目撃)

平和島静雄

一般人)

(被害者)

斬り裂き魔

加害者

平和島静雄)

〈対峙 告白と戦い方〉（後書き）

そろそろ《罪歌編》も終盤ですね。

どうにも静雄が描写しにくくて仕方ありません

では次回予告！

事後。

結末と約束……え？

本作品に関して

誤字脱字・質問等お待ちしております^^

〈事後 凹凸（欧突）〉（前書き）

前回の投稿から大分経ってしまいました。

お読みいただいている皆様、申し訳ありませんでした。

では予告通り事後のお話です。

今回もよろしく願います。

〈事後 凹凸（欧突）〉

「やて………これからこいつどじするよ?」

ようやく全員が落ち着いたところで、次に静雄さんとやらがこつ切り出した。

こいつ、といって指さすのは勿論壁にもたれ掛かり、ぐったりとした斬り裂き魔のことである。

………改めて見ると、盾として使役されたバンの扉（元）は見るも無惨に凹んでいた。

たった一人の人間によって、この鉄の塊は一瞬で鉄屑スクラップにされてしまったのだ。

全く、酷く恐ろしいことこの上ない。

あまりにも、現実離れし過ぎている。

まあ、殺人鬼が言えた義理ではないのだけれど。

ここは本当に“普通の世界”なのかと疑ってしまうほど、平和島静雄は色々な意味で馬鹿げていた。

馬鹿げた、破壊力だった。

この人は本当に、一体何者なのだろう。

哀川さんが知ったら、是非戦いたいとか言い出しそうで嫌だなあ。
リアリティ溢れる想像。

よって哀川さんには“平和島静雄”の噂を流さないことにする。
無駄な行為のような気もするけどさ。

ダラーズ内で噂されていた、“自動販売機をぶん投げて壊した”という話も、あながち嘘ではないのかもしれない。

車よりも大きな衝撃を、ただの突進で生み出せるような男だ。

その“力”は、本当の意味で計り知れない。かもしれない。

この人の側にいるだけでも、僕の内側から染みだしてくる“恐怖”は、一向に収まってくれる気配すらしないし。

何だか、冗談みたいな現状だった。

そういえば哀川さんと出会った時も、そうだったっけ。

いや、出会った時、かな。

この悪い夢のような感覚は、気持ちが悪い。

『とりあえず、こいつが妖刀に操られてただけなのか、それとも単

なる斬り裂き魔なのかを判断しなきゃいけないから……」

セルティさんは、静雄さんにPDAを見せている。

その中に、気になる言葉ワードがあった。

妖刀。

妖刀、とセルティさんは言っていた（表示していた）。

怪しすぎる言語発見。

妖刀、妖刀か。

成る程。

と言えるほど、理解してないけど。

『警察に引き渡すにしても……』

「あの、セルティさん」

僕は思わず声に出した。

あの妖刀という言葉がどうにも気になる。

妖刀。

“怪異”。

関連性がないとは、考えがたい。

それにこの斬り裂き魔騒動の、核心を突けるかもしれないのだ。

そんな淡い期待と、希望を含めた質問。

普通に嘘だけど。

「さっきの斬り裂き魔と、その“妖刀”って一体何の関係が……あ
っ！」

弱々しく言ってみる。

が、途中で中断された。

頭部に激震、続けて激痛。

電信柱に頭を叩きつけられたかと錯覚した。

それほど衝撃が、頭の中を脳全体の至るところまで電撃のように
走り回った。

いや、一言で言つと。

「滅茶苦茶痛えっ……………」

ということだ。

至極単純、分かりやすい人体損傷の信号シグナルである。

痛い。

すげえ痛い。

磯野さんちの拳骨の80倍は痛かったと思う。

僕は魚の名前ではないので、かつおくんとは痛みを共有できないけれど。

多分海賊王に一番近い男の拳骨ってこのくらいなんじゃないかと思っただ。

あー、思考回路が大変なことに。

頭をやられたせいで回路が粉碎されたのだー。

嘘だと信じたい。

僕にこの日本一レベルの拳骨を食らわせたのは、何を隠そう金髪のバーテンダー、平和島静雄だった。

静雄さんはいつのまにやら僕の前に立っていて、滅茶苦茶怖い顔をしていましたはい。

「来良の餓鬼、話の邪魔すんな」

来良の餓鬼、とは多分（というか確実に）僕のことだろう。

なぜ彼が来良学園の制服を知っていたのかはさておき。

「すみませんでした……」

素直に謝っておいた。

何だか普通に怖いよこの人。

容赦なく拳骨が来るとは思わなかった。

余計に痛みが増加するわけだ。

意表を突くような攻撃に弱い、というのは師匠(2)によく言われたことだから。

わかってはいるのだけれども。

「大丈夫ですか……?」

園原さんが心配そうにこちらを見ている。

僕は激痛を必死に抑え、

「はっはー。僕はこれぐらいじゃあ倒れないぜ!」

とか言うわけもなく

「大丈夫……」

と、普通に返した。

あー、やっと痛みが引いてきた。

「で、結局こいつはどうすんだ？」

静雄さんが、再びセルティさんに問い掛ける。

セルティさんがPDAを打ち込み始めた。

「……………おいっ！」

門田さんの声。

視線は、倒れている斬り裂き魔へ。

瞬間、斬り裂き魔は目を見開き、その“赤い眼球”をあらわにさせた。

昆虫のような、人間味のない赤い瞳。

よろけながら立ち上がる。

……………なんだ？

あの傷で何をしようというのだろうか。

少なくとも確実に骨が四・五本折れているはずだ。

あれほどの衝撃を受けて、どうしてまだ立っていられる？

非人間的だ。

ゆらゆらとよるめきながら立ち上がる斬り裂き魔は、不気味としか
言いようがなかった。

ここ、マジでほんとに普通の世界？

睨み付けるかのように、宙に向けて言った。

「 やっぱり、私じゃダメね。デタラメな奴ってのは聞いてい
たけど………」

相変わらず女言葉で続ける。

静雄さんの力を見誤っていた とでも言いたいのだろうか？

確かに間違いではないけれど、斬り裂き魔が本気で静雄さんを殺そ
うとしていたとは、思えなかった。

斬り裂き魔は殺気など、微塵も出していない。

ただの、気味の悪い“気配”だけだ。

殺気がない。

殺すつもりは、ないのか？

斬り裂き魔の台詞を思い出す。

“ 私達が愛し合うのには、ほんの少しのかすり傷でも十分なのよ？”

かすり傷。

あくまでも、傷をつけるのが目的か。

殺すのは目的ではない、と。

斬り裂き魔は自分でそう言っていた。

意味はよくわからないけれど。

とにかく斬り裂き魔は、“殺さない”つもりだ。

僕の苦手な、戦い方。

ゆらゆら揺れる斬り裂き魔は、真っ赤な瞳を隠しもせず、高らかに叫んだ。

「ならばせめて “そいつだけでも!”」

手に持った包丁を構え、走り出す。

狂気に彩られた声色。

人間らしからぬ動きで走る斬り裂き魔。

凶器となる包丁が向けられていたのは

「え……………」

園原杏里。

そう理解して、理解して理解している間にも斬り裂き魔はこちらに近づいてきていて。

どうすれば園原さんを守れるか。

ただそれだけを思案する。

考える。

考える考える考える。

僕がすべきことはなんだ？

殺意なき攻撃を避けることは難しい。

僕は、死んだって殺人鬼だから。

ならばどうする？

「
「

不味い。

今からじゃ、完全に避けきれない。

自己犠牲に逃げてみるか？

それがどんなに他人を傷付ける行為なのか、痛い程知っているくせに。

園原さんを庇うように、覆うようにして右肩を後ろにする体勢になる。

両手で園原さんを後ろに押し出して

僕は、自分自身が刺されることを承知した行動をとった。

だけど。

「　　っ！」

斬り裂き魔が、狼狽える。

「あなた……“人間じゃないわね！” ああ、汚らわしい、汚らわしいわ！私の愛をあなたみたいな化物に凌辱されるなんて！」

僕は目を、疑った。

眼球に映り込む光景を。

「汚らわしい汚らわしい！人間じゃあないあなたみたいなものが、私の愛を汚さないで！」

斬り裂き魔の包丁が貫いたのは、

セルティさんの、腹部だった。

物の見事に、綺麗と思えるほどに呆気なく、その凶器はセルティさんの腹部を貫通していた。

漆黒の胴体から生える、銀色の刃。

まるで1つの芸術品のような、そんな光景。

そしてやはり、人としての赤い血は漆黒を塗り潰さない。

その銀色の一点に釘付けにされる。

セルティさんはやはり何も言わず、首さえも動かさない。

腹を刺されているというのに、動揺さえしていないのだろうか。

僕は動けなかった。

セルティさんに話し掛けることも、出来なかった。

何やってるんだろう、僕。

ぼく、という嫌な音がして、斬り裂き魔の腕が大きく“ずれた”。

同時に包丁が敷き詰められたアスファルトに落ちて、乾いた音が響く。

悲鳴も何も無い。

斬り裂き魔は失神してしまっただらしく、腕がだらしなく垂れ下がっていた。

終わり、か。

思わず溜め息がでる。

何も出来なかった自分と、訳の分からない斬り裂き魔に対して。

セルティさんは落ちた包丁を、自分自身から伸びる“影”を使い拾い上げる。

こうした様子を見ると、セルティさんが人間ではないということ、改めて思い知らされるな。

セルティさんも少し疲れたようだったが、拾い上げた包丁をそのまま“影”によつてバイクにくくりつけていた。

便利な機能だな、あれ。

続けてセルティさんは、門田さんやら大人組に説明を始めている。

すると暫く名前の通り静かだった静雄さんが、背後で口を開いた。

「なんだかよ……完全にはすつきりしないんだよな……。なんでだ……?」

独り言、のようだ。

だけど、共感できるものがある。

“ 完全には、すっきりしない。 ”

僕は先程自分で“ 終わり ”と言ったけれど、どうにもこれで綺麗さっぱり無事解決したような気になれないのだ。

なぜだ。

確かに“ この ” 斬り裂き魔は失神しているし、終わったと言えば終わっている。

もしかして、“ こいつは主犯ではない ”、と考えた方がいいのか？

親玉、と言い換えてもいい。

斬り裂き魔は複数存在している。

同時に複数存在しているのか、一体ずつなのかはわからないけれど、少なくとも僕は三人の斬り裂き魔に出会っているのだ。

終わっていない。

はずだ。

「 ああくそ、すっきりしねえ……ちょっと新宿に行って、臨也の奴をぶっ殺してくる 」

と、暴力的（笑）なことを言いながら静雄さんは立ち去ってしまった。

……うん、誰も止めようとしない。

何だかよくわからないけれど、恐らく“臨也”とは折原臨也のことだろう。

というか、確実に。

臨也なんて面白可笑しい名前は他にきいたことがない。

しかも新宿にいる、と言っていたし。

静雄さん、よろしくお願いします。

「ねえねえ、絶対シズちゃんってイザイザのこと好きだよねー。男同士でボーイズにラブってるって感じ？」

「『いや、それはない』」

狩沢さんが物凄いことを言い出した。

色々な意味で危険な発言をしたよ、この人。

うわあ、鳥肌が止まらない。

狩沢さんの衝撃発言に対し、セルティさんのPDAと門田さん、遊馬崎さんに僕という総勢四人のイザイザ×シズちゃん説完全否定突っ込みが炸裂した。

思うことは皆同じ。

僕はこの時、確かな繋がりを感じたのだった。

嘘だけだ。

「そんなこと言ったら、いくら狩沢さんでもギタギタのギニャーにされるっすよ！」

遊馬崎さんが狩沢さんの口を両手で必死に塞ぎながら言った。

どうなるか、など容易に想像できる。

先程の静雄さんを見ていれば。

リアル
現実リアルは妄想ほど甘ったるくはないのだよ。

身をもって痛感させられるようなエピソードが出来てしまった。

池袋怖いよー。

嘘だ。

セルティさんは再び説明を再開したようで、次々と文字を打ち込んでいく。

大人の話に水を差すのも野暮だし、セルティさんに後で直接教えてもらおう。

……何だか強力な脱力感が僕の身体を襲う。

余りにも感情を出しすぎて、疲れたらしい。

地面に座り込んだまま、中々立ち上がる気になれない。

年かな？

嘘だけど。

肉体的には丈夫なはずだけど、精神的にというか“神経”そのものが疲労したというか。

気味の悪い“気配”が、僕の内側^{ナカ}を侵食しているかのようだ。

「深隈くん……」

いつのまにやら園原さんが僕の目の前にいた。

心配して駆け寄ってくれた……のだったら嬉しいな。

けれどやはり動揺を隠しきれないようで、困惑というのが正しい感情なのだと思う。

当たり前だ。

目の前でいきなりアクション映画の再現のようなことをされたら、誰だって困るだろう。

リアクションの取りようがない。

園原さんが、右手を差し出してくれる。

普通、立場が逆のような気がするけど。

ここはありがたく思わなければ。

「ありがと、園原さん」

右手を右手で受け取って、軽く引き上げてもらう。

大半は自分の力で立ち上がった。

女の子に力を使わせるわけにはいかないだろう。

少しだけ起動力になってもらっただけだ。

ほんとだよ。

「大丈夫だった？」

衣服に付着した埃やらの汚れを軽くはたき落とし、靴を履き直す。

そういえば僕、制服のままだったよ。

明日着ていくのに、埃まみれは不味いだろ。

クリーニングに出したい。

僕は案外几帳面なのだ。

若干嘘だけど。

「私は……大丈夫です。けど、あの……“黒バイク”のひとが……」
俯きつつ、言う。

セルティさんのこと、知っていたのか。

あくまで“黒バイク”としてだけど。

そういえばセルティさんは有名人なのだったな。

僕が知らなかったただけであり、池袋の都市伝説としてはかなりメジャーな存在なのだ。

そう他人から聞いた。

「わ、たし。私を　庇ってくれたんですよね？」

いや、僕に聞かれても分からない。

というのが本心だけど、我が友人の面目を立てるため、嘘つきが適当なことを語りだした。

「多分、そうだよ。けど、心配しないで。あの人は大丈夫だし、そもそも園原さんが責任を感じる必要性は微塵もない」

「けど………」

園原さんは律儀で良い子だった。

嘘でもない。

僕は必死に園原さんのフォローを放棄しようとした自身を弁護する。

嘘だ。

「ていうか、あの人刺されてもごく普通に立ってるだろう？そもそも刺されていなかったんじゃないかな。だってほら、血とかが出てなかったし」

適当に誤魔化しておく。

こうでも言わなきゃ説明がつかない。

他にどう呟けというんだ。

むだに怒気を拡散させる。

嘘だけど。

「それにしても何だったんだろうね、あの男」

うんざりした調子で言う。

数歩発展すればただのぼやきだ。

「こわ、かったですね……あんな、通り魔みたいな……」

通り魔。

一般的に見て、ごく自然な感想だ。

刃物振り回している危険人物が一般人に見えるはずがない。

人間の網膜はそんなに都合のいい作りにはなっていないのだ。

常識常識。

嘘だけだ。

「通り魔ねえ……。あれが噂に名高い斬り裂き魔だったのかな？」

自分で確信を持ちながらも、無意味に惚けてみる。

ほら、設定上フツの高校生なのだし。

異常に情報収集能力がないというオプションがつくけどね。

『二人とも、大丈夫だった？』

とか、ゆったりとしたペースで園原さんとのぼのぼのムードに浸っていたら（嘘だよ）、セルティさんがこちらに歩いてきていた。

どうやら、あちらの大人会談は無事終了したようだ。

バンに斬り裂き魔を詰め込んでいるのが見える。

かなり乱雑に、投げ込まれるように詰め込まれる斬り裂き魔。

……御愁傷様。

セルティさんはPDAを提示して、僕や園原さんに自身の意思を伝える。

「大丈夫です。ありがとうございます」

「大丈夫……です」

若干被りつつ、僕は答える。

セルティさんは安心したように肩を撫で下ろし、再びカタカタと文字を打ち込んでいく。

『何ともないなら、よかった』

簡潔な文章。

心配してくれたのだと、素直に感じた。

嬉しかった。

素直に、ね。

「助けてくれて……ありがとうございます」

園原さんが改めて、言う。

やはり彼女は律儀な性格をしている。

難儀なくらいに。

だが、次に彼女が口にしたのは思いもよらぬ類いのもだった。

「あの、教えて下さい。……………この街で、一体何が起きているんですか？」

そう、余りにも的確に核心を穿つ質問。

一体、何が起きているのか？

ニュースやテレビの向こう側の話ではない。

“目の前で起きている非日常に対して抱いた素直な疑問。”

セルティさんは、何だか困った様子を露にしていた。

露骨に困っていた。

当たり前だ。

セルティさん自身が“都市伝説”である以上、何をどのようにして説明すればいいのか困惑しているらしい。

かといって僕が説明するというのも、おかしいだろうし。

うーむ。

「あなたは、一体……………」

セルティさんが満面笑顔で「デュラハンです」とか言うはずもなく、ただ沈黙が続く。

真摯な瞳を向け続ける女子高生。

たじろぐデュラハン。

成り行きを見守る殺人鬼。

……どんなシュールな光景だよ。

セルティさんはやはり躊躇って、俯くような動作を繰り返した後、決心したかのように。

何かを　多分、“勇氣”を振り絞るかのように。

実に人間らしい化物は。カッジョ

自身のヘルメットを、静かに外した。

「
」

園原さんが何を思ったかなど、僕がわかる筈もない。

けれど、彼女はさほど驚いた様子を見せなかった。

……一度胸据ってるねえ。

『驚かないの?』

余りの薄いリアクションに痺れを切らしたのか(嘘です)、セルティさんがヘルメットを外したままPDAを見せる。

園原さんは何故か申し訳なさそうに言った。

「いえ、あの、首がないってというのはニュースとかでも知っていたので……」

ニュース。

へー。

僕の情報収集能力の低さが露になってしまった。

今更、とかじゃないから。

現代の池袋人にとっては、常識だともいっただろうか。

けれど、いくらニュースで見えていたとしても、実際に首無の“化物”が目の前に現れれば“普通”は驚くだろう。

驚く、よな。

それが僕の想像する“普通”なのだけだ。

的外れなのかな?

うーん。

よくわからん。

『あ、ああ。成る程……』

セルティさんも普通に驚いてしまったらしい。

絵文字機能があったら、“汗”とかつけそうな感じ。

確かに驚くよな。

何とも呆気なく、自身を受け入れられるというのは。

ふふふ、経験済みなのだよ。

嘘だけど。

嘘だ。

嘘。

何事も三回言つと信憑性が薄れるものだ。

そう、“普通”ならば“起こり得ないこと”。

こんなにも軽々と、“問題”が“解決”するわけがないのだ。

「けど、本当に首、ないんですね……あ、あの、違うんです！もしかして凄く失礼な質問だったかもしれませんが！怒らせてしまってい

たらずみません！」

泣きそうになって、俯く園原さん。

いやはや、この姿を見て誰が彼女を“普通じゃない”なんて定義する？

どこからどう見ても普通の女の子だ。

ただし、首のないセルティさんには驚かない、と。

あれ？

矛盾してる？

ああでも、僕も余りリアクション取らなかったし。

いや、僕は別だろ。

普通じゃないし、耐性もあったし。

……………耐性？

もしかして園原さん、その手の“モノ”を知っているとか

『話せば長くなるから……………メールアドレス教えてくれれば、後で詳しいことを教えてあげても……………』

セルティさんは長い間を置いてようやく、そんな文字を紡いだ。

園原さんに気を使ったのか、メールアドレスという手段に出たらしい。

だがセルティさんの優しい気遣いも、園原さんの一言に一蹴される。

「うち、ネット環境無いんです……」

露骨に動揺するセルティさん。

なんと。

仲間意識を勝手に芽生えさせる殺人鬼一名。

『困ったな。ずっとここに居るわけにはいかないし……』

セルティさんがそう言って（見せて）悩む仕草を表現する。

そんな都市伝説に、園原さんは言った。

決意するかのように、呟いた。

「あの……私の部屋、このすぐ先にあるんです……もしも良かったら、お茶でも飲んでいってくれませんか？」

「……………」

僕が絶句した。

セルティさんも、明らかに驚愕し動揺していた。

「えと、深隈くんも、一緒に……」

くるりと振り返って僕に言う園原さん。

え、いや、え？

まじすか？

何だかよくわからない展開になってきてしまったようだ。

唯一理解したのは、園原さんが意外にも冒険者チャレンジャーだったということ。

それと。

『い、いいのかな……上がらせてもらっても……』

首なしライダーも、人間のように悩むということだった。

(標的)

園原杏里

高校生)

(被害者)

園原杏里

加害者

斬り裂き魔)

〈事後 凹凸（欧突）〉（後書き）

では次回予告

うん。

これはまあ……幸せな状況だね。

本作品に関して

誤字脱字・感想等お待ちしております^^

〈園原杏里宅 情報と凶報〉（前書き）

お久しぶりです！

すみません

気付けば一ヶ月以上更新できていませんでした……

では今回もお付き合いください！

〈園原杏里宅 情報と凶報〉

「お邪魔しまーす……」

僕の前方を歩いていた眼鏡巨乳委員長もとい園原さんは、自宅の扉を開けて僕と後ろに続く首なしライダーまたはセルティ・ストウルルソンを手招きする。

ただいまの説明文に訂正すべき箇所がひとつあります。

さてなんでしょー。

と、脳内クイズ大会を渋々強制終了し（一部嘘）、玄関に足を踏み入れる。

女の子の部屋に行く、なんてラブコメ的展開に発展するなど誰が予想できよう。

初めての経験かもしれない。

少なくとも、零崎を始めてからは初の体験だ。

寂しい青春時代だねえ。

自分で自分を憐れんでみる。

嘘だけど。

あんな上目遣い（ポイント高い）で頼まれたら断るにも断れないさ。
嘘だよ多分。

靴を脱いで、侵入させていただく。

丁寧語にしたのにやけに響きの悪い表現になってしまった。

やむを得まい。

園原さんにとっては恐らく、僕など“おまけ”の存在なのだろうか
ら。

ついで、ともいう。

流石に巷を騒がす首なしライダーと二人きりというのは気が引けた
のかもしれない。

手頃な場所に僕という隔壁、または堤防があったのだから利用しな
い手はないということだ。

うお。

甘い臭いがする。

いや、変態的な意味ではなく。

単純に鼻の粘膜が脳にそう訴えているだけだ。

僕が変態なわけないじゃないか。

少なくとも、僕の周りには“そういう”類いの奴がいるのだから、自身を仲間入りさせたくない。

死んでも嫌だね、そんなの。

そう考えるとあやつら、変態の度を越えているぞ。

勿論その輪の中には我が兄貴も含まれている。

当然だ。

あれを変態と言わずとして何と言う。

ロリコン？

ファミコン？（ファミリーコンピュータの略である）

どれにしる結局は変態だった。

残念だったね、そう兄。

僕がそう兄のイメージを守るのはこれが限界だよ。

いやいや失礼、ただの戯言だ。

まあ結局のところ僕が言いたかったのは、園原さん宅はやはり女の子の部屋といった感じだった、ということだ。

その割には随分と話が脱線したけれど、割愛割愛。

もう割愛の使い方とか完全無視である。

少なくともクラスメイトの部屋でどきどきしたりしたりしないよ、僕は。

英国紳士だからね。

嘘つけ。

別の意味でどきどきはする。

というか、セルティさんもいるのだしそんな桃色な思考回路が形成される訳もないだろう。

破廉恥極まりない。

『お邪魔します』

セルティさんも僕に続いて部屋に入る。

そういえばセルティさんは靴、どうしているんだろう。

確認しようと玄関方面に回れ右（首限定）してみたが、既にその類いの動作は終了していた模様。

くそっ。

僕は拳を床に叩きつけた嘘です。

「どうぞ、座っててください。お茶淹れてきますね」
本当にお茶を淹れてくれるらしい。

接客の仕方をよくわかっている。

どこかの誰かさんにも言い付けてやりたかった。

誰だ、客人に水道水出すような恥知らずは。

探しだして説教食らわせてやるぜ！となると僕は小一時間ぐらい誰とも会話不能になってしまったために却下された。

僕の脳内は有効活用に適応していません。

アンインストールと再インストールを必要とする旧式なのであります。

僕にしては珍しくでじたるな言語を使用した。

嘘に、だけど。

『わざわざありがとう』

とセルティが感謝の気持ちを十文字以内で述べていたので、負けじと僕も言葉を口にする。

嘘。

「ありがとう」

園原さんが淹れてきてくれたお茶を静かに啜る。

渋味が口内部に広がるが、嘘を綴るのにはさして問題はない。

「それで、その……………」

言い出したはいいが、すぐに言葉につまる園原さん。

多少申し訳なさそうに、目を泳がせつつの発言。

『池袋で起きていることが知りたい、だよな？』

セルティさんが会話が滞りなく行えるくらいの高速スピードで文字を打ち込んでいく。

凄いな。

携帯で文字を打つ女子高生くらいは速い。

「はい」

小さく答える園原さん。

未だ発言するチャンスは訪れない。

『わかった。説明しなきゃならないと私も思うし。けど私も詳しいことはわかっていないんだ。信憑性もないかもしれない。それでも

よければ話すよ』

「そんな……話していただけるだけで、ありがたいです」
うんうん。

僕もその辺り、セルティさんに聞きたいことが山ほどなくともたくさんあるのだ。

ただ今のは盗み聞き体勢で。

と思っていたら、

『それと、この話は冬護くんにも聞いてほしい』

セルティさんをお願い（軽いジョーク、つまり嘘だ）されてしまったので、勿論断らずに肯定の意を込めて頷く。

頷き返してくれるセルティさん。

どちらにしろ話が聞けるのは好都合だし、あちらもそういう意があるようなので。

まずセルティさんは、PDAを園原さん寄りに向けて、

『まず、私のことだけど……私は、何て言ったらいいのかな……
その、人間じゃないんだよ』

度々文字を追加しながら、自身のことを語り始める。

人間じゃない。

このことを説明して、園原さんが理解してくれるかどうか微妙なところだけど。

『私に首がないのはわかったよね？私のような存在のことを、デュラハンというのだけど』

「正確に言つと、外国　アイルランド辺りの怪談に出てくる“首なしの妖精”を“デュラハン”と呼ぶ、らしいよ」

介入。

まあ、今の僕を例えるならば、主人公が戦っている様子をご丁寧解説してくれる便利キャラクターのようなものだ。

と、勝手に自身の立ち位置を解釈する辺りが鬱陶しいとも言える。

簡単に言えばつざいキャラなのだ。

「デュラハン……？」

どつやら園原さんはドラ　エをプレイしたことがないらしく（園原さんの性格からして当たり前だ）、首を傾げてそう言った。

セルティさんが受け答える。

『私もよくわからないんだけど……そういう風に呼ばれる存在らしい』

よく、わからない。

“記憶”がないから。

『昔のことはよく覚えてなくてね。今は別にいいんだけど、前は首を持ち歩いている妖精だったらいいんだ』

セルティさんは、記憶を失っていると言っていた。

自身に関する記憶を。

“首”を盗まれたことにより、一部の記憶を失ってしまったらしい。

記憶がないのは辛いことだ。

嫌なことだ。

だってそれは、自己を形造る部品パーツを失っていると、同じことなのだから。

だけど、彼女は別にいいと言った。

“愛する人”と、“愛してくれる人”がいるから、と。

そう、僕に言ったのだ。

「……その首は、どうかしたんですか？」

その問いかけに、ワンテンポ遅れて答えるセルティさん。

答えるのが億劫なようにも見えた。

あえて止めるようなことは、しないけれど。

『盗まれたんだ。誰かに。その首の気配を追って、私は池袋にやってきた』

セルティさんは、少し辛そうな動作アクションをして、園原さんにその文面を提示し続けた。

まるで何かを訴えるかのように。

「首を、盗まれ……………」

園原さんも、悲しげな顔をしていた。

本当に優しい人だなあ、なんて場違いなことを考える。

嘘じゃない。

嘘じゃない。

『だから、やっぱり私も人外ということになるのだけど……………だからこそ、さっき包丁で刺されても、平気だったんだし』

……………デュラハンは、血を流さないのだろうか。

この前もこの前も、セルティさんは僕を体を張って守ってくれた。

自身が傷つくことを省みずに。

素直に、嬉しかった。

だけどやっぱり、悲しくもあるのだ。

そういう寂しさを、僕は知ってる。

痛いぐらいの優しさと、優しすぎる痛みの、両方を。

どんな時も彼女は守ってくれたけれど、その全てで彼女は痛がる素振りを見せていなかったし、血も流れていなかった。

セルティさんが人間だったら、傷口からの出血多量でオダブツというぐらいの深い傷だったのに。

つまり痛覚も、あまりないというのだろうか。

少なくとも、人間の概念が通じるような存在ではないのだし。

『私の体は人間とは根本的に違うらしい……そう聞いた。だから少しくらい刺されても全然大丈夫なんだけど、やっぱり、二人を不安にさせたかな？』

申し訳なさそうに、PDAを見せる。

そんなことを言われてしまったら、たまらない。

「そんなことないです。僕は、そんなセルティさんに何度も助けられたんです。不安……じゃあなくて、心配なら、しますよ」

心配。

心を配るで、心配。

僕には配るほど心がないけれど、ある意味核心をついた熟語だ。

僕はセルティさんのようにはなれないから。

僕はセルティさんのように強くないから。

だから、心配する。

そう思った。

「か、かつこいいと思います……」

照れながら言う園原さん。

かつこいい、か。

うむ、確かに。

感慨深く納得したように振る舞ってみる。

嘘だけ。

『ありがとう……なんか、お礼ばかりいつてるけど』

それもまた、人間らしくていいんじゃないかな。

セルティさんは僕みたいな奴よりよっぽど、人間らしい。
優しい、というわけだ。

つまるところ、ね。

『それで次に、斬り裂き魔のことなんだけど……』
うむ。

僕も斬り裂き魔についてはよくわかっていない。

というか、わからないところが多すぎる。

意味不明だ。

わけのわからない存在は、ただただ気味が悪い。

そういうものだ。

残念な事にね。

「あの人はやっぱり、斬り裂き魔だったんですか？」

園原さんが、恐る恐るといった感じに聞く。

そりゃあ、そうだよな。

訳のわからん謎の変態に襲われたのだし。

「斬り裂き魔、を。あの、私一度、“見ているんです”」

「見ている？」

僕が問い掛ける。

それは一体、どういった意味合いなのだろうか。

「その……来良学園の、人が襲われて……」

俯く園原さん。

その様子を、見てしまったということか？

『そつか……言いづらいかもしれないけれど、その斬り裂き魔の奴、“赤い目”をしていなかった？』

赤い目。

あの昆虫のような目のことか。

やっぱり、“あれ”も斬り裂き魔の特徴……なのかな。

園原さんが見た斬り裂き魔まで赤い目をしてたというのなら、確信も持てるというものなのだが。

「はい……気味の悪い、色をしてました」

『やっぱり……実はね』

そこで、セルティさんはまた躊躇う。

どう言ったらいいか悩むように、首を傾げている。

斬り裂き魔。

池袋の都市伝説

というか、事件か。

セルティさんは、何を知っているというのだろう。

もし“それ”が、怪異とかいう“ぶっ飛んだ”存在なのだったら

いよいよ“あいつ”に、頼るしなくなってくる。

のだが。

セルティさんは、僕らにPDAを見せた。

『斬り裂き魔の正体は、“罪歌”という名前の“妖刀”らしいんだ』

「……………」

「……………」

妖、刀。

妖刀。

“罪歌”。

やっぱり、妖刀なのか。

ふむ。

妖刀ね。

マサムネ的な？

「妖刀ですか……………」

いやいや……………。

妖刀って、ねえ。

そんな、ゲームでしか聞かないような存在が？

斬り裂き魔の正体？

ふざけてるな……………。

“ふざけてる。”

馬鹿げていると言ってもいい。

だが、妖刀となると。

「やっぱり、怪異なのかな？」

聞こえないように呟く。

怪異。

在るはずのない、存在。

だからこそ何処にでも在るような

そういう、曖昧な存在。

妖刀。

しっかりと、はっきりと当てはまる。

怪異という、存在の中に。

『妖刀なんて、ゲームの中の存在みたいで現実味湧かないだろうけど……でも、私も同じようなものか………』

うむ。

妖刀ね。

となるとやはり、あいつらは人間じゃないということか。

寄生型の怪異ということになる。

まさかあの斬り裂き魔達が全員、妖刀が化けたような存在
わけないだろうし。

な

単純に考えて、寄生型の怪異だろう。

けれどこの推測が“当たっていたら”

相当厄介なことになる。

相手が怪異そのものならば、手加減する必要もないし容赦する情けもない。

だが斬り裂き魔が“人間なのだったら”………正確に言えば“人間の肉体を操っているのだったら。”

僕は斬り裂き魔を　　殺せない。

それは、致命的だ。

痛いくらい致命的だ。

『どうやら罪歌は、“人間を乗っ取る”能力を持っているらしいんだ。私の知り合いが調べてくれたんだけど………』

乗っ取る……

まさに妖刀、といった感じだな。

寄生型。

あながち間違っではないかな？

だとすると本当にまずい。

僕としては、このまま斬り裂き魔を放っておくわけにもいかなくなくなってしまうわけだし、かといって止められる自信があるわけでもない。

いやはや、切羽詰まってきたな。

何度も語った通り、僕は“殺さない”となると、とことん駄目になる。

弱いとか、そういう意味とは多少違うのだけど。

だけどそれは。

どうにも、できないことだから。

「乗っ取る、というのは、その………体を操られているってこと、なんですか？」

園原さんはセルティさんを見つめて、小さく問い掛ける。

『そうだね………けれどさっきの奴を見る限り、精神も乗っ取られていると考えるといいかもしれない』

確かに、やけに流暢な女言葉だった。

あれで操られていないのだとしたら、それはそれで怖いんだけど。

口振りや振る舞いからして、怪異に乗っ取られているように感じた。

人間にはない不気味さがあつたし。

だとすると罪歌というのは、“女”の怪異なのだろうか。

あんなものに性別があるかどうかも、怪しいところだけど。

寄生型……………。

そうなると、あの斬り裂き魔は“本体”を身に付けていたのか？

真っ先に思い付くのは、あの“包丁”

確かセルティさんが回収していたんだよな。

ていうか、違うものだけど僕も持っている。

男の斬り裂き魔が持っていた、包丁。

あれが罪歌の本体？

「罪歌の本体っていうのは、あるんですか？……………さっきの包丁、とか」

『私にもよくわからない。けどやっぱり危険だし怪しいから、さっきの奴が持っていたこの包丁は私の知り合いに調べてもらおうよ』

セルティさんは黒い影に包まれた包丁を、机の上にそつと置く。

包まれている影は、おそらくセルティさんのものだろう。

ぐるぐる巻きにされ、それこそ影そのものようになっていく包丁は、やはりピクリとも動かない。

動いたら普通に怖いけど。

斬り裂き魔の所有していた包丁。

セルティさんがこの包丁について、どのような見解を持っているのかはわからないが

少なくとも、これが“大元”ではないだろうと、僕は考えている。

この手の怪異とやらは、ネズミ方式でどんどん広がっていく。

まず“元”の罪歌がどこかしらで己の“分身”をつくり、その“分身”がまた“分身”を作り続けていく。

そういった図が成り立っているのではないかと、予測する。

そういう類いのものなのではないだろうか。

寄生型怪異の場合は、そういったパターンが多いと聞いたことがある。

最もこの場合は、その方法がはっきりと断定できていない以上、包丁を伝染元であると決めつけることはできないのだが。

とはいえただの包丁が大元とは、やはり考えにくいだろう。

だが刃物という面で見れば、少なくとも伝染元であるという可能性は飛躍的に上がる。

大元の、本物の罪歌だという可能性はやはり低いのだが。

明確な理由を挙げてみれば、それは僕が斬り裂き魔の包丁を観察しているとき、包丁本体に彫られたMADE IN JAPANという文字を見付けていたというのに起因する。

怪異である罪歌の本体に、そんな風に製造元が彫られているとは非常に考えにくい。

物の怪異とは、長年の思いやら怨念やらが積み重なって九十九神となる場合が多いのだ。

その怪異の本体に製造元が彫られている……なんてことはない、はず。

口振りからして、セルティさんは恐らくこの包丁をまだじっくりとは眺めていないのだろう。

だからこそ、これも僕しか知らない事実であるわけだが。

『私が知っていることは、これくらいかな？まだ全てを突き詰めた訳でもないから、わからないことはたくさんあるのだけど』

「そんな……ありがとうございました。こんな遅くに、色々教えて

「いただいて」

『全然平気だつて。何かあったら、また呼んでくれれば助けるから
格好いいセリフを飄々と出していくセルティさん。』

全く、なんでこの人こんなにもヒーロー気質なのかな。

女性なのに。

僕なんて全然見せ場なかったし。

不満に思っているわけじゃあないんだけど。

……………言い訳にしか聞こえないな。

『じゃあ、私は帰るけど……………冬護くん、よければ送っていくけど
どうする？』

「いえいえ、大丈夫ですよ。セルティさんはやくその包丁を見て
もらってください」

かといってここから我が家に帰れるかどうか怪しいのだが。

うーん……………。

帝人くん出るかな？

起きていてほしい。

起きていてくれないと困るぞ、真面目な話。

『わかった。帰り道気をつけて。何かあったら連絡して……あ、連絡先教えてなかったね』

そういえば。

すっかり忘れていたが、まだ会って三度目くらいだし……。

けれど、セルティさんの連絡先を入手できたのは嬉しいね。

気持ちの面だけでなく、利益の部分としても。

“ダラーズ”であるらしいセルティさんの連絡先だ。

あくまでダラーズ内の噂として聞いた話だから、彼女が本当に加入しているのかはわからないけれど。

まあ、結果オーライ。

「ありがとうございますセルティさん。セルティさんの方も、何かあったら連絡して下さい。一高校生として何か役に立てるなら、頑張りますから。あと園原さんも、何かあったら言って」

“言う”という行為の難しさを知っているくせに、この最弱はまあぬけぬけと。

頼ってほしいのは事実だ。

勿論、嘘じゃない。

誰かに頼ることは大切だよ？

じゃなきゃ怒られるからね、僕が。

「じゃあ僕も帰ります。またね園原さん、セルティさん」

「夜分遅くにすいませんでした。二人とも、気をつけて帰ってくださいね」

『冬護くん、本当に気を付けてね』

二人の女性から心配されているよ。

嬉しい状況じゃないか、自分。

無意味な自問自答。

嘘だけ。

軽く手を振りながら、園原さん宅を後にする。

さて、どうするかねえ。

大体園原さんの家がどの辺りに位置しているのか全く把握していないものだから、右にも左にも行きようがないのだけ。

やっぱり、帝人くんに頼る他ないか？

帝人くんなら、園原さんの家ぐらい知っているだろうし。

問題は彼が起きているかどうかだ。

携帯を取り出す。

勿論あの時のナイフは家に放置してあるので（嘘だって）、不快感は無いに等しい。

血の臭いは嫌いなんだよねえ。

だから殺し、嫌い。

嘘だけど。

う。

携帯を持つ右手が震える。

僕は両利きだからどちらの手でも使用できるのだけど

「……………」

電話だった。

至極通話開始したくない、電話。

「えー、なんの御用でしょうか？」

『馬鹿野郎冬ちゃん！今すぐ逃げろ！』

お相手、人類最強様。

やけに焦った声で、耳がじんじんするほどの大声で叫ばれた。

やれやれ、一体何だっというんだ。

「どうしたんです？逃げろってのは一体どっいう意味で

」

『“絵合”がお前の居場所を突き止めたらしい』

「は？」

“絵合”……………

確か、匂宮の分家だったかな？

聞き覚えのあることはあるんだけど。

今さらその“絵合”が僕に何の用があるって？

『お前が数年前“ぶつ潰した”匂宮の分家だよ。まさか忘れた訳じゃねえよな？』

「いや、忘れてはいないですけど。今更その“絵合”が僕に何の用があるっというんですか？」

ああ、あの“絵合”か。

やっと思い出した。

別に理由があつて“潰した”訳じゃないんだけど、やけに人数多かつたんだよなあ、あの分家。

ていうか、“潰した”つもりもない。

酷い言われようだ。

『あそこの生き残りがお前を狙ってるらしいんだよ。“絵合”って言やあ、そこそこのやり手だったらいいじゃねーか。お前に恨みでもあるんだろつよ』

「いや……………ていうか僕、あちらの世界的には“居ないことになつてるんじゃない”」

『悪い、情報漏れっぽいわ』

「……………軽く言いますね」

『まあまあ、お詫びは後ですつからよ。今はとにかく逃げる』

“生きている”のがバレたか……………。

面倒だな。

すごく面倒だ。

若い頃のツケが今回つてくるとはね。

やんちゃも過ぎるってことか。

「そんな、逃げるだなんて大袈裟な……いつも通り、やり過ぎせ
ばいいんでしょう？」

「それがそうもいかないんだわ。あいつら、“一般人を巻き込むか
もしれねえし”」

ふむ。

“一般人を巻き込む”ね。

それは逃げる理由にはならないよ、お母さん。

だったら尚更、逃げる訳にはいかない。

危険だとかそんなもの、知るか。

逃げる訳には、やっぱりいかないじゃないか。

「僕にはその“絵合”がどのくらい危険な存在なのか全然わかりま
せんけど、逃げる訳にはいきませんよ。そんな危険をこの街に野放
しにするわけにはいかないし、“裏”の事情なら僕が解決すべきだ」

その責任が、僕にはある。

逃亡者としての、責任が。

「大丈夫。“僕はもう、逃げたりしないから”」

だから、大丈夫。

自分に言い聞かせるようにして、軽い現実逃避を繰り返す。

『まあ、大方そう言うとは思ってたさ。冬ちゃん頑固だしなー。どうなるうが知らねーよあたしは。けど、お前が自分で“逃げない”って決めたんだ。お前が手前てめえで決めたんだ。なら、守れ。お前はお前自身も守るし、大事なもんも手前で守れ。約束だ。大丈夫、冬ちゃんなら出来る。大丈夫！』

ああ。

哀川さん

多分、笑ってる。

『だから死ぬほど頑張れよ、冬ちゃん。負けたら一生許さねーから表示される通話終了の文字。』

無機質なディスプレイを暫く眺めて、自分の保護者のことを考えた。

全く、大した信頼を背負ってしまったもんだ。

頑張らなくちゃいけないじゃあないか。

ていうか、頑張れ。

頑張れよ零崎冬識。

「一生許してくれないのはキツいなあ」

親子の縁を切られでもしたら大変だ。

あながちあり得ないことじゃない。

そういう人だから。

僕はよく、わかってるから。

「だから最強なんだ。あの人は」

言い聞かせるように、呟いた。

それが最強と最弱の、歴然とした差だとわかっているから。

だからこそ。

やはり、僕は最弱だ。

花を踏まぬ虎のように

雲を散らさぬ籠のように

水を汚さぬ鳥のように

願わくば

何も傷付けないあの人のように

願いが終わるものならば

草を折らぬ獅子のように

星を砕かぬ狼のように

風を断たぬ猫のように

ただ静かに

ここに立っていたいだけなのに

〈園原杏里宅 情報と凶報〉（後書き）

もう大分間が開いてしまって、なんといっているのやら……！！

もし忘れてしまった方はお手数ですが前話をお読みください！

そんなに進んでないです！！

えー、こんな感じで自分で自分の首を絞める展開ですね。これは。

次回、執筆がんばります。ほんとに。

本作品に関して

誤字脱字・感想等お待ちしております^^

感想をいただけたら執筆速度が上がるかも上がらないかもです！
（上げるよ）

〈通話 羊頭狗肉（妖刀苦辱）〉（前書き）

弁明の余地もありません……

作者の気分で執筆速度が変化する作品で……

〈通話 羊頭狗肉（妖刀苦辱）〉

さて、僕にもやらねばならないことができた。

どうしてもやらなきゃならないことが。

怒られるのは嫌だしね。

にしても、哀川さんがああいう風に言ったということとは、つまり。

「うっかり殺しちゃったとしても」

いいのだろうか。

不可抗力なのだろうか。

いや、殺し名相手に“殺さない闘い”を強いるのは結構無茶だと思
うんだけどなあ。

匂宮の分家 少なくとも相手は殺す立場である“殺し名”なの
だ。

大嫌いな“呪い名”ではない。

だったら尚更、「殺さずに」守りきるのは容易なことではない。

僕は死んだって殺人鬼なのだ。

実は呼吸をするように殺さないとやってられない。

さすがに嘘だけだ。

自分で言うのもなんだが、もう死んじやってるわけだ。

以前程の殺戮衝動はないし、自由自在とまではいかないがある程度は抑えられる。

そういう訓練みたいなものも、一応してあるし。

役に立っているかどうかは、怪しいところだけだ。

その辺りのことは我が友人に頼っちゃったし、任せきりにしちゃったからなあ。

あの人のことだ、何かしら僕の“本能”^{ホントウ}について掴んでいるのかもしれない。

確かそういう能力^{スキル}を持っていたのだろう、あの人は。

まあ、今はともかく例の“絵合”とやらを探し出さなくてはならない。

ただでさえ斬り裂き魔が横行しているこの池袋で、本物の“殺し屋”がいたとなつては洒落にならない。

あの黒幕気質そんな情報屋なら、何か少しは尻尾を掴んでいるかな？
ただ僕とは超絶的に仲の悪いあの人が、そうやすやすと情報を売
ってくれるとは限らない。

けど仕事に関しては文句のつけようもないくらい、いい仕事するん
だよなあ、あの情報屋。

それがまた苛つく。

まあ、師匠には遅れをとるであろう。

ざまあみやがれ。

勝ち誇ってみる。

嘘だけ。

決め台詞（笑）が出たところで、真面目に思考を開始する。

まず厄介なのが、僕の素性を知っているということだ。

これに関して………言っ飛ばせば哀川さんのミスなわけだが。

正直これはキツイ。

“零崎冬識”という存在の情報を、“暴力”に属する輩が握ってい
るといっものは見過ごせぬ事態だ。

あつてはならないことだ。

それだけはどうしても、許せないことだ。

折角の僕の死に物狂いの“最期”を、もう一度繰り返す訳にはいかない。

だからまあ、出来ることならいなくなってくれた方が喜ばしいのだけど。

レグラとエコさんじゃあるまいし、記憶操作なんてできないからね僕は。

うん、なんだか僕が楽勝で勝てるみたいな雰囲気になりつつあるが、実際そんなことはない。

僕のプレイヤーとしての実力なんて親愛なる兄たちには及ばないだろうし、もとより殺し屋相手に殺人鬼が勝とうとなんてしないからね。

残念ながら僕はチートキャラではないのだ。

笑えない。

ただの殺人鬼だよ。

約束に縛られた殺人鬼、だけど。

うむ、どうするか。

とりあえずは、探すしかないか。

一番効率の良いと思われる探索方法は

「うーん……………」

まあ、なんとなく悩んだ末の結論。

まずこの方法を実行するにあたって必要なのは、自意識の過剰だ。

要するに自分を過信すればいい。

これについては実を言うと、一番苦手な行為ではある。

自分に自信がないとまではいかないが、信じることができないのだ。

信頼すべき己を持っていない。

ちょっとした弱点である。

次に必要なのは、集中できる場所。

急に現実的な話になったが、この方法を実行する上では欠かせない。

頑張るには、それなりの集中力が必要だ。

集中するためには安心できる場所が必要だ。

そちらは僕の性質上、もうどうしようもできないので、仕方ない。
諦める。

諦めがはやいのが定評なのだよ。

嘘なのだよ。

コンディションが悪いのは仕方ないと割り切って、早速実行に移す
ことにした。

「よし、れっつとらい」

どこかの裏十三家みたいな発音で呟く。

さあ、真面目に頑張ろうか。

自身に投げ掛けて、僕は意識を集中させる。

全身で

とにかく全力で

感じる。

感じる。

髪の毛一本分でもいい。

探し出せ。

感じる。

感じる感じる感じる感じる感じる感じる！

必死に感覚器官に伝達する。

全身全霊で“気配”という“気配”を感じ取る。

それだけが特技なんだから。

頑張れ自分。

「
「

あ、予想外の事態。

少し、どころか相当まずいことになっている。

いや、マジでまずい。

多分この事態を正確に察知できているのは、僕だけだ。

「おいおい………」

まさしく、悪い冗談のようだった。

もう一度意識を集中させる。

……うん、気配察知と理解に狂いはなかったらしい。

僕が感じ取った冗談のような緊急事態。

“池袋中の同じような気配が、一ヶ所に集中しているのだ”。

もっと言えば、この気配は

「斬り裂き魔か………！」

最悪だった。

今この状況で、こんな事態が起きるものなのか？

一ヶ所に集まっていく斬り裂き魔。

池袋に現れたらしい殺し屋。

困った。

斬り裂き魔の“気配”が強すぎて、他の“気配”は正確に察知できないのだが。

それでも、殺し屋らしき“気配”は見つけた。

うん、我ながら頑張ったぞ自分。

“絵合”の殺し屋は、どうやら二人組らしい。

殺し屋らしい“殺気”を放つ気配を、二つほど感じた。

まだ別々に動いている様子はない。

それどころか、まだ僕を見付けてすらいないようだ。

相当の術師がない限り、“逆探知”されることはまずない。

“絵合”にそんな輩は居なかったはずだし、そういう“能力”^{スキル}を持つ人材を雇うようなら、哀川さんに情報が漏れているはずだから。

……それにしても、さすがに“街一つ分”の探査は疲れるもんだな。

昔は全然平気だったのに。

その分、作業はぞんざいだったらしいが。

師匠に文句をつけられて、必死に精度を上げたものですか。

昔話はこれくらいにして。

とにかく、今すぐどうにかすべきなのは“斬り裂き魔”だ。

“絵合”の方は気付かれない限りどうとでもなる。

斬り裂き魔の気配

何だか感じ覚えのある場所、っばい。

あー……あーっと、どこだ？

もう少し細かく探れないか？

んんんんん。

………“南池袋公園”か？

あの、臨也さんのバイトで行った公園 辺りの気がする。

まあ、おおよそそのエリアなのだろう。

とはいえ、場所がわかって僕はすぐには辿り着けない。

今回は“気配”が馬鹿みたいに強大なため、それを追っていけば辿り着けるだろう。

問題はスピードだ。

いくら全力疾走したとしても、限界というものがある。

どうにかできないか。

………。

いや、でもなあ………。

友達と呼んでくれたあの人を、あまり危険に晒したくない。

セルティさん。

確かに彼女の機動力ならば、僕よりも遙か先に辿り着くことができるだろう。

ああ、そうだ。

セルティさんはあくまで“デュラハン”。

斬り裂き魔もあまり手出しできないのではないだろうか？

明らかに、怪異としての“格”はデュラハンの方が上だ。

ならば、ひょっとして

それが。

あの、“静雄さん”なら。

とも思っただけれど、そりゃあ駄目だよな。

けれどとりあえず、セルティさんに連絡をとってみよう。

電話………はできないか。

けれど出来るだけ手短に素早く伝えたい。

返事だけ、メールしてもらおう。

携帯電話を取りだし、ついさっき登録したばかりの番号を表示する。
発信音が暫く響く。

…………… 出た！

「もしもしセルティさん、聞こえていますか？聞こえてたら、マイク付近を二回軽く叩いてください」

ぼんぼん、とマイクの籠った音が聞こえた。

通じていると判断して、本題に移ることにした。

「聞こえているとして話しますね。セルティさん、僕の言うことをよく聞いてください」

沈黙だけが返答。

気にせず続ける。

「今すぐ“南池袋公園”付近に向かってください “斬り裂き魔”が、集まってきています。お願いします。僕もすぐに向かいますから」

そこで、通話が切れた。

すぐさまセルティさんからメールが届く。

『私もあるチャットNログを見て、今向かおうTしEいたところだ。危ないよ』

所々英語なのは、焦っていて変換できなかったからか。

けど向かおうとしていたのなら、丁度いい。

返信する。

『僕も行きます』

携帯を折り畳んで、走った。

目指すのは、南池袋公園。

セルティ・ストウルルソンは人間ではない。

俗にデュラハンとよばれる、“妖精”の一種だ。

デュラハンの特徴と言えば、首がないこと。

首のない女騎士が、美しい首を抱えて死期を迎えた者の家に“首なしの馬車”を操りやってくる。

うっかり扉を開けてしまえば、盥いっぱいの血液を浴びせられてしまう

そんな、不吉の象徴として語り継がれてきた存在である。

彼女は自身の首を探すために、この池袋にやってきた。

鎧をライダースーツに、首なし馬車をバイクに変えて。

今は池袋の“首なしライダー”として過ごす毎日を、愛する恋人とともに謳歌していた。

セルティは園原杏里の家を出たあと、真っ先に自宅へと向かった。

そこで待つ恋人に、斬り裂き魔が所持していた妖刀“罪歌”と思われる包丁を見せるためである。

だが、包丁を持ち帰った彼女を待っていたのは、思いもよらぬ真実だった。

包丁を見た後、彼女の恋人は語ってくれた。

妖刀である罪歌の、目的について。

「罪歌の目的はね、セルティ。“人を愛することさ”」

恋人の一言に、疑問を抱かずにはいられないセルティ。

愛するのに斬る。

そんな斬り裂き魔　　いや、罪歌の行動の意味が理解出来なかったからだ。

「嗜虐趣味とはちょっと違うんだけどね。ぶっちゃけた話、彼女は妖刀だ。持ち主である主人にしか声を届けることができないんだけど罪歌は、人類全てを愛していた」

余計にわけがわからなくなるセルティ。

彼女は疑問符をたくさん浮かべて、恋人に聞き返す。

『意味がわからないんだが。森羅、それって一体どういうことなんだ？』

「つまりね、人間個人ではなく“人類”という一つの“種”を罪歌は愛してしまっただよ。最初は心のなかでだけ思っていた。だけど、愛して愛して愛して愛して愛して愛して愛するうちに……一人の人間を想うだけじゃ、満足できなくなった。そして彼女は人類全てを愛するようになった。だが、その想いもやがて煮詰まって、彼女は愛を行動で示したくなった」

『行動？』

「そ、行動。人間だって、様々な方法で愛を表現するだろう？それ

と一緒に。その表現方が歪んでいるか歪んでいないかはおいといて、彼女も愛を体現したくなっただね。だけど彼女は妖刀だ。愛するにも身体がない」

『……………』

「彼女はただ、触れ合いたかっただけなんだ。結局のところね。彼女は愛する人間の肉体に、自らを同化させたかった。染み込ませたかった。自分のを相手の中に入れてしまいたかった」

『なんか卑猥な感じになってきたな。……………いや、まで、ということとはつまり……………』

「そう」

恋人 岸谷森羅は告げた。

余りにも歪み過ぎている、“罪歌”という妖刀の選んだ愛情表現を。

「罪歌は 愛を表現する方法として、ただひたすら人類を“斬る”事を選んだのさ。斬る瞬間だけが、彼女が人間の全てと触れ合える瞬間だからねえ。肉から、血から、心から 命に至るまで、ね」

『……………』

セルティは森羅の話聞き、ただ「うわ……………」とだけ思った。

身の毛もよだつような話だ。

愛するために、愛するもの自体を斬る？

セルティにはやはり理解出来ないし、しようという気さえ起きない。

率直な感想が、それだった。

「まあつまり、罪歌は持ち主を操って何度も、何人も人を斬り続けていたのさ。相手の心と身体に愛の証として残すためにね。自分の愛を確認する為に、愛を形にする為に、愛した相手が自分のことを決して忘れないようにする為に、相手に深く深く刻み込んだ」

『そこまでいくと、気持ちが悪いな……えげつない』

「仕方ないよ、妖刀だし。そして彼女は人を愛し続けたんだけど、それもほんの十数年の間だけ……時が進むにつれて、罪歌は完全に姿を消した」

『そんなやつが、なぜ今になって現れたんだ？しかも、最初はネットの書き込みだったんだろう？あの滅茶苦茶な日本語の』

「姿は消していたけれど、あの書き込みを見る限りは、まだまだ人間にはご執着ってことなのかねえ？日本語は忘れちゃったのかもしれないけど。……って、ん？」

森羅は置かれた包丁をじっと見つめ始める。

影はすでに解いているので、包丁はむき出しになっている状態だった。

『どづした？』

「いや、え？あれ……………ええー？」

奇妙な声をあげながら、ひょいっと包丁の柄を掴む森羅。

セルティは危険だと思い、慌てて奪い取ろうとするが、森羅はそれを手で制しながら、疑問を口にする。

「セルティ。これ、明るいところで確認しなかつたろ」

『？いや、外だったしな。……………それより、大丈夫なのか！？こつ、あれだ、なんか心が乗っ取られそうになったりしてないのか！？』

「いや、大丈夫。……………ていうかセルティ、これ、罪歌じゃないよ」

『何！？』

その言葉に、動揺を隠せないセルティ。

思わず森羅の眼前にPDAを突き出してしまふ。

「ここ見てごらん。柄の部分」

指し示された部分を見ると、そこには小さく。

M A D E I N J A P A N 2 0 0 2

と彫られていた。

メイドインジャパン2002。

森羅は若干呆れ気味に、包丁をまじまじと見つめていた。

「なんで何十年も前から記録に残ってる妖刀が、2002年作なのかな」

必死で弁解するセルティ。

両手を顔の前でぶんぶんと振る。

『いや待て、信じてくれ。私は確かに』

「信じてるよセルティ。俺がセルティを疑うもんか。そいつが単に異常な奴で、たまたま罪歌の伝説を知っていたのかもしれない」

『いや、そうも思えないんだ。一度その男……確か、贄川周二だっけ？も被害にあってるから、その時に取り憑かれたのか。もしくは警察の目を反らすために自分で斬ったのかも……』

「その、贄川って人とは知り合いだったのかい？」

『いや、知り合いつていうか、先月の末に私に静雄のことを聞きたいつて言ってた雑誌の記者だったんだ。その日の夜に斬られたってチャットで聞いてた』

被害者だという贄川周二は、自宅の前で斬られていた。

セルティは彼について調べたのだが、そのような事件がやはりあつ

たらしい。

そこまで口に出し、考えた時点で、セルティは一つ思い出した。

罪歌が頻繁に書き込みしていた、自身の行きつけであるチャット。

『そつだ、チャット。チャットはどうなってる？』

パソコンを起動させ、ページを開いてみる。

そして、そこにあったものは。

『なんだ……………こりゃ』

そこにあったものは。

恐怖でも不安でもない、ただただ寒気だけを感じさせるもの。

背中に突き抜ける寒さだけを感じる明確なおぞましさ。

セルティは確かに、“寒気”だけを感じていた。

おびただしい数の罪歌というハンドルネーム。

そこに綴られた、罪歌の言葉。

失敗した、よくも私の姉妹を、母、今度は失敗しない、平和島静雄を愛する、池袋を愛せるから、静雄、現れて、もっともっと

いるらしく、バイクに乗る直前もそのような話をしていた。話というか、口喧嘩だった。

あの二人の場合、あの後すぐに静雄が何かしら臨也に投げつけるなどして喧嘩に発展するので、見ている方はひやひやしてしまう。

もつとも、臨也は応戦せずにすぐ逃げてしまうことが多い。

二人の喧嘩、というか静雄の暴力は凄まじく、止められるのは寿司屋のサイモンかセルティぐらいのものだ。

静雄自体は、上司である田中トムの言うこともすぐに聞くのだが、彼は巻き込まれないようすぐさま避難していることが多い。

ともあれ二人の喧嘩は軽く名物になるくらい、派手で危険なものなのである。

それを間一髪で防いだことに少し安心したセルティ。

それに対し、臨也に何もできなかった静雄は、見るからにイライラしていた。

バイクの座席をがっちり掴み、顔面に薄く血管を浮かばせている。

愛馬が痛がっていたため、セルティはバイクを優しく撫でてやった。

臨也だけでなく斬り裂き魔にも苛ついているのか、先程からぶつぶつと呟いていて、ぶつちゃけ今の静雄はかなり怖かった。

そんな時、連絡が入る。

影を器用に使い取り出してみると、電話をしてきたのは先程別れたばかりの高校生、深限冬護だった。

セルティは話せないの、電話をされても受け答えができない。

かといって切るわけにもいかないの、一応出ておくことにした。

勿論ここでも影を使う。

『もしもしセルティさん、聞こえていますか？聞こえてたら、マイク付近を二回軽く叩いてください』

とりあえずセルティは影を使って、ばんばんと二回程マイクを叩く。

後ろの静雄は通話をしていることにも気づいていないようだ。

間を開けずに、焦りにまみれた少年の声が電子音と共にかえってくる。

『聞こえているとして話しますね。セルティさん、僕の言うことをよく聞いてください。今すぐ“南池袋公園”に向かってください』

“斬り裂き魔”が、集まってきています。お願いします。僕もすぐに向かいますから』

……………！

セルティは無言で驚く。

この少年がどのようにして情報を得たのかはわからないが、考えと目的地は自身と全くと違っていいほどに同じだったことに、素直に驚いたのだ。

荒い息が伝わってくる。

走って、いるらしい。

自分のことを友達と言ってくれたこの少年は、誰かのために斬り裂き魔の集まる“危険”に躊躇なく向かっているのだ。

困った。

今時こんなにも正義感溢れる子供、いるもんなんだな。

同時にセルティは考える。

だからといって、あんな危険に立ち向かって無事ですむ訳じゃない。

確かに斬り裂き魔の狙いは静雄だけなのかもしれないけれど、池袋を騒がす犯罪者　妖刀が集まっているのだ。

危ない。

彼はただの高校生だ。

大人として、巻き込むわけにはいかなかった。

セルティは電話を切って、すぐさまメールを送る。

器用に影を操り、次々と文字を打ち込みながら。

「どうかしたのか」

セルティが何かしていることに気が付いたのか、静雄がPDAを覗き込むようにして問いかける。

静雄に向けて

『ちよつとメール』

と見せてから、セルティは冬護当てにメールを送信した。

変換ミス、多いだろうな。

少し不安になっていると、着信を示すバイブがそれを遮る。

『僕も行きます』

ただ一言。

そこにはただの一言しかうつし出されていなかった。

けれどセルティは感じた。

直感にも近い感覚。

きっとこの少年は、何を言っても止まらないだろう。

だったら、私が守るだけ。

それだけの、ことだろうが。

自分自身に言い聞かせるようにして、セルティはハンドルを握りしめた。

彼女の愛馬はそれに呼応するように、低い嘶きを目一杯響かせた。

走る。

とにかく走る。

ていうか僕、最近やけに走ってないか？

さっきも走ってたし。

明日筋肉痛になるのは確実だな。

とまあ、身体の心配をしつつ走り続ける。

今回は迷子になる心配はないので安心だ。

いや、安心というのは些か間違っている気もするのだけど。

馬鹿でかいこの“気配”の塊を追いかければいいのだから、迷う必要性もないのだ。

近づくとつれて、吐き気が増してくる。

どうにも気味が悪い。

居心地の悪いというか、“あちらが僕を拒否している”のか

否定的な空気が流れてくる。

本当に吐き気がした。

身体中の至る神経が、“引き返せ”と悲鳴をあげている。

我慢しろ。

我慢するのは得意のはずだろ。

毎日毎日自身の衝動を抑え付けているんだ。

このくらい、わけないはずだ。

現在地点は不明。

だが、確実に近付いてはいつている。

この“気配”が正確には一体どこに在るのかわからないのだが、行
つてみるしかない。

友達のためだ。

僕には頑張る理由が出来たのだから、頑張るしかない。

セルティさん、大丈夫だろうか。

セルティさんは、何らかの情報を得て、斬り裂き魔のもとへ向かっていたのだろう。

あの様子からすると場所もわかっていた、のかな？

その辺りはセルティさんに直接聞かなければわからないが、とにかく彼女の機動力があれば僕よりもかなりはやく辿り着くはずだ。

斬り裂き魔の巣窟へと。

………ものはずみでセルティさんに頼んでしまったが、本当に大丈夫だろうか。

ていうか、普通に考えてごく一般的な高校生であるこの僕（客観的見解）が、そんな危険を体現したかのような場所に向かう方がよっぽど危ない。

滅茶苦茶危険だ。

セルティさんはそう考えているだろうが、最悪の場合………

最悪の、場合。

依存症ディペンダンスシンブートンを見られるわけにはいかないし………

ひたすら逃げているか。

まあもし“友達”が危険に晒されることがあったなら。

僕は迷わず依存ほくじしん症状を使うだろう。

そのための獲物だ。

………近いな。

もうすぐ、という感じがする。

さて、それじゃあ。

戦争といこうか。

(通話 セルティ・ストウルルソン
友人)

(被害者 なし
加害者 なし)

〈通話 羊頭狗肉（妖刀苦辱）〉（後書き）

1カ月強ぶりですね。

お久しぶりです四季織です。

実を言いますとこの作品。

何話か在庫がありまして、まだギリギリというほどではないのです。あと3話くらいストックあるのかなあ…

しかし作者の脳内では、大分前に書き上げた話なので読み返してみると、文才のなさに対し悲しくて仕方ない……
どうにかならないもんですかね。

というわけで前話で女子の部屋に上がりながらも死亡フラグをたてた 作者もびっくりな主人公ですが。

今回は戦闘フラグたてていきましたね。

なんなんですかね、彼は。

全く計画性がない上に 勝手に動くんですが。

ともあれ、1カ月に一回更新という低い目標をもってがんばります。

あ、それと次回すごいことやります。

零崎小説好きな方必見ですよ

これはほんとに楽しみにしてください！

へただただ雑談をしようか、まあそんなこと言いながら馬鹿みたいに騒いじゃ
まずは未読の方、烏妣 揺様作の「零崎宗識の人間考察」を読みま
しょう。

すべてはそこから始まります。

「ただただ雑談をしようか、まあそんなこと言いながら馬鹿みたいに騒いじゃって
愛すべき日常。」

いとおいしい程に、程遠かった日常。

普通の生活なんて夢のまた夢だと、僕は一時期真面目に考えていたことがある。

今現在の僕の日常は明らかに普通ではなく、異常なのだ。

異常で、非日常なのだ。

と、そんな下らないことを真剣に考えるような青苦い時代が僕にもあったのだ。

嘘混入。

けれども僕は、そこに関して大きな勘違いをしていた。

日常だなんだというのは、本質的には何ものにも変わりはない。

非日常でない日常なんてないし。

日常でない非日常なんてないのだ。

それは他でもない“普通の世界”で学んだことであり、殺人鬼であ

る僕だからこそ感じられた違和感なのだと思う。

絶対が絶対であるように、最低は最高に揺るがない。

最低が絶対であるように、最高は絶対だ。

だからこの“絶対”と思えるような毎日を、僕は死んだって守りたいと思う。

絶対の定義は個人が決める。

他人には、到底理解されないだろう“絶対”という意識、意志、そして違和感。

要するに何が言いたいかというと、僕はこの平凡で幸福な、夢のような生活を続けられればそれで良いということをお願いしたいのだ。

その為ならば、何だってしてやる。

そう、何だって。

願いを叶えるのは、いつだって自分自身だ。

願いを縛るのが、自分自身であるように。

だが。

それでも、だ。

「今回は特例すぎる……」

あんなにくだらだと言葉を垂れ流してはみたものの、そんなことには何の意味もありゃあしないのだ。

僕は一人語りを食べて生きている生物だから、致仕方ないのだけど。

いや、戯言だったかな？

嘘だけど。

「ヘーイ、そこのイケてるボーイ！」

何故エセ英語。

「……このクラスに留学生なんて来てたっけ？帝人くん」

「あはは……」

「じゃああれかな。ここ最近の気温の変化に彼もきつと参ってしまつて、ついに脳の言語機能がショートしちゃったのかな？」

「それはなくもないよね」

「帝人お！そこは否定しろよ！」

エセイングリッシュボーイこと正臣くんが、泣きそつな顔をして帝人くんの腕にしがみつく。

はっはー、何かあったのかな？

僕は存じ上げないな。

普通に嘘だけど。

腕に張り付いている正臣くんを無理矢理引き離し、帝人くんは呆れ気味に溜め息をつく。

わお、リアルな溜め息。

あんな溜め息は滅多に見られるもんじゃないぜ？

ラッキー深隈くん。

わかる人にはわかるパクリ。

「いや……うん、ね？」

「何なんだその妙に悲しくなる視線のやり取りは！哀れみの目で目配せすんな！」

正臣くん、決死のツツコミ。

彼のツツコミの精度が上がっているのは、気のせいかな。

何はともあれ。

本日の授業やら何やらが全て終わり、放課後。

ホームルームの最後の砦（微妙な嘘。）である号令を掛け終わった直後に、僕のケータイが振動した。

今日は珍しくケータイを携帯していたので、それに気付く。

……学校の友達が今メールしてくるはずがないし、一体誰だ？

と、何も考えず何気なくディスプレイを確認する。

「は？」

思わず声が漏れた。

二度見した。

何故だ。

いやいやいや、意味わからん。

脳内を疑問符が駆けずり回る。

誰か駆除してくれ。

30秒くらいフリーズした後に、静かに静かに折り畳む。

僕は折り畳み派なんだ。

第一、スマートフォンを使いこなせる訳がない。

よし、いいぞ。

いつもの感じに戻ってきた。

この妙な心情をリセットしたところで、現在に至る。

まだ二回しか確認していない。

そくだ……きっと冗談だ……悪い夢だぜ。

二人に見えないように、こっそりともう一度だけ確認をとる。

そして頂垂れた。

溶けてしまいたかった。

液体になって地中をさ迷いたくなった。

ごめんなさい嘘です。

だが、冗談であって欲しかったのは本当だ。

何故だ。

一体全体どうしてこんなことに。

やばい、顔がひきつってきた。

「ちげーよ、あれだよ、帰ろーぜって話だよ。今日は杏里いないんだろ？」

園原さんの不在を提示する正臣くんは、そりゃあもう落ち込んでいた。

あからさまにがっかりしていた。

全く、彼ほど自分にある意味正直な人間を、僕は見たことがない。

なんて、戯言戯言。

「仕方ないよ……学校自体休んでたんだから」

そう言う帝人くんも、心なしかテンションが低い。

園原さんの偉大さを再三おもい知ったのであった。

続く。

……嘘だよ。

「杏里が休むなんて、普通に珍しいよな？連絡してみっか？」

「下手に連絡とって迷惑かけたら不味いよ。ほら、帰ろう？」

「はいはい、わかりましたよーっと。つまり帝人、お前は俺と杏里が電話するのを僻んでるわけ……」

「冬護くん帰ろうか」

「賛成だよ」

「俺が悪かった！」

帝人くんに至極弱い正臣くん。

第三者からすれば、大分面白い二人組ツーマンセルなただけ。

あ、そうだ。

さっきのコント（嘘です。）の途中では普通に受け答えしたんだけども。

「ごめん、二人とも。実は今日一緒に帰れなかったりするんだよね」
言い回しが面倒くさいという意見は強制却下。

根本的な性格の問題だ。

あしからず。

「マジかよ！何だ何だ二人して……って、はっ！ま、まさかお前ら……」

「え！？そ、そそそそそれって」

「いや、そんなわけないだろう。帝人くんも本気にしないの」

やれやれ、といった風に両手を上げてお手上げポーズ。

全く、言い掛かりも甚だしいぜ。

「まあほら、そういうわけだから。そろそろ行かないと」

横目で時刻を確認。

ホームルームが終了してから既に、大分時間が経っていた。

急がないとまずい。

何がまずいのか具体的には主張できないが、まずい。

まずすぎて水分が汗で50%は失われてしまった。

まあ、嘘だけど。

とにもかくにも、急いの方が良いのは確かだ。

「お前がそんなに急ぐなんて珍しいよな。何か大事な用でもあるのか？」

正臣くんはつまらなそうに言う。

さすがに帝人くんと二人で下校も飽きたのかな。

何て言ったら、帝人くんに失礼だけでも。

僕は基本的にのんびりやさんだし（嘘だ）、焦ることなんて余りない。

と、よく言われる。

そんな馬鹿な……と勇者風反論を胸に押し込め、僕はぐつと下唇を噛み締めた。

嘘だけど。

「ちょっとね……急がなきゃ殺される用事が出来たんだよ」

「随分大袈裟だな！」

「そんなに急ぐ用事なんて、本当に珍しいね。い、いや、別に貶してるわけじゃないよ？」

わかっているさ、帝人くん。

君の優しさも、僕の印象も。

キラッと効果音を付けて宣言した。

嘘なんだけどね。

だがこの用事とやらは本当に外せない。

「じゃ、いくね」

鞆を肩に掛け、教室のドア方面へ。

体が重いのは気のせいだ。多分。

さて、と。

ちよつくら、兄貴にでも会いに行きますかね。

流石に迷子にはならなかった。

例によって、僕の本日の探し物（ん、人？）は目立つこと極まりない、端から見れば迷惑も甚だしい存在なので、問題なし。

のーぷろぶれむ。

さて、その探し物だが。

そもそも僕の目的はあの白い頭の人で、本来ならばこんなのはあり得ない邂逅だ。

原因はわかっている。

いや、この場合は元凶か。

事の発端は発覚している。

というか、確信している。

……何かもう嫌だな。

話しかけたくないな。

よし、無かったことにしよう。

いっつおーるふいくしょんだぜ。

シカト スルー。

作戦決行。

「……っておい、てめえ普通にシカトすんな！」

ちっ、バレたか。

いつになくあからさまに舌打ちしてみる。

というのは冗談で、まあため息を吐きながら、とりあえず上を向いてみる。

くそっ、身長差は縮まらないか。

「うん、相も変わらずペンキを被ったかのように真っ白なイカす髪の毛だね。それにキャラ立てのような眼帯、僕は好きだよ。ところで宗兄、イカすって死語だと思わない？」

「ああ、相変わらずいちいち回りくどくて面倒な会話をするよな、お前は。ところで冬識、お前いつから高校生になったんだ？そもそも集団生活なんて送れたのか？」

「余計なお世話だよ。知ってる？殺人鬼だって人間と同じように成

長したりするんだぜ」

「キャラ立てとか率直に言うんじゃないやねえ。いいんだよ、これが俺のスタイルなんだよ！」

「まあ、何はともあれ」

「ん？」

「久しぶり、宗兄」

「ああ。久しぶりだな、冬識」

「また会えて嬉しかったりしなくもないよ」

「もう会うことは無いと思ってたぜ、正直な」

むう。

本音を理解しやすいのは、家賊だからか。

僕は嘘って素敵だと思うんだよね。

嘘だけ。

何はともあれ、本日の予定をそろそろ説明しよう。

特に予定というほどでもないのだが、まあしかし。

今回は異様に異例で特例だ。

僕のテンションも心無しかおかしい。

目の前に立っているのは 殺人鬼。

紛れもない、殺人鬼。

つまるところ僕の兄である、零崎宗識なのだった。

零崎宗識は殺人鬼である。

名前からして否定しようもない。

否定する気も無いけれど。

そして僕。

零崎冬識も、殺人鬼だった。

「いや、普通に久しぶりだな。お前と最後に会ったのなんて覚えてねえぞ。今より背が低かったのは覚えてるけどな」

それこそ、余計なお世話だ。

僕だって覚えていない。

そのしたり顔をやめるんだ我が兄よ。

「……ていうかさ、とりあえず聞きたいこと、聞いていい？」

「ん？ああ、何だ？」

よく考えてみれば、白髪眼帯の青年と奇抜な頭をした高校生が並んで歩いているという、あらゆる意味で絶妙な光景が広がっているの
だろうが。

若干嘘。

「僕のアドレス、誰から聞いたの？」

「哀川潤」

「だよなあ……」

「つたく、いくらなんでも軽すぎる。」

「何だ、その軽すぎるノリは。」

「哀か……潤さんに聞いたつつつか、無理矢理登録させられたんだよ。そもそも俺は いや、“俺ら”はお前が生きていることさえ知らなかったんだしなあ」

「そうなんだけど。」

要するに、悪いのは全てあの赤い請負人だ。

今確定した。

「ふうん。で、宗兄は、今請負人やってるんだっけ？何か仕事でもあったの？」

宗兄が請負人をやっているというのは、前々から知っていた。

わざわざ東京にまで来たんだ。

何か、そっち関連の仕事があったのだと考える方が妥当だろう。

「まーな。ちよつとした野暮用だ。観光も兼ねて、な」

「観光ね……宗兄、どうやら宗兄は田舎から来たみたいだけど、ここはうざいくらい人がいるからね。うっかり殺しちゃったとか、洒落にならないから」

「人識じゃあるまいし、そんなことするか！俺は一応は常識人なんだ。一応な」

確かにひい兄だったらそんなのお構いなしだぜー、となる可能性大だが（曲兄もか……）、宗兄は常識人だったらしい（自称）。

いや、そんな成りしてる殺人鬼に言われても。

説得力は皆無だった。

人のことは言えないけれど、ご愛嬌ということ。

「宗兄、まさか1人で来た……訳じゃあないよね？」

別に拒否感はないが、何だか負けた気分になりそう。悔しいだけ。

「違いよ。俺の仕事のパートナー（？）も一緒だ」

「の割には姿が見当たらないけど……、あ」

ふと前方を確認してみる。

レーダー発動びびびび。

よくある光景その1、に当てはまる情景だった。

誰かがおもいつきり絡まれてる。

うわあ、スルーしづらい。

が、手も出しづらい。

「いやあ、都会って怖いよねえ」

「あたかも俺の台詞みたいに言うな。あーあ、確かに下らねえことするな。そうか、これが都会か……」

「そうだぜ。これが都会だぜ」

宗兄に間違った知識を植え付けよう。作戦只今実行中。

参加者絶賛募集中。

嘘だけど。

「ったく……仕方ねえな……」

を。

我が兄は思いの外正義感の強い好青年（笑）だったらしい。

まあ、宗兄がその気なら協力はするが。

流れに逆らい、そのー、なんか目的不明な集団へ向かう。

黄色いバンダナ。

……どこかで見たことあるな。

「うわあ、ちょ、やめてくださいよ!」

中心で抵抗する少年（仮）の音がぼんやり聞こえる。

はっはー、何だか初池袋時を思い出さず。

あの頃は僕だって以下略。

「……ちょい、そこのにーちゃん達」

正義の青年（笑）こと宗兄が、ぼん、と不良集団の一人の肩に手を

置く。

ああ、ん？と目で訴えながら振り返る不良その1。

「あのさあ、別に俺だって説教たれるつもりはねえよ？けどいい年して恥ずかしいとかそーいう感情はないわけ？つたく、だからこの国はダメなんだ。つまりだな、今あんたら相当痛いことやってんだぜ？自覚してほしいわけ、自覚。わかんねえかなあ？あー、めんどくせえ、さつさと去りやがれこの野郎。殺すぞこの野郎」

てかなんとか宗兄がべらべら喋りだした為（軽いジョークだと流せない）に結果的に気の弱そうな僕が絡まれるわけで。

「んだお前、あの白いやつ連れかあ？」

不良その2が僕に絡んできた！

全体のステータスが3下がった！

「うあつ、とうつ………つて、あれ！？」

二人別役で頑張っている中、絡まれていたらしい少年Aが不良集団から飛び出してきた。

囲まれていたために、さつきから顔が確認できなかつたのだが、

少年A（仮）は、喋り続ける宗兄を指差して叫んだ。

軽く叫んだ。

結構な街中で、遠慮なく叫んだ。

「む、宗識さん！！！！」

「み、命！？」

あれ。

……知り合い？

「ふうん。つまり、彼が宗兄の相棒ってわけか」

「まあ、ざっくり言えばそういう感じだ。なあ、命？」

「相棒、というより僕が勝手に手伝ってる、みたいな感じですけどね」

不良さんたちを宗兄の眼力だけで撃退した後、歩くのも面倒なので喫茶店に入った。

隻眼パワー、素晴らしいね。

そっぴゃこども、軋兄と仲良く対談したあの喫茶店だ。

「……成る程」

まさか宗兄が、こんな一般人を“パートナー”にしているとは思わなかった。

びっくりだ。

超驚きだ。

眼前に座る、サツキヤミミト五月闇命くん。

彼はどこからどうみても普通の高校生、といった感じで、間違ってもこちらの世界の人間でないことは明らかだった。

雰囲気とかで、確信できるほどに。

にしても、(多分)男なのに可愛い感じの顔立ちだな。

羨ましいぜ。

「?……僕の顔に何かついてます?」

「あ、ごめん、何でもない。……ん、ところで命くん。君多分僕とタメだし、敬語とか堅苦しいから、普通でいいよ普通で」

何気に敬語とか、苦手なのだ。

使うのに抵抗はないけど、使われるのは落ち着かない。

相手が女の子だったらそれもありかもしれない以下略。

「そうなの？何か、冬識……くんで、僕より年上な雰囲気あるんだけど」

「あー、こいつ、普通に年齢詐称とかするから、実際年齢なんて伊達だぜ？」

「失礼だな。人をそんな詐欺師みたいに扱わないでくれ」

否定はできないが。

うん、見た目はそうでもないだろうけどね。

「で、命くんはもしかして東京初めて？」

彼はさつきから妙にそわそわしている。

うずうず、といった感じで。

「うん。実は初めてなんだよね……こんなに人がいるところも、落ち着かないし。絡まれたし」

「そりゃあ、災難としか言いようがないんだけど。僕も初日に絡まれたしね」

なんだ宗兄。

その明らかに嘘だろ、といった表情はやめてくれ。

「んじゃあさ、提案と言ったらなんだがね」

おっと、アイスココアが来てしまった。

ストローを差して、一口啜る。

命くんはブラックコーヒーか。

大人だな。

宗兄、何故バナナチョコパフェを頼んだ。

と、視線で直訴してみた。

嘘だけど。

「どこか行きたいところあるなら、僕が案内するよ？超身近ならギリギリ大丈夫だから」

「え？」

呆けた顔をする命くん。

何だか心なしか、帝人くんに似てる気がしないでもないな。

一方僕の兄（だっけ？）は、クリームを喉に詰まらせたのか咳き込みながら、僕の方を見て爆笑していた。

おのれ零崎宗識。

「お、おま、超方向音痴のくせして……案内とか……ぶっ」

「どうかな？」

スルーおあスルー。

で、スルー。

「それはありがたいけど……冬識くんは大丈夫なの？予定とか、あるんならそつちを優先してほしいし」

「ああ、ないない。全然暇人だからのーぷろぶれむ」

「おい命……こいつに案内なんてさせたらその内海か山とかにで」

いかりの鉄槌！

ゼロザキムナシキに30ダメージを与えた！

「じゃあ、よろしく頼むよ」

「あいあいさ」

答えて、アイスココアを再び啜る。

甘くて美味しいじゃないか、ココア。

で、完食。

いや、完飲か？

命くんも飲み終わったらしい。

宗兄？

あれだけ食べれば十分だろう。

「よし、行こっか」

「あ、ちょ、待て。俺を置いてくな」

宗兄の必死の叫びが聞こえる気がする。

気のせいかな？

ついでに伝票を宗兄の手元に挟んでおいたので、もう何も問題ないだろう。

「あ、そっだ」

唐突に思い出す。

命くんはやはり何呆けたような顔で、「え？」と聞き返す。

「街中では僕のこととは冬護って呼んでね。誰かに聞かれたら、色々面倒だからさ」

君にもわかるだろう？

真の意味で、住む世界が違うということ。

零崎は存在しえない危険因子なのだということ。

「わかったよ」

そうして僕らは、喫茶店を後にした。

「ごめん、僕も友達に教わったルートだったからさ」

「全然大丈夫だって。にしても、さすが首都、すごいね」

「まあ、腐っても朽ちても首都だからね」

「……いや冬護。確実にお前の方が色々買ってるんじゃないか」

「数奇^{スウキ}さんもそんなこと言いながら買ってるんですし、攻める理由がないと思うんですけど」

正しい。

正しく正論だった。

命くんは頼れる正論者だよな。

ちなみに数奇さんとかいう変な名前は、宗兄のもうひとつの名前＝偽名らしい。

「いやあ、いい買い物したなあ」

「だから、そもそも命のための案内だろうが！お前が一番楽しんでたんじゃないか……？」

ほっとけい。

久しぶりだったからな、とらのあな。

今月のお小遣いを結構使ってしまった。

「宗識さんとかと都会を歩くなんて、何だか新鮮だなあ。月屑さんツキクスとかも来ればよかったのに」

「……………？」

ふうーいず月屑さん。

視線で訴える。

「あいつらだよ、匂宮の分家の“紅梅”」

「……………ふうん」

殺し名、か。

まあ宗兄は昔から横に繋がりがあつたみたいだし、驚くことでもないな。

命くんに対しては、驚くほかないけれど。

紅梅ねえ。

知らないな。

あいつら、とかいわれても。

「ていうか命、それについては心配いらねえぞ。月屑なら、今来てるから」

「は!?!?どうして、なんで!?!?」

「いや、別に。誘ったら行くっつうから……」

ノリ軽。

近頃の殺し名はみんなそんな感じなのか?

何だか危つい気がするねえ。

色んな意味で。

「そうだったのか……てか宗識さん、何で教えてくれなかったんすか!」

「タイミング逃したんだよ!」

「それは宗兄が悪い」

うん、明らかだった。

と、頷いた瞬間。

どがあああああああんんん

……という爆音が聞こえた。

まさに爆音。

破壊音。

「何だ？」

「え、な、何ですか今の!？」

さて、池袋の常識を思い出してみよう。

こんな風に爆音が聞こえてくる要因はいくつか思い当たる。

それらは

「こたえanswer. その1、平和島静雄が折原臨也に向けて自動販売機を投げたとき。その2、平和島静雄が折原臨也に向けてガードレールを投げたとき。その3、平和島静雄が折原臨也に向かって投げた道路標識をサイモンが受け止めて投げ返したとき」

……。

「さて、どーれだ」

……………3。

「残念、不正解。正解はセルティが必死に白バイから逃げるうちに、誤って昔シズちゃんがぶん投げた元自動販売機のゴミ屑を思い切り弾いてしまった、の4番でした！」

「あ、そうですかいやあ間違えちゃったなあうっかりしちゃいましたよあははは」

「うっかりだなんて、君にしては珍しいじゃないか。そう思うよね？ 零崎宗識 ムーちゃん」

真っ黒なファーコート。

年齢の定まらない顔立ち。

どれもこれも、僕が嫌いなものを凝縮した化身のような、存在。

つまり、いらぬ存在。

「随分久しぶりだねえ。そっちの子は君の相棒か何か？ 名前は確か五月閻命くん、だっけ」

命くんが明らかに驚いたのがわかる。

それが普通の反応だ。

だって、見ず知らずの人間にいきなり名前を呼ばれたら、戸惑うに決まっている。

「……久しぶりだな、折原臨也。オリハライサヤ 実を言うと、お前に用があつてわざわざここまで来たんだよ。ていうかムーちゃんってなんだよ。普通に気持ち悪いわ！」

「へえ。そりゃありがたいね。感動の限りさ。零崎一賊の殺人鬼に会いに来てもらえるなんて」

乾いた笑いを消さない臨也さんみたいなひと。

ちなみに僕はこの人嫌いだからきちんと描写しません。

ご了承ください。

嘘だけど。嘘だけど。

「零崎一賊の殺人鬼……って、宗識さん。この人が来るときに話してた」

「折原臨也。よろしくね、五月闇くん」

そりゃ、初対面なら人懐っこいとか、そういう印象を受けるのかもしれないが。

実際はそんなことはまったくない。

それに気付くのは、大抵騙された後だ。

とかいうとあの人は詐欺師か何かなのかと思うかもしれないが。

折原臨也。

職業は、情報屋。

「えっと、よろしくお願ひします」

「しなくていいしなくていい」

さあ今すぐこの場を立ち去るんだ。

ああ、気分が悪い。

「なんだい、酷いなあ。自己紹介くらいいいだろうに」

「うっさいですよ全く。あなたに関してはプライバシーもあつたもんじゃないですね」

意地の悪い性格がそれを拍車している。

いや、あんな性格だから、情報屋なんてやっていられるのか。

「まあ、いいや。そうそうムーちゃん。俺に用があるなら、事務所のほうで話をしようよ。こんな街中じゃあれだし、美人秘書もいたりとかしちゃって」

「よし、行くか」

「最低だぜ宗兄」

「ドヤ顔が悲しすぎますよ……?」

「そんな目で俺を見るなああああ!」

いや、ねえ。

ちょっと軽く引いたよ。

「まあまあ、いいじゃない二人とも。ムーちゃんだって立派な大人なんだから」

「あんたが言うな」

大人って怖いね。

なんなら僕は一生子供でいたかったりするんだぜ。

「んじゃ、真面目にちと行ってくるわ」

ま、どうせ仕事の話だろう。

宗兄、ファイトだぜ。

苛められたら僕に言うんだよ。

と、以心伝心兄弟ならきつと伝わるぜ、的な雰囲気醸し出してみ
る。

嘘だけど。

「じゃあ、いつか。僕んちに集合ということだ」

「ああ、わかった。そっちはそっちでぶらぶらしててくれりゃいいから」

「また後で」

臨也さんに軽くガンを飛ばし（嘘だ。）、宗兄を見送る。

……さて、これで命くんと二人きりという微妙な状況に陥ってしまった。

いや、もう、どうすることもないんだけどさ。

命くんは何だか、絡みやすいのでいいんだけど。

「で、他にいききたいところとかある？」

このまま帰るというのも味気無いし、まだ家に帰るような時間帯でもない。

さて、どうしようかねえ。

ここは命くんに任せる。

「いや、冬護くんの行きたいところについていくよ。どうでもいいから」

をを、控えめ好青年。

とは言っても、あまり行くところもないのだが。

……まあ、軽くぶらつくか。

「僕にとっては何かさ、全部が新鮮っていうか、物珍しいからさ……
……って、あれ？」

命くんが口を嗣ぐんだ。

ん、どうした。

「うわ、もしかして……」

嫌そうな表情だなあ。

すごい怪訝そうな顔だ。

何だよ、どうしたっていうんだ。

などと考えに耽っていたら、なにやら怪しいひと発見。

本能が逃げるといっている。

気がする。

「よもやそこにいるのは五月晴くんじゃないか？それに、右のは。」

「五月闇ですさ・っ・き・や・みー！」

「なんだ、五月病くん。」

「もういいです！」

あー、なんとなくわかった。

このひとが、“紅梅月屑”かな。

「ところで睦月闇くん。宗識のやつはどうした。」

だいが名前を間違えられているが、命くん諦めた模様。

「今、ちょっとした仕事の話をしてるみたいです」

「成る程。で、右の彼はだれだ。」

右の彼いこーる、僕。

自己紹介的な流れなのか、これ。

「零崎冬識くん　宗識さんの弟だそうです」

命くんありがとう。

何か普通にありがとう。

紅梅さんは多少驚いたらしいが、あまり表情は変わらなかった。

「零崎一賊、殺人鬼か。ただでさえ人数の少ない零崎と、こんなと

「ここで出会つとはな。」

ふむ、うなずける思考だね。

僕の知名度なんて、知れたもんだし。

あつても困るが。

「私は紅梅。紅梅月屑だ。宗識から聞いているだろうが、匂宮の家といえはわかるだろう。」

「あ、どうも。宗兄の弟こと零崎冬識です。以後よろしく」

丁寧に言われてしまったら、丁寧に返すほかない。

なんだこの堅苦しい会話は。

微妙にキャッチボールが成立していないぞ。

むしろ千本ノック的な感じだぞ。

「月屑さん、こんなところで何やってんです？」

命くんからもつともな質問。

「いや、今期深夜アニメのファイルを総まとめ買いしようと思つてな。」

紅梅さんからあまり答えになってない回答。

この人は本当になにをしにきたんだ……

「ほんとに何しに来てるんですか……」

命くんと思いがシンクロしていた。

ちょっと感動したりしなかったり。

「まあ、宗識がいなければ仕方ない。また時間を潰していよう。」

「紅梅さん、宗兄に用でもあつたんですか？ だったら、折原臨也とかいうふざけた情報屋の事務所にいけば会えますよ」

嘘じゃないぜ。

「折原臨也…… ああ、情報屋か。わかった。感謝する。」

有名人だな、臨也さん。

どうやら紅梅さんも折原事務所行きらしい。

言い方が悪いものの例。

「では五月間くん、帰ったら会おう。零崎くん、縁があればまた会おう」

あ、自力で来てたんだ。

「はい、じゃあまた後で」

「縁が“無”くても、また会いましょうか」

変な人だ……な。

いや、人のこと言えないんだけど。

紅梅さん、アニメイトらしき袋を手にもち退場。

「……何だったんだろうね」

「作者の自己満じゃない？（）メタ発言」

気を取り直して。

「うーん……ほんとにどうしようか」

「んじゃ、適当に歩いてみるか」

迷子になる確率もゼロじゃないが、がんばればなんとかなるぞ。

雑談枠といこうぜ。

だらだらと話すだけってのも、悪くない。

曲兄のセリフを引用してみる。

「あかさ、冬し……冬護くん」

「ん、なに？」

命くんは、なんだか少し聞きづらそうな表情で、歩みを止めずに口を開く。

何かね。

「冬護くんは、宗識さんの弟なんだよね」

「うん」

「ということは、殺人鬼なんだよね」

「建前上はね」

「冬識くんは、人を殺せるんだよね」

「、」

ん、どうだろう。

答えづらいことこの上ない質問だね、これは。

真面目に考えるべきなのか。

あえてお茶らけて答えるべきなのか。

どちらにせよ、僕にだってわからない。

僕は僕自身について、何も知らないんだから。

「いやさ、実を言つと僕、一度死んでるんだよね」

「は!？」

素っ頓狂な声。

そりゃあそうか。

「物理的に死んだわけじゃない。現実的に死んだわけじゃない。けれど、確かに一度死んだ」

「……うん、」

「そしたら、人が殺せなくなった」

いや、ちがうな。

人を殺せなくなったから、僕は死んだんだ。

「けどそう兄だって軋兄だって、勿論宗兄だって、家賊であることをやめようとはしなかった」

だけど、さ。

けじめってのは、つけるもんだらう？

僕はそうやって知ったかぶって。

「まだ、逃げてる途中なんだよ」

結局は、そういうことだ。

つまり、僕はただの意気地なしだということ。

「……………そんなこと、ないとおもっよ」

「え？」

どういこと？

普通に呆けた顔をしてしまった。

「はじめをつける、なんて、そうそうできることじゃないし
冬識くんは、頑張ったんだろ？」

「……………」

「少なくとも僕なんかよりは全然、強いよ」

そんなことないんだって。

全然、そんなことはないんだって。

命くんにとっての“零崎”がどのようなものなのかわからないけど、
君の知ってる宗兄よりは、僕は全然ダメなんだって。

「とりあえず　宗識さん以外の零崎が、冬識くんが、そういう
ひとでよかった」

「……………そうかい？」

まあ、喜んでくれたならなによりだが。

あ、家ついちゃった。

奇跡。

「……………お茶でも飲む？」

「じゃあ、いただきますかな」

結局、部屋で雑談枠か。

「あ、おかえり宗兄」

「はやかっただすね」

ぜえぜえと、息の荒い宗兄が帰宅。

「つよし、命、帰るぞ」

「え？」

あちゃ、はいお帰りです。

なんか、残念なような複雑な心情。

深刻なエラーが発生したため、完全描写は無理なのです。
嘘だけだ。

「てかはやくしねえと電車、電車が…！」

「急ぎましようか！」

うん、そりゃあ急いだほうが良いな。

帰れなくなるとか、展開がベタ過ぎるっての。

そうなったら宗兄の責任だからな。

「じゃあ、案内してくれてありがとう冬識くん。また、暇があったら来るよ」

「そりゃ嬉しいね。いつでもおいでよ」

「……なんだお前ら、いつのまにかそんな仲良くなって」

高校生の友人作りスキルを甘く見ちゃいけないぜ、宗兄。

そんなわけで僕と命くんはマブダチになりました、と。

「ん、じゃあね宗兄。そう兄とか曲兄にもよろしく」

階段を下っていく宗兄に、もう一度別れを告げる。

宗兄は少しだけ神妙な顔をして、

「……冬識、お前、大丈夫か？」

「ん？」

「家賊がいなくても、大丈夫か？」

……ああ。

どうだろう。

多分、ダメかも。

けれど愛すべき兄に、余計な心配はかけさせるもんじゃない。

「友達がいるから、大丈夫だよ。素敵な友達がさ」

「……そうか。ならよかった」

何か、笑われた。

ひでえ。

「何かあったら連絡しろよ」

「僕にもねー」

軽く手を振りながら、手すりに体をもたれかける。

ふう。

なんだか長い一日だった。

「あ、冬護くん」

ドアから顔を出したのは、僕の親友（笑）帝人くん。

隣室だし、よくあることだ。

「やあ、帝人くん」

「今日はどうだった？　　っていつても、なんかいいことあった
みたいだね」

「む、なぜに？」

「いやあ、なんかいつもより楽しそうな表情だったからさ」

さすが帝人くん。

よくわかってるじゃないか。

「まあ、ちよつとね」

兄貴と、新しい友達に会えたから、さ。

「へたただただ雑談をしようか、まあそんなこと言いながら馬鹿みたいに騒いじゃ
お久しぶりです、運動不足の四季織です。
ということでは今回は

「奇跡のW1周年特別企画 コラボしちゃおうぜ」

というノリから始まりノリで終わろうとしている1周年企画にのっ
とり3日くらいで三分の二を書き上げた、色々ギリギリな作品とな
っております。

さすがにクオリティ低いです。
ご了承ください。

まずひとこと。

あー、楽しかったあ！

宗識さんはもつとかっこいいぜ とか 命くんはもつと可愛い(?)
ぜ などの批評は極力スルーしてくださると嬉し()

とにかく書きたかっただけの月屑さん。
月屑さん大好きです。

素敵な企画を提案してくださった同志、烏妣 揺様に最大級の感謝
を！

最後にひとつ。

本作品は「零崎冬識の人間模様」ならびに「零崎宗識の人間考察」
とは一切関係ありません^^

感想待ってます。

感想くれたら感動して独り泣きますよ！

それに、こんな作品に一年も付き合っただ読者様。

本当にありがとうございます。

一年たっても一巻分終わらせられない自分を許してください（

これからも冬識をよろしく願います！

〈南池袋公園 手袋と背中合わせ〉（前書き）

お久しぶりです。

前は特別企画でした。

今回はただの冬識くんをお楽しみください。

〈南池袋公園 手袋と背中合わせ〉

平和島静雄という存在について、僕は思考を重ねずにはいられない。

とはいえ、僕自身彼の存在を知ったのはつい最近のことだ。

平和島静雄。

池袋、最強。

池袋において、“絶対に手を出してはいけない”と言われる危険人物。

金髪のバーテンダー。

実際にはバーテンダーではなく、借金の取り立て屋らしい。

“池袋最強”と聞いて思い浮かべる姿というのは多種多様だと思うが、何しろ“最強”だ。

ごく自然に考えて、筋骨隆々であったり傷が沢山あったり……なんてありきたりな“ヤバそうな奴”を想像することだろう。

だが彼は見た目、“普通の”青年だった。

外見で言えば、細身の長身、金髪と青いサングラスか特徴的なただの街のチンピラ、といった具合である。

まあ、僕なんかは“見た目は問題ではない”なんてことは重々承知の上、常識もいいところなので驚きはしなかったんだけど。

見た目なんて、究極的にはどうでもいいのだ。

良い例が出夢ちゃんね。

平和島静雄と聞いて、まず耳にする情報。

それは圧倒的な“暴力”だ。

自動販売機を“投げつけた”とか、ガードレールを“ぶん投げた”とか、標識をいとも簡単に“振り回した”とか。

信憑性のない、疑わずにはいられないような胡散臭い噂ばかりが、彼の情報の周囲には溢れている。

未だに信じられないが、聞くところによるとどうやら噂は本当らしく、成人男性など軽々と投げ飛ばす　　といったことは多々起る日常的な風景らしい。

そんな馬鹿らしい人間が存在するのか

そんな阿呆らしい人間が、“普通の世界”に存在しているのだろうか。

例えば池袋に住まう人々に“この街で一番強い奴は誰だ？”と聞いてみたとする。

黒バイク、ヤクザ、サイモン、折原臨也、警官、ダラーズ、“黄色いカラーギャング”……………

答えは様々だろう。

ただど一つだけ確信が持てる。

きっと、その“強い人たち”は皆同じ結論を出すだろう、という確信じみた予測。

僕の親愛なる友人、黒バイクに“最強は誰か？”なんて聞いても答えは決まっている筈だ。

ヤクザの皆さんの答えなんて知らないし知りたくもない。

サイモンという人とは面識がない。

よって保留。

大嫌いな折原臨也にしたって、苦々しくも黒バイクと同じ答えを導き出すだろう。

そしてダラーズ。

ダラーズ内で“池袋最強は誰？”と聞いてみたとする

そうしたら、全員総じて“自慢するように”同じ名前を言うのだ。

“最強”といったら、“平和島静雄”しかない。

それほどまでの強さ。

明確な、隔絶された強さ。

そんな“平和島静雄”とは、一体どんな人物なのか

池袋という歪んだ街で“最強”を称された人物とは、一体どんな奴なのか。

やはり気にせずにはいられないし、思考せずにはいられないのだ。

第一に、僕は迷わず“最強”を名乗るような人間を知っている。

赤々しい、目を背けたくなるような真っ赤で真っ紅な“最強”を知っている。

4つの世界の誰しもが認める“人類最強”を。

だからこそ余計に、なのかもしれない。

彼女と同じ“最強”を称された平和島静雄とは、一体どのような人間なのかということを知りたくなる。

最強。

在り来たりなようで、実は現実味のない言葉。

最強なんて、よっぽどのがない限り付けられることもないよう

な“称号”だ。

それは意味合い（ニュアンス）は違えど、“最悪”だって同じなのだろうけど

一番強い。

それだけじゃないのが、最強だ。

その何か“違う”部分が一体何なのか。

平和島静雄の強さの“違い”を、僕は知りたいと思う。

奇しくも“最強”を与えられた彼に、僕は尊敬の意を抱いているのかもしれない。

大して知りもしない、噂に聞くぐらいの存在に。

だってそれは。

どんなに望んだって、手に入らないものだから。

望みたくもないけれど、誰しもが望んでしまう確かな“頂点”だ。

その頂点に興味を持つ。

当たり前なことだとは、思うんだけどね。

嘘じゃない。

だからあの時、本音を言えば僕はもう少しだけでも彼を見ていたかったのだ。

そんな、“見ていたくなる”ような、“格好いい”戦い方だった。

僕なんかにとっては“ヒーロー”みたいな

それこそ、あの赤色みたいな。

そんな、戦い方。

ああ、これで確信が持てた。

僕は平和島静雄のれっきとした“ファン”になってしまったのだ。

だってあんな格好いい人、他には母さんくらいしかいないだろうし

「ウフフ」

ウフフ、うふふ、ふふ、ウフフふふフふふふと。

あちこちで笑い声が聞こえる。

否、これは明らかに“こいつら”の笑い声だ。

ただただ気味の悪い、寒気のある笑い声。

「会いたかったわ。平和島静雄さん」

現在地、南池袋公園（多分）。

情報屋に嵌められ、セルティさんと待ち合わせをした、あの公園だ。思い出深い場所となりつつある。

嘘のような。

「本当に素敵ね……あなたが私の“姉妹”を倒した時、遠くから見させてもらったけど……私の口から、他の姉妹にも“母さん”にも貴方の強さを伝えたわ」

夜も折り返し地点に達した、南池袋公園。

そこには現在

奇妙としか言い様のない光景が、広がっていた。

軽く五十人は越えるであろう人、人、人、人。

サラリーマンから街のチンピラ、小学校や主婦、女学生……

黄色いバンダナを巻いた者も見受けられる。

んー？

……どこかで見たことあるな、あのバンダナ。

ともかくこの公園、統一性のない、年代も性別も職業もばらばらな人間が、“たった二人”を取り囲むようにして忙しなく蠢いているのである。

しかも、その誰もが手に何らかしらの刃物を持ち、誰一人として例外なく　両目が血のような真っ赤な紅色に染まっているときた。

ナイフやらハサミやらでは飽きたらず、高枝バサミやチェーンソーを持っている者までいる。

どこの眼鏡死神だよ、全く。

流石に芝刈機はなかった。

残念極まりない。

僕はあの新人くんの方が好きなのに。

いやはや失敬、戯言戯言。

そう、一言で言えば。

“異様”。

異質で異常。

異色で歪。

気味が悪い。

というか、何だこいつら気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いキモチ悪い気持ちワルイキモチワルイキモチワルイ。

ここにきて自身の気分の悪さが頂点に達しようとしていた。

頂を制してしまう。

いや、嘘でもないよねこれは。

とにかく気分が悪かった。

どうにかして欲しかった。

……甘えはよくない。

頑張るって決めたんだ。

もう少しくらい意地見せろよ。

必死に大声援エールを送る。

嘘だけ。

「ただ静雄さん、あなたの強さを、もっともつと詳しく知りたいの。もっと見せて欲しいの。今度は、みんなの前で……そしたらきつと、今以上に貴方を愛することが出来るから……」

うわぁ。

あの子、明らかに乗っ取られてるよ。

ていうか、ここにいる全員がそう、なのだろうな。

妖刀。

罪歌、か。

恐ろしい繁殖力　　そして、支配力だ。

「さあ！愛し合いましょう？どこまでもどこまでも、貴方が疲れて動かなくなっても、私達が一方的に愛してあげる！愛し続けてあげる！そこにいる化け物以外、誰の邪魔も入らないよ？今日はここから離れた場所で、何人かの姉妹が新しい姉妹を増やし続けてるから！この街の人を愛し続けてるから！お巡りさん達はみんな大忙しだからね！」

嬉しそうに楽しそうに笑う人間　　いや、罪歌達。

どうやら僕に気付いていないのか　　カウントする必要性もないと判断されたのか。

まあ、好都合だ。

ていうか、愛だの何だのは、至極“どうでもいい”。

正直もう、うんざりだ。

聞き飽きた。

けれど、ただ1つ反応できる、反応するべき事柄。

僕の罪歌に対する敵対心を決定的なまでに確立させた、その一言。

“こいつらは、僕の友達を侮辱しやがった”。

だから、“怒る”。

ほら、大丈夫。

僕はこのつらに、“怒ってる”。

随分とまあ、人間らしいじゃないか。

随分とまあ、弱々しくも素晴らしい感情じゃないか。

思わず笑いそうになった。

嘘でもない。

そして、罪歌に囲まれている二人

即ち、平和島静雄とセルティ・ストウールソンは。

これだけの“化け物”を相手にしていても、微動だにしていなかった。

「一つ、聞いていいか」

静雄さんが、バイクから降りる。

そして、無表情のまま 罪歌達の前に立ちはだかった。

怒っているわけでもなく。

恐れているわけでもない。

ただの、無表情で。

感情を、決して表にださないまま。

「なにかしら？」

「お前らよ………なんで俺のことが好きなんだ？」

おっと。

結構面白い発言が。

そんなこと言ってる**雰囲気**じゃないのは明らかなんだけど。

罪歌達は余裕そうに、最前列に立つ少女を代表にして、答える。

「強いからよ」

「……………」

「あなたのそのデタラメな強さ……：権力や金に頼らない、人間の本能としての絶対的な、それでいて暴力的な徹底した強さ。それが、私達は欲しいの」

うむ。

強さ。

たしかにそれは認めざるを得ない。

ただの一度きりだが、それで十分だと思わせる、そういう明確な強さ。

惹かれないといえば嘘になる。

だが、彼女たち罪歌は“怪異”なのだ。

全く意味合いが違ってくる。

彼女たちの“平和島静雄への愛”は

あくまでも、“人間への愛”の延長線上に在るから。

「貴方みたいに危ない人、好きになってくれる人間なんかいないでしょう？ だけど私達なら、貴方を愛してあげられるわよ？ 私達は人類全てを愛しているの。愛しても愛しても足りないから、私は人間全てを支配したいの。そして　優秀な子孫を残したいの。例え

ば貴方みたいに強い人とか、ね」

どこの独裁者だよ。

たかが“妖刀”風情が 笑わせるね。

セルティさんが呆れ気味に、静雄さんの顔を覗いているのがわかる。

便乗してみた。

怒りを爆発させそうにでもなっているのかと、予想して。

だが、彼は。

「ハハ……ハハハハハハハハ」

笑っていた。

あの情報屋のような作り物の笑顔ではなく。

僕みたいな奴がよく浮かべる、表面だけの笑いでもなく。

まるで心の底からの穏やかな笑みのように

綺麗に、笑っていた。

セルティさんがPDAを見せているようだが、角度的に見えない。

だが静雄さんが、返事を告げた。

恐らくそれは、罪歌たちの“愛の告白”への返事。

「いや……セルティ。正直な、嬉しいんだよ俺は」

「え……………?」

「え?」

思わず声が漏れた。

あまりにも意外な答えだったために。

それは罪歌達にとっても意外だったようで、互いに顔を見合わせている。

一体、どういうことだ?

「俺は、この“力”が嫌いで嫌いで仕方なかった。俺を受け入れてくれる奴なんて誰もいないんだと思ってな」

その言葉には、静雄さんの思いや感情が表れているように感じた。

本来言葉とはそういうものだって。

戯言だな

「だがゆ……………もう、いいんだよな?こんな俺を愛してるって奴が、いち、にい……………まあ、たくさんいるわけだ。だから……………もう、い

「いんだよな」

嬉しそうに、実に嬉しそうに。

「俺は 自分の存在を認めてもいいんだよな？」

楽しそうに、至極楽しそうに。

「俺は 自分を好きになってもいいんだよな？」

そして誰が見ても“幸せそうに幸せそうに”眼を見開いて。

サングラスを外して、ポケットにしまった。

「嫌いで嫌いで仕方なかったこの“力”をよお……………消したくて消したくて仕方なかったこの“力”をよ……………。俺は、認めてもいいんだよな？使ってもいいんだよな？」

「俺は 俺は 全力を出しても、いいんだよな？」

瞬間。

爆発的と言っていいほどの“平和島静雄の全力”が、開放された。

少なくとも、そう見えた。

彼は楽しそうに嬉しそうに、幸せそうに笑いながら。

罪歌達にとって、絶望的な答えを告げた。

「ああ、ちなみに、俺にとってお前らみたいなのは……全然、全く、これッッッッッッぽっちも好みのタイプじゃないからよ」

「まあ、とりあえず……臨也の次くらいに、大嫌いだ」

……………同感です。

ああ、どうしてだろう。

私は彼を愛していたのに。

何時だって彼のことを考えて、何時だって彼のために愛を抱き続けて、何時だって何時だってどんな時だって彼への愛を忘れたことはなかった。

だから戻ってきた。

この罪歌のお陰で、愛する方法に気付くことができたから。

他人がなんと言おうと関係ない。

彼が私にしてくれたことは、全部全部全部ぜんぶぜんぶぜんぶぜん

ぶぜんぶ受け止めて、許して、愛してきた。

だから当然なのよ。

私は彼を愛しているのだから

“彼も私の愛を、受け止めるべきなのよ!!”

「待って!」

……………あら?

「もう……………やめて下さい、^{ニエカワ}贄川先輩。その刃物で……………人を傷つけるのは、もう……………」

「貴女には関係ないでしょう?それとも、死にたくないだけかしら?」

「いいえ……………関係ないわけじゃ無いですから」

「?」

この子、何を言っているのかしら。

ああ、さっき襲われたせいで錯乱してるのね。

可哀想。

私と隆志タカシとの愛を邪魔するから、そんなことになるのよ。

「園原さん、貴女の言葉にはなんの意味もないわ。他人に寄生する生き方しか選べなかったような弱い人間に、私と罪歌の愛をどうことうする資格なんてありはしないんだから……」

「間違つてると思うことを止めるのに資格なんていりません……それに……生き方なんて、関係ないと思います。他人に依存する生き方しか出来なかったから弱いんじゃないんです。そう生きることを選んだ。ただ、それだけなんです」

「屁理屈を……」

「人が、強いか弱いかなんて……生き方だけで決めて欲しくない！」
何よ、この子。

さつきまでとは……まるで別人のように口が達者になっちゃって。
だけどそんなことは関係ないわ。

殺せばいい　　殺してしまえばいいのよ。

「ねえ、園原さん……あなたは、人間を愛したことってあるかしら……？私はあるわ！初めて罪歌が語りかけてきた時、私はこの子に身体を乗っ取られそうになったわ……だけど私は必死に抵抗して抵抗して、逆に支配したの！罪歌を支配したのよ？愛の力で！愛の力で！」

どうして。

“なんで右腕で、刃物を受け止められているの？”

「……確かに、私は人を愛する事ができません。5年前のあの日から、人を愛するのが怖くて仕方なくなっただんです」

5年、前？

“強盗に両親を殺された”っていう、あの5年前？

「だから……私は自分に足りないものを補うために、他の何かに依存して生きてるんです……それが、私の選んだ生き方ですから」

なによ、あれ。

銀色の 刃？

「まさ……か……」

「だから私は、人を愛する事さえも 依存する事にしたんです」

“日本刀”！？

まさか。

まさか、あれは……

「贅川先輩、知っていましたか？罪歌の大本の一本振りは、ちゃんとした刀の姿を持ってるんですよ」

「そんな……そんな!？」

「私は人を愛せない。だから」

嘘よ。

だって私は、罪歌に勝ったのよ?

罪歌を逆に支配して、私は私の愛のためだけに　!

……あれ?

「だから私は、私の代わりに人を愛する“罪歌に依存して”……」

いや。

い、いや。

なんて、なんて“赤い”

「寄生して、生きてるんです……」

「……………」

絶句。

するしかなかった。

あり得ない。

“普通の世界”じゃ明らかにあり得ない現象が、目の前で起こっている。

先程まで斬り裂き魔は、確か何人いた？

ざっと100人はいた筈だ。

その100人が。

たった1人に、圧倒されている。

殴る。

蹴る。

力任せにぶん投げる。

ただそれだけの、いたってシンプルな戦い方。

だが、そのシンプルさがまた、“恐ろしい”。

彼が殴った者の腕は見事に折れ曲がり、蹴った者の膝は見るも無惨に破壊されていく。

人を投げれば、漫画のように水平に飛んでいった。

……………ヤバイ。

滅茶苦茶、“格好いい”。

もう強い弱いの問題なんかではなくて、ただただ彼の姿は格好よかった。

魅せられるものがあつた。

かつてこんな戦い方をしていた人間を、僕は1人だけ知っている

鬼をカウントすれば、2人だけ。

ああ、そう。

鬼、というか。

鬼神だな。

今の平和島静雄は、まさしくゲームに出てくる鬼神ようだった。

強い。

この人は本当に、強い！

「やば」

静雄さんの“暴力”は止まることを知らず、今まで蓄積されていた何かを使い果たすかのような勢いだった。

本当に1人で倒してしまうんじゃないか？

その時。

静雄さんと戦っていた 否、静雄さんに投げ飛ばされていた罪歌達が、“一斉に同じ方向を向いた”。

シンクロのようなほぼぴったりのタイミングで、ある一点を見続ける。

なんだろう。

何かあったのか？

そちらの方向には、公園の出口しかない。

ということは、公園の外で何かあったということか？

「……もしかしてよ。この近くで、なんかあったんじゃないか？何かはよく解らないけどよ……」

意外と冷静だった静雄さんが、そう言った。

セルティさんが頷いている。

「ここは俺がなんともすっから、ちょっと見てきたらどうだ？どつちにしろ、お前今何もしてねえだろ」

明らかに、セルティさんに気を使った一言だった。

……何かあったなら、気になる。

けれど。

僕は正直、静雄さんの戦いを見届けたかった。

それに現実的な話、僕が下手に動くと見つかってしまう可能性もあるのだ。

かといってこのままこそそしているのもあれだし……

結論。

「セルティさん、静雄さん」

二人のところまで、すごいダッシュで駆け寄った。

セルティさんがすぐにPDAを見せる。

『冬護くん！無事でよかった。ていうか危ないよ。離れてて』

「いえ……それより、何かあったんでしょうかね？」

『わからない……けれど、心配するに越したことはない。君も一緒に来るんだ』

……ありがたい。

けれど大丈夫だ。

静雄さんがいれば、多分平気。

「僕はここで　　静雄さんの側にいます。大丈夫です、喧嘩慣れしてるんで」

まあそういう問題でもないのだが。

単なる理由づけだ。

セルティさん、困ったようなりアクション。

『喧嘩っていったって……』

「いいよ。要するに、俺がこいつを守ってればいいんだろ？」

「静雄さん！」

守るって……

そんなつもりじゃなかったのだが。

けれどセルティさんも、渋々納得してしまったらしい。

仕方ない、といった感じで、手から“影”を生み出し 二組の手袋を作り出した。

……物質創造能、力？

『じゃあ、これを預ける。鎌と同じ特別製だ。刃物くらいなら平気だから』

僕の方まで作ってくれるなんて。

本当に、なんでこんなに優しくしてくれたりするんだろうね。

普通に、素直に嬉しかったよ。

嘘じゃない。

セルティさんが、走り去る。

そして残っているのは

少しだけ数が減った、池袋の斬り裂き魔である、罪歌。

子供みたいな我が儘を言っつてこの場に残った、見た目真面目な（嘘）高校生である殺人鬼、つまるところ僕。

それに、“池袋最強”平和島静雄。

静雄さんが、セルティさん特製の手袋を嵌める。

続けて僕も、嵌めておく。

うむ。

サイズがぴったりですな。

さすがはセルティさん。

「さあて」

そう言って指を鳴らす静雄さん。

当面僕の出番は無さそうなのだが

まあ、一応。

「お前、逃げてなくて大丈夫か？」

「はい。今は“友達”もいないですし、大丈夫です」

そう。

今この場所に、僕の友達はいないのだ。

だから。

うっかり気合いを入れてしまっても　　大丈夫。

哀川さん。

とりあえずこれは、ただの正当防衛ですからね。

「僕が、貴方の背中を守ります。だから貴方は、僕の背中を守ってくださいね」

背中合わせは喧嘩の基本。

僕はただ、自分のできることをするだけだ。

「……………言っじゃねえかよ。お前、名前は？」

静雄さんにはっ、と笑って、僕に背中を向けたままそう言った。

少し嬉しくなり、うきつきしながら答える。

嘘だけ。

「深限冬護です。深淵の深に限界の限、冬に護るで深限冬護」

「そうか。俺は平和島静雄ってんだ。よろしく　！」

「じちらじそ　！」

〈南池袋公園 手袋と背中合わせ〉（後書き）

作者もどのように収集をつけるのか謎です。

行き当たりばったりで小説なんて書いてはいけませんね。

では次回予告。

喧嘩は得意じゃない。

喧嘩と殺人には明確な差異がある。

漠然とした、けれども決して侵されない絶対的な違和感が。要するに、それが僕とあのひととの違い。

最強と最弱の違い、というわけだ。

ではまたいつかお会いしましょう。

頑張って更新します、はい。

そろそろ罪歌編も終盤。

とりあえず終わりません。まだ。

〈南池袋公園 収集（蹴襲）〉（前書き）

お久しぶりです。

ほんとにお久しぶりですね……

言い訳をすると普通に勉強とか

……嘘ですしてませんでした

〈南池袋公園 収集（蹴襲）〉

殴る。

蹴る。

投げ飛ばせなかった。

いや、これは体格の問題。

そもそも無理にぶん投げる必要もないわけで、僕はどちらかという
と地味に戦うのが好きなタイプなのだ。

というわけで深夜、南池袋公園。

わらわらと蟲のように蠢いている斬り裂き魔 もとい、罪歌に
乗っ取られているとみられる人間達。

それをなぎ払い振り回し、絶対的暴力によって彼らを圧倒している
平和島静雄。

それに加担する僕。^{オマケ}

罪歌に対し、寧ろ圧倒している静雄さんに加担する必要性もないに
等しいと思うのだが、恐らくこの喧嘩の“中心”にしているのがある意
味一番安心だし、静雄さんの喧嘩を是非とも目の前でみたい。

よってぶつちやけ罪歌は眼中になかった。

だが、相手は妖刀。

決して油断できる相手ではない。

ただでさえ鬱陶しい存在なのに、ここまでの数となると相当厄介だ。

一人一人の能力など知れたことではないが

まさしく、塵も積もればやまとなでしこじゃなくて山、山となる。

弱者も群れば強者のフリくらいはできるということだ。

いい勉強になりました。

嘘だけ。

とはいえ僕の背後で喧嘩を続けている池袋最強は、そんな理屈はものともせず、罪歌達を人形のように殴り蹴り倒し振り回していた。

べき、とかごき、とかおおよそ日常生活では耳にすることのない音が絶えず聞こえてきている。

御愁傷様。

心の中で彼らの怪我の心配をしながら（嘘だ）、斬りかかってきた成人男性の脇腹めがけて回し蹴り。

衝撃をモロに食らったらしく、5、6人を巻き込んで吹っ飛んでいった。

砂埃が巻き上がる。

続いて飛び掛かってきた高校生らしき男子が手にしていたサバイバルナイフを彼の右手ごと蹴り上げる。

あ、折っちゃったかも。

くるくると回転しながら宙を舞うサバイバルナイフを空中で左の手を使用して掴み、柄の部分で首の裏辺りを一発突く。

よろめいて倒れる高校生。

それを避けつつ2、3人の人影が僕を標的に定め、思い思いの刃物を突き出しながら走ってくる。

内一人の持つ包丁を踵落として地面に抉り込ませてから、残り2人の持つ刃物の刃渡りにサバイバルナイフを叩き付ける。

耳に痛い、金属音。

刃物を取り落とした2人の隙をみて腕の下辺りに潜り込むため即座にしゃがみ、空いている右手を地面について低い体制から蹴りを放つ。

ドミノ倒しの要領でノックアウトさせた後（嘘）、女子高生が包丁を振り上げていたため、左手のサバイバルナイフで受け流し前のめりになったところを軽く肘で殴る。

呼吸器官を狙ったわけだ。

女の子に暴力なんて、気が引けるけどね。

嘘みたいな。

とりあえずナイフを捨てる。

こんな感じの受け流し受け流しをもう何回繰り返しただろうか。

考えている内にもまだまだ罪歌達は斬りかかってくる。

今のところ傷は負っていないので、吐き気は止まらないもののまだ大丈夫そうだった。

とはいえ、辛いんだけどね。

居心地が悪いのは変わりなかった。

だが、先ほどまで傍観していた時よりかは幾分かマシになったような気がする。

それは恐らく静雄さんが近くにいるからだろっ。

罪歌達の目的はどうやら静雄さんのようだし、だからこいつらの意識や注意、興味や関心は静雄さんに向けられている筈だ。

通知表の右側みたいになった。

通りでおかしな空白感がするわけだ。

基本的にこいつらの意識は静雄さんに傾いている。

つまり、僕へ向けられる意識や注意は薄いということなのだろう。

ありがたいことだ。

静雄さんにとってすれば、いい迷惑なのだろうが。

先ほどきっぱりと罪歌の告白を振っていたし。

当たり前だ。

人間、重すぎる愛になんて答えられるわけがない。

そんなものはただの鉄屑同然だからね。

嘘だけど。

とか考えていたら、鉄パイプらしき鈍器がふり下ろされようとしていた。

真剣白刃取り は流石に無理だと判断したので、体自体を右側にずらす。

うーん、この手の獲物はいちいち大袈裟なアクションが必要だから、僕みたいな奴に向かってくる場合にはあまり適してないと思うんだよね。

とん、と脇腹に軽く一発。

やれやれ。

ゆっくり思考する暇もないのか。

いつになったら全滅するのやら。

途方もない作業に頂垂れながら、人一人をぐるぐる振り回している
静雄さんに目を向ける。

セルティさんの手袋が幸をそうしたのか、静雄さんの手には傷一つ
ついていないようだ。

つくづく凄いな、セルティさんの影。

妖精というくらいなのだから、相当格の高い怪異なのだとは思って
いたのだけれど

「深限、大丈夫か？」

成人男性をぶん投げつつ、静雄さんはいつの間にか僕の方を見てい
た。

目が合う。

「大丈夫、です、よ」

おっと、危ない。

振り下ろされた包丁を手で鷲掴みにしながら答える。

「そうか。喧嘩慣れ、してんのか？」

静雄さんは、男性の顔面を容赦なく殴る。

男は派手に吹っ飛び、右頬は最早原型を留めていなかった。

「まあ、そんな感じですよ」

渾身の力を込めて蹴りを放つ。

余り長く刃物に触れていたくないので、掴んでいた包丁はすぐに捨てた。

喧嘩慣れというか何というか。

的外れというほど間違ってもいないのだが……正解とは言えない。

殺し合い（いつもの喧嘩）は喧嘩としてカウントするべきじゃあ、ないよな。

よって僕はまともに喧嘩なんかしたことがない。

喧嘩と呼べるものはせいぜい、口喧嘩レベルぐらいだ。

だから実のところ、こんな殴る蹴るの繰り返しは慣れていないし得意でもないのだが。

戦うのに躊躇はしないが、戦いと呼べる技術は持っていないのだ。

体術の類いなんて、師の足下にも及ばない。

「静雄さんの方は、大丈夫ですか？」

どうにも途切れ途切れとなってしまうが、仕方ない。

聞くまでもないのだろうが、一応ね。

チェーンソーを何とか両手で受け止め、本体を蹴り砕く。

つもりで蹴る。

チェーンソーは危ないよ、チェーンソーは。

「ああ。俺は平気だけど、よー！」

静雄さんが2・3人まとめて蹴り飛ばした。

そして全員が全員、“姉妹”とやらを巻き込んで吹っ飛んでいく。

何とも豪快な喧嘩だ。

本当に、憧れる。

そついう“戦い方”。

「そつですか。そりゃあ、よかった」

そついえば、こいつらは自分たちの仲間を“キョウダイ姉妹”と呼んでいた。

“母”というのは、大元の、本物の罪歌のことを指しているのだから
うが

“姉妹”^{キョウダイ}ねえ。

嫌だ嫌だ。

たかだが同じ発生源だとかいうぐらいで、キョウダイという言葉を使っ
てほしくはない。

僕らにとって“キョウダイ”というのは、そんな薄っぺらい繋がり
で表せるものじゃ、ないんだから。

僕ん家の（主に兄の）家族愛を見たまえよ。

そう、零崎は罪歌^{こいつら}とは違う。

それだけは、確固として譲れない。

そんな単純な繋がりじゃない

そんな簡単な家賊じゃ、ない。

仲間でもない。

同士でもない。

だけど僕らは家族だから。

そんなこと。

「僕が知るわけ、ないだろうが」

教えてほしいくらいだよ。

それがわかっていたら、何の苦勞もないわけだし。

それがわからないこそ、こんなにも面倒でややこしいことになってしまったわけだし。

残念ながら質問に答えることは出来なそうだった。

だから聞き返してみた。

腹いせに、とかではないのでご安心を。

深呼吸を一回。

「逆に聞くけど、君達は何？何者？妖刀？それに取り憑いた何かなのかい？静雄さんのことが好きみたいけどさ、好きだなんだ言う前に君達は何なの？人間を愛する、愛せるような存在なの？君達の存在意義は在るの？どこに？寧ろ本当に君達は愛することができているのかい？僕には理解できないけど、それは本当に愛と呼べる代物なの？愛なの？一体それはなんなの？一体君達はなんなのさ？」

……………一気に喋ったので疲れしました。

途中辺りは、自分でも何を言ってるんだかわからなくなってしまっていたが。

まあ本音。

僕は基本的に“怪異”のように訳がわからない存在は嫌いなので、本音と言っても嘘ではないのだ。

自身が訳がわからないような存在に分類される位置にしながら、こんなことを抜かしてみせる自分に吃驚だぜ。

嘘だけど。

簡単にいえば、軽い同族嫌悪。

あいつらと同じにされるのは、心底嫌だけど。

それは言葉の綾だ。

戯言ともいう。

「あなた」「静雄」「愛する」「あなたも」「あなたが」「人」「ならば」「二人とも」「愛してあげる」「私たちが」「愛」「愛」「愛」「愛して」「愛する」「愛して」「あげる」「愛してあげる！」「愛してあげる！」

高らかに叫ぶ、罪歌たち。

敵意は減るところか増しているようだった。

いや、まあ明らかに僕のせいなんだけど。

だからといって、愛されても困る。

そんな愛は、いらない。

返却希望、クーリングオフだ。

重すぎる愛はなんてモノは

あの人たちと家賊からので、十分だ。

「お前らがイカれてるっことはよくわかった。けど言っただろ？俺はお前らが嫌いだ。しかも愛だなんだ言っつてこんなガキにまで刃物向けてんだ。“殺されても文句は言えねえよなあ！”」

静雄さんが、やはり楽しそうに叫ぶ。

そうそう。

僕みたいなひ弱な高校生にまで寄って集って刃物向けるなんて頂けないね。

妖刀だろうが何だろうが、静雄さんには関係無いみたいだ。

良いことだ。

少なくとも、無理矢理関連付ける必要性なんて微塵もないんだから。

ただ罪歌を殴れる、理由さえあればいい。

その程度の意識さえあれば、十全だ。

「好きになってくれて嬉しいけどよ、文句は言わないでくれや

」

「……………静雄さん」

そうやってまた、自身へと注目を集めてくれる。

優しいんだと思う。

普通に、優しいのだと。

「静雄さんは、いい人ですね」

「んなことねえよ。照れるだろうが」

かはは　　と笑ってみた。

やはり失敗した。

そんなもんだよね。

今まで笑ってこなかったんだから、急にはできない。

「それじゃ深限。また、“背中預けて良いか？”」

斬り裂き魔は、依然として多い。

困ったな。

明日はまだ学校だというのに。

今日寝れるかな。

まあ、睡眠時間が確保できるくらいには努力しないと。

手っ取り早くこの喧嘩を終わらせなければ。

僕は彼の背中を、守らなければ。

だから返す言葉は決まっていた。

珍しく迷わずに　僕は返事を口にする。

「勿論ですとも」

少なくとも、この喧嘩が終わるまでは。

それまで僕の身体が、頑張ってくれれば良いけど。

依存^{ほくじしん}症状は、余り使いたくないからね。

きっと、最初はじめからわかっていた。

きっと、最後おわりもわかっていた。

わかっていなかったからこそ目を瞑って、無かったことにしてしまおうとした。

始めから存在していなかったことにしようとした。

それがただ逃げていることだと、わかっていた。

だからこれは、ただの逃避行。

逃げた先に何があるのかなんてわからない。

逃げ続けることに意味なんてないのかもしれない。

だけど私は、逃げていなければ生きていけなかった。

足りないものを何かで補ってまで、ずっと逃げ続けている。

何で、どうして。

今更飛び交う疑問と疑問に、選択しさえ出さないまま。

私はまだここにいる。

進めないまま、永遠にここにいる。

始めから何も変わってなくて。

私の時間は止まったままで

「あなた……その刀……罪歌！」

園原杏里は“自身の右腕から取り出した日本刀”を、静かに構えた。

「間違いない……5年前に私を斬りつけた、あの刀！」

鷺川春奈のそんな言葉と驚愕に満ちた顔を確認し、杏里は考える。

やはり、予想通りだった。

春奈は5年前、“罪歌に襲われた”被害者だったのだ。

大元の罪歌に斬りつけられた人間の心には、子として罪歌が宿る。^{ナカ}

春奈に宿った罪歌も、初めは大人しくしていたのだろうか

恐らく、那須島への思いか何かが強くなることによって、比例する
ように罪歌の力も強まっていったのだろう。

「あなた……もしかして……殺したのね？自分の両親を！その刀で
！」

「そうですね。私が殺したようなものなのかもしれません」

体を震わせる春奈を前に、杏里は少しだけ思案する。

それは正解でもあるし。

勿論、不正解でもある。

私には　　わからない。

杏里は静かに刀を振り上げる。

ただそれだけの動作であったが、刀の峰は正確に春奈の腕の急所を打ち、一瞬でナイフを床に落とさせる。

「あつ……………」

焦った春奈は、ナイフを拾うために腰を屈めるといふ、素人丸出しの行動に出てしまう。

刹那、春奈の首には日本刀の刀身が添えられ　　身動きが取れなくなってしまうた。

「……………ッ！」

「そつちの“子供”は、戦い方までは教えてくれなかつたんですね。目的や意思は受け継いでも、経験や記憶は受け継がない……………」

淡々と相手の分析結果を口にし、杏里は困ったように春奈に問いかけた。

「あの……………お願いします。他の罪歌に、もうやめるように言ってください……………“親”である貴女が命令すれば、止まるはずですから……………」。

貴女が罪歌に乗っ取られてるんだったら、私の“罪歌”が命令しても止まるんですけど……」

「そんな……そんなはずない！毎日毎日湧き上がってきて乗っ取るうとしてきた罪歌を、私は乗り越えた！押さえ付けた！愛の力で！それなのに、愛を知らない貴女に、貴女なんか……！」

杏里は少しだけ悲しそうな顔をして、春奈を見直す。

「贅川先輩。少しだけ、聞かせてあげます。私の中にいつもいつも響いている　罪歌の、“愛の言葉”を」

杏里は感情もなく呟き、そっと春奈の首から刀をずらす。

そしてそのまま切っ先を1ミリ程、彼女の胸に染み込ませた。

そして。

「　聞こえましたか？罪歌の言葉が……」

春奈の心が破裂しそうになった瞬間、杏里は静かに刃を引いた。

確かに、聞こえた。

絶え間なく。

拒絶もできないほどの、どうしようもない“愛の言葉”が。

これはもはや愛などではない。

春奈が聞いた言葉とは比べ物にならないくらいのも、毒々しい怨嗟の
声。

「なん……で？なんで貴女はそんな声に耐えられるの……？」

「私は、色々足りない人間です。だから、自分に足りないものを
補わなくちゃいけない……色々な“何か”に寄生して生きてます」

杏里は悲しげに微笑み、罪歌に目を向ける。

自分自身に語り掛けるような、そんな口ぶりだ。

5年前からずっと同じことを思っていた。

何かが決定的に足りていなくて。

いうならば、欠陥製品のようなもので。

だから補うために、寄生した。

依存ではなく、寄生した。

「私には、人を愛する心が足りないんだと思うから……ずっとこの
声を聞き続けるんです。聞き続けられるんです……ずっとずっと
客観的に……」

額縁の、外から。

園原杏里は、そういう生き方をしてきた。

だからこそ罪歌の愛の言葉も、彼女には届かない。

春奈は杏里が俯いたその瞬間に、足元から自分のナイフを拾い上げ、杏里に思い切り斬りかかった。

「あは……あはははは！やったわ！そうよ、貴女なんか私に……」

春奈のその哄笑は、長くは続かなかった。

そこには全く冷静なままの杏里がいて、自分の喉には、いつの間にか切っ先が突き付けられていたのだから。

「ひっ……」

恐怖と焦燥から、思わず声を漏らす春奈。

そんな彼女に、杏里は不思議そうに尋ねる。

「なんで斬られるのを、怖がるんですか？斬るのは、愛の結果なんでしょう？」

春奈は咄嗟に理解し、そして恐怖が彼女を襲う。

敵うわけがなかった。

杏里は、無機質な瞳を光らせ、宣告する。

「どうしても辻斬りの人たちを止めてくれないなら……貴女の心を、

少しだけ罪歌に乗っ取らせてもらいます。大丈夫です。死ぬようなことはないと思いますから」

「あ……あぁ……あ」

「謝りませんよ。ここで謝ったら、私の生き方を否定することになりますから。………はい、私はずるいんだと思います。貴女に酷いことをして、自分の平穩を守ろうとしているんですから………。でも、仕方がないんですよ」

杏里は淡々と言葉を綴る。

自らの平穩を守る。

例え自虐的になろうとも、周囲の平穩を守ろうとする。

奇しくもそれは、彼女の友人である殺人鬼と同じ考えであり

酷似した生き方だといえた。

「寄生虫、ですから」

切っ先が喉に刺さり、愛の言葉が流れ出す。

その時一瞬だけ、5年前斬り裂き魔に斬られたときのことを思い出
し。

最後に春奈は、杏里の声を聞いた。

「罪歌は　　とっても寂しがり屋なんです。だから、押さえ込ん

だとか、利用したとか、そんな寂しいことを言わないでください。
私達から見たら、やり方は間違ってるかもしれないけど……罪歌は、
私達人間の事が本当に本当に好きなんです……」

あい。

「だから……愛してあげてください」

愛、して、

「贄川先輩も、罪歌の事を

愛してあげてください」

あいし、て、愛し

「先輩は、私と違って……人を愛することができるんですから……」

愛してる。

だから、あなたは私を愛して。

違和感。

なかなかどうして妙な言葉なのだと思う。

違和感。

何か納得のいかないような。
そういう曖昧な現象。

だけどこの時、僕は確かにその“違和感”を感じていた。

静雄さんと斬り裂き魔との“喧嘩”が開始されてから、どのくらいの時間が経ったのだろうか。

普通の人間ならば、そろそろ疲労が人体を侵食し始める頃だろう。

そのくらいの時間は、確実に経っていた。

だけでも斬り裂き魔は、まだ群衆と称せるほどには残っている。

壊れた人形のように体をひしゃげて転がっている者も、少なくともないが。

優勢なのは相変わらず静雄さんで、この下らない“喧嘩”の結果は誰の目にも明らかだった。

恐るべし、池袋最強。

伊達に最強を冠されてはいない。

だが斬り裂き魔も、諦める様子はなかった。

次から次へと、活動できなくなる限界まで動き続ける。

ある者は包丁を。

ある者はナイフを。

ある者は鋸を。

ある者は文房具を。

とにかくありとあらゆる刃物を使い、休む暇もなく襲ってくる。

その姿は勇猛果敢とも称せそうだった。

嘘だけだ。

とはいえ。

こういつた場合、恐らく“大元”みたいなものを叩かなければ、この喧嘩が終わりを迎えることはないのだろう。

大元　こいつらが“子供”なのだとしたら、“親”ということになるのかな。

この中にそんな存在が紛れ込んでいるとは思えない。

いや、今僕の場合は万全じゃないから信憑性が高いとは言いがたいのだけだ。

半分堪。

怪異つてのはどいつもこいつも吐き気がするくらい“濃い”気配を垂れ流しにしているので、実を言うと余り区別がつかないのだ。

正直なところ。

だとしても“大元”ほどの気配ならば感じ取れるはずだし……

今のところ、この公園内にはいないのだろうというのが、僕の個人的な見解。

さて、正解なのかどうなのか。

勿論斬り裂き魔たちが教えてくれる訳もなく。

「結局は振り出しに戻るってことですか」

違和感。

この平らな気配の片隅に感じる、違和感。

小さな、けれど確実に感じる間違い。

こいつらの中で何か変化が起きているのか

それとも、この違和感こそが“大元”なのか。

「……………あれ？」

気のせいかな。

心なしか、“ぶれ”を感じたような

「……………は？」

恐らく僕にだけ聞こえた。

ばきん、という明らかな粉碎音。

一体何が起きたのか、なんて考えている余裕は無かった。

「静雄さん！“止まってください”！！」

叫ぶ。

まずい、はやく伝えないと。

静雄さんを止めないと。

そんな雑念が入り雑じって鬱陶しいが、我慢する。

自業自得というやつだ。

嘘でもない。

「静雄さん　こいつらには殺意は愚か、“もう戦意なんて欠片もありません！”“戦う必要はもう無いんです！”」

静雄さんは、1人の男性の顔面を殴ろうと構えているところだった。

そこで、停止。

はつきりとわかった。

先程の耳を貫くような粉碎音は、“戦意が消えた音”だったのだ。

その証拠に、斬り裂き魔達は糸が切れたように動かない。

まるで電池の切れた人形のように　　これほどの人間が一気に動かなくなるというのは、何とも言えない悪寒がする。

そんな奴等を、殴る必要はない。

理由がない。

理由というのは、残酷なまでに必要不可欠のものだから。

それは、よく知ってる。

だから、静雄さんを止める必要がある。

無意味な“喧嘩”を、僕は認めたくないから。

許したくなんか、ないから。

けれど僕自身、緊張の糸が切れたのか、若干視界が揺れる。

引っ張られ張りつめていた感覚を、急に手放されたものだから動揺が浸透しているのか。

あー、頭が痛い。

朦朧とする意識を無理矢理行使。

「……………あ、あ」

静雄さんは、ゆっくりと腕を下ろした。

地面に崩れ落ちる男性のことなど気にも留めずに。

静雄さんは、己の拳を見つめていた。

握り直して、顔を上げる。

まるで久しく友人と再開した時のような、そんな表情。

つまり、分かりやすく言うと。

「静雄さん……………」

「ようやく、だ」

静雄さんは呟く。

清々しいとも言える、表情で。

「なんだよ。ようやく、俺の言うことを聞いてくれた
ハハハ」

ハハ、

けれどその笑いは、子供のようでもあり。

どこかの殺人鬼の笑顔のようにも、見えた。

「終わっ、たあ……………」

力が抜ける。

静雄さんの表情を見たら、一気に全身の力が抜けてしまった。

終わったんだよな。

これで、綺麗さっぱり問題事は終了して

「！」

ぱんっ、と。

呆気ないくらいに味気なく、つまらない音がした。

力なく宙を舞う物体が目に入った。

よく見ると、それは“人の肉が弾けた物だった。”

瞬間、僕の全ての神経が一気に訴えかけてくる。

やばい。

不味い。

頭を過るのは、そんな敗北概念ばかり。

まさか。

まさか。

こんなところで

「気付かれた……！」

全身を貫いたのは、明らかな“殺意”だ。

不味い。

不味い不味い不味い。

ここには人がいる。

そして何より、友人ともがいる。

どうする。

こんなところで、“殺し名”の相手をするわけにはいかない

！

「静雄さん、すみません」

そう言って、僕は。

全速力でこの場から逃げることにした。

勿論、この判断はいつものような逃避からではない。

静雄さんを巻き込むことはできない。

それに、こんな場所でバトったりしたら確実に警察やら何やらの“表”の機関に気付かれる。

そればかりか、“裏”にも感づかれるかもしれない。

あまりにも、リスクが高すぎた。

静雄さんの声が遠くに消えていく。

構わず僕は走り続ける。

とにかく、人がいないところだ。

気配だけを頼りに走る。

ああ、これは完全に僕のミスだ。

あんなところで気を緩めたから、感づかれたのか。

普段押さえていた気配まで、一瞬だが出してしまったらしい。

少なくともやはり、静雄さんを巻き込むわけにはいかない。

だからこそ、許されざるミスだった。

「そつやって」

「猜疑心にまみれるような男だったんだね」

「君は」

声。

二重に重なるように響く、男か女か判別の付けづらい声色。

まあ、そんなに驚かない。

もう十分距離はとれたはずだ。

それに緊急用だけど、場所に対しては策もある。

今日の僕は些か準備がいい。

「少なくとも僕らは」

「君のそのような部分を目にすることもなく」

「君に殺されかけたわけだし」

「仕方がないと言えば」

「仕方がない」

なんだこいつらは。

句読点が嫌いなのか。

まあ、「冗談。」

「けれど」

「僕らは」

「生き残った」

「それ以外の奴等は死んだ」

「君に殺されて」

「だから僕らは当然のように」

「だから僕らは必然のように」

「君に復讐しに来た」

「零崎」

「冬識」

「僕らは」

「絵合の名にかけて」

「君を殺害しよう」

.....。

姿が見えた。

1人は、中学生くらいの男の子。

もう1人は、髪を上につい上げた同じくらいの女の子。

見覚えがあるような、ないような。

顔立ちからして双子らしい彼らは、おおよそ中学生が所持するには不釣り合いな“物”を僕に向けて、そう宣言した。

困った。

うん、困った。

「あのさ、僕を殺すつもりなんだったら、名前くらい名乗りなよ。君たちは護廷十三隊十一番隊第三席の名言を知らないのかい？という訳で紳士的ルールに乗っ取って僕は君たちの名前を知りたいんだけど」

無理矢理繋げた。

結局は名前を聞き出そうとしているだけなんだけど。

「.....いいだろう」

「教えてあげよう」

「僕は絵心エココロ」

「僕は絵画カイガ」

「絵合絵心エアワセエココロ」

「絵合絵画エアワセカイガ」

「爪裂きの絵心ツメサ」

「八裂きの絵画ヤッザ」

「ふうん。絵心ちゃんに絵画ちゃんね。こりゃ、こり寧にぶつも」

本当に教えてくれたよ。

案外素直な子達なのかもしれなかった。

嘘だけど。

ふむ。

絵心ちゃんに絵画ちゃんか。

それじゃあ、こちらも名乗らなきゃ失礼ってものなのかな？

僕は律儀な男だからね。

嘘だけど。

「ご存知の通り、僕は零崎。零崎冬識だ。お二人さん、一体僕に何の用で？」

復讐だなんだと言っていた気もするが、記憶から抹消した。

なんだか、面倒なことになってきた。

昔の僕を本当に呪う。

「言っただろう」

「僕らは君を」

「殺しに来た」

「絵合の殺し屋として」

「それではいくよ」

「一族の怨念を受け」

「苦しみながら死んでくれ」

それは嫌だな。

僕の人生の目標は、安楽死なのに。

こんなところで殺されてしまったら、堪らない。

「君たちの熱意はわかった。まあ、殺されるつもりは毛頭ないしはやく戻らなくちゃならないものでね。今回ばかりは出し惜しみ無く、手早く片付けさせてもらおうよ」

宣言通り。

惜しんでいる場合じゃない。

手間は掛けずに、早く終わらせる。

初めから全力、とは言わないが。

八分目ぐらいまでは、何とか頑張ってみようかな。

「ディペンダンスシンフトン依存症状、使ってみるかな。さて、それじゃあ殺されない

ためにも、さっきの宣言を戯言にしないように努力しなくちゃね」

なんて。

それがすでに戯言だけど。

それじゃあいこうか。

気を取り直して、久し振りの。

「 零崎の、開幕だ」

(喧嘩)

平和島静雄

池袋最強)

(加害者

斬り裂き魔

被害者

平和島静雄)

〈南池袋公園 収集（蹴襲）〉（後書き）

さて。

どこかでみたことのある展開ですね。それは気のせいです。

すみません。話の展開上、杏里ちゃん視点かなり長くなってしまいました。

罪歌を語るにおいて デュラ2巻の内容飛ばせないんです（言い訳喧嘩しました。

今回は殺し合います。

で、次回予告

さて、物語も大詰めだ。

僕は池袋で未だ大したことはやってきていない。

それこそが僕の本来の目的であり、“何もしない”ことが僕の目標なのだから。

けれど、それも言い訳でしかない。

なんてことはとうの昔に気付いていた。

だからたまには、自分と向き合ってみようと思う。

要するに、零崎と向き合ってみようと思う。

さて、開幕準備だ。

今宵も素敵な零崎をお楽しみあれ

なんて、嘘だけだ。

ではまたいつかお会いしましょう。
頑張つて更新します。

誤字脱字報告等、よろしくお願ひします。
最近激しいみたいです反省してます。

210,000アクセス、30,000ユーザありがとうございます。
ます。

感激です。ほんとに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6259m/>

零崎冬識の人間模様

2011年10月31日08時11分発行